

志木市の文化財 第77集

田子山遺跡第160地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財 第77集

田子山遺跡第160地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『田子山遺跡第160地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和元年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、市内には、15カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

また、田子山遺跡については、これまでの調査成果から、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

今回の調査においても縄文時代から近世までに渡って、本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者や土地所有者、そして地元の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、令和元年度に発掘作業を実施した、埼玉県志木市に所在する遺跡である田子山遺跡第160地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、中学・高等学校校舎等建替工事に伴う記録保存のための発掘調査として、志木市教育委員会が学校法人細田学園（理事長 細田洋一郎）から委託を受け、調査主体者として実施した。
3. 埋蔵文化財保存事業の実施にあたり、発掘作業・整理作業・報告書刊行作業に係る支援業務を株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）に委託した。
4. 発掘調査の期間は、以下のとおりである。
 - 令和元年度（第1期）
 - 発掘作業：令和元年5月7日から9月3日
 - 整理作業：令和元年5月7日から令和2年3月25日
 - 令和2年度（第2期）
 - 整理作業・報告書刊行作業：令和2年4月28日から12月28日
5. 本書は尾形則敏・大久保聡が監修し、編集は石川安司・小林陽子・清水理史が行った。執筆は第1章を尾形則敏、第2章第1節を大久保聡、それ以外は石川安司と小林陽子・清水理史が担当し、付編の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
6. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。
7. 調査組織は以下の通りである。

【志木市教育委員会組織】

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	柚 木 博
教 育 政 策 部 長	土 岐 隆 一（～令和元年度）
〃	北 村 竜 一（令和2年度～）
教 育 政 策 部 次 長	北 村 竜 一（～令和元年度）
〃	大 熊 克 之（令和2年度～）
生 涯 学 習 課 長	原 田 謙 二（～令和元年度）
〃	山 本 勲（令和2年度～）
生 涯 学 習 課 副 課 長	中 原 敦 也（令和2年度～）
生 涯 学 習 課 主 幹	中 原 敦 也（～令和元年度）
	浅 見 千 穂（令和2年度～）
生 涯 学 習 課 主 査	浅 見 千 穂（～令和元年度）
〃	武 井 香 代 子
〃	尾 形 則 敏
〃	徳 留 彰 紀（令和2年度～）
生 涯 学 習 課 主 任	松 永 真 知 子

// 徳留彰紀（～令和元年度）
// 大久保 聡
生涯学習課主事補 鈴木楓月
志木市文化財保護審議会 井上 國夫（会長）
深瀬 克（委員）
上野守嘉（委員）
新田泰男（委員）
金子博一（委員）（令和2年4月1日～）
高橋 豊（委員）（～令和2年3月31日）
調査担当者 尾形則敏・徳留彰紀・大久保 聡

【株式会社中野技術】

○発掘調査

調査員 石森 光・清水理史
現場代理人 細田大輔
調査補助員 小峰 健
測量員 小林由典・佐貫 健・高橋貴子
作業員 青木利恵・泉山顯廣・植村智美・白井 孝・甲斐栄美子・川口砂織・
久津輪弘樹・坂本秀也・佐藤忠雄・徳光直子・根岸智子・早瀬三四郎・
丸尾道文・森澤重雄
高田華穂（国土舘大学学生）
石田和広・白井大輔・辛島美樹雄・木村圭介・小堀孝典・櫻井偲温・
鈴木明人・高橋広幸・千葉真人・荻原和彦・福泉 藍・藤江保明・
藤田吉虎・渡部正雄

○整理作業

調査員 石川安司・石森 光・小林陽子・清水理史
調査補助員 久津輪弘樹・小峰 健・佐貫 健・高橋貴子・原野真祐・福泉 藍
作業員 青木利恵・明石千とせ・井上麻美子・白井 孝・内田恭子・大原美紀・
甲斐栄美子・甲斐照人・坂井美樹子・榊原みゆき・佐竹里佳・中澤敏宏・
山内康代・山本圭子・森澤重雄

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・三芳町立歴史民俗資料館
足立佳代・安藤広道・飯島義広・江原 順・大木さおり・大久保淳・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・熊澤孝之・斉藤 純・齋藤欣延・佐々木義則・斯波 治・眞保昌弘・鈴木一郎・辰巳晃司・蓼沼香未由・田中 信・照林敏郎・富元久美子・中岡貴裕・奈良貴史・早坂廣人・比毛君男・深澤靖幸・細田信良・堀 善之・

前田 秀 則・水口由紀子・村上 伸二・安田 脩一・山本 龍・渡辺 邦仁・和田 晋治

9. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

平成31年 4月26日付け 教文資第4-204号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

令和元年11月29日付け 教文資第7-91号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：5,000 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年 4月発行
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。

3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

5. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものは、数値を省略した。

6. 遺構挿図中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図中の遺物番号と一致する。なお、特に表示のないドットは土器を示す。

7. 挿図中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は []、推定値は () を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y=弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 H=古墳時代後期・平安時代の住居跡

T=掘立柱建築遺構 D=土坑 M=溝跡 P=ピット

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表目次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 発掘調査の経過と調査方法	12
第3節 基本層序	12
第3章 検出された遺構と遺物	16
第1節 縄文時代	16
第2節 弥生時代後期～古墳時代初頭	24
第3節 古墳時代後期～平安時代	31
第4節 近世以降	114
第5節 遺構外出土遺物	115
第4章 調査のまとめ	118
第1節 縄文時代	118
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期	118
第3節 古墳時代後期～平安時代	119
[付編] 自然科学分析	127
第1節 田子山遺跡出土炭化材の樹種同定	128
第2節 田子山遺跡から出土した炭化種実について	129
第3節 放射性炭素年代測定	133
第4節 田子山遺跡出土の鉄滓の自然科学分析	135

図版／報告書抄録

挿図目次

第1図	市域の地形と遺跡分布（1／20,000）	2
第2図	田子山遺跡の調査地点（1／3,000）	9
第3図	確認調査時の遺構分布図と調査区設定状況（1／500）	11
第4図	深掘りトレンチ位置図（1／600）	14
第5図	基本層序（1／60）	14
第6図	遺構分布図（1／400）	15
第7図	縄文時代土坑1（1／60）	19
第8図	縄文時代土坑2（1／60）	20
第9図	縄文時代土坑3（1／60）	21
第10図	縄文時代土坑4（1／60）	22
第11図	260・283号土坑出土遺物（1／3）	22
第12図	65号ピット（1／60）	23
第13図	6号炉穴（1／60）	23
第14図	24号住居跡（1／60）	24
第15図	24号住居跡出土遺物（1／4・1／3）	25
第16図	30号住居跡（1／60）・30号住居跡炉跡（1／30）	26
第17図	30号住居跡出土遺物（1／4・1／3）	27
第18図	31号住居跡（1／60）	27
第19図	32号住居跡（1／60）・32号住居跡炉跡（1／30）	28
第20図	32号住居跡出土遺物（1／4・1／3）	29
第21図	42号ピット（1／60）	29
第22図	76号住居跡1（1／60）	32
第23図	76号住居跡2（1／60）	33
第24図	76号住居跡カマド（1／30）	34
第25図	76号住居跡ピット（1／60）	34
第26図	76号住居跡遺物出土状態1（1／80）	35
第27図	76号住居跡遺物出土状態2（1／60・1／30）	36
第28図	76号住居跡出土遺物1（1／4）	37
第29図	76号住居跡出土遺物2（1／4）	38
第30図	76号住居跡出土遺物3（1／4・1／3）	39
第31図	81号住居跡（1／60）	40
第32図	81号住居跡遺物出土状態（1／60）	40
第33図	81号住居跡出土遺物（1／4）	41
第34図	82号住居跡・82号住居跡遺物出土状態（1／60）	41
第35図	82号住居跡カマド（1／30）	42
第36図	82号住居跡カマド遺物出土状態（1／30）	43
第37図	82号住居跡出土遺物（1／4・1／3）	43
第38図	83号住居跡（1／60）	44
第39図	83号住居跡カマド（1／30）	45

第40図	83号住居跡遺物出土状態 (1 / 60・1 / 30).....	45
第41図	83号住居跡カマド遺物出土状態 (1 / 30).....	46
第42図	83号住居跡出土遺物 (1 / 4).....	46
第43図	84号住居跡 (1 / 60).....	47
第44図	84号住居跡カマド (1 / 30).....	47
第45図	84号住居跡遺物出土状態 (1 / 60)・カマド遺物出土状態 (1 / 30).....	48
第46図	84号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 2).....	48
第47図	85号住居跡 (1 / 60).....	49
第48図	85号住居跡カマド1 (1 / 30).....	50
第49図	85号住居跡カマド2 (1 / 30).....	50
第50図	85号住居跡炉跡 (1 / 30).....	51
第51図	85号住居跡遺物出土状態 (1 / 60).....	51
第52図	85号住居跡カマド1遺物出土状態 (1 / 30).....	51
第53図	85号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3).....	52
第54図	86号住居跡1 (1 / 60).....	53
第55図	86号住居跡2 (1 / 60).....	54
第56図	86号住居跡3・貯蔵穴・ピット (1 / 60).....	55
第57図	86号住居跡炉跡 (1 / 30).....	56
第58図	86号住居跡カマド (1 / 30).....	57
第59図	86号住居跡カマド遺物出土状態 (1 / 30).....	57
第60図	86号住居跡遺物出土状態1 (1 / 60).....	58
第61図	86号住居跡遺物出土状態2 (1 / 60).....	59
第62図	86号住居跡出土遺物1 (1 / 4).....	60
第63図	86号住居跡出土遺物2 (1 / 4).....	61
第64図	86号住居跡出土遺物3 (1 / 4).....	62
第65図	86号住居跡出土遺物4 (1 / 4・1 / 3・1 / 2).....	63
第66図	86号住居跡出土遺物5 (1 / 3).....	64
第67図	87号住居跡 (1 / 60).....	65
第68図	87号住居跡カマド (1 / 30).....	65
第69図	87号住居跡出土遺物 (1 / 4).....	65
第70図	88号住居跡1 (1 / 60).....	67
第71図	88号住居跡2 (1 / 60).....	68
第72図	88号住居跡3 (1 / 60).....	69
第73図	88号住居跡カマド (1 / 30).....	70
第74図	88号住居跡炉跡 (1 / 30).....	70
第75図	88号住居跡遺物出土状態1 (1 / 80).....	71
第76図	88号住居跡遺物出土状態2 (1 / 80)・カマド遺物出土状態 (1 / 30).....	72
第77図	88号住居跡遺物出土状態3 (1 / 80).....	73
第78図	88号住居跡遺物出土状態4 (1 / 60).....	73
第79図	88号住居跡出土遺物1 (1 / 4).....	74
第80図	88号住居跡出土遺物2 (1 / 4・1 / 3・1 / 2).....	75

第81図	6号掘立柱建築遺構（1／60）	76
第82図	平安時代土坑1（1／60）	89
第83図	平安時代土坑2（1／60）	90
第84図	平安時代土坑3（1／60）	91
第85図	平安時代土坑4（1／60）	92
第86図	252・287号土坑出土遺物（1／4）	92
第87図	14号溝跡（1／150・1／60）	93
第88図	14号溝跡遺物出土状態（1／150・1／60）	94
第89図	14号溝跡出土遺物（1／4・1／3）	94
第90図	17号溝跡（1／60）	95
第91図	古墳・平安時代ピット1（1／60）	96
第92図	古墳・平安時代ピット2（1／60）	97
第93図	古墳・平安時代ピット3（1／60）	98
第94図	古墳・平安時代ピット4（1／60）	99
第95図	古墳・平安時代ピット5（1／60）	100
第96図	7号ピット出土遺物（1／4）	100
第97図	16号溝跡・285号土坑・67号ピット（1／60）	114
第98図	遺構外出土遺物（1／4・1／3）	116

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	田子山遺跡第160地点の発掘調査工程表	13
第3表	260・283号土坑出土遺物一覧	23
第4表	24号住居跡出土遺物一覧	30
第5表	30号住居跡出土遺物一覧	30
第6表	32号住居跡出土遺物一覧	30
第7表	ピット一覧	101
第8表	76号住居跡出土遺物一覧（1）～（3）	102～104
第9表	81号住居跡出土遺物一覧	104
第10表	82号住居跡出土遺物一覧（1）・（2）	104・105
第11表	83号住居跡出土遺物一覧	105
第12表	84号住居跡出土遺物一覧	106
第13表	85号住居跡出土遺物一覧（1）・（2）	106・107
第14表	86号住居跡出土遺物一覧（1）～（4）	107～110
第15表	87号住居跡出土遺物一覧	110
第16表	88号住居跡出土遺物一覧（1）～（4）	110～113
第17表	14号溝跡出土遺物一覧	113
第18表	252・287号土坑出土遺物一覧	113
第19表	7号ピット出土遺物一覧	113

第20表	遺構外出土遺物一覧	117
第21表	樹種同定結果	128
第22表	田子山遺跡から出土した炭化種実	129
第23表	炭化種実同定結果(1)(2)	131・132
第24表	測定資料および処理	133
第25表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	134
第26表	暦年較正結果	134
第27表	分析対象一覧	135
第28表	XRF分析による鉄滓の半定量値	135
第29表	EDS分析結果	135

— 図版目次 —

図版 1	調査区全景・合成写真
図版 2	1. 1区プラン確認状況 2. 2区プラン確認状況 3. 6号炉穴セクション 4. 6号炉穴完掘 5. 24号住居跡遺物出土状況 6. 24号住居跡完掘状況 7. 30号住居跡炉跡 8. 30号住居跡掘り方
図版 3	1. 31号住居跡完掘状況 2. 32号住居跡掘り方 3. 42号ピットセクション 4. 76号住居跡遺物出土状況 5. 76号住居跡遺物出土状況 6. 76号住居跡遺物出土状況 7. 76号住居跡遺物出土状況 8. 76号住居跡完掘状況
図版 4	1. 76号住居跡掘り方 2. 76号住居跡カマド完掘状況 3. 81号住居跡遺物出土状況 4. 81号住居跡常総型甕出土状況 5. 81号住居跡完掘状況 6. 81号住居跡掘り方 7. 82号住居跡遺物出土状況 8. 82号住居跡完掘状況
図版 5	1. 82号住居跡カマド完掘状況 2. 82号住居跡カマド掘り方 3. 82号住居跡掘り方 4. 83号住居跡遺物出土状況 5. 83号住居跡鉄滓出土状況 6. 83号住居跡遺物出土状況 7. 83号住居跡完掘状況 8. 83号住居跡カマド遺物出土状況
図版 6	1. 83号住居跡カマド完掘状況 2. 83号住居跡カマド掘り方 3. 83号住居跡掘り方 4. 84号住居跡遺物出土状況 5. 84号住居跡遺物出土状況 6. 84号住居跡完掘状況 7. 84号住居跡カマド遺物出土状況 8. 84号住居跡カマド完掘状況
図版 7	1. 84号住居跡カマド掘り方 2. 84号住居跡掘り方 3. 85号住居跡灰釉陶器手付小瓶出土状況 4. 85号住居跡遺物出土状況 5. 85号住居跡完掘状況 6. 85号住居跡カマド1完掘状況 7. 85号住居跡カマド1掘り方 8. 85号住居跡カマド2セクション
図版 8	1. 85号住居跡カマド2掘り方 2. 85号住居跡炉跡セクション 3. 85号住居跡炉跡完掘状況 4. 85号住居跡掘り方

5. 86号住居跡遺物出土状況 6. 86号住居跡遺物出土状況
7. 86号住居跡土製品出土状況 8. 86号住居跡紡錘車出土状況
- 図版9 1. 86号住居跡遺物出土状況
2. 86号住居跡粘土・ローム・焼土堆積層検出状況 3. 86号住居跡完掘状況
4. 86号住居跡カマド遺物出土状況 5. 86号住居跡カマド完掘状況
6. 86号住居跡カマド掘り方 7. 87号住居跡完掘状況
8. 87号住居跡カマド完掘状況
- 図版10 1. 87号住居跡掘り方 2. 88号住居跡遺物出土状況
3. 88号住居跡遺物出土状況 4. 88号住居跡遺物出土状況 5. 88号住居跡完掘状況
6. 88号住居跡カマド遺物出土状況 7. 88号住居跡カマド遺物出土状況
8. 88号住居跡カマド完掘状況
- 図版11 1. 88号住居跡貯蔵穴完掘状況 2. 88号住居跡炉跡完掘状況
3. 88号住居跡炉跡掘り方 4. 88号住居跡出入口施設拡張状況
5. 6号掘立柱建築遺構 6. 14号溝跡遺物出土状況 7. 14号溝跡完掘状況
8. 16号溝跡完掘状況
- 図版12 1. 17号溝跡完掘状況 2. 287号土坑炭化材出土状況
3. 304号土坑遺物出土状況 4. 7号ピットセクション
5. 7号ピット遺物出土状況 6. 深掘りトレンチ（TP 3）土層断面
7. 発掘作業風景 8. 現地説明会
- 図版13 1. 260・283号土坑出土遺物 2. 24号住居跡出土遺物 3. 30号住居跡出土遺物
4. 32号住居跡出土遺物
- 図版14 76号住居跡出土遺物 1
- 図版15 76号住居跡出土遺物 2
- 図版16 1. 81号住居跡出土遺物 2. 82号住居跡出土遺物 3. 83号住居跡出土遺物 1
- 図版17 1. 83号住居跡出土遺物 2 2. 84号住居跡出土遺物 3. 85号住居跡出土遺物 1
- 図版18 1. 85号住居跡出土遺物 2 2. 86号住居跡出土遺物 1
- 図版19 86号住居跡出土遺物 2
- 図版20 86号住居跡出土遺物 3
- 図版21 86号住居跡出土遺物 4
- 図版22 1. 87号住居跡出土遺物 2. 88号住居跡出土遺物 1
- 図版23 88号住居跡出土遺物 2
- 図版24 1. 88号住居跡出土遺物 3 2. 古墳・平安時代土坑出土遺物 3. 14号溝跡出土遺物 1
- 図版25 1. 14号溝跡出土遺物 2 2. 7号ピット出土遺物 3. 遺構外出土遺物 1
- 図版26 遺構外出土遺物 2
- 図版27 炭化材の走査型電子顕微鏡写真
- 図版28 1. 田子山遺跡第160地点2区86Hから出土した炭化種実
2. 鉄滓とその断面組織

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.05km²（註1）、人口約7万5千人の自然と文化の調和する都市である。

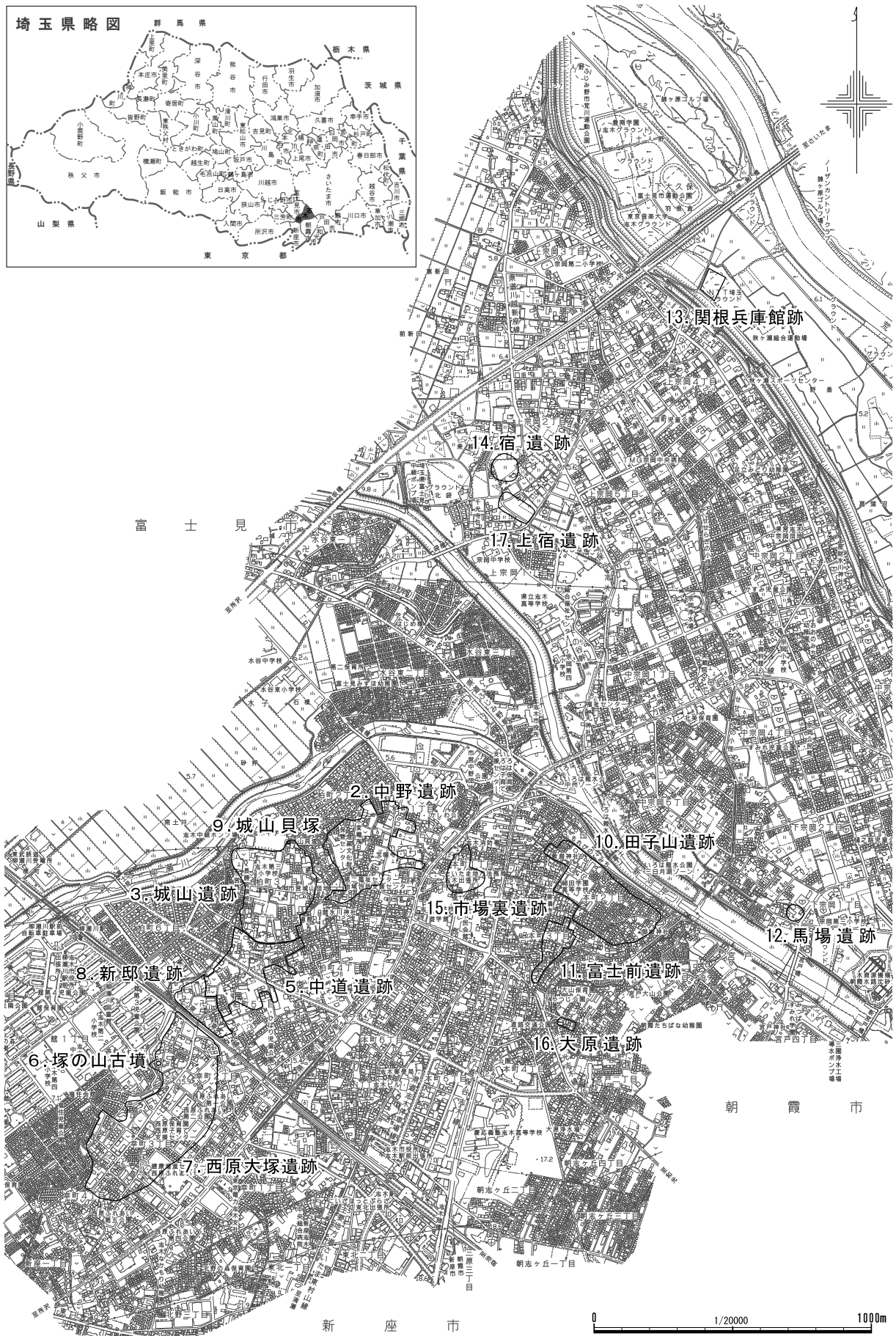
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	67,620 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,100 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	54,420 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	164,960 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈、平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム探掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830 m ²	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700 m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
17	上宿	8,600 m ²	水田・宅地	集落跡	平安、中・近世	住居跡、溝跡	土師器、須恵器
合計		519,240 m ²					

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

令和元年11月14日 現在



第1図 市域の地形と遺跡分布(1/20,000)

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年に第224地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91⑦地点からは、礫群1基が検出された。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が検出されている。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部で石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層で石器集中地点と礫群が検出されている。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚遺跡・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡・城山遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成27（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EIV式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。最新資料として、平成26（2015）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2016・2017）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとまって出土している。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については、令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で、市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは、壺、甕、高坏、挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。

後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見

され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。なお、鳥形土製品1と壺形土器4点の計5点は、考古資料として市指定文化財に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で約230軒、次いで中野遺跡で約55軒、中道遺跡と田子山遺跡で16軒ずつ、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶^{ふじゆしんぼう}が2枚とその近くか

らは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸軀が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらきゆうき館村旧記』（註2）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『かいこくざつき廻国雑記』（註3）に登場する「おおいしなののかみのやかた大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、『おおつかじゆうぎよくぼう大塚十玉坊』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鑄型、鍋の耳部分の小型鑄型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状態で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、『よろい さね鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新た土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべき

である。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」^{しょうりんざんかんのんじだいじゅいん}関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する田子山遺跡について概観することにする。

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約15m、低地との比高差は約10mであり、南北方向に約100m、東西方向に約500mの広がりを持ち、遺跡の面積は約74,000㎡である。

遺跡の周辺を眺めてみると、古くから個人住宅・共同住宅などの小規模住宅が密集している地域であり、大きな建物は、今回報告する細田学園とその北側に隣接するマンション（第31地点）が存在するのみで、その他として敷島神社、御嶽神社が存在し、市内でも閑静な住宅地と言える。

最近では、個人住宅の建物の老朽化による新築・建替工事や相続による土地売買により分譲住宅建設などが原因による小・中規模開発が急激に増加している状況である。

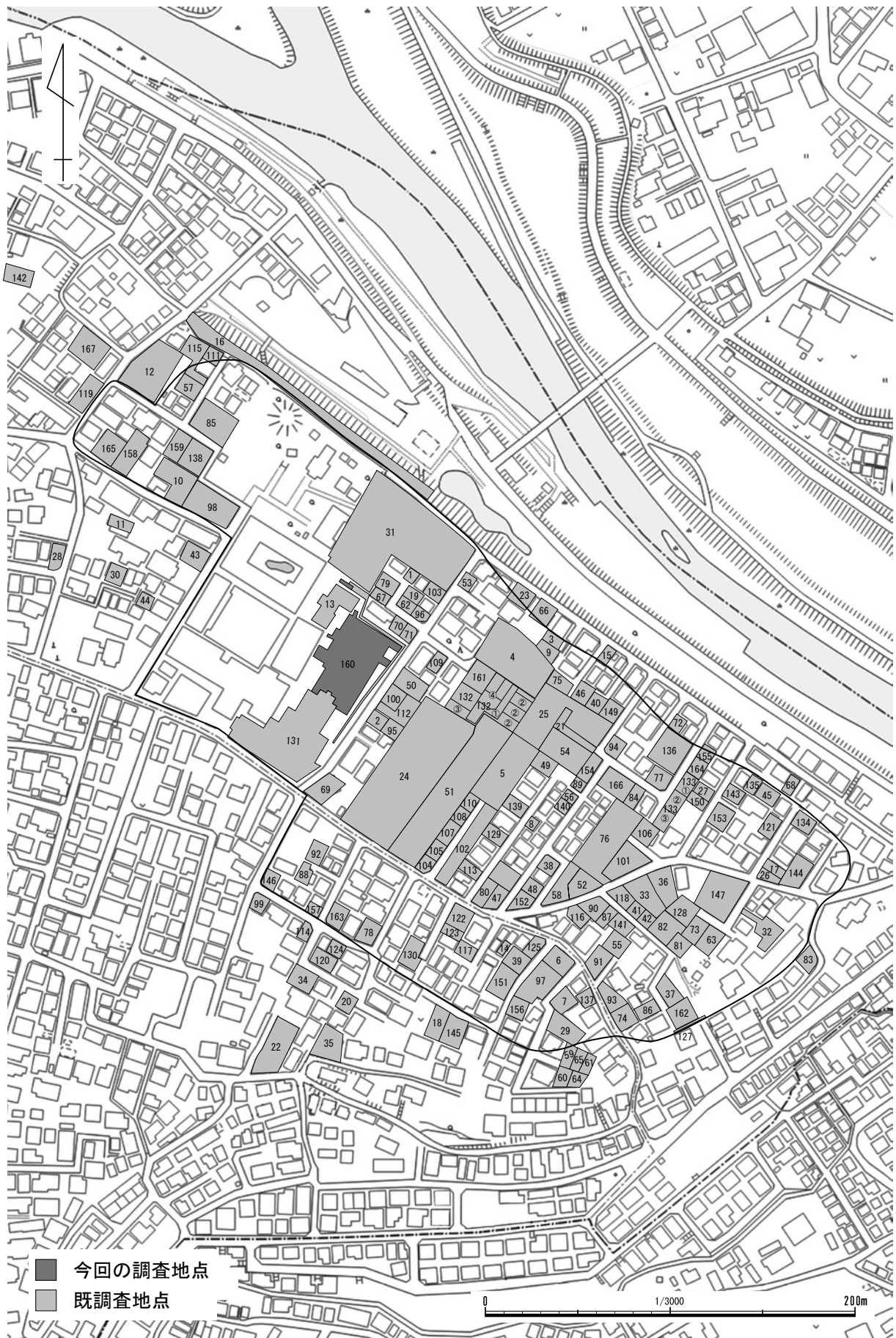
本遺跡は、これまでに165回の調査（令和2年9月30日現在）が実施され、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世、近代に至る複合遺跡であることが判明している。

[註]

- 註1 平成26年度「全国都道府県市区町村別面積調」により、9.06km²から9.05km²に変更された。
- 註2 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の^{なぬしみやはらなかえもんなかつね}名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註3 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

- 神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号第1章 遺跡の立地と環境



第2図 田子山遺跡の調査地点(1/3,000)

令和2年8月31日現在

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成30年10月、学校法人細田学園（理事長 細田洋一郎）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市本町2丁目1700-1における学校法人細田学園の中学校・高等学校校舎等建替工事を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田子山遺跡（コード11228-09-010）に該当するため、大旨下記のとおり回答し、学校法人細田学園の了承を得た。

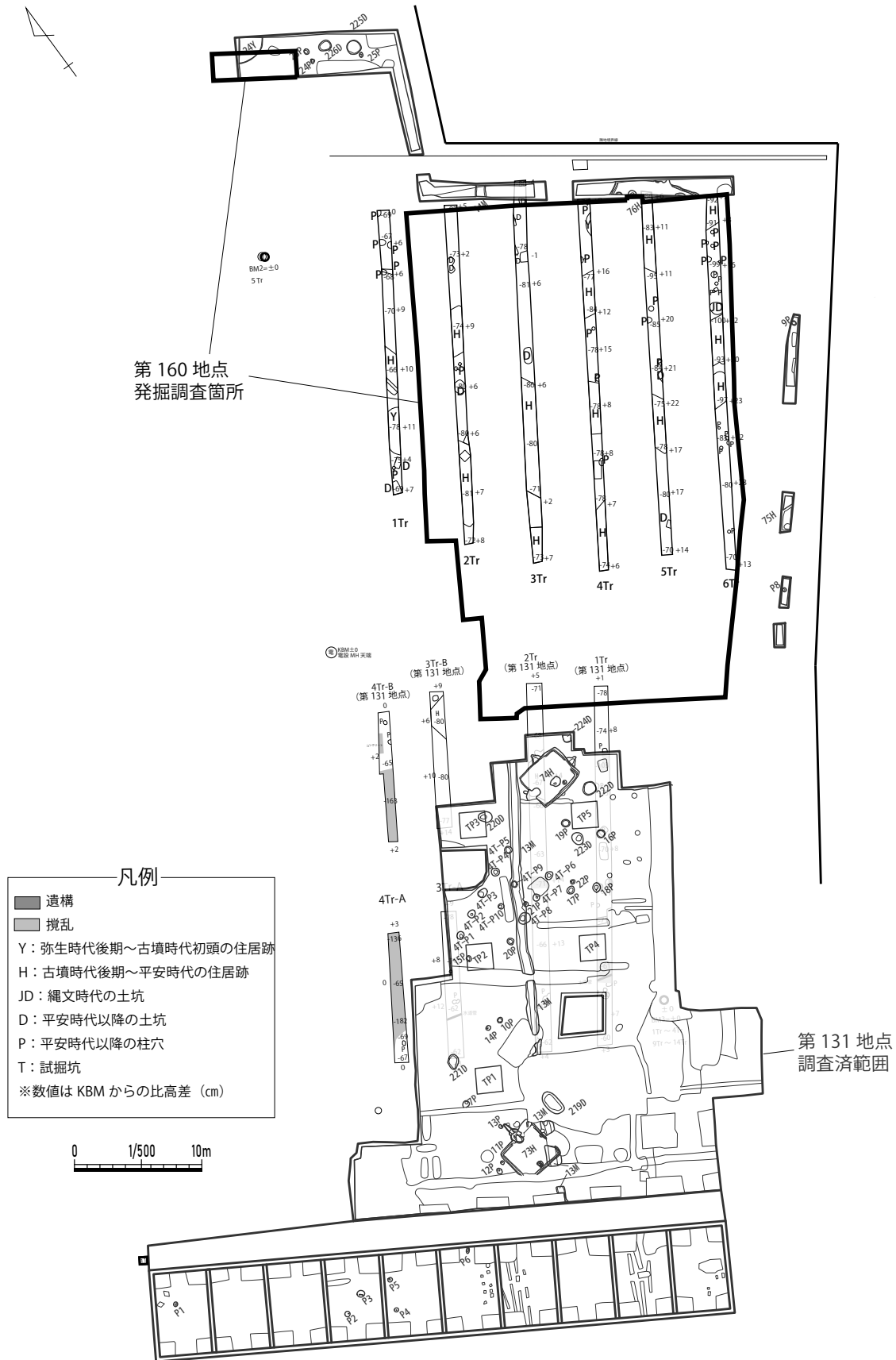
1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。学校法人細田学園からは、今回の計画で盛土保存を行うことは不可能であるため、確認調査の結果、遺構等が確認できた場合には、発掘調査を早急に行ってもらいたいとの意向が示された。その場合、発掘調査は民間調査組織に支援業務を委託し実施する。
3. 今回の調査対象範囲については、学校における利用があった箇所のため、まず、確認調査を実施するにあたり、事前に現地視察を行い、打合せを実施する。

11月8日、細田学園の現地視察を実施する。その結果、今回の調査対象箇所は、以前に発掘調査を実施した第131地点の北側部分であり、現在はバスケットボールコートと駐輪場になっているため、教育委員会は学校法人細田学園に対し、確認調査の実施前には確認調査が実施できるように事前に撤去を依頼した。

平成30年12月13日、教育委員会は、土木工事主体者である学校法人細田学園より確認調査依頼書を受理し、田子山遺跡第160地点として、12月19日から確認調査を開始した。確認調査は、第3図に示すように調査区ほぼ南北方向に6本のトレンチ（1～6 Tr）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒、古墳時代後期～平安時代の住居跡12軒、平安時代の土坑11基・ピット30本等を確認した。調査区全体に各時代の遺構が広がっており、特に古墳時代後期の住居跡については、一辺8mを超える大型の住居跡が3軒ほど分布しているものと想定された。教育委員会は、この結果をただちに土木工事主体者に報告し、保存措置について検討を依頼した。

平成31年2月15日に教育委員会は計画書類及び志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書を受理した。これにより、調査主体者となる教育委員会は、発掘調査の実施にあたり、民間調査組織の支援を受けることとし、4月23日に競争入札を行った。その結果、支援を依頼する民間調査組織が株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）に決定し、同日には、志木市埋蔵文化財保存事業受託要綱第2条第2項に基づき、学校法人細田学園と事前協議を実施し、4月26日には株式会社中野技術と業務委託を締結、同日、学校法人細田学園と埋蔵文化財保存事業に係る協議書を取り交わし、志木市埋蔵文化財保存事業委託契約を締結した。

さらに教育委員会は、4月26日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。以上により、教育委員会を調査主体に、5月14日から発掘調査を実施した。



第3図 確認調査時の遺構分布図と調査区設定状況(1/500)

第2節 発掘調査の経過と調査方法

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。

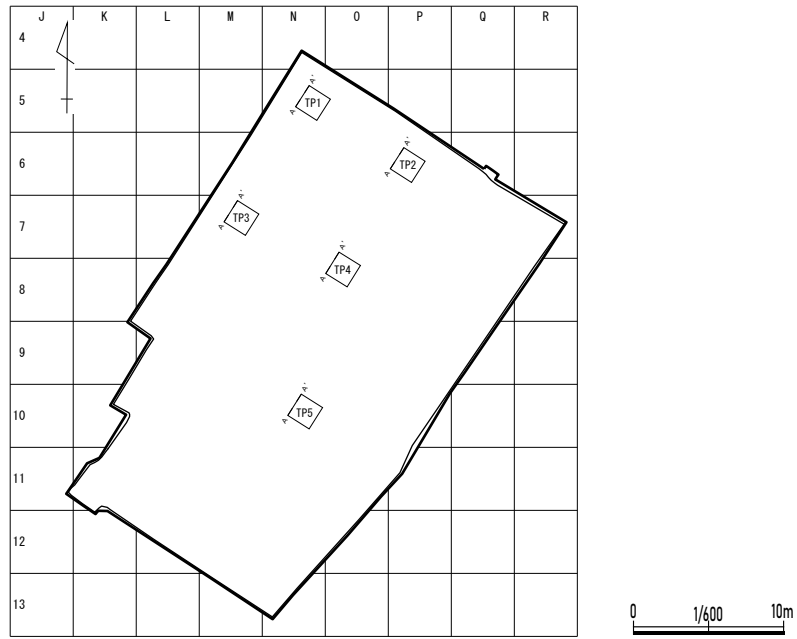
まず、準備作業として令和元年5月7日から囲柵設置、現場事務所設営、器材搬入、基準点測量及び調査区の位置出しを行った後、0.4m³バックホーによる表土除去を5月13日まで断続的に行った。翌日の14日にバックホーにて北側飛地の表土除去を行い、すべての準備が整い同日の14日より本調査を開始し令和元年9月2日に現地での作業を終了している。調査面積は1315.5m²であった。なお、実際の現地調査は廃土置場を別途確保できないことから、除去表土は反転して2期に分け対象区の北側を1期調査区として概ね30・31Y（弥生時代後期～古墳時代前期）住居跡より以北と更に北側の飛び地を、2期調査区を85・86H（古墳時代後期・平安時代）住居跡以南として進めた。なお、それぞれの除去表土の集積に当っては、飛散、崩落などを防ぐため、ブルーシートによる養生を行い対処している。

表土除去後、世界測地系国家公共座標により杭を打ち5mグリッドを設定、遺構確認、写真撮影を行い、遺構の掘り下げを開始した。遺構は、覆土の堆積状況を観察、記録するため半截又はベルトを残して掘り下げ、出土遺物は基本全点ドットで記録している。特殊な出土状況が伺えたものとカマド内については写真撮影してオルソ図を作成したものと手実測して記録を作成したものがある。ただし、遺構に伴わないもの又は微細な遺物については、グリッド又は遺構毎とし住居跡など大形遺構についてはさらに小区を設けて極力位置情報の取得に努めた。遺構は完掘後、平面図断面図をトータルステーションと電子平板を用いて記録した。なお、1期調査は、埋め戻しを含め5月14日から6月27日まで、2期調査は表土除去と最終埋め戻しを含め7月1日から9月3日まで実施し、学校法人細田学園、志木市教育委員会、株式会社中野技術立ち合いのもと調査区の引き渡しが行われ現地作業のすべてを完了した。

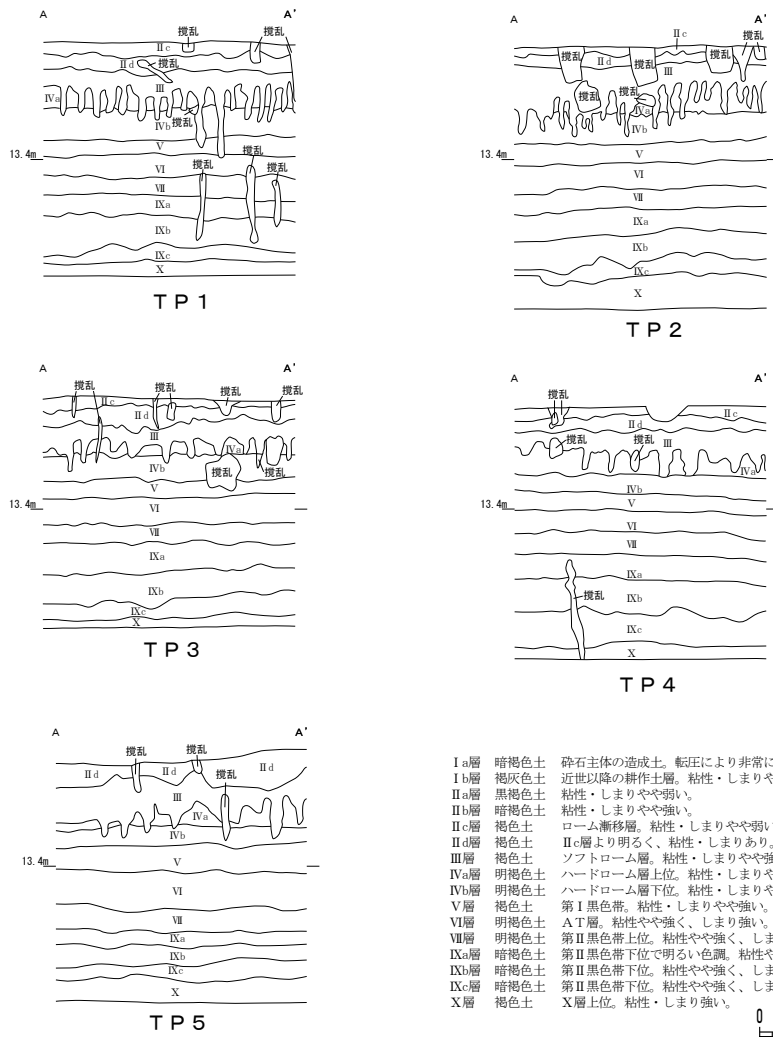
第3節 基本層序

本調査区の基本土層を確認するため、5箇所の深掘りトレンチを設定し、土層の記録を行った（第4・5図）。確認された層位は、立川ローム第X層までである。なお、I a層は碎石主体の造成土で、1・2区に認められ、I b層は耕作土で調査区全体に認められる。II a層は黒褐色土、II b層は暗褐色土で、調査区全体に認められる。I a層からII b層までの土層断面については、第14・18・21・34図等を参照。

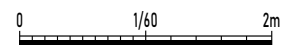
分層の結果、各深掘りトレンチの土層は水平に堆積しており、層位ごとの標高差は顕著にみられない。本調査区においては、傾斜地形はみられず、概ね平坦な地形であったと言える。



第4図 深掘りトレンチ位置図 (1/600)



- I a層 暗褐色土 砕石主体の造成土。転圧により非常に硬く締まる。
- I b層 褐灰色土 近世以降の耕作土層。粘性・しまりやや弱い。
- II a層 黒褐色土 粘性・しまりやや弱い。
- II b層 暗褐色土 粘性・しまりやや強い。
- II c層 褐色土 ローム漸移層。粘性・しまりやや弱い。
- II d層 褐色土 II c層より明るく、粘性・しまりあり。
- III層 褐色土 ソフトローム層。粘性・しまりやや強い。
- IV a層 明褐色土 ハードローム層上位。粘性・しまりやや強い。
- IV b層 明褐色土 ハードローム層下位。粘性・しまりやや強い。
- V層 褐色土 第I黒色帯。粘性・しまりやや強い。
- VI層 明褐色土 A T層。粘性やや強く、しまり強い。
- VII層 明褐色土 第II黒色帯上位。粘性やや強く、しまり強い。
- IX a層 暗褐色土 第II黒色帯下位で明るい色調。粘性やや強く、しまり強い。
- IX b層 暗褐色土 第II黒色帯下位。粘性やや強く、しまり強い。
- IX c層 暗褐色土 第II黒色帯下位。粘性やや強く、しまり強い。
- X層 褐色土 X層上位。粘性・しまり強い。



第5図 基本層序 (1/60)



第6図 遺構分布図 (1/400)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構は、土坑19基、炉穴1基、ピット1本が検出された。遺物は、縄文時代早期～後期の土器、黒曜石製の碎片などの石器で、遺構に伴うものは早期末から前期初頭と中期後葉の土坑から出土し、その他のものは遺構への流れ込みによるものと確認調査時に出土したものである。

(2) 土坑

257号土坑

遺 構 (第7図)

[位 置] (N-5) グリッド

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：北壁は垂直に近く、南壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸70cm／短軸60cm／深さ15cm。主軸方位：N-20°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 古墳時代後期と平安時代の土師器小片が出土したが、流れ込みであり不掲載。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

259号土坑

遺 構 (第7図)

[位 置] (N-5) グリッド

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：北西壁は緩やかに、東南壁は45°で立ち上がる。底面は東に傾斜し東南側が窪む。規模：長軸100cm／短軸65cm／深さ26cm。主軸方位：N-54°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

260号土坑

遺 構 (第7図)

[位 置] (N-6) グリッド

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：45°で緩やかに立ち上がる。底面は中央がやや盛り上がる。規模：長軸72cm／短軸55cm／深さ17cm。主軸方位：N-80°-W。

[覆 土] 単層で中央に攪乱が入る。

[遺 物] 縄文土器1点と古墳時代後期の土師器、平安時代の須恵器小片が出土した。縄文土器以外は流れ込みが想定され不掲載。

[時 期] 覆土の観察及び出土土器により縄文時代前期初頭花積下層式期。

遺物 (第11図、図版13-1-1、第3表)

1は深鉢口縁部付近の小片で胎土に繊維を含み、二重口縁状を呈し口縁外面に山形沈線が見られる。その括れ下には僅かに蕨手状文が確認でき、特徴から花積下層式であろう。

282号土坑

遺構 (第7図)

[位置] (O-6) グリッド

[構造] 平面形：円形。断面形：75°前後で立ち上がる。底面は西側に段を持つ。規模：長軸65cm／短軸55cm／深さ30cm。主軸方位：N-83°-E。

[覆土] 3層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

283号土坑

遺構 (第7図)

[位置] (O-9) グリッド

[構造] 平面形：円形。断面形：40°で緩やかに立ち上がる。底面は緩やかに弧を描く。規模：長軸70cm／短軸55cm／深さ17cm。主軸方位：N-23°-E。

[覆土] 2層で西側に攪乱が入る。

[遺物] 縄文土器1点が出土した。

[時期] 覆土の観察及び出土土器により縄文時代中期後葉加曾利EⅢ期。

遺物 (第11図、図版13-1-1、第3表)

1は加曾利EⅢ期の深鉢胴部破片である。

284号土坑

遺構 (第7図)

[位置] (O-9) グリッド

[構造] 平面形：円形。断面形：35°前後で緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸65cm／短軸55cm／深さ16cm。主軸方位：N-43°-E。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 古墳時代後期の土師器片が出土したが、流れ込みであり不掲載。

[時期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

286号土坑

遺構 (第8図)

[位置] (L-7・8) グリッド

[構造] 平面形：円形。断面形：40°前後で緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸65cm／短軸57cm／深さ16cm。主軸方位：N-20°-E。

- [覆 土] 2層に分層できた。
[遺 物] なし。
[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

289号土坑

- 遺 構** (第8図)
[位 置] (Q-8) グリッド
[検出状況] 1区東側で検出され、263Dに切られ、290Dを切る。
[構 造] 平面形：隅丸方形。断面形：40°～50°で緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸100cm／短軸75cm／深さ16cm。主軸方位：N-26°-W。
[覆 土] 2層に分層できた。
[遺 物] なし。
[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

290号土坑

- 遺 構** (第8図)
[位 置] (Q-8) グリッド
[検出状況] 1区東側で検出され、289Dに切られる。
[構 造] 平面形：円形。断面形：55°で立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸70cm／短軸検出長55cm／深さ14cm。主軸方位：N-24°-W。
[覆 土] 2層に分層できた。
[遺 物] なし。
[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

291号土坑

- 遺 構** (第8図)
[位 置] (M-7) グリッド
[構 造] 平面形：円形。断面形：40°前後で緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸90cm／短軸75cm／深さ14cm。主軸方位：N-56°-E。
[覆 土] 2層に分層できた。
[遺 物] なし。
[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

292号土坑

- 遺 構** (第9図)
[位 置] (P・Q-8) グリッド
[検出状況] 1区東側で検出され、266Dに切られる。
[構 造] 平面形：楕円形。断面形：30°～40°で緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で西に傾斜す

る。規模：長軸190cm／短軸125cm／深さ32cm。主軸方位：N-14°-W。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

293号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (P・Q-8) グリッド

[検出状況] 1区東側で検出され、264・265Dに切られる。

[構 造] 平面形：不定楕円形。断面形：20°～30°で緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

規模：長軸検出長235cm／短軸不明／深さ22cm。主軸方位：N-54°-E。

[覆 土] 2層に分層でき攪乱が入る。

[遺 物] 縄文土器（早期末葉条痕文系）が1点出土したが、小片のため不掲載。

[時 期] 出土土器及び覆土の観察より縄文時代と想定される。

294号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (Q-9) グリッド

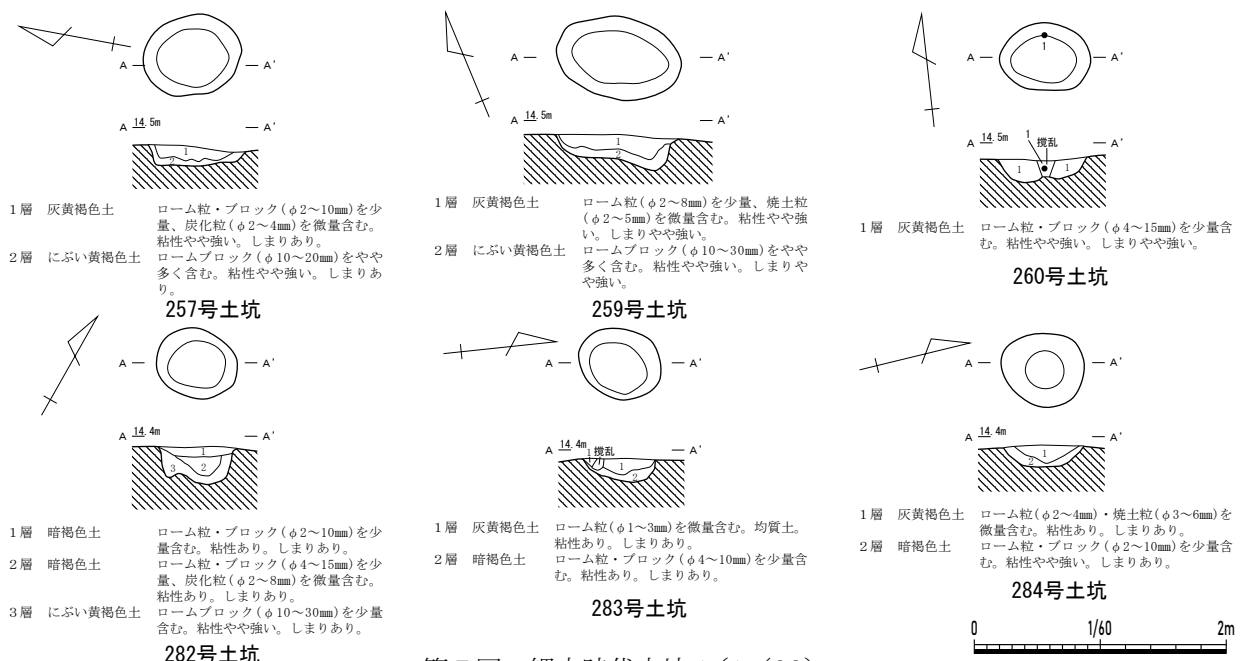
[検出状況] 1区東側で検出され、81H床下より検出、295Dに切られる。

[構 造] 平面形：円形。断面形：40°で緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸75cm／短軸65cm／深さ17cm。主軸方位：N-60°-W。

[覆 土] 単層。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。



第7図 縄文時代土坑1(1/60)

295号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (Q-9) グリッド

[検出状況] 1区東側で検出され、81H床下より検出、294Dを切る。

[構 造] 平面形：円形。断面形：現況40°～50°で緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸90cm／短軸75cm／深さ14cm。主軸方位：N-8°-W。

[覆 土] 単層。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

296号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (Q-9) グリッド

[検出状況] 1区東側で検出され、81H床下より検出。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：現況北東は10°で緩やかに、南西は50°で立ち上がる。底面は僅かに凸凹があり、南西に傾斜する。規模：長軸180cm／短軸125cm／深さ30cm。主軸方位：N-50°-W。

[覆 土] 3層に分層された。

[遺 物] なし。

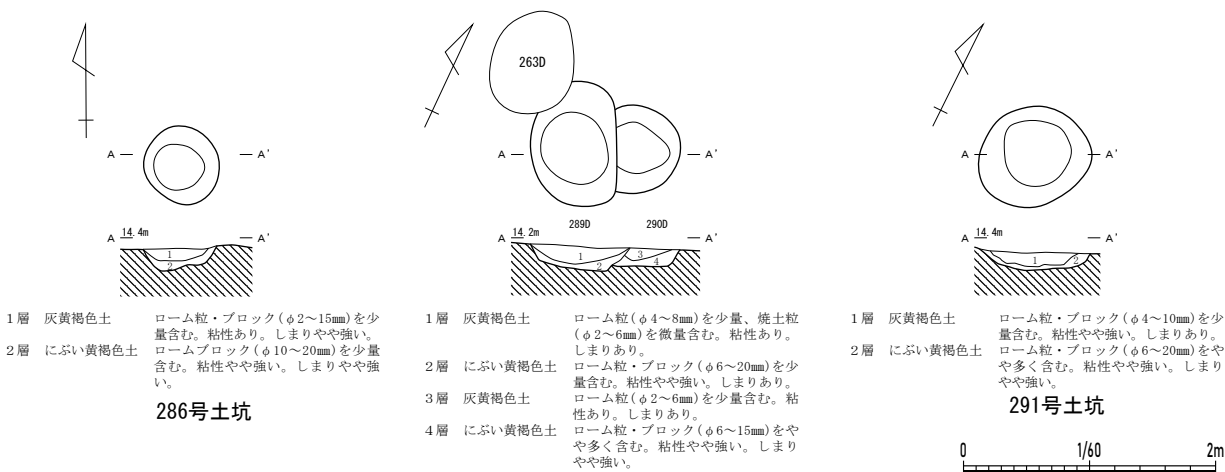
[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

298号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (P-7) グリッド

[構 造] 平面形：円形。断面形：現況40°～50°で弧状に立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸60cm／短軸52cm／深さ22cm。主軸方位：N-27°-E。



286号土坑
289号土坑・290号土坑
第8図 縄文時代土坑2(1/60)

- [覆 土] 2層に分層され攪乱が入る。
- [遺 物] なし。
- [時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

299号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (O-8) グリッド

[構 造] 平面形：円形。断面形：現況40°～50°で弧状に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。規模：長軸85cm／短軸80cm／深さ17cm。主軸方位：N-64°-E。

- [覆 土] 3層に分層され攪乱が入る。
- [遺 物] 古墳時代後期の土師器片が出土したが、流れ込みであり不掲載。
- [時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

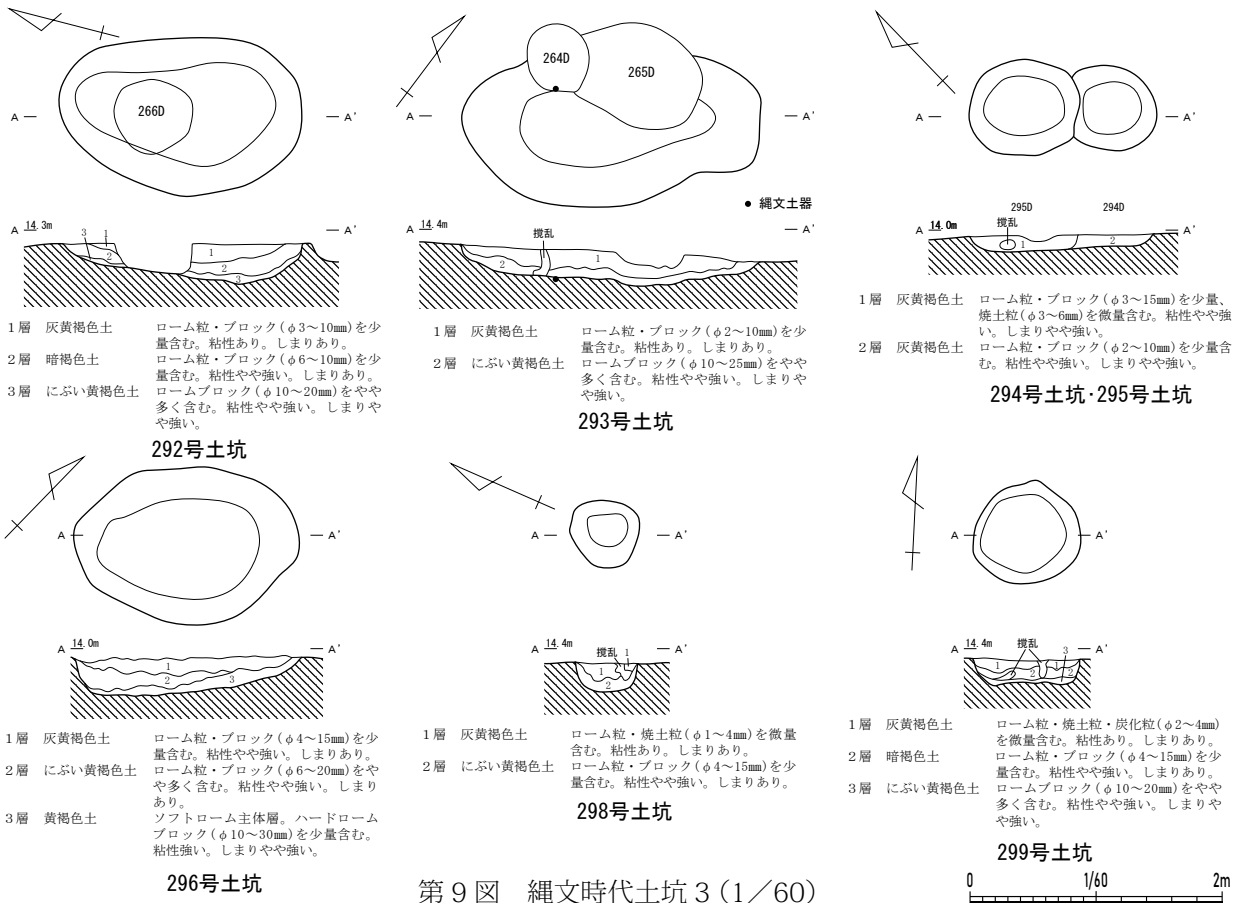
305号土坑

遺 構 (第10図)

[位 置] (P・Q-8) グリッド

[検出状況] 1区東側で検出され、81H、288D、29Pに切られる。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：現況10°～15°で緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸検出長220cm／短軸検出長70cm／深さ28cm。主軸方位：N-64°-E。



[覆 土] 2層に分層され攪乱が入る。

[遺 物] 古墳時代後期の土師器が出土するも、流れ込みのため不掲載。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。

313号土坑

遺 構 (第10図)

[位 置] (O-10) グリッド

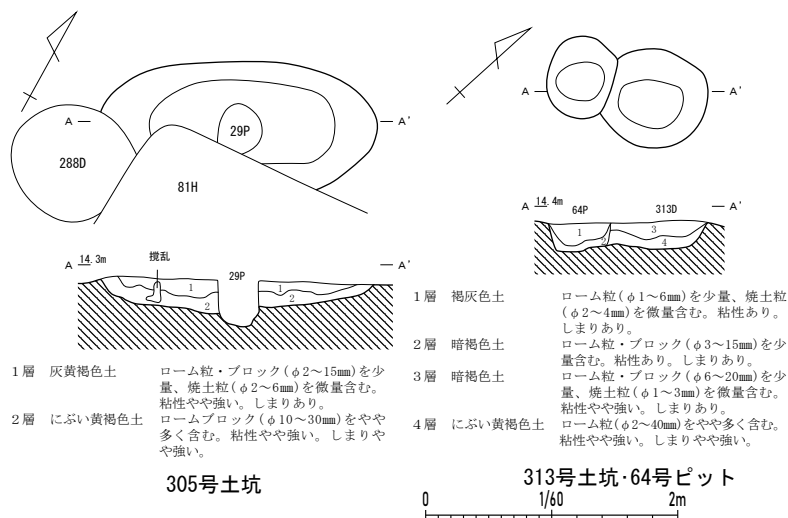
[検出状況] 2区北東側で検出され、64Pに切られる。

[構 造] 平面形：円形。断面形：現況40°で弧状に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。規模：長軸検出長85cm／短軸75cm／深さ24cm。主軸方位：N-20°-E。

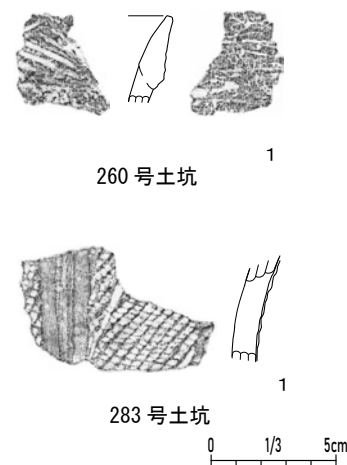
[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察より縄文時代と想定される。



第10図 縄文時代土坑4 (1/60)



第11図 260・283号土坑出土遺物 (1/3)

(3) ピット

65号ピット

遺 構 (第12図)

[位 置] (L-8) グリッド

[検出状況] 2区西側で検出。32Yに切られる。

[構 造] 平面形：不定楕円形。断面形：壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は弧を描く。規模：長軸50cm／短軸30cm／深さ22cm。

[覆 土] 単層。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察と床下より検出されたことから縄文時代と想定される。

(4) 炉穴

6号炉穴

遺構 (第13図)

[位置] (K・L-10) グリッド

[検出状況] 2区西側で検出。14Mに切られる。

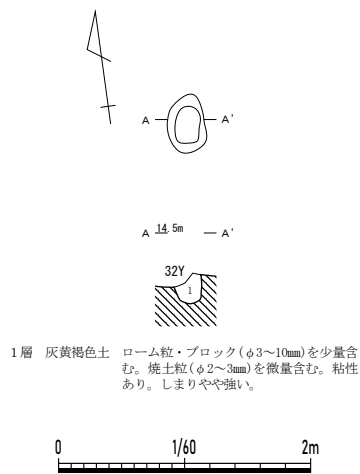
[構造] 平面形：楕円形。断面形：北壁は60°で外反気味に、南壁は30°で緩やかに立ち上がるが、14Mに切られ上部を失う。底面は中央が浅く皿状に窪む。規模：長軸検出長165cm／短軸検出長80cm／深さ61cm。

[覆土] 7層に分層できた。

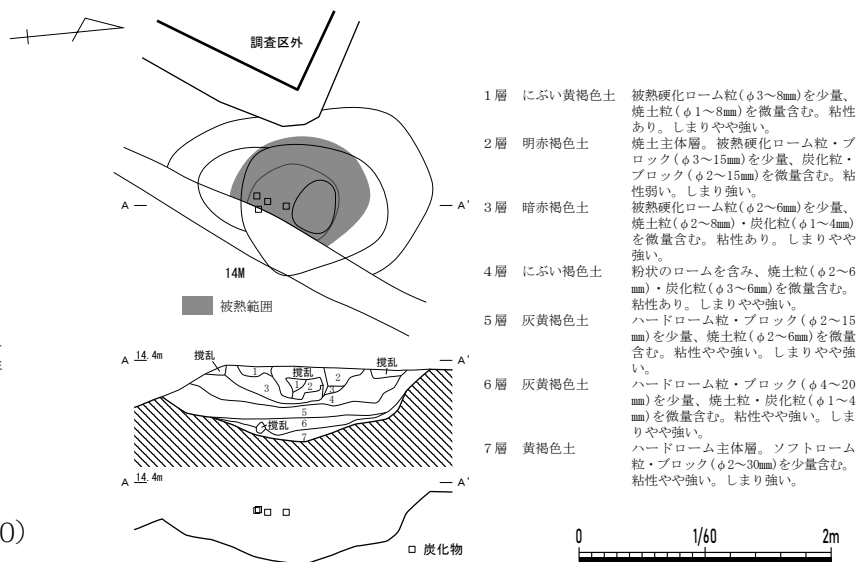
[遺物] 縄文後期土器片、古墳時代後期土器片、近世の土器・陶器片が出土したが、何れも流れ込みの為不掲載。

[時期] 覆土から縄文時代。

[所見] 覆土の状況と構造、当遺跡の調査歴から想定される遺構の性格も加味すれば、早期末葉から前期初頭頃の炉穴と判断されよう。



第12図 65号ピット(1/60)



第13図 6号炉穴(1/60)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第11図1 図版13-1-1	縄文深鉢	口縁部破片	高[3.5] 厚1.2	260号土坑 覆土中	口縁は2重口縁状で、やや外傾する／前期初頭花積下層式	口縁外面に山形沈線、斜位の平行沈線施文／括れ直下には僅かに縄文による蔵手文が観察される	長石・白色砂粒・砂粒・繊維を含む	灰黄褐色
第11図1 図版13-1-1	縄文深鉢	胴部破片	高[4.3] 厚1.1	283号土坑 覆土中	器形は外反する／中期後葉加曾利EⅢ式	地文に縦位縄文RLを施文→磨消縄文を垂下させる	砂粒多く、長石・角閃石を含む	にぶい橙色

第3表 260・283号土坑出土遺物一覧

第2節 弥生時代後期～古墳時代初頭

(1) 概要

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構は、住居跡4軒とピット1本を検出し、遺物は弥生土器、土師器が出土している。

(2) 住居跡

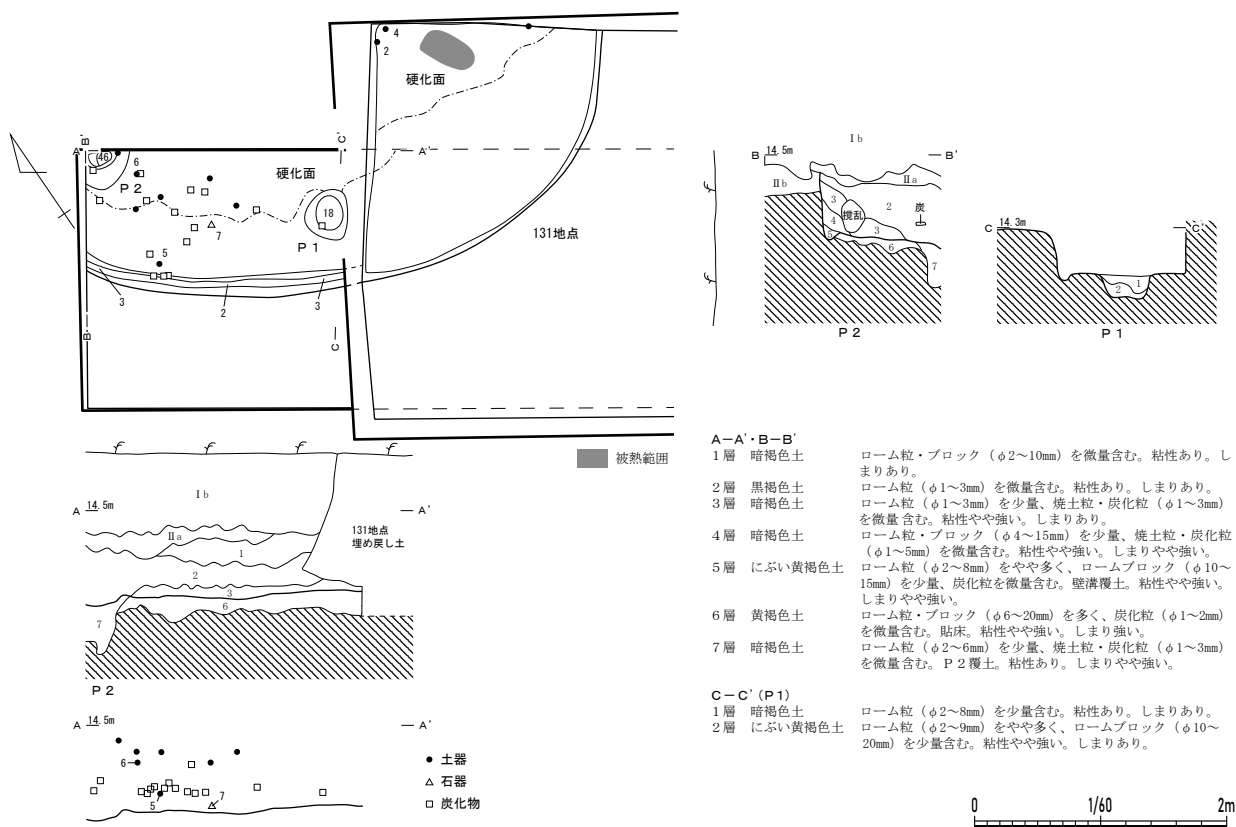
24号住居跡

遺 構 (第14図)

[位 置] (M-0・1) グリッド

[検出状況] 1区の北西。隣接する第131地点第4区検出の北西に続く同一住居である。なお、本住居は北側・西側調査区外へ更に続く。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸検出長2.40m / 短軸検出長1.00m / 確認面から床面までの深さは49cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：131地点では確認されていないが当地点では長さ2mに渡り確認された。幅は15cm前後、深さは2～8cm程である。床面：貼床の厚さは12cm前後である。硬化面は壁から概ね60～80cm内側より認められた。炉：第131地点で調査されている。柱穴：ピットを2基確認した。規模はP1(40×25cmの不正円形 / 深さ18cm)、P2(現況25×25cmで形状不明 / 深さ46cm)である。入口施設・貯蔵穴：検出されていない。



第14図 24号住居跡(1/60)

[覆 土] 7層に分層され、部分的に攪乱が認められた。暗褐色土と黒褐色土が互層をなし、貼床にはロームブロックが多く含まれる。

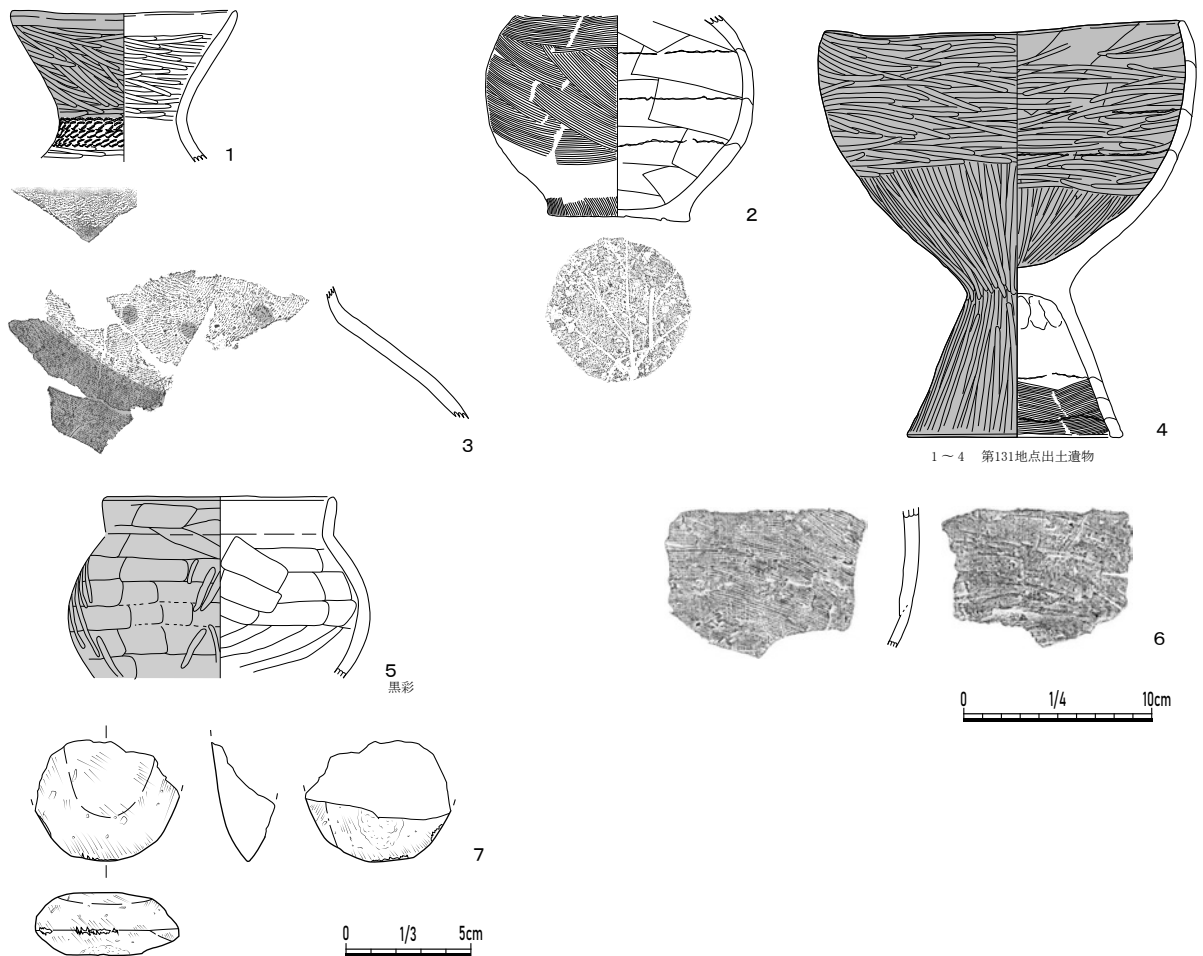
[遺 物] 第131地点で弥生土器が17点、第160地点で弥生土器が7点、混入した縄文土器2点、石器1点が出土している。図示したのはこの内の7点である。

[時 期] 弥生時代後期後葉。

[所 見] 床面近くで焼土と炭化材の分布が認められ、第131地点調査部分でも同様の状況があり焼失住居と想定される。

遺 物 (第15図、図版13-2、第4表)

5は壺、6は甕で、7は刃部付近を残す磨製石斧である。1～3は壺、4は高坏で、1～4は第131地点の遺物である。



第15図 24号住居跡出土遺物 (1 / 4 ・ 1 / 3)

30号住居跡

遺 構 (第16図)

[位 置] (P-9・10、Q-9) グリッド

[検出状況] 8・9 Pに切られる。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸3.60m / 短軸3.00m / 確認面から床面までの深さは45cm。壁：70°前後で立ち上がる。主軸方位：N-16°-W。壁溝：なし。床面：貼床の厚さは10cm前後である。住居の炉を除いた中央付近の凡そ1.80m×1.50mの範囲に硬化面を検出した。炉：北コーナー内側75cmの

偏った位置で掘り込み、東側縁に粘土を貼った粘土板炉を検出した。長軸50cm、短軸42cm。柱穴：なし。入口施設：なし。貯蔵穴：北東壁際検出された。規模は、長軸55cm、短軸35cm、深さ15cm。赤色砂利層：東コーナーの際で確認された。

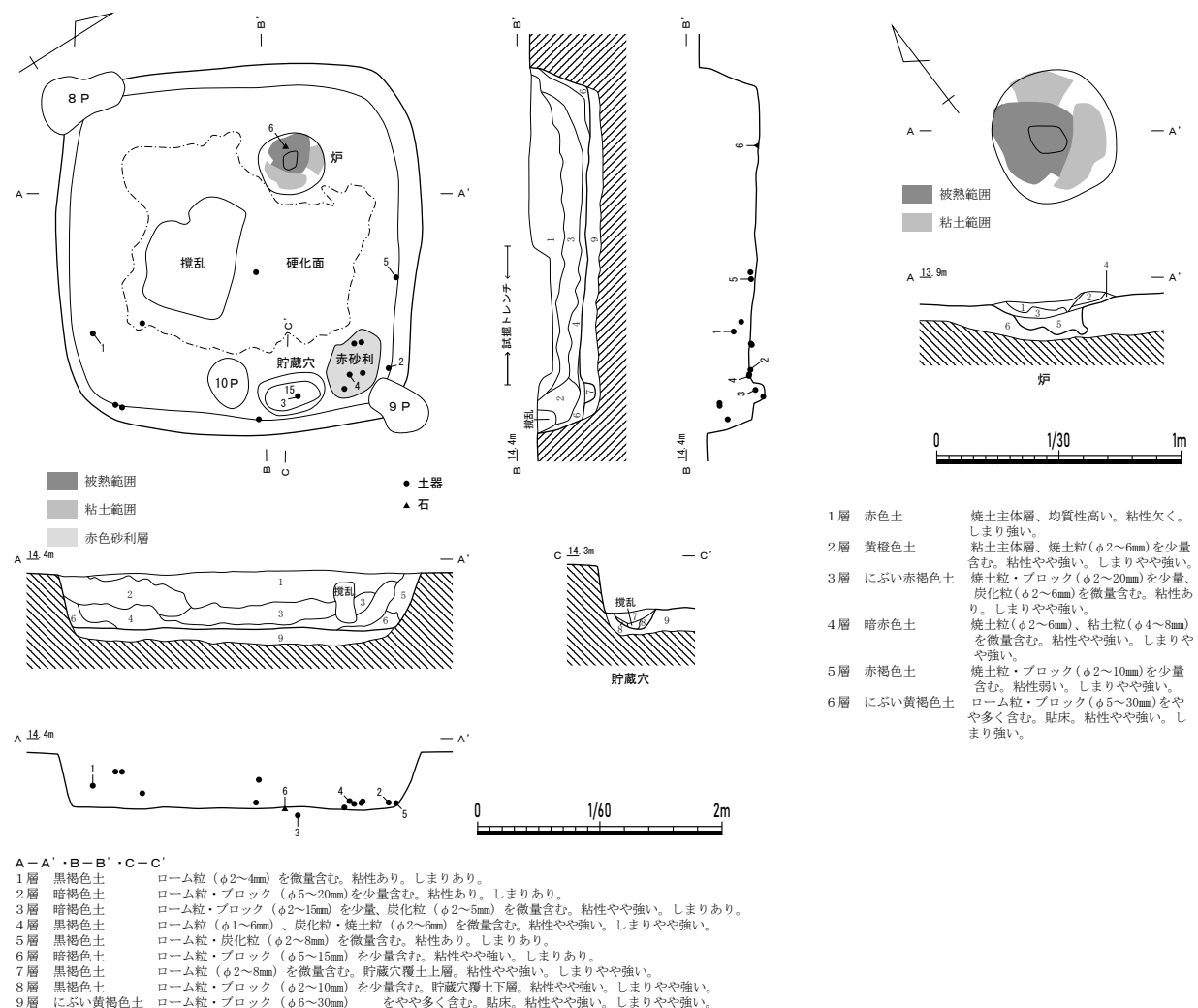
[覆 土] 9層に分層され、部分的に攪乱が認められた。黒褐色土と暗褐色土が主体で、貼床にはロームブロックが多く含まれる。

[遺 物] 弥生土器が71点、混入と思われる石器1点、須恵器4点、陶磁器4点が出土した。図示したのはこの内の土器5点と石器1点の6点である。

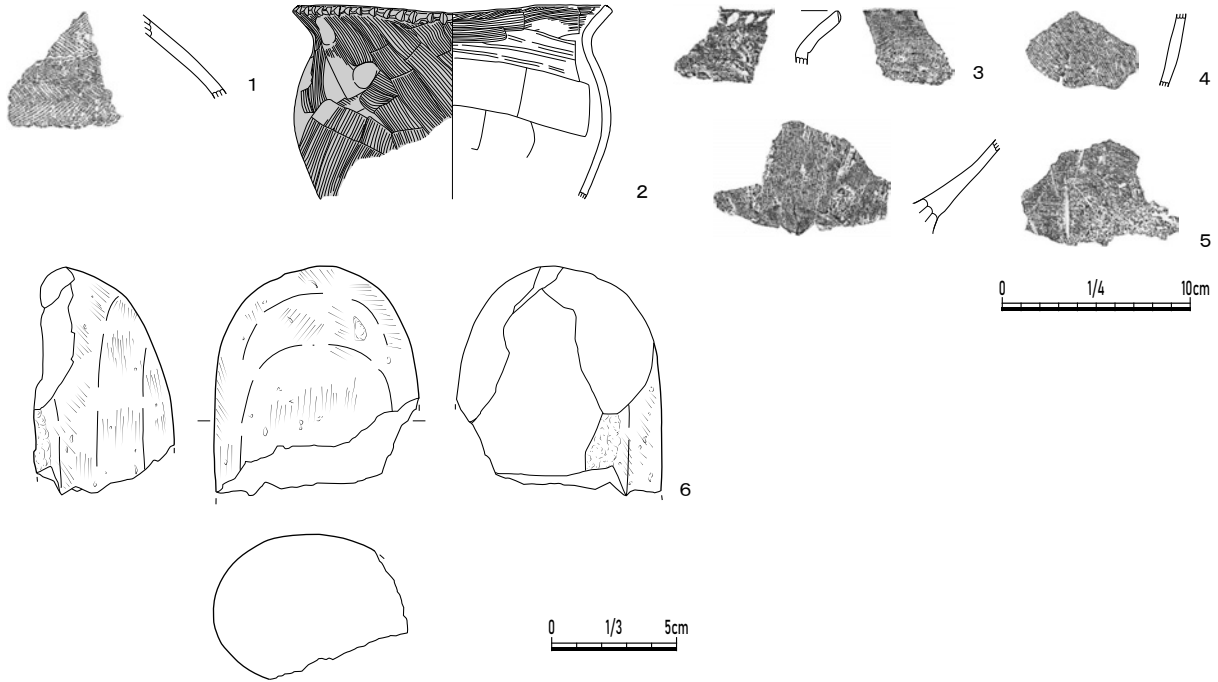
[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期前葉。

遺 物 (第17図、図版13-3、第5表)

1は壺の胴部片、2～5は甕である。6は磨石で破損資料である。



第16図 30号住居跡(1/60)・30号住居跡炉跡(1/30)



第17図 30号住居跡出土遺物 (1 / 4 ・ 1 / 3)

31号住居跡

遺 構 (第18図)

[位 置] (L-7) グリッド

[検出状況] 2区西端にて検出。住居の東端を検出し大部分は西側調査区外に所在するものと思われる。

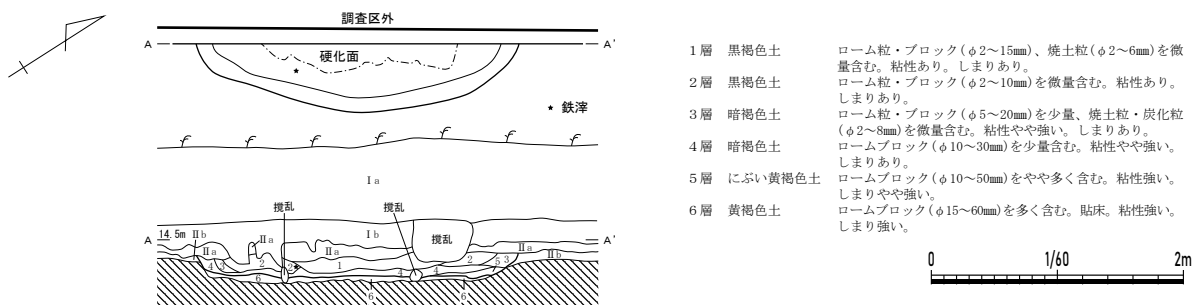
[構 造] 平面形：楕円形か。規模：長軸不明／短軸検出長2.55m／確認面から床面までの深さは12cm。壁：北東30°、南西は55°で何れも緩やかに立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：調査箇所では確認されなかった。床面：貼床の厚さは5cm前後である。確認されている壁から内側に15～30cm内側から硬化面が認められる、西側調査区外に続くことが予想される。炉・貯蔵穴・柱穴・入口施設：いずれも確認されなかった。

[覆 土] 6層に分層された。暗褐色土が主体で、貼床にはロームブロックを多量に含む。

[遺 物] 土器細片と土製品がそれぞれ1点、鉄滓1点。いずれも不掲載。

[時 期] 弥生時代後期。

[所 見] 調査範囲確定前の確認調査1トレンチにおいて、当住居跡の西側の一部が検出された。



第18図 31号住居跡(1/60)

32号住居跡

遺 構 (第19図)

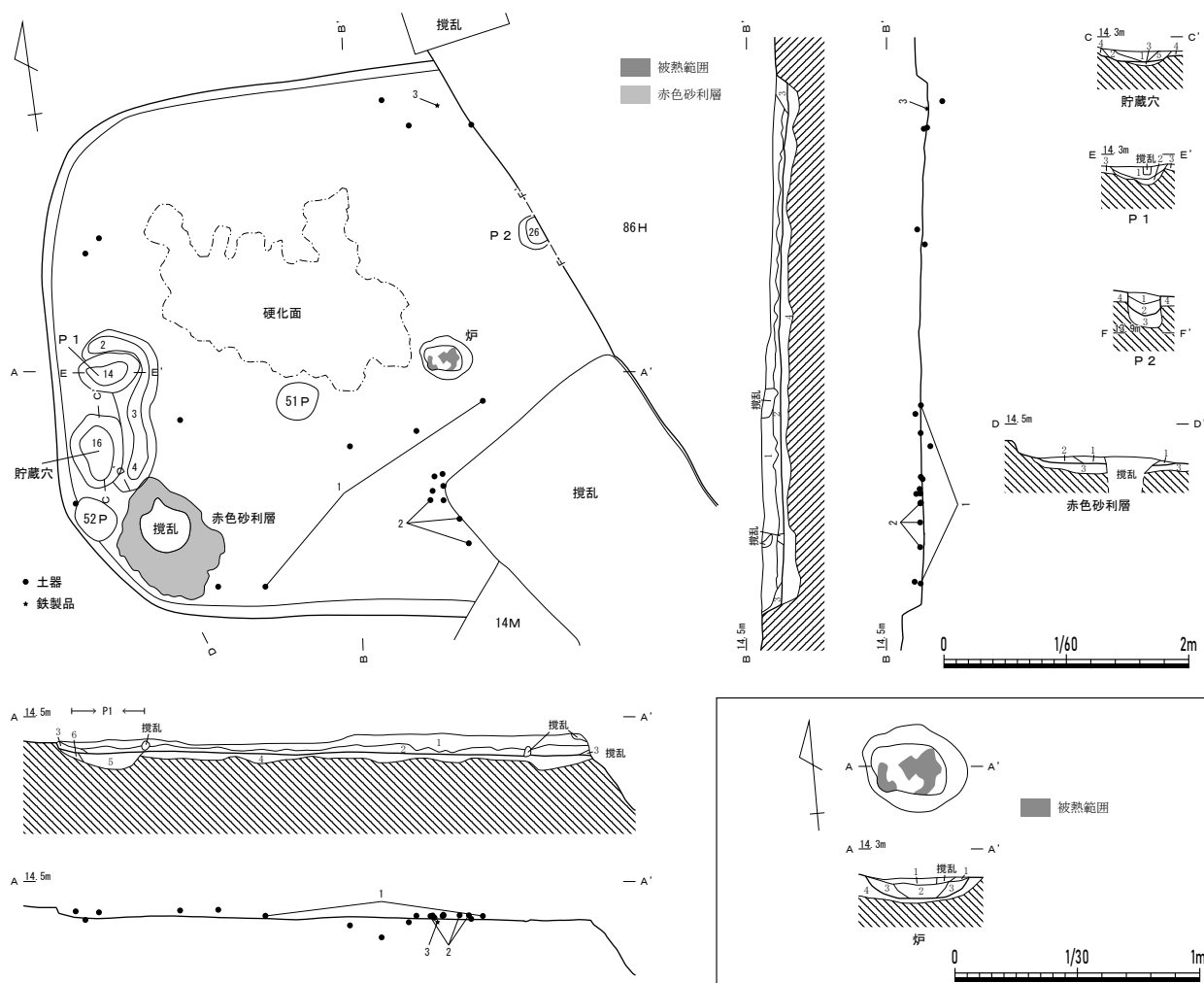
[位 置] (L・M-8・9) グリッド

[検出状況] 調査区西中央部付近に86H、14M、51・52Pに切られ、65Pを切る。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸検出長5.00m / 短軸4.36m / 確認面から床面までの深さは15cm程度。壁：60°でやや緩やかに立ち上がる。主軸方位：N-35°-E。壁溝：確認されなかった。床面：貼床の厚さは8cm前後。硬化面が推定長軸ラインの北側で壁下場から80～100cm内側で2.00m×1.60mの不定形な範囲で確認された。炉：長軸ラインのやや東に寄って長軸40cm、短軸32cmの地床炉が確認された。貯蔵穴：西壁際のやや南に寄って確認された。規模は、長軸60cm、短軸40cm。柱穴：ピット2本を確認した。P1は長軸ライン上の西壁際で、規模は、長軸55cm、短軸40cm、深さは14cmである。P2は86Hに部分的に切られ、確認できる規模は、長軸30cm、短軸20cm程で、深さは26cmである。なお、P1と貯蔵穴を囲うように凸堤が巡る。当住居の全形は不明であるが、P1は位置的に出入口施設を構成するピットの可能性もあろう。赤色砂利層：南西コーナーに検出した。

[覆 土] 暗褐色土を主体とする3層に分層され一部に攪乱が入る。貼り床には、ロームブロックがやや多く認められた。

[遺 物] 弥生土器を83点、混入した土師器18点、須恵器6点、鉄製品1点、鉄滓が1点出土した。



第19図 32号住居跡(1/60)・32号住居跡炉跡(1/30)

- A-A'・B-B'**
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒(φ1~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 4層 黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~30mm)をやや多く、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性やや強い。しまり強い。
- 5層 褐灰色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。IP1層。粘性あり。しまりあり。
- 6層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。IP2層。粘性やや強い。しまりあり。
- C-C' (貯蔵穴)**
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量、炭化粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、炭化粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 4層 黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~30mm)をやや多く含む。32Y貼床。粘性やや強い。しまり強い。
- D-D' (赤色砂利層)**
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、白砂利・焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量、白砂利(φ1mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 3層 黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~30mm)をやや多く、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。粘性やや強い。しまり強い。

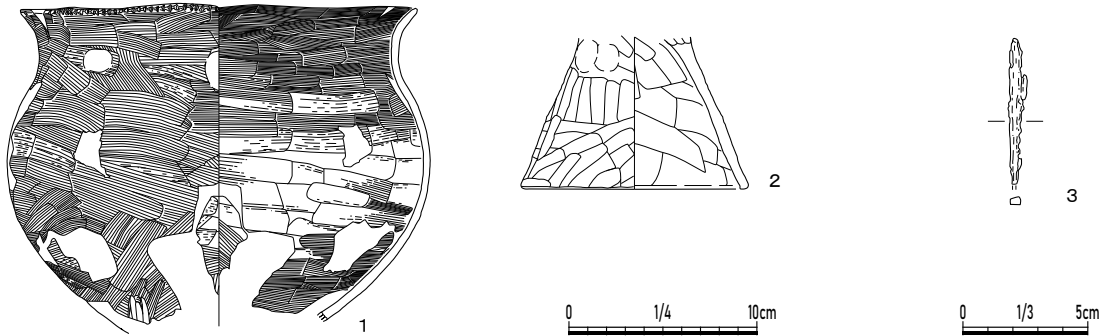
- E-E' (P1)**
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~25mm)をやや多く含む。32Y貼床。粘性やや強い。しまり強い。
- F-F' (P2)**
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量、焼土粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 褐灰色土 ローム粒(φ1~6mm)を少量、粘土粒・焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~25mm)をやや多く含む。32Y貼床。粘性やや強い。しまり強い。
- 炉A-A' (P2)**
- 1層 暗褐色土 ローム粒・焼土粒(φ1~6mm)を少量、炭化粒(φ3~4mm)を微量含む。粘性やや弱い。しまりやや強い。
- 2層 にぶい黄褐色土 硬化ローム粒・ブロック(φ3~15mm)を含み、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性やや弱い。しまり強い。
- 3層 にぶい黄褐色土 ローム粒(φ2~6mm)をやや多く、ローム粒(φ10~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 4層 黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。貼床。粘性強い。しまり強い。

その内図示したのは3点である。

[時期] 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

遺物 (第20図、図版13-4、第6表)

1・2は台付甕である。3は釘状の鉄製品である。



第20図 32号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

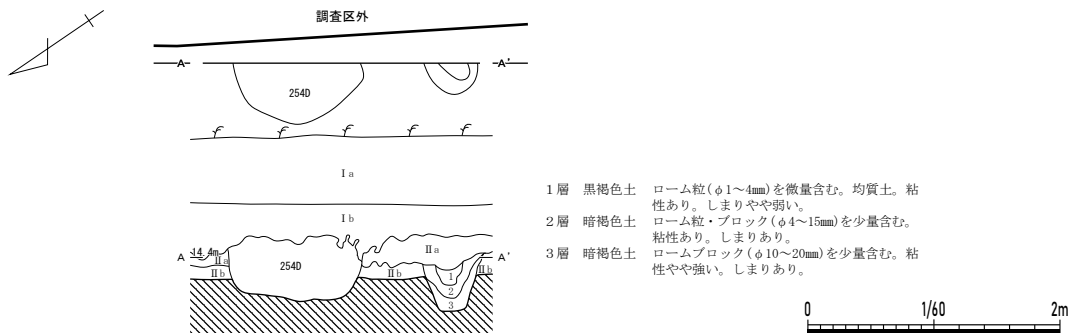
42号ピット

遺構 (第21図)

[位置] (P-10) グリッド

[検出状況] 2区東側で検出。東側は調査区外となり未調査。

[構造] 平面形：不定楕円形か。断面形：深い逆台形でバケツ状。平坦な底面から北東、南西壁とも70°~80°で直線的に立ち上がる。規模：長軸検出長45cm/短軸不明/深さ32cm。



第21図 42号ピット(1/60)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりやや弱い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ロームブロック(φ10~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

第3章 検出された遺構と遺物

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物として、古墳時代後期の土師器と平安時代の須恵器が出土。いずれも流れ込みで小片の為不掲載。

[時 期] 覆土の状況から弥生期の遺構と判断される。

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第15図5 図版13-2-5	土器 壺	口縁部～胴部破片	口12.0 高[9.6]	南側壁溝付近覆土 中	胴部中央で最大径を測り、口縁部は短く直立	内面は斜位ヘラナデ後横位ヘラナデ、外面は横位ヘラナデ後部分的に斜位の細長いヘラナデ（磨き）が施される	黄褐色粒子多く、長石・砂粒含む	にぶい褐色
第15図6 図版13-2-6	土器 甕	胴部破片	高[7.4] 厚0.9	柱穴（P2）付近 覆土中	器形はやや内湾する／外面は薄く煤けている	内面はハケ目後横・斜位ヘラナデ、外面は横・斜位ハケ目	砂粒・小石を少量含む	外面：にぶい 褐色 内面：褐色
第15図7 図版13-2-7	石器 磨製 石斧	刃部破片	—	南側ほぼ床面上	長さ4.7cm・幅5.7cm・厚さ2.5cm・重さ50.4g／蛤刃、基部欠損、両面ともに研磨されているが、裏面の中央部に研磨されていない部分が残る／刃部にガジリ痕が見られる	—	閃緑岩	—

第4表 24号住居跡出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第17図1 図版13-3-1	土器 壺	肩部破片	高[4.5] 厚0.8	南コーナー覆土中	器形は内傾する	内面は丁寧なナデ、外面は端末結束羽状縄文+横位RL縄文+端末結束羽状縄文を施文	砂粒・黄色粒子多量含む	褐色
第17図2 図版13-3-2	土器 甕	口縁部～胴部破片	口16.2 高[12.0]	東コーナー壁溝付 近床面上	胴部中央で最大径を測る／口縁は外反し、波状に歪む／外面に煤付着	内面は横位ハケ目調整・ナデ、外面は斜位のハケ目調整→口唇端部に連続した刻みを施す。	砂粒・褐色粒子多量含む	灰黄褐色
第17図3 図版13-3-3	土器 甕	口縁部～頸部破片	高[2.9] 厚0.6	貯蔵穴内覆土中	口縁部は直線的に外傾する／内外面に煤付着	内面は横位のハケ目調整・横ナデ、外面は斜位のハケ目調整・横ナデ後口唇端部に連続した刻み／外面煤ける	砂粒・黄色粒子・小石少量含む	にぶい黄褐色を基調とし、一部黒褐色
第17図4 図版13-3-4	弥生土 器 甕	胴部破片	高[3.9] 厚0.6	東コーナー覆土中	器形は外傾する	内面は横位のヘラナデ、外面は斜位のハケ目調整	砂粒・褐色粒子多量含む	にぶい褐色
第17図5 図版13-3-5	土器 甕	胴部～脚部破片	高[5.0] 厚2.0	北東壁溝付近床面上	胴部は大きく外傾する／内外面に煤付着、特に内面の黒化が著しい	内面は横・斜位のヘラナデ、外面は縦位のハケ目調整	砂粒・小石を多量含む	外面：にぶい褐色 内面：黒褐色
第17図6 図版13-3-6	石器 磨石	30%	—	粘土板炉内床面上	長さ9.0cm・幅8.1cm・厚さ5.5cm・重さ489.0g／全面に擦痕が見られる／裏面中心に2／3ほど欠損／裏面に敲打痕が残る	—	閃緑岩	—

第5表 30号住居跡出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第20図1 図版13-4-1	土器 台付甕	口縁～胴部破片	口21.0 高[17.2]	南側床面上	口縁部は外反し、胴部中央付近で最大径を測り、下半は大きくすぼまる	内面は横位のハケ目調整、外面は横位、斜位のハケ目調整後、一部に指頭による圧痕が見られる／胴部下方に幅の狭いヘラナデが粗く施される	砂粒・小石・黄色粒子多量含む	赤褐色
第20図2 図版13-4-2	土器 台付甕	脚部70%	高[8.0] 底11.8	南側と東側床面上 に散在	直線的な「ハ」の字状を呈する。	内面は斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラナデ後、斜位のヘラナデ調整／上方に指頭による圧痕が残る	砂粒・黄色粒子多量含む	にぶい褐色
第20図3 図版13-4-3	鉄製品 釘	ほぼ完形	—	北東側床面上	釘か／長さ5.8cm・幅0.7cm・厚さ0.3cm・重さ3.0g／先端部欠損／先端に向かって細くなり、断面は方形に近い	—	—	—

第6表 32号住居跡出土遺物一覧

第3節 古墳時代後期～平安時代

(1) 概要

当期は、古墳時代後期と平安時代に大きく分かれる。古墳時代後期の遺構は、住居跡が3軒（76H、86H、88H）、ピットが10本（54P～63P）、平安時代の遺構は、住居跡6軒（81H～85H、87H）、掘立柱建築遺構1棟（6T）、土坑が43基（252～256、258、261～281、287、288、297、300～304、306～312、314D）、溝跡2本（14・17M）、ピットが54本（1～41、43～53、64、66P）検出された。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、鉄滓、土製品、石製品、ほかである。この内、古墳時代後期の住居はいずれも一辺が8m弱から9m弱に及ぶ大形に属する部類のもので、かつ6本柱穴をもつ整美なものであった。出土遺物も総破片点数でいずれの住居も3000～8000点に及ぶ大量の出土を見ている。また、覆土中も含めて200点余りの炭化種子（モモ、スモモ）が出土した86Hや覆土上層に定量の平安時代の遺物が出土した88Hなど廃絶や埋没過程の点で興味深い状況が伺える。一方、平安時代は、更に9世紀前後と10世紀前後の2時期に細分される。また81H、83H、85Hが位置する中央には、この期のピット群があり、その中で北西隅柱を欠くが2×3間の東西棟で梁行き4.50m、桁行き2.80mの6Tが整理作業段階で確認できた。覆土と主軸方位から当期の遺構として認識した。

(2) 住居跡

76号住居跡

遺 構（第22～27図）

[位 置]（P・Q-6～8、R-7）グリッド

[検出状況] 1区北東部で検出。住居跡北東部は第131地点で調査済である。252・253Dに切られる。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸7.80m／短軸7.60m／深さ86cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-32°-W。壁溝：全周する。規模は上幅30cm前後／下幅15cm前後／深さ15cm。床面：貼床の厚さは9cm前後である。硬化面：北西コーナー付近及び各壁際を除きほぼ全域に確認できた。カマド：西壁中央に長軸160cm、短軸100cm、深さ64cmのカマドを検出。袖構築時の掘り残しロームの痕跡とその袖を破壊して壁溝が貫通し、火床面最下部の一部が僅かに遺存していることから旧カマドと判断される。新カマドは第131地点にて確認されている。炉：長軸63cm／短軸34cm／深さ2cmで住居の中心に地床炉が確認された。貯蔵穴：今次調査区の北東壁際に検出され、以北は第131地点でP1として調査された。合わせた規模は、長軸120cm／短軸45cm／床面からの深さ45cm。柱穴：ピットが8本確認された。第131地点と合わせると、炉を中心に住居コーナー対角線に主柱穴4本を埋設し、各主柱穴の間に補助柱4本を配する整った8本構成となる。P6のみ配列的に外れる。深さは、主柱穴が64～75cm、支柱穴が21～35cmである。入口施設：南東壁中央と南西壁中央の二か所に凸堤が認められ、出入口ピットが検出された。

[覆 土] 覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とする18層に分層でき、全体的に炭化粒が分布した。

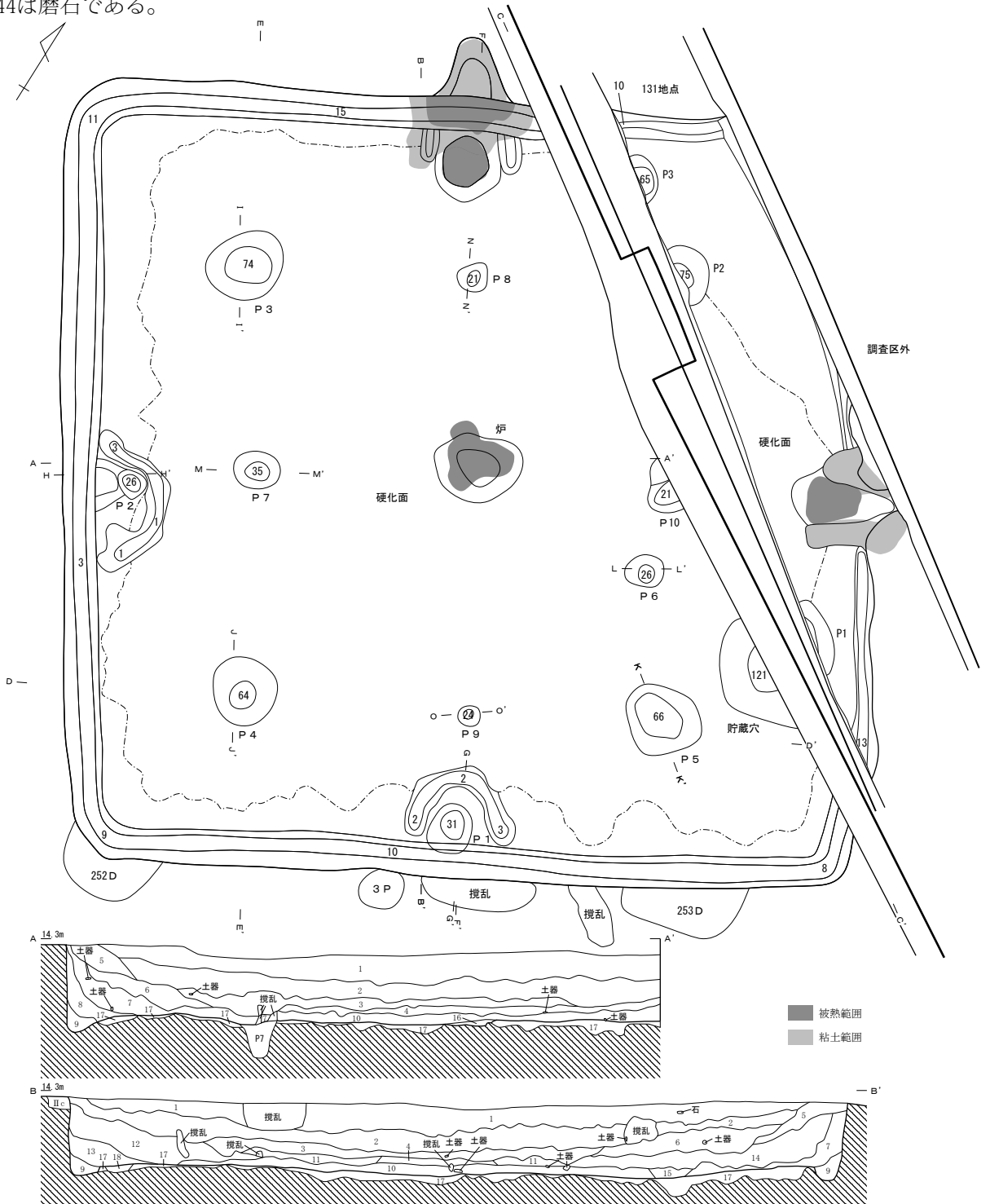
[遺 物] 第131地点で360点の遺物が出土し、第160地点では総点数5041点の大量の遺物が出土している。土師器坏、鉢、甕、甑、土製支脚などと不掲載としたが椀型滓が1点出土している。遺物の分布状況は（第26・27図）、平面的には第131地点東カマド南袖付近と西コーナーからP3付近・中央の炉東側

付近に集中し、南側は分布がやや薄い状況であった。垂直分布は概ね、床面付近を除けば四囲の壁溝埋没後のものと見える。図示したのは38点で、これらは結果として第28図10を除けば、中層と床面付近(第27図)から出土であった。なお131地点出土土器と接合を試みたが接合するものはなかった。

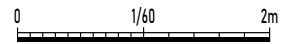
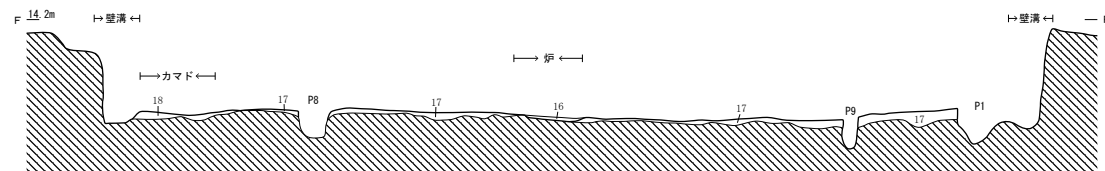
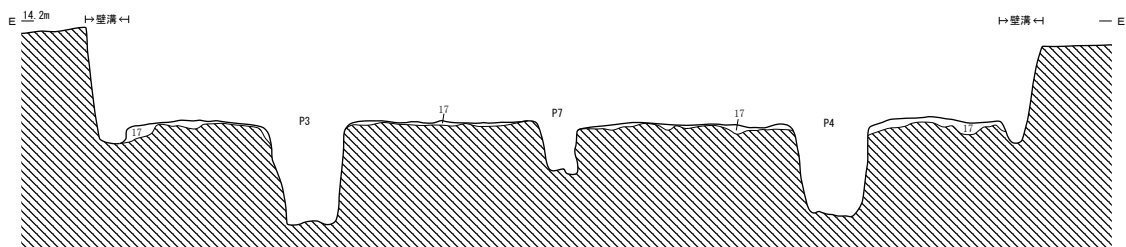
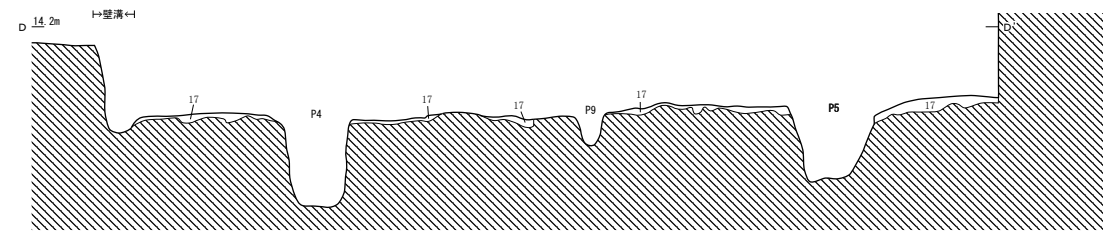
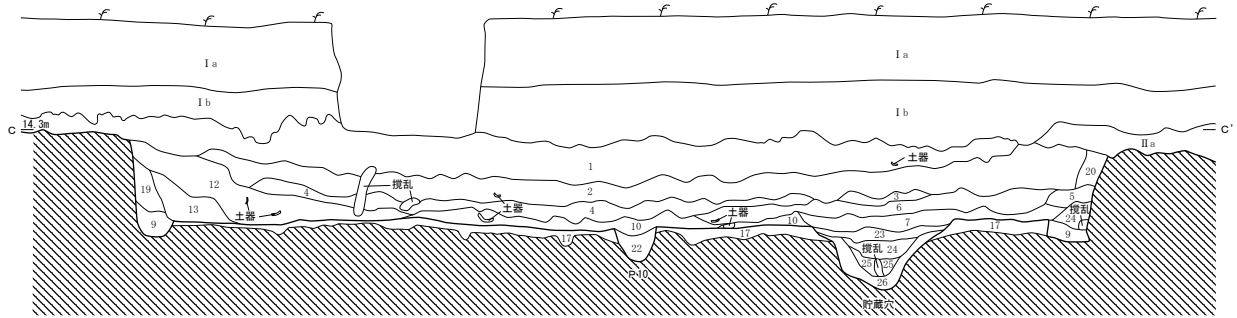
[時期] 古墳時代後期(7世紀末葉から8世紀初頭)。

遺物 (第28～30図、図版14・15、第8表)

1～6は第131地点からの出土である。1～34は坏、35は鉢、36～41は甕、42は甑、43は土製支脚、44は磨石である。



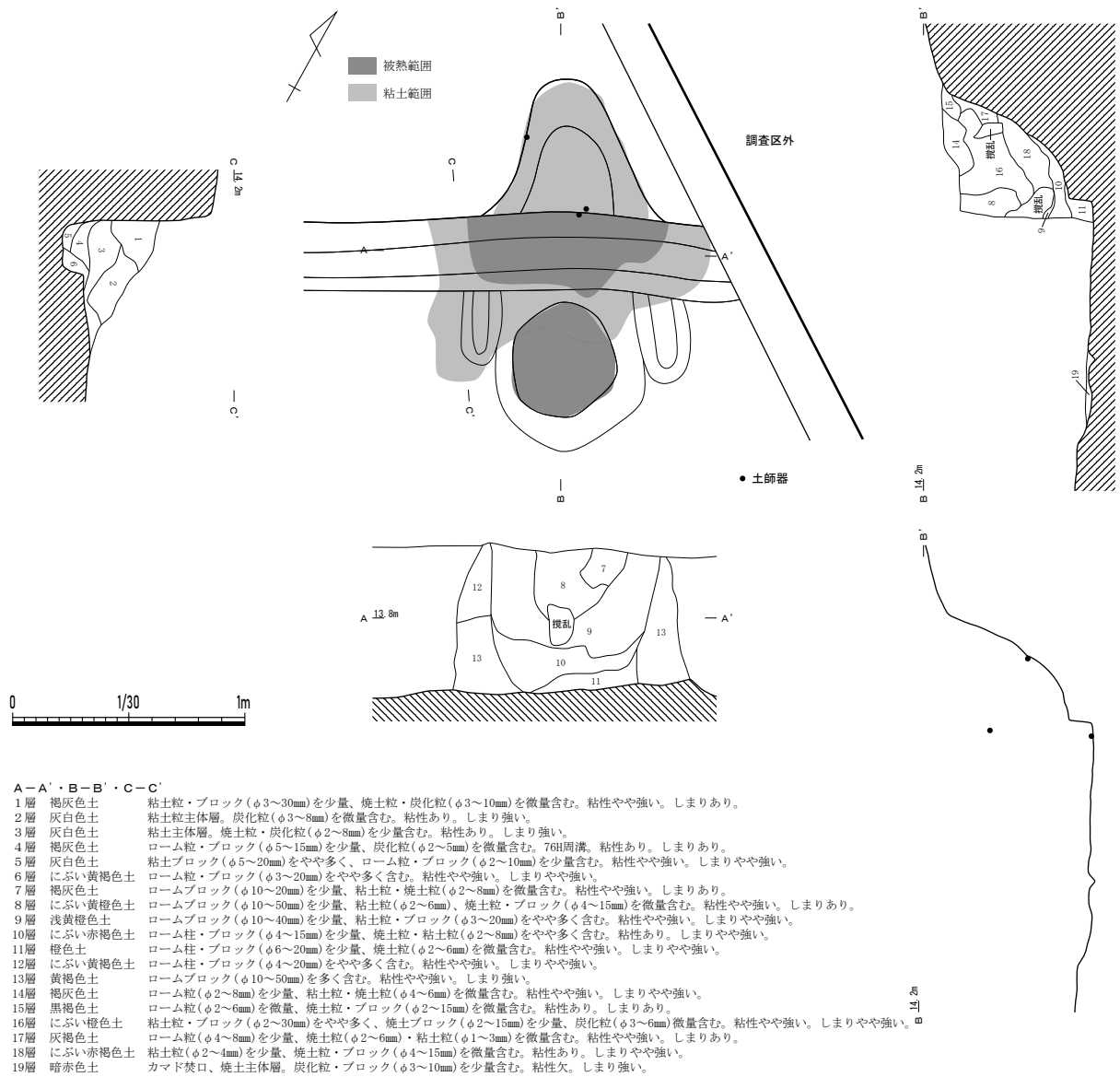
第22図 76号住居跡1(1/60)



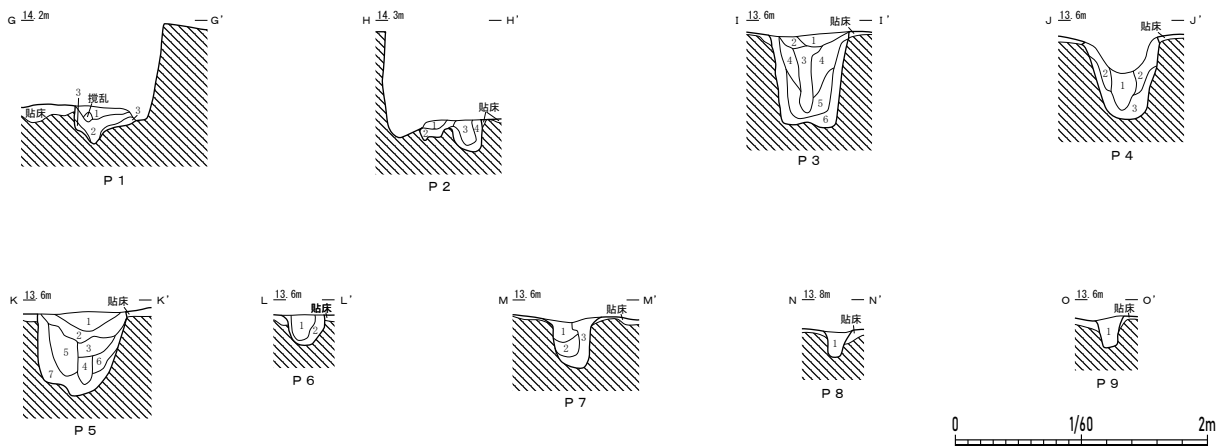
A-A' · B-B' · C-C' · D-D' · E-E' · F-F'

- | | |
|-------------|---|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 2層 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 3層 極暗褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、炭化粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。 |
| 4層 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)を微量、炭化粒(φ2~10mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 5層 暗褐色土 | ローム粒(φ1~8mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 6層 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)を微量、炭化粒(φ1~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 7層 暗褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 8層 暗褐色土 | ローム粒(φ1~8mm)を少量、炭化粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 9層 暗褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~5mm)を微量含む。壁溝。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 10層 にぶい黄褐色土 | ローム粒(φ2~9mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~20mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性強い。しまりやや強い。 |
| 11層 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 12層 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ1~10mm)を微量、焼土粒・粘土粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。 |
| 13層 にぶい黄褐色土 | 粘土粒・ブロック(φ3~20mm)をやや多く、焼土粒・炭化粒(φ2~8mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。 |
| 14層 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。 |
| 15層 暗褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)を少量、炭化粒・焼土粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 16層 赤褐色土 | 焼土粒・ブロック(φ3~15mm)を少量含む。粘性欠。しまり強い。 |
| 17層 黄褐色土 | ロームブロック(φ10~30mm)を多く、焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。貼床。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 18層 にぶい橙色土 | 粘土粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。旧カマド貼床。粘性やや強い。しまり強い。 |
| 19層 暗褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)を少量、粘土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 20層 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)を微量、焼土粒・炭化粒(φ1~2mm)を含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 21層 暗褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)を少量、炭化粒(φ1~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 22層 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 23層 暗褐色土 | ローム柱・ブロック(φ2~10mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 24層 黒褐色土 | ローム柱(φ2~5mm)、焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 25層 暗褐色土 | ローム柱・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 26層 にぶい黄褐色土 | ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性強い。しまりやや強い。 |

第23図 76号住居跡2(1/60)



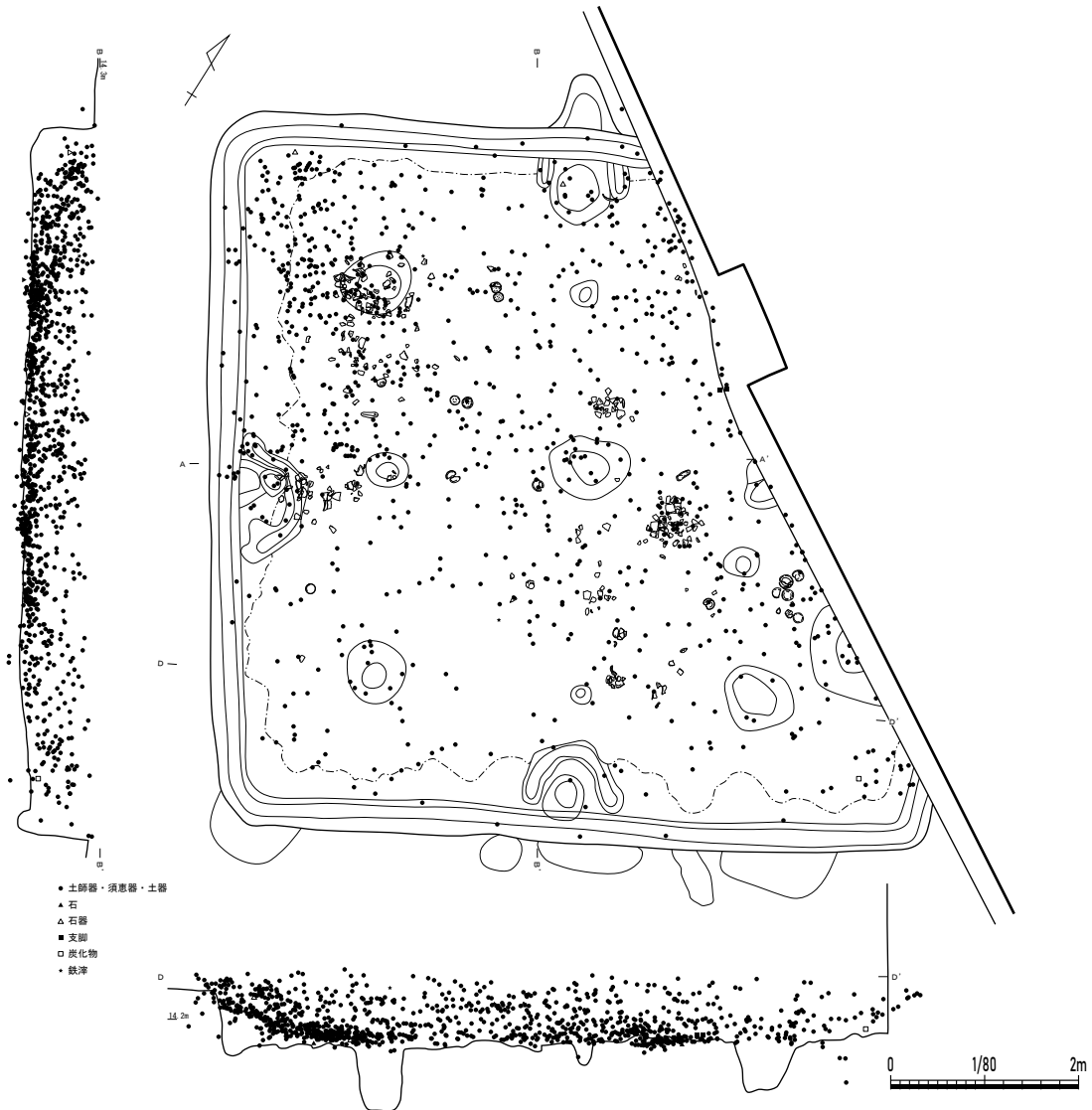
第24図 76号住居跡カマド(1/30)



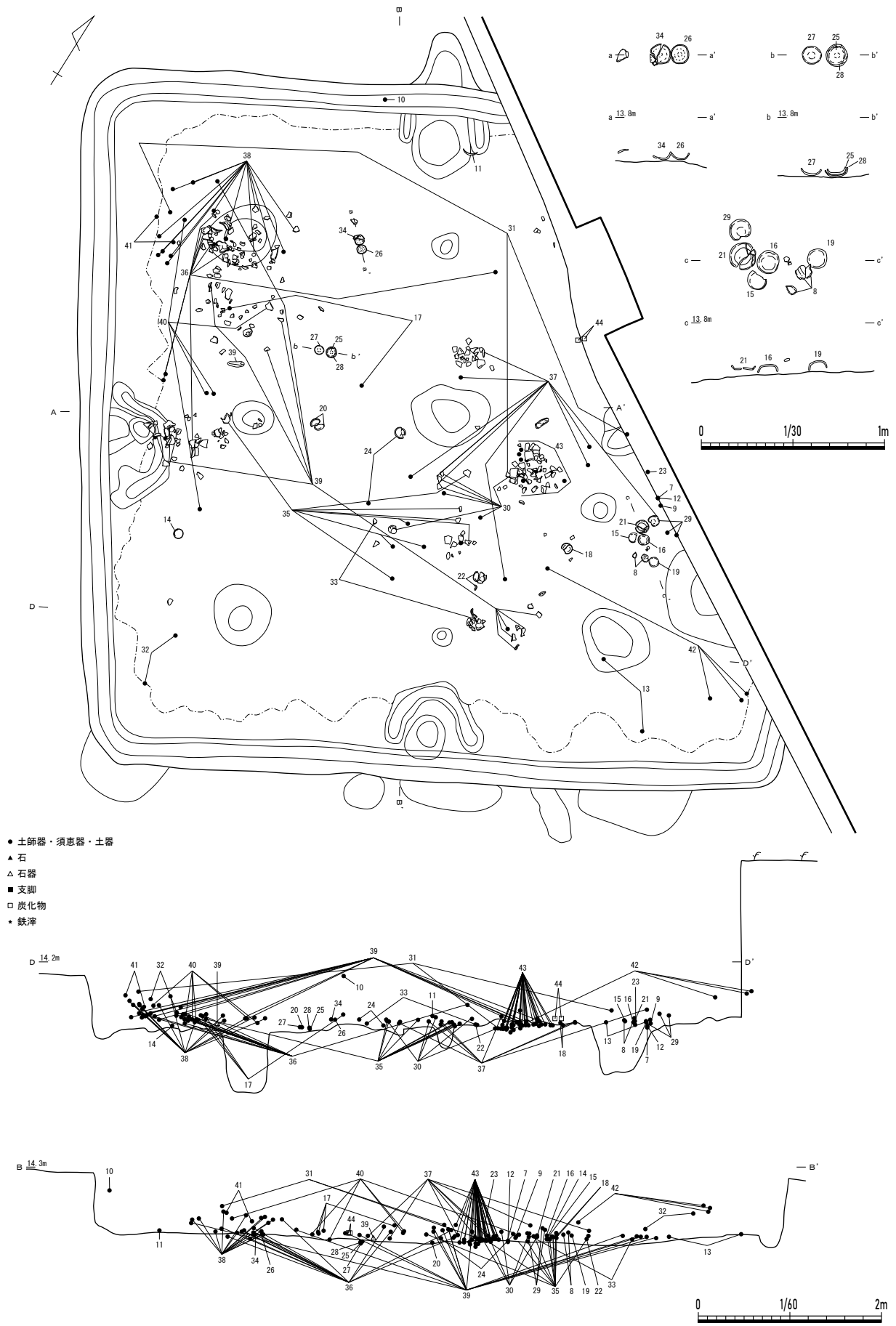
第25図 76号住居跡ピット(1/60)

- G-G' (P1)**
 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒(φ3~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~15mm)を少量、焼土粒・ブロック(φ2~15mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 3層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- H-H' (P2)**
 1層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、炭化粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~20mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
 3層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、炭化粒・焼土粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 4層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりあり。
- I-I' (P3)**
 1層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、炭化粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~30mm)を少量、炭化粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 4層 にぶい黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまり強い。
 5層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~50mm)をやや多く含む。粘性強い。しまり強い。
- J-J' (P4)**
 1層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 2層 にぶい黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 3層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~40mm)をやや多く含む。粘性強い。しまりやや強い。

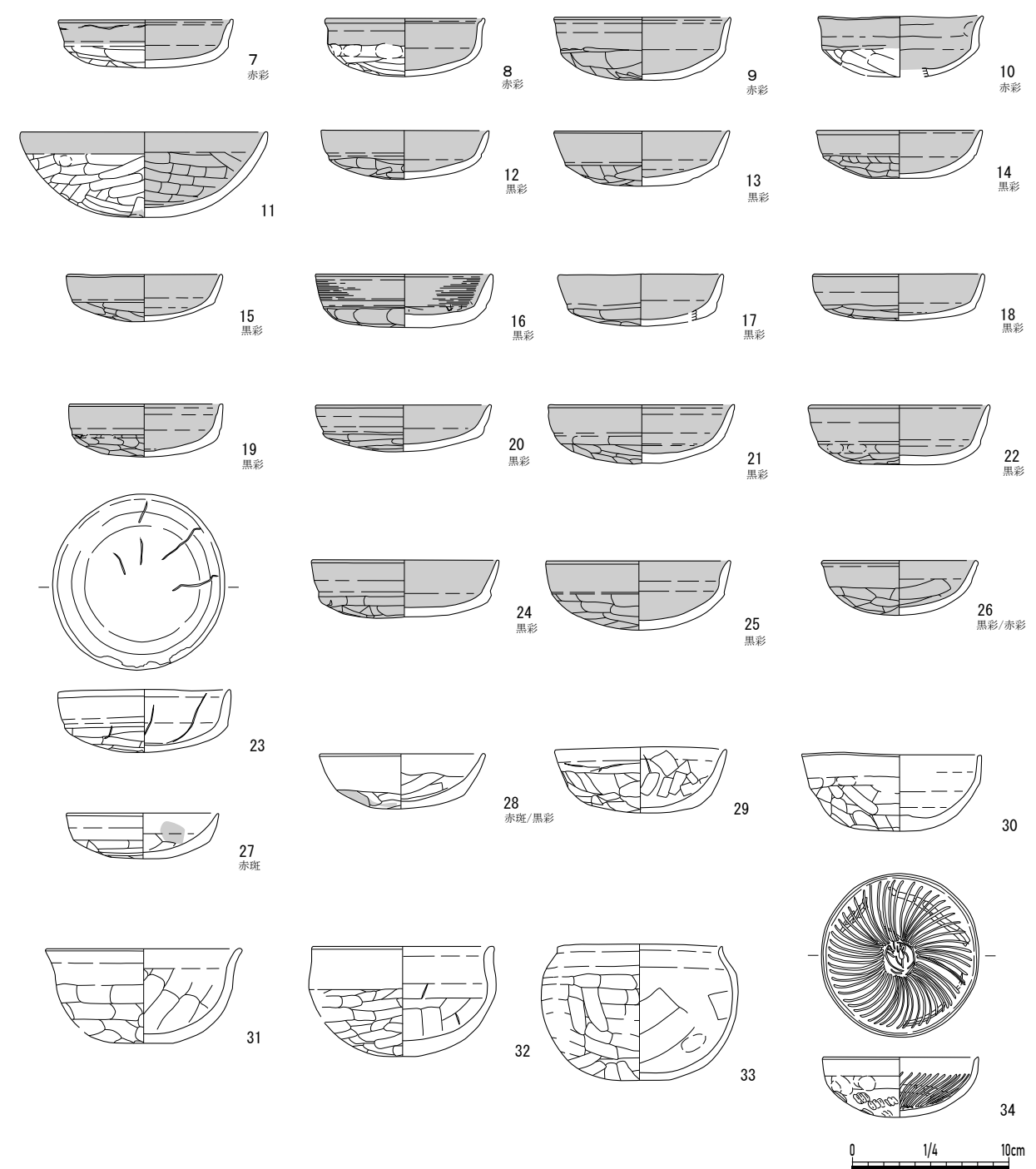
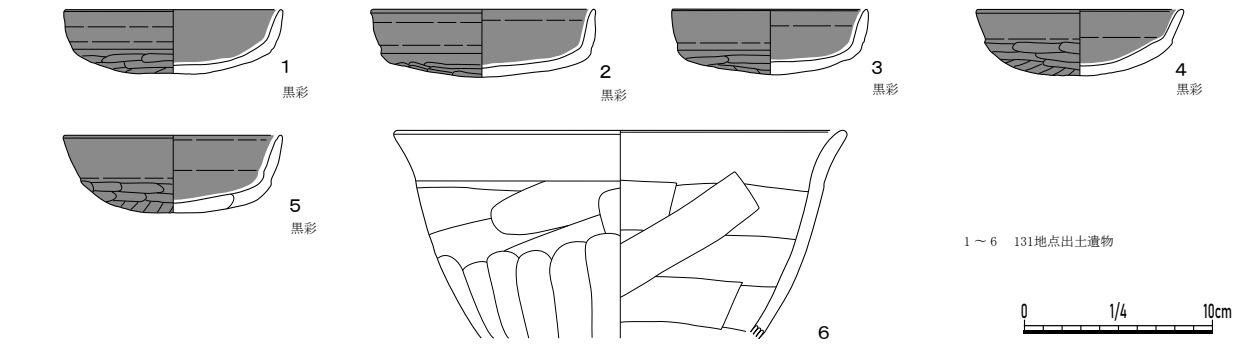
- K-K' (P5)**
 1層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~10mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 3層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 4層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量、ロームブロック(φ10~20mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 5層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 6層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 7層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ20~50mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- L-L' (P6)**
 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ8~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりあり。
- M-M' (P7)**
 1層 暗褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 3層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- N-N' (P8)**
 1層 暗褐色土 ローム粒(φ1~6mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~15mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- O-O' (P9)**
 1層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。



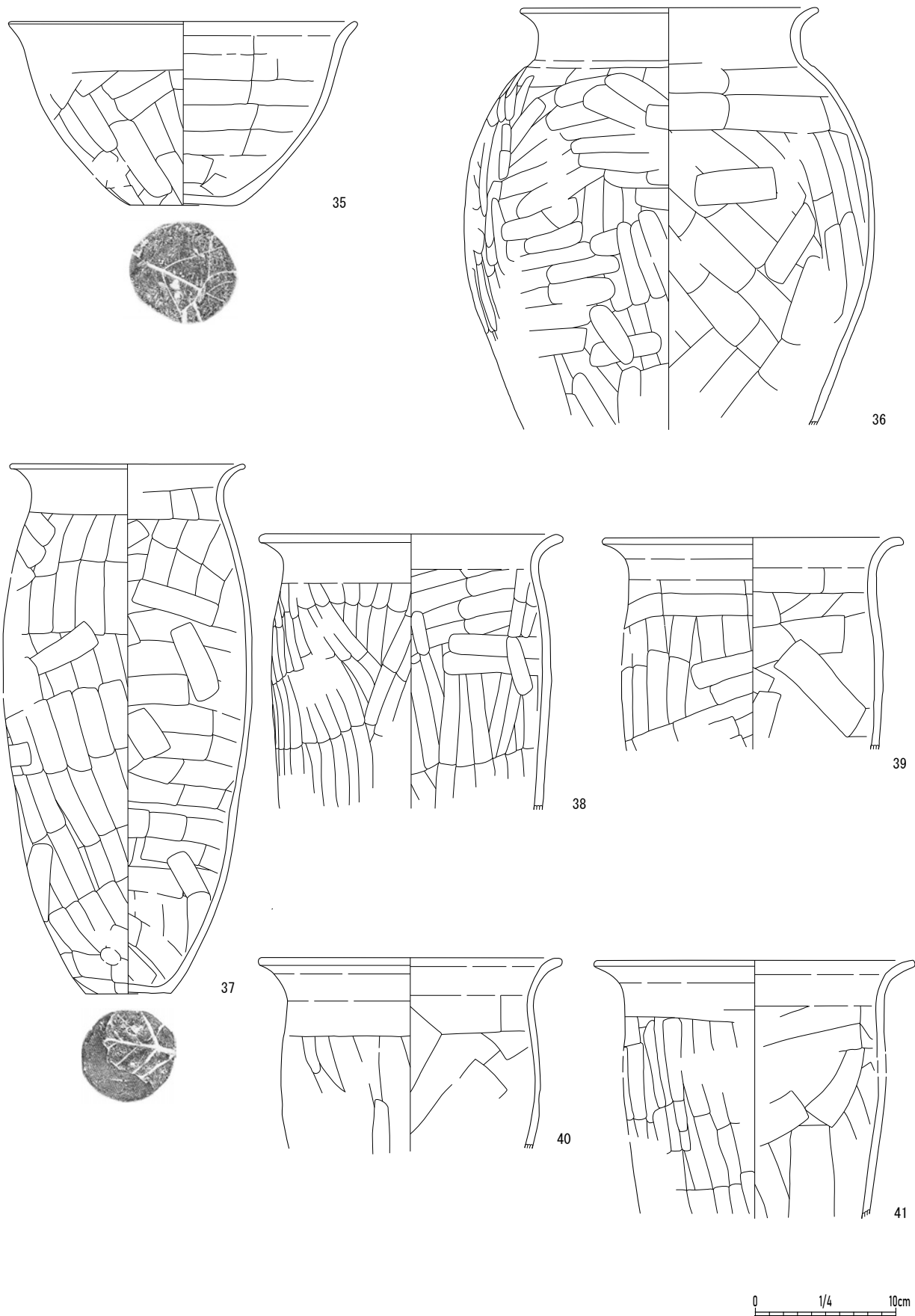
第26図 76号住居跡遺物出土状態1(1/80)



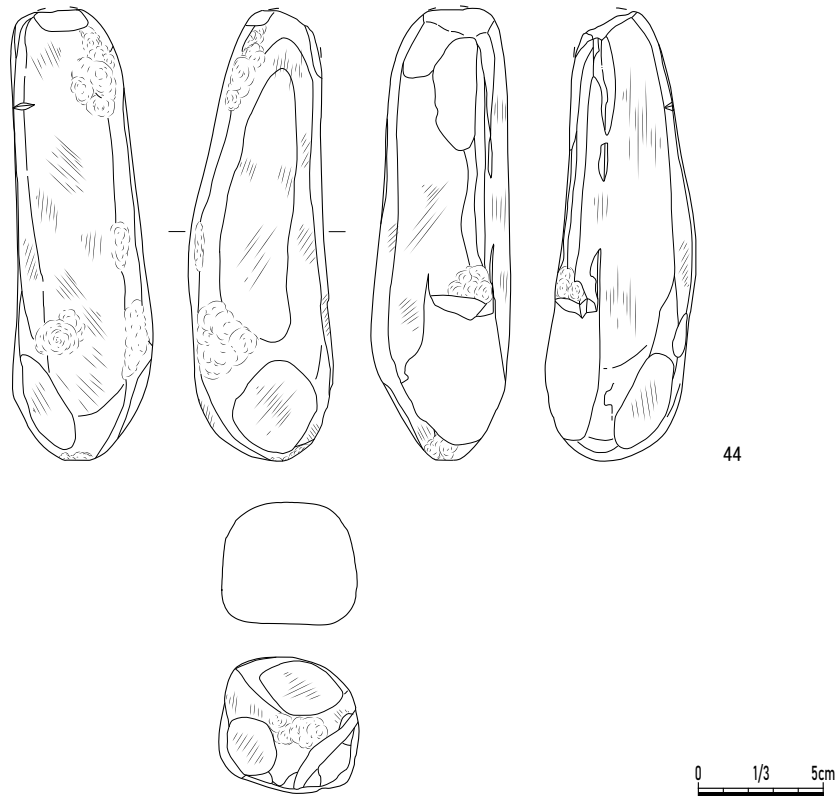
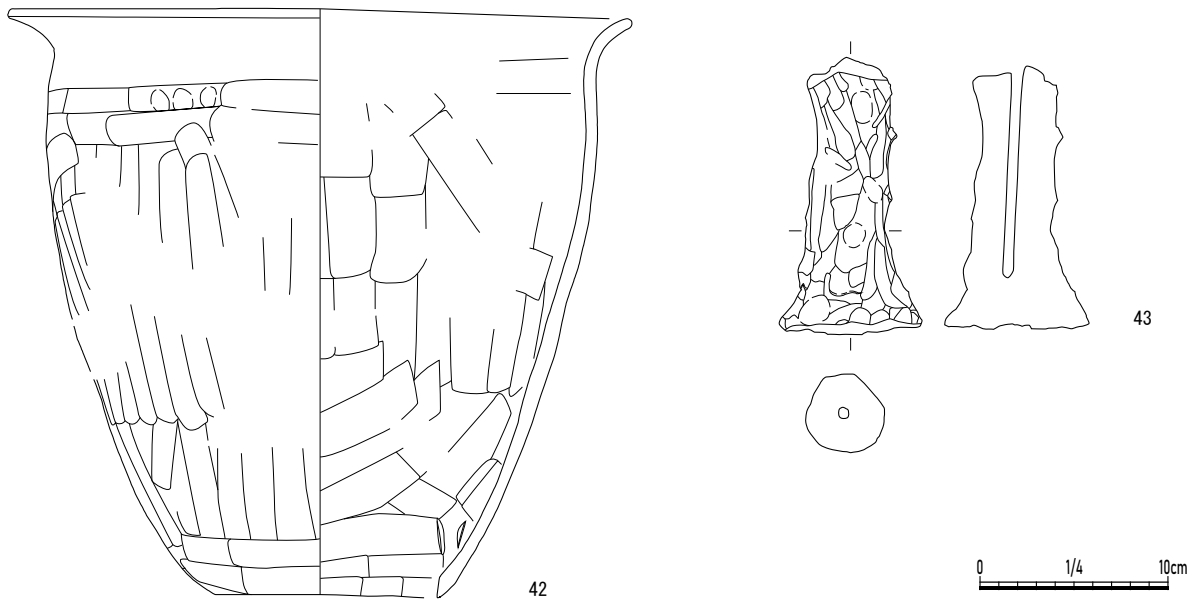
第27図 76号住居跡遺物出土状態 2 (1/60・1/30)



第28図 76号住居跡出土遺物 1(1 / 4)



第29図 76号住居跡出土遺物 2(1 / 4)



第30図 76号住居跡出土遺物 3(1 / 4・1 / 3)

81号住居跡

遺構 (第31・32図)

[位置] (Q-8・9) グリッド

[検出状況] 1区南東端にて検出した。続く南東コーナー部は調査区外となる。294・295・296・305Dを切るが、11Pは切り合い関係不明。

[構造] 平面形：方形。規模：長軸検出長3.40m / 短軸検出長3.10m / 深さ15cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-42°-W。壁溝：調査区内では全周する。規模は上幅15cm前後 / 下幅5cm前後 / 深さ10cm前後。床面：貼床の厚さは7cm前後である。また4か所焼土の分布が認められた。カマド：確認できなかったが、調査区外の東壁に所在すると思われる。柱穴：ピットが1基確認された。深さは、8cmである。入口施設：確認されなかった。

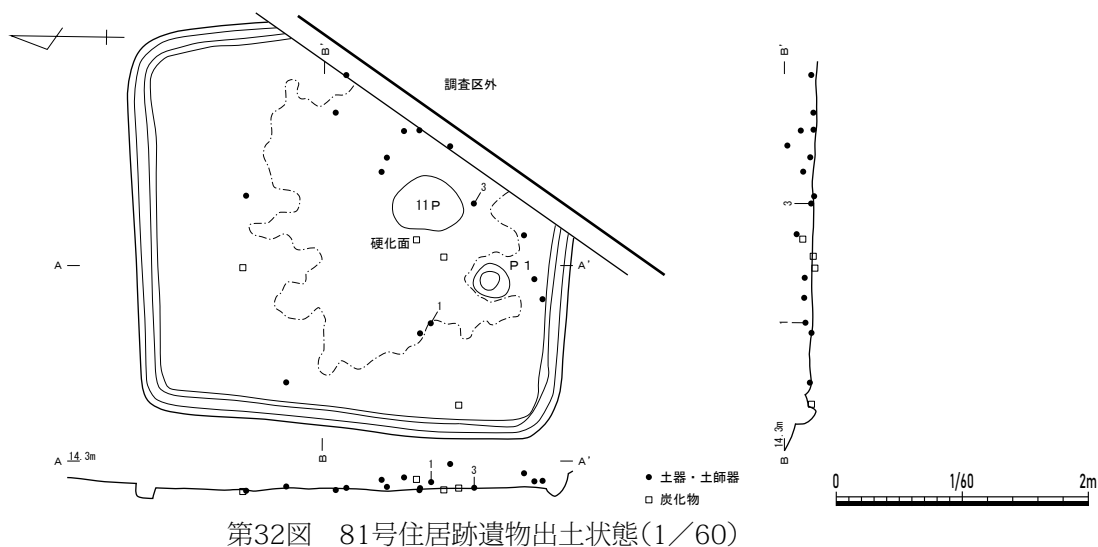
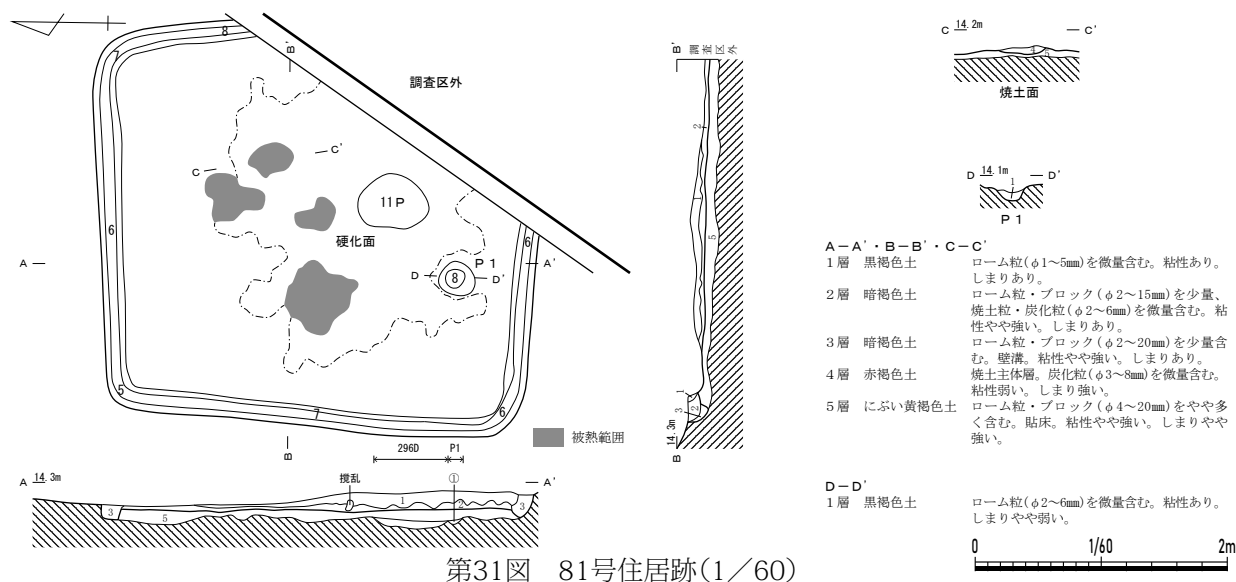
[覆土] 覆土は暗褐色土を主体とする5層に分層でき、自然堆積の様相を呈す。

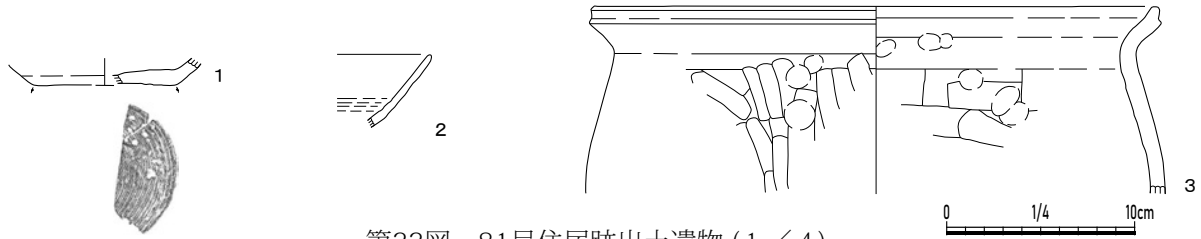
[遺物] 土師器片87点、須恵器2点、混入と思われる縄文土器2点、陶磁器1点が出土した。このうち、図示したのは3点である。

[時期] 平安時代（9世紀末葉～10世紀前葉）。

遺物（第33図、図版16-1、第9表）

1・2は酸化炎焼成の須恵器坏である。3は所謂常陸型或いは常総型甕で、図示しないが同一個体の胴部中位付近と更に下部の胴部下端の小片が出土している。





第33図 81号住居跡出土遺物(1/4)

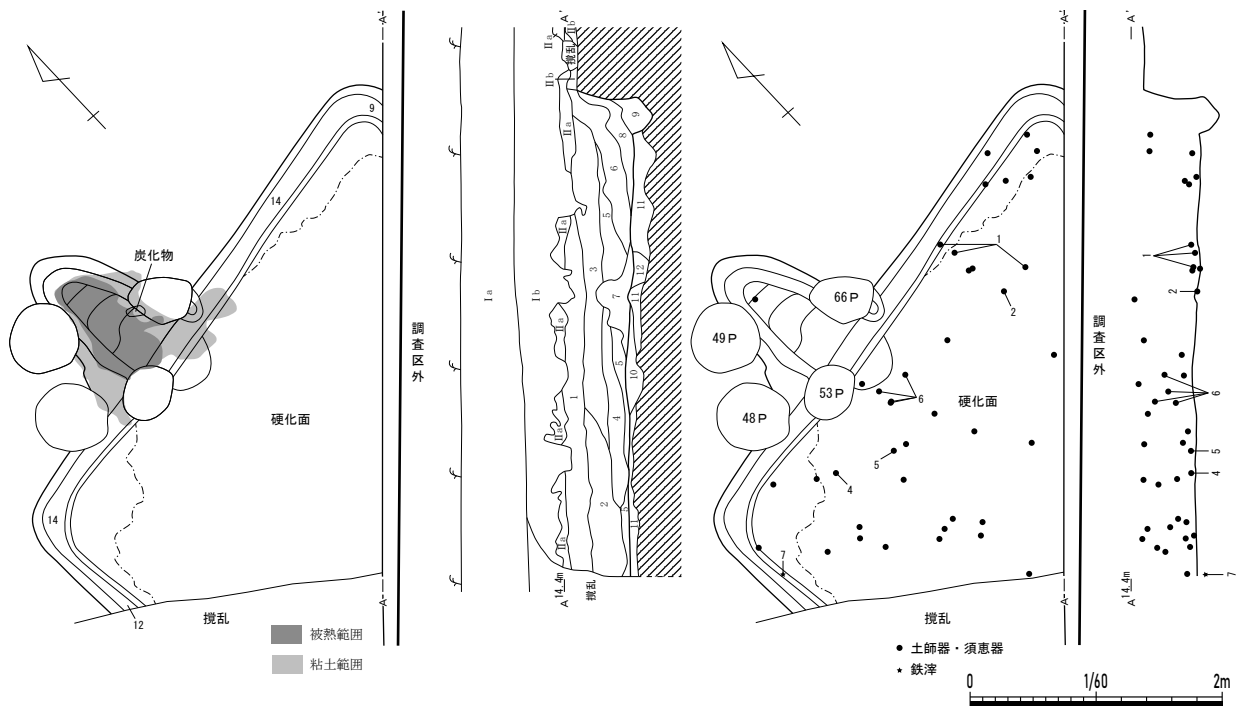
82号住居跡

遺構 (第34～36図)

[位置] (N-12・13、O-12) グリッド

[検出状況] 2区南端にて検出した。北東-南西ラインの南側は旧コンクリート基礎で調査区外となり、北西コーナーの南側にも旧コンクリート基礎による攪乱が入る。カマド付近の48・49・53・66Pに切られる。

[構造] 平面形：方形。規模：不明。北辺の最大検出長4.50m / 深さ55cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-78°-E。壁溝：調査区内ではカマド下も含め全周する。規模は上幅15～25cm / 下幅5～10cm / 深さ15cm前後。床面：貼床の厚さは7cm前後である。カマド：北壁西寄りに確認され、壁溝を埋めて構築された。規模：長軸160cm / 短軸75cm / 深さ81cm。柱穴：調査区内では確認できなかった。入口施設：調査区内では確認されなかった。



- | | | |
|-----|---------|---|
| 1層 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~2mm)、焼土粒・炭化粒(φ1mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。 |
| 2層 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~4mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 3層 | 黒褐色土 | ローム粒(φ2~4mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 4層 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 5層 | 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 6層 | 暗褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)を少量、ロームブロック(φ2~30mm)を微量、焼土粒・ブロック(φ1~30mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。 |
| 7層 | 褐灰色土 | ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、粘土粒・ブロック(φ3~20mm)・焼土ブロック(φ20~30mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 8層 | 黒褐色土 | ローム粒・ブロック(φ1~8mm)、焼土粒(φ1~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 9層 | 暗褐色土 | ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量、炭化粒(φ2~4mm)を微量含む。壁溝。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 10層 | にぶい黄褐色土 | ローム粒・ブロック(φ2~50mm)をやや多く含む。貼床。粘性やや強い。しまりやや強い。 |
| 11層 | 黄褐色土 | ローム粒・ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ6~40mm)を少量含む。貼床。粘性やや強い。しまり強い。 |
| 12層 | にぶい黄褐色土 | ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ハードローム粒(φ10~30mm)を少量含む。貼床。粘性やや強い。しまりやや強い。 |

第34図 82号住居跡・82号住居跡遺物出土状態(1/60)

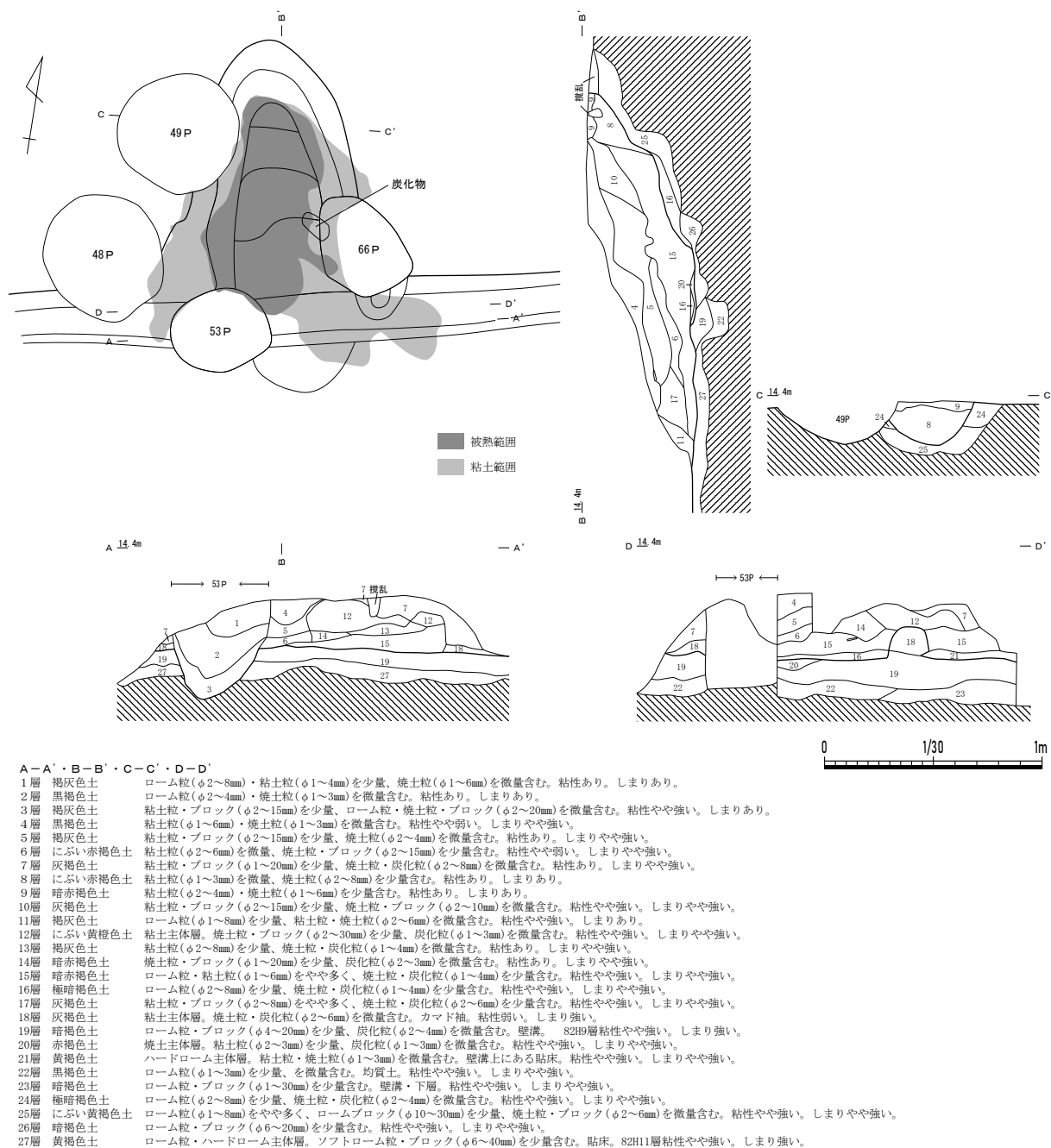
[覆 土] 覆土は黒褐色土の間に暗褐色土が挟まれた12層に分層でき、自然堆積の様相を呈した。

[遺 物] 土師器片427点、須恵器19点、刀子1点。混入した縄文土器2点、瓦1点が出土した。このうち、図示したのは7点である。

[時 期] 平安時代（9世紀前葉）。

遺 物（第37図、図版16-2、第10表）

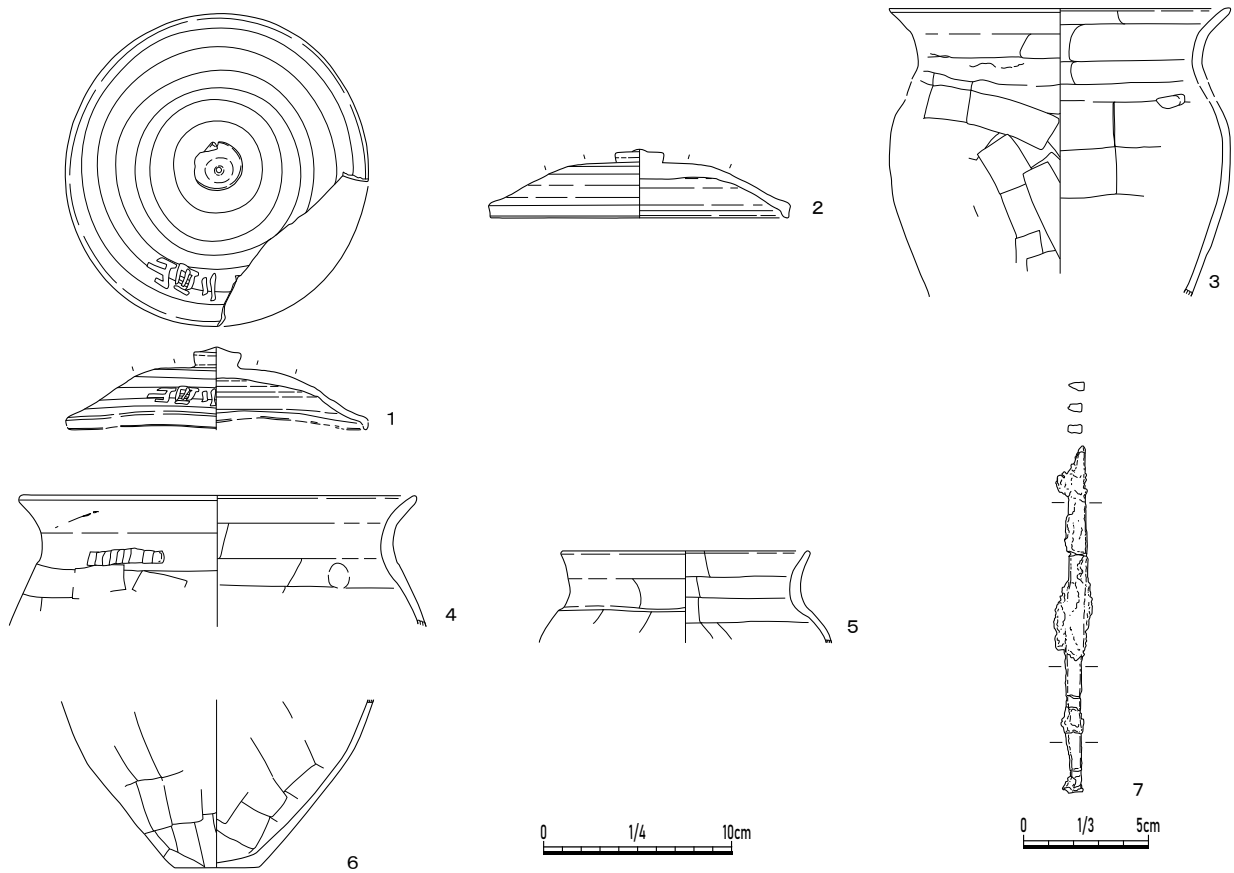
1・2は須恵器蓋で、1の外面には、左から右に「山田二」の墨書が確認できる。3～6は土師器甕である。また図示しないが、糸切り底から緩やかに丸みをもって立ち上がる須恵器杯の小片や器壁の薄い土師器甕胴部片などが出土している。7は鉄製品で、刀子であろうか。



第35図 82号住居跡カマド(1/30)



第36図 82号住居跡カマド遺物出土状態(1/30)



第37図 82号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

83号住居跡

遺 構 (第38～41図)

[位 置] (O・P-7) グリッド

[検出状況] 1区中央付近で検出した。7・20Pに切られ、46Pを切る。45Pは床下から検出。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸5.00m／短軸3.20m／深さ45cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-83°-W。壁溝：カマド以外全周する。規模は上幅15～25cm／下幅5～15cm／深さ10cm前後。床面：貼床の厚さは8cm前後である。カマド：東壁中央に確認された。規模は長軸162cm／短軸100cm。柱穴：ピットが2本確認された。いずれも、出入口ピットとなる可能性がある。深さは、P1が7cm、P2が12cmである。

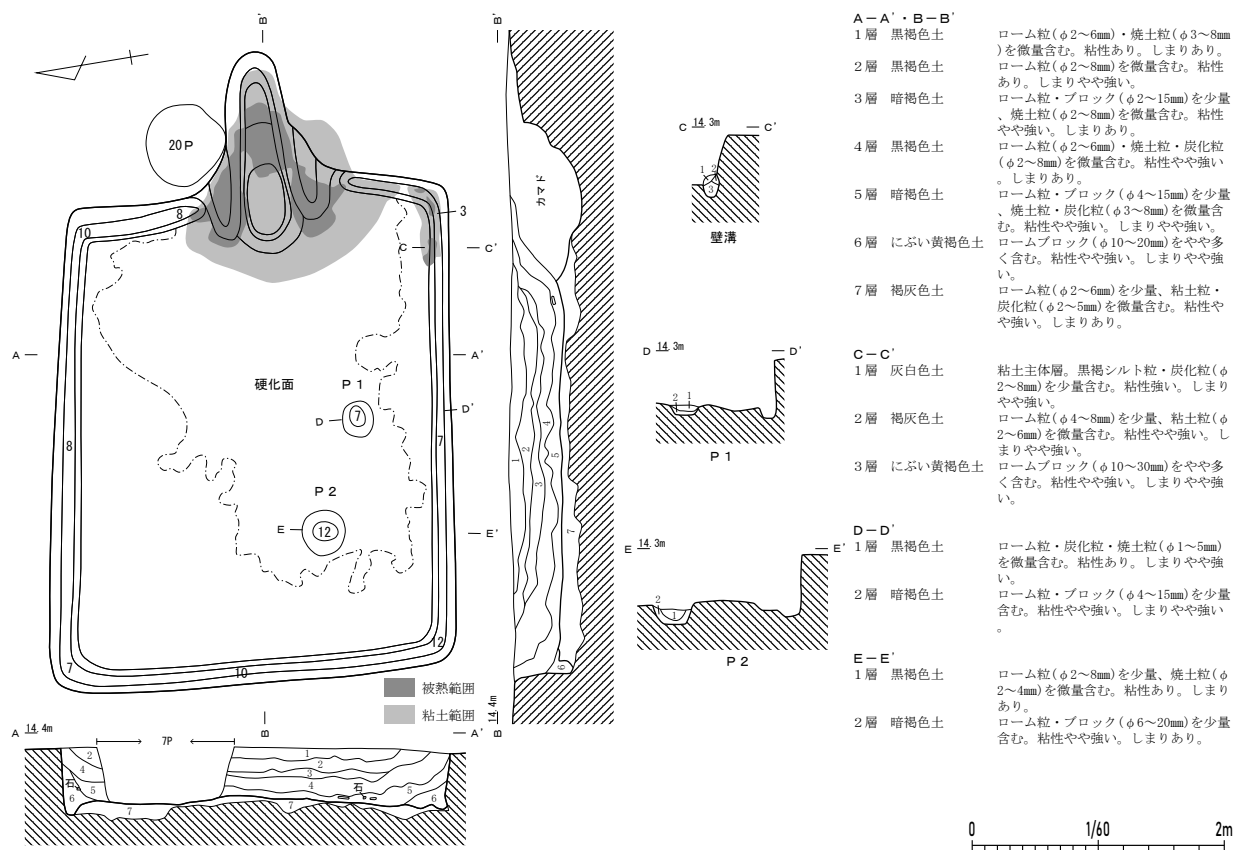
[覆 土] 黒褐色土を主体とする7層に分層でき、自然堆積の様相を呈す。

[遺 物] 土師器片920点、須恵器46点、大型の鉄滓1点、椀型滓4点、混入と思われる縄文土器8点が出土した。このうち、図示したのは14点で、大型の鉄滓については、[付編] 自然科学分析(135ページ)を参照いただきたい。

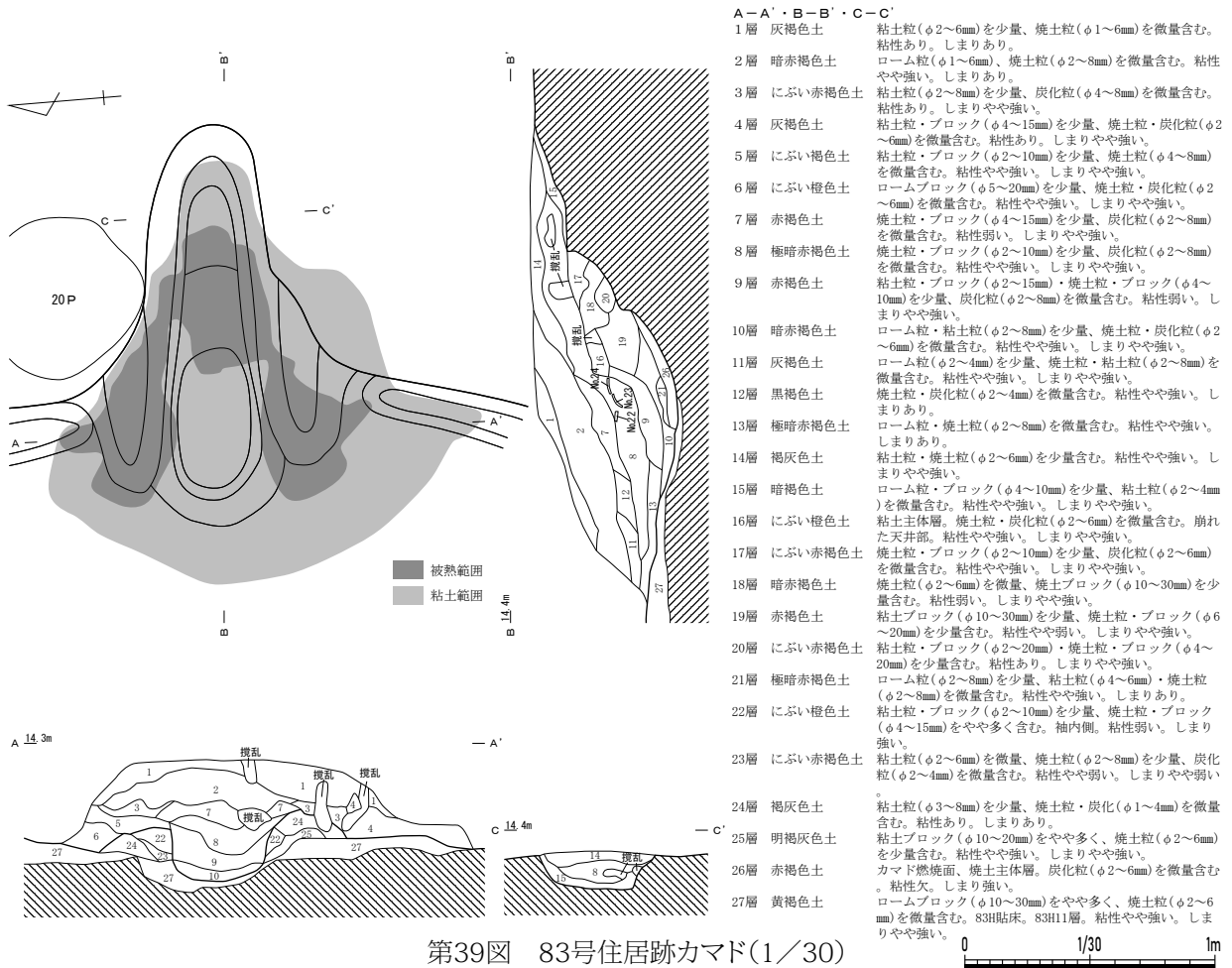
[時 期] 奈良時代(8世紀後葉)。

遺 物 (第42図、図版16-3・17-1、第11表)

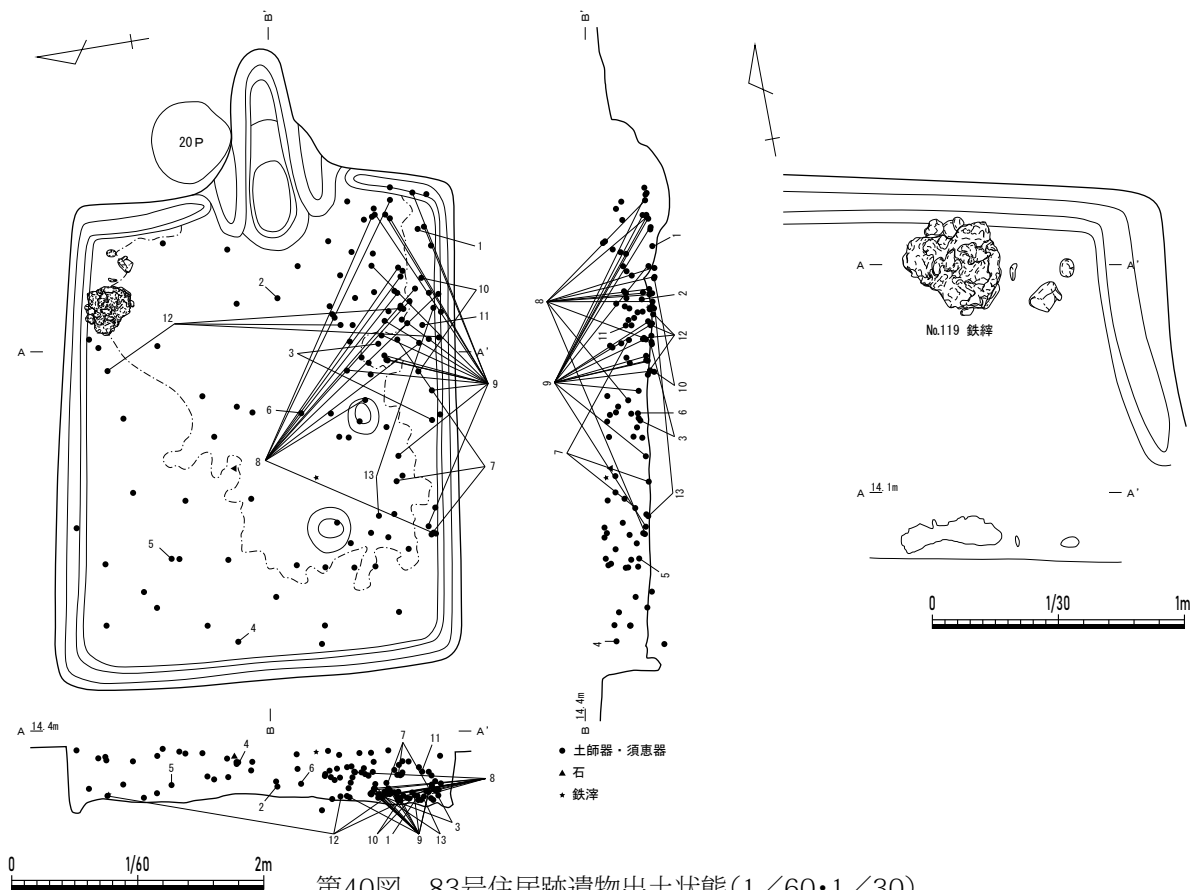
1は須恵器椀蓋、2～6は須恵器坏、7は小形で無台のため須恵器の壺であろうが、甕の可能性もある。8～14は土師器甕で、8・10～13は台付甕であろう。



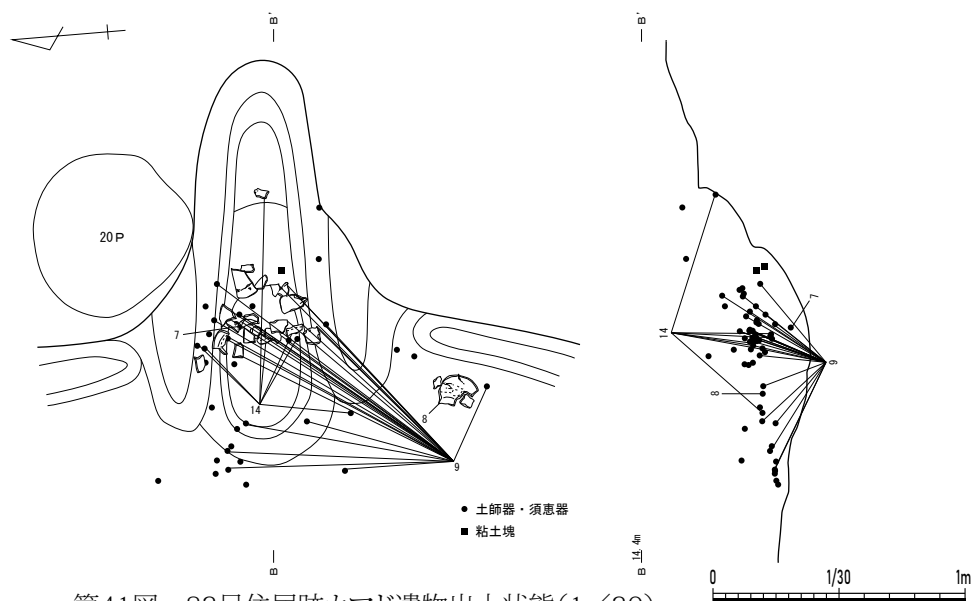
第38図 83号住居跡(1/60)



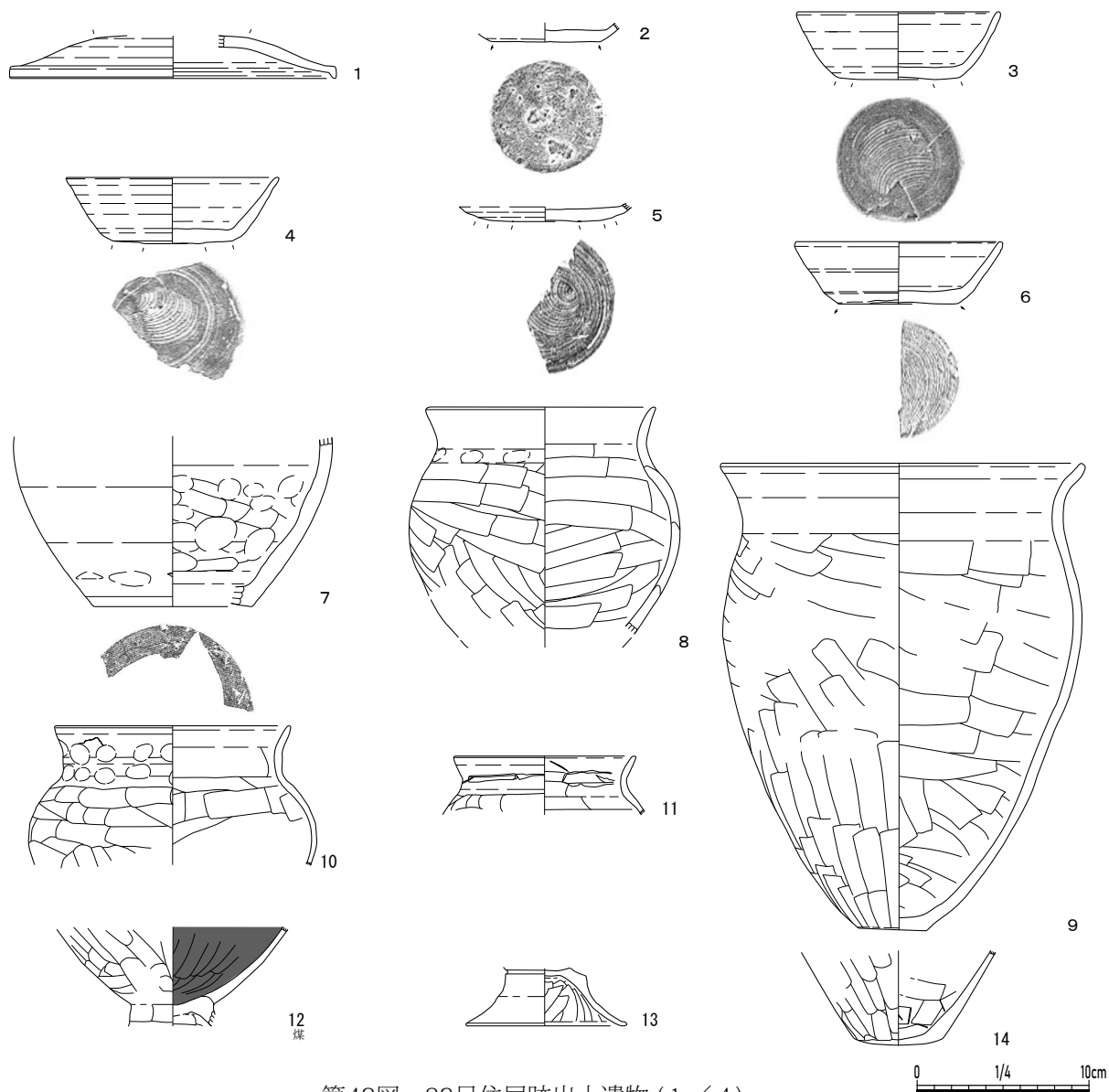
第39図 83号住居跡カマド(1/30)



第40図 83号住居跡遺物出土状態(1/60・1/30)



第41図 83号住居跡カマド遺物出土状態(1/30)



第42図 83号住居跡出土遺物(1/4)

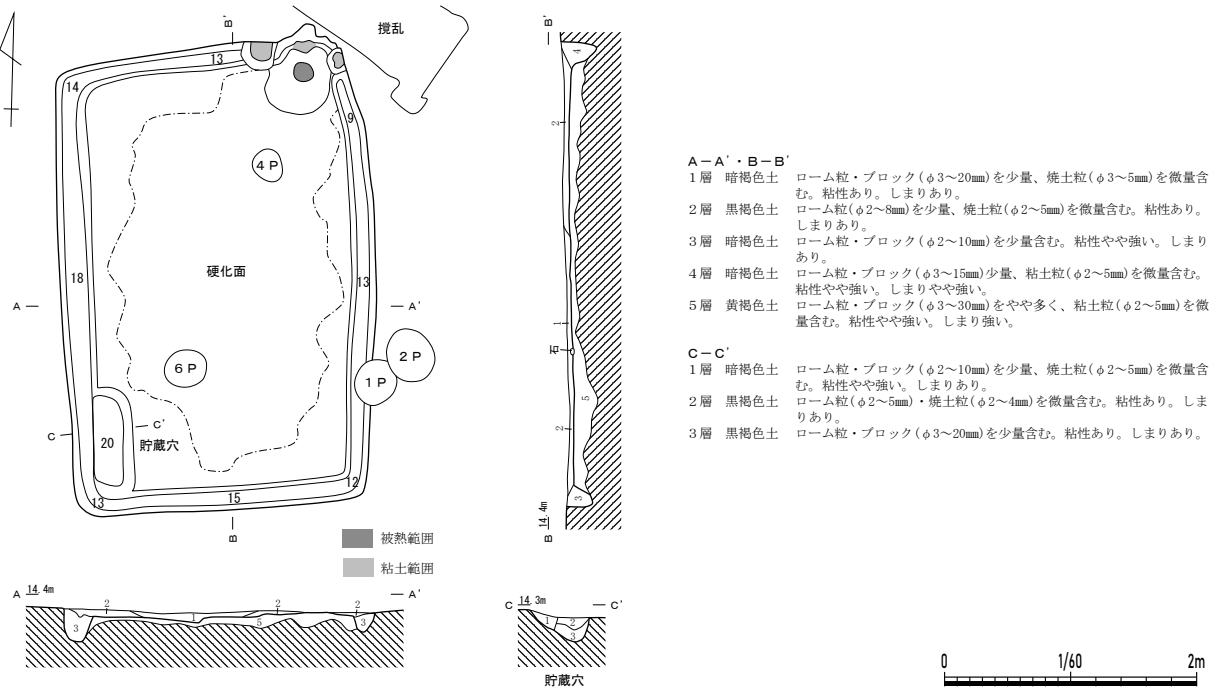
84号住居跡

遺 構 (第43～45図)

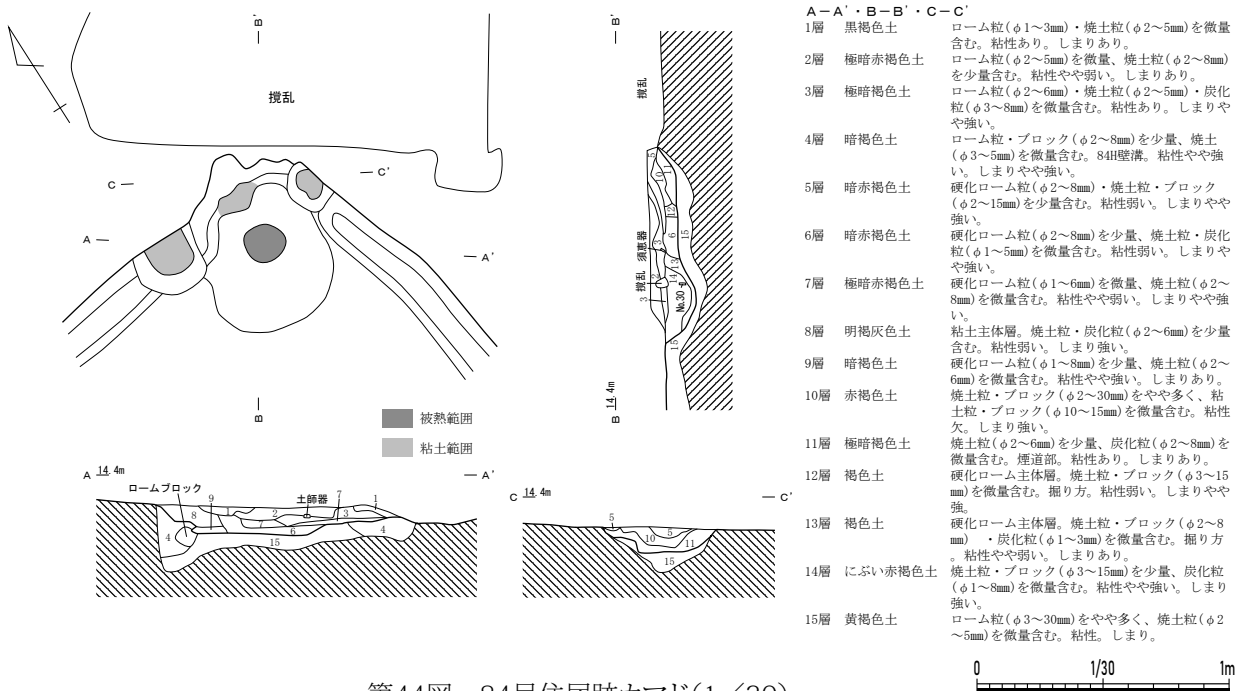
[位 置] (M・N-6・7) グリッド

[検出状況] 1区北西端で検出した。1Pに切られる。4・6Pは床下から検出。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸3.60m／短軸2.50m／深さ6cm。壁：欠失していた。主軸方位：N-26°-E。壁溝：カマド以外全周し、東袖下に僅かに潜り込む。規模は上幅20～25cm／下幅10cm前後／深さ9～18cm。床面：貼床の厚さは9cm前後である。カマド：北東コーナーに設けられてい



第43図 84号住居跡(1/60)



第44図 84号住居跡カマド(1/30)

た。規模は長軸75cm／短軸65cm／深さ18cm。柱穴：床面からは検出されなかったが、床下から4P、6Pの2本が検出された。入り口施設：検出されなかった。貯蔵穴：南西コーナーから西壁端に確認された。規模は長軸88cm／短軸32cm／深さ20cm。

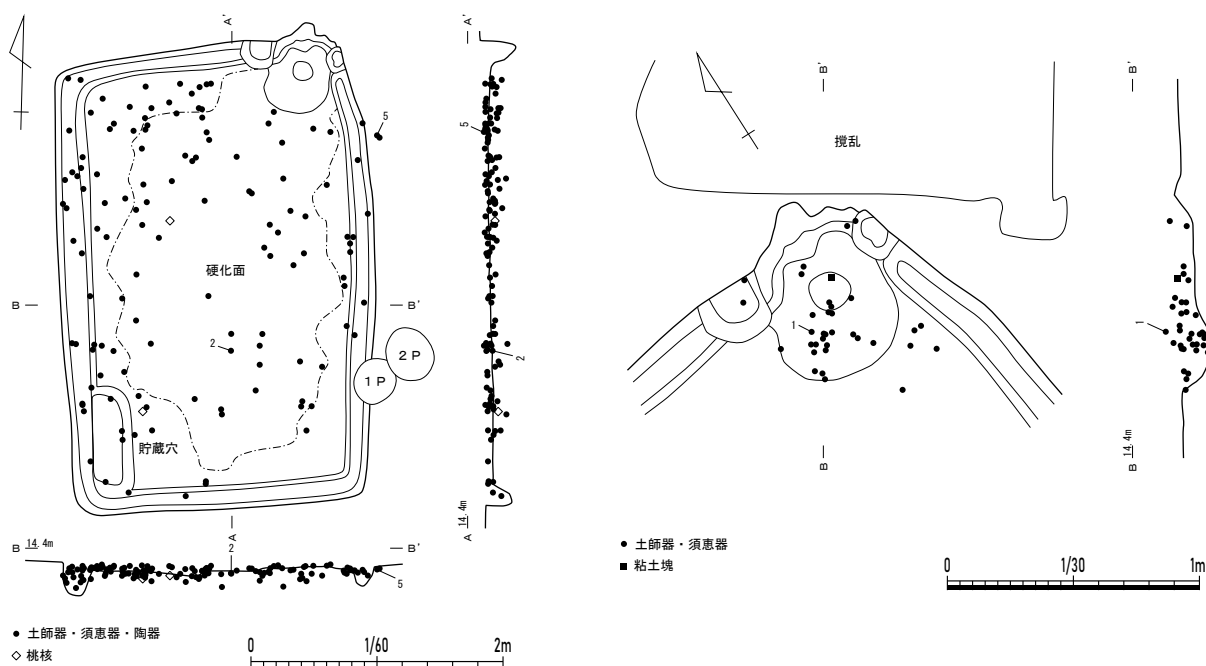
[覆 土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とする4層に分層でき、自然堆積の様相を呈す。

[遺 物] 土師器片489点、須恵器38点、土製管玉1点、炭化種子2点、混入と思われる縄文土器2点が出土した。このうち、図示したのは6点である。

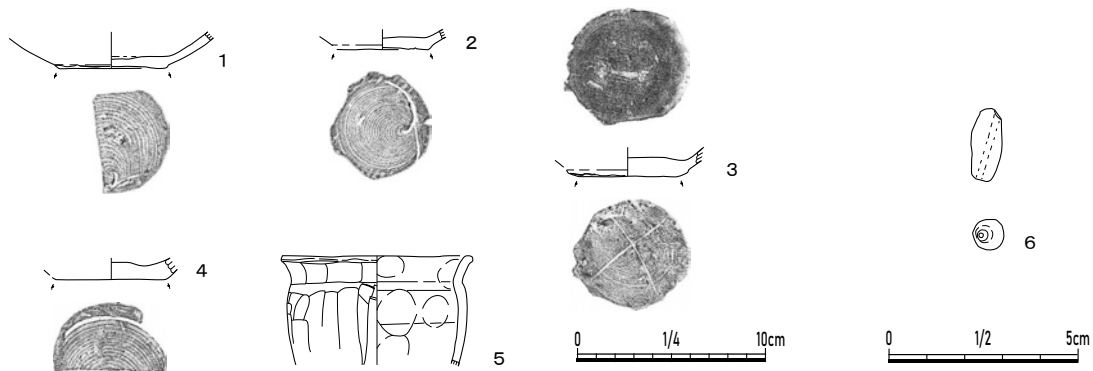
[時 期] 平安時代（10世紀）。

遺 物（第46図、図版17-2、第12表）

1～4は酸化炎焼成または酸化炎焼成気味の須恵器坏、5は小型の土師器甕、6は土製品で小型の土錘である。



第45図 84号住居跡遺物出土状態(1/60)・カマド遺物出土状態(1/30)



第46図 84号住居跡出土遺物 (1/4・1/2)

85号住居跡

遺 構 (第47～52図)

[位 置] (N・O-8・9) グリッド

[検出状況] 2区北端で検出した。86Hを切り、東壁に数箇所の攪乱を受ける。

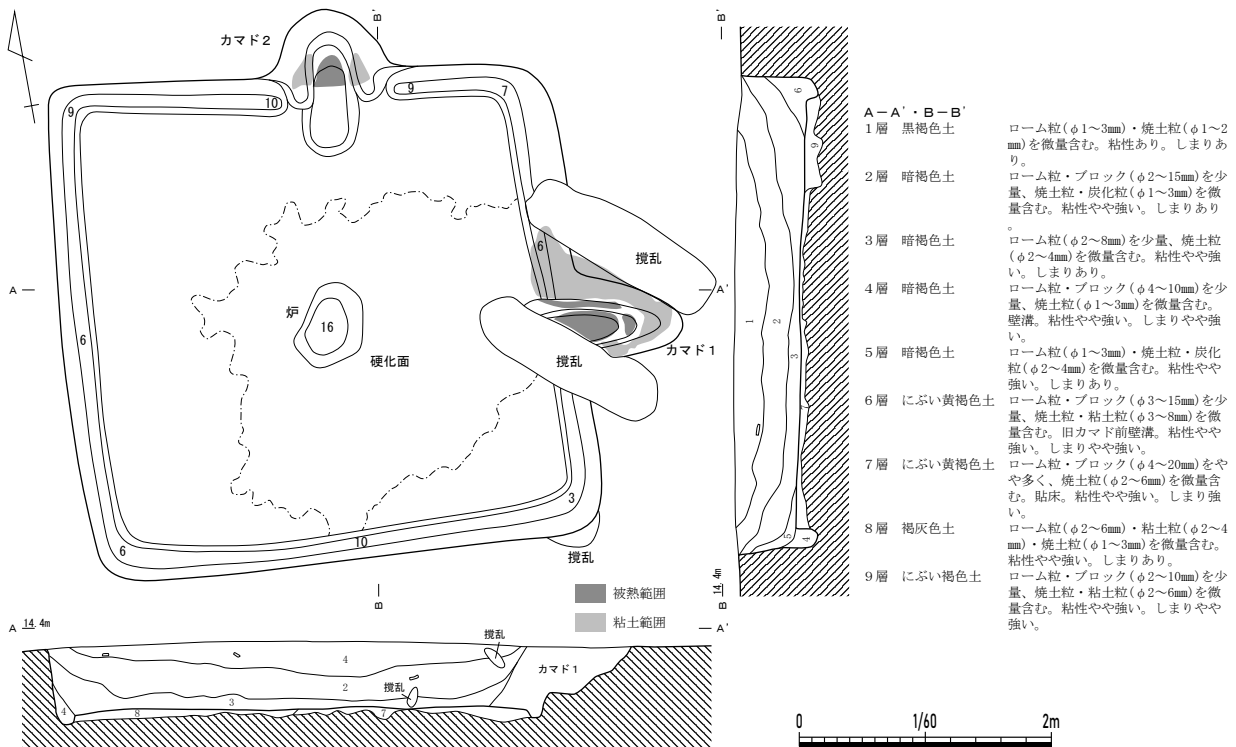
[構 造] 平面形：方形。規模：長軸4.10m／短軸3.90m／深さ54cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-82°-W。壁溝：北カマド以外全周する。規模は上幅20～30cm／下幅10cm前後／深さ3～10cm。床面：貼床の厚さは6cm前後である。カマド：2基確認され、袖の有無で新旧が想定される。北壁中央やや東寄りにカマド2が設けられ、袖が残る新カマドと想定した。規模は長軸115cm／短軸80cm／深さ56cm。東壁中央やや南寄りにカマド1が確認され、袖が残っていないが、古カマドと想定した。規模は、長軸90cm／短軸60cm／深さ67cm。柱穴：検出されなかった。入り口施設：検出されなかった。炉：床面中央に地床炉が検出された。規模は長軸70cm／短軸50cm／深さ16cm。

[覆 土] 黒褐色土を主体とする9層に分層でき、自然堆積の様相を呈す。

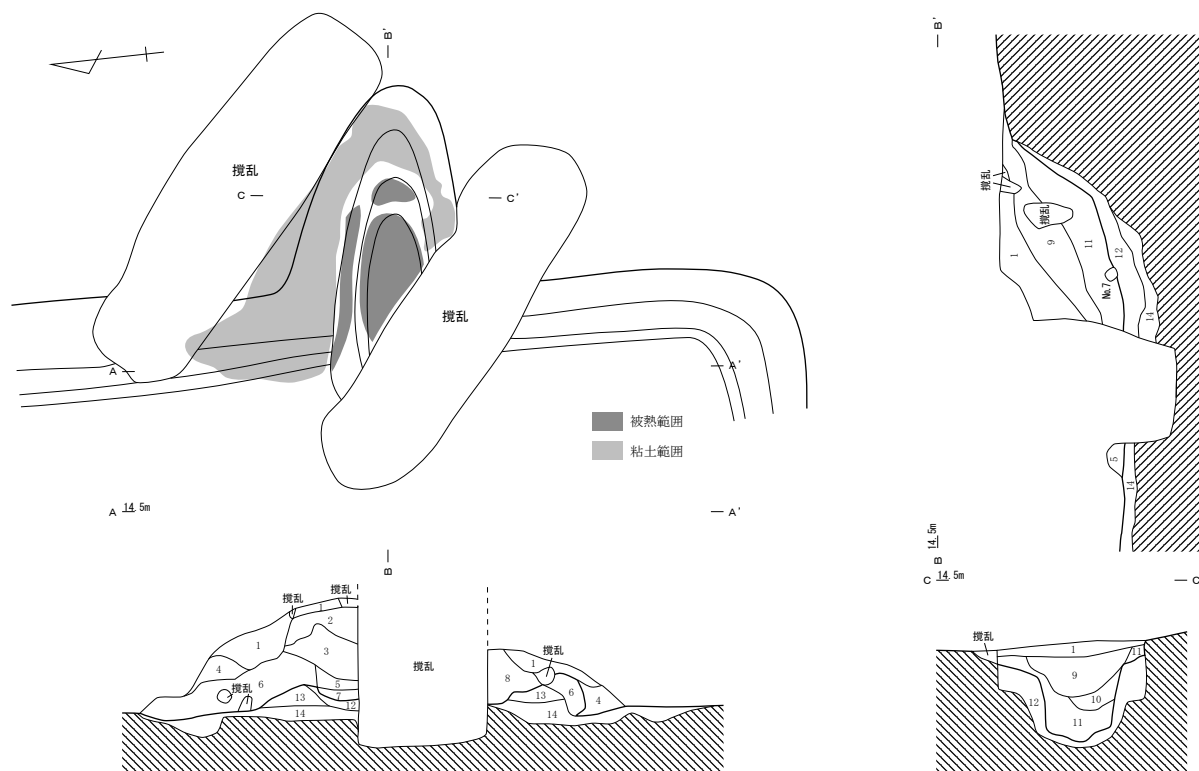
[遺 物] 土師器片1872点、須恵器247点、灰釉陶器2点、炭化種子1点、鉄製品2点、椀型滓1点、混入と思われる縄文土器5点、石器1点、陶磁器5点が出土した。このうち、図示したのは18点である。

[時 期] 平安時代（9世紀後葉から末葉）。

[所 見] 古相を示す4は貼床下から、3は覆土中層から出土し何れも9世紀中葉前後の様相を示す。土師器甕はカマド西袖付近床直と地床炉内との接合で14が、南西コーナー付近中層から15が出土し、いずれも広義のコの字口縁だが、14が古く、15は新しい。新相を示す、2・5は覆土中上層からの出土で9世紀末葉頃の様相を示す。カマドの造り替えが行われ、新相の遺物が覆土中上層からの出土であることを考慮し時期を想定した。なお、灰釉陶器の手付小瓶首部が中層から正位で出土したほか、灯

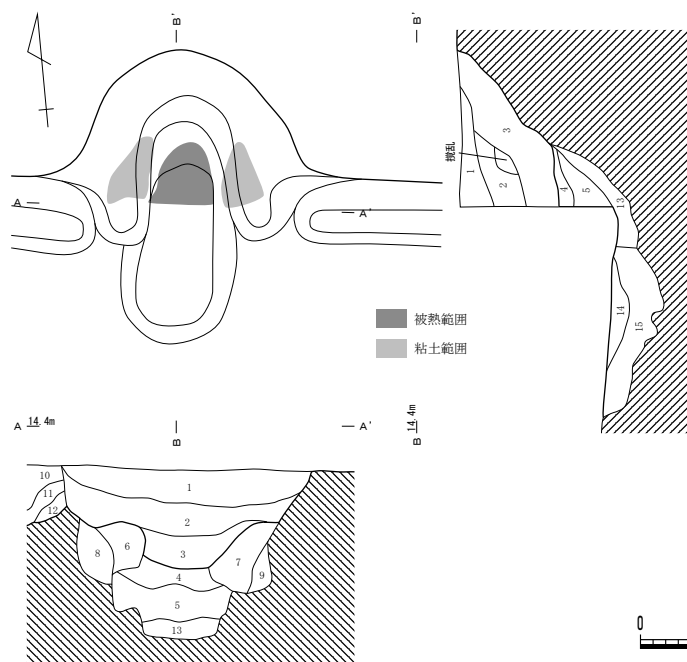


第47図 85号住居跡(1/60)



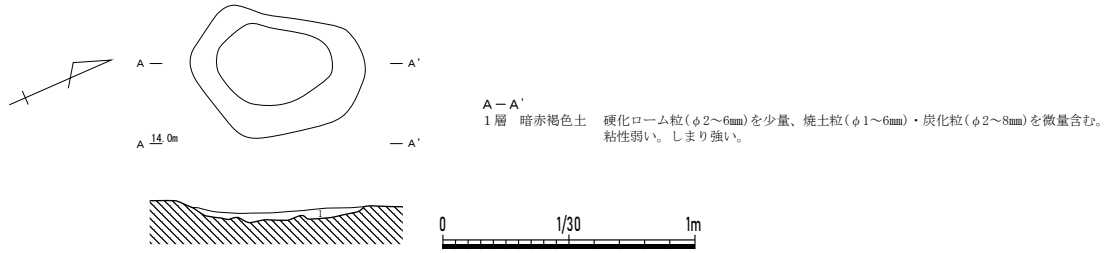
- A-A'・B-B'・C-C'
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~4mm)・焼土粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 - 2層 極暗褐色土 ローム粒(φ1~3mm)・粘土粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
 - 3層 褐色土 ローム粒(φ1~2mm)・粘土粒(φ4~8mm)を少量、焼土粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 - 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、粘土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 - 5層 褐色土 粘土粒・ブロック(φ4~10mm)を少量、焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 - 6層 灰黄褐色土 粘土粒・ブロック(φ1~15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 - 7層 暗赤褐色土 硬化ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、焼土粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性やや弱い。しまりやや強い。
 - 8層 暗褐色土 粘土粒(φ2~8mm)・焼土粒(φ1~8mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
 - 9層 褐色土 粘土粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
 - 10層 灰褐色土 粘土粒(φ1~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 - 11層 暗赤褐色土 硬化ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量、焼土粒(φ2~8mm)・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 - 12層 赤褐色土 焼土面、焼土主体層。炭化粒(φ2~8mm)を少量含む。粘性欠。しまり強い。
 - 13層 極暗赤褐色土 硬化ローム粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ2~8mm)を少量、炭化粒(φ4~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
 - 14層 にぶい黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)をやや多く、焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。貼床。粘性やや強い。しまり強い。

第48図 85号住居跡カマド1 (1/30)

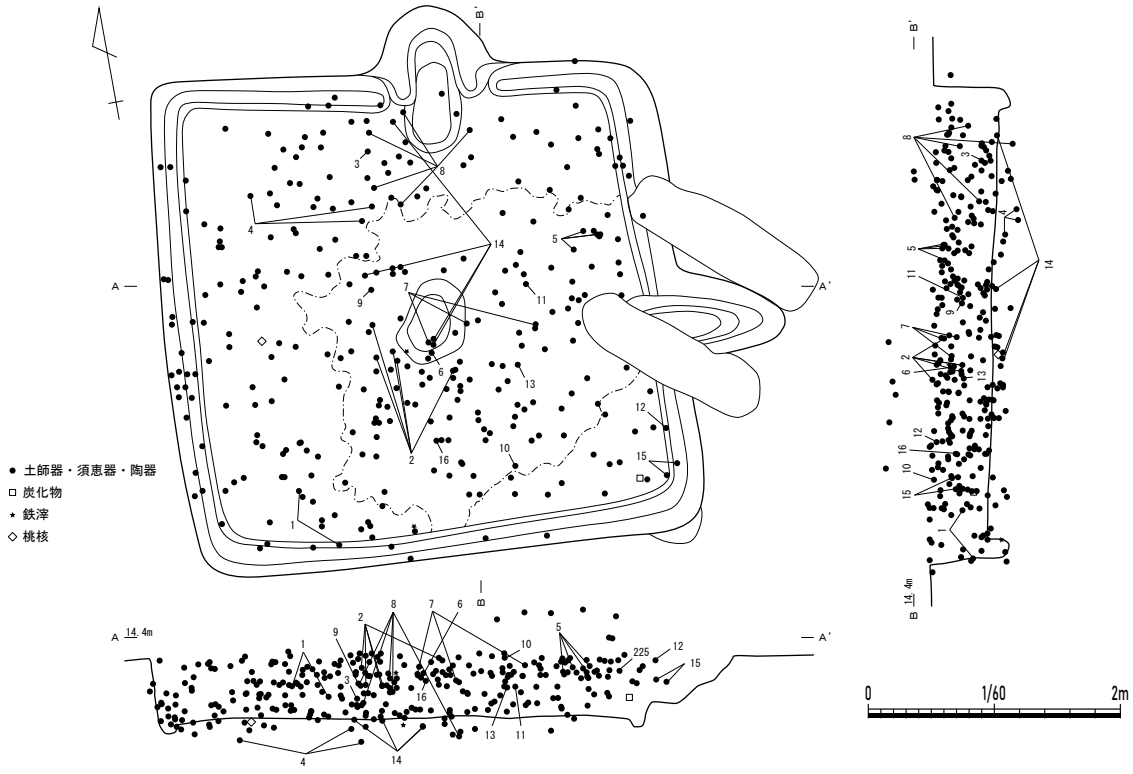


- A-A'・B-B'
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)をやや多く、焼土粒(φ1~5mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 2層 黒褐色土 灰白色土(φ1~5mm)をやや多く、しまりにローム土含む。1層より黒い。粘性あり。しまり強い。
 - 3層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)を少量、焼土粒(φ1~10mm)・灰白色土(φ1~20mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
 - 4層 灰黄褐色土 焼土粒(φ1~50mm)を多量、灰白色土(φ1~5mm)をやや多く、炭化粒(φ1~5mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 5層 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~4mm)・ロームブロック(φ5~10mm)を少量、焼土粒(φ1~5mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりあり。
 - 6層 灰白色土 灰白色土多量。ローム粒(φ1~3mm)をしまりに多量、焼土粒(φ1~5mm)少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 7層 灰白色土 灰白色土(φ5~10mm)を多量、ローム粒(φ1~4mm)・ロームブロック(φ5~10mm)を少量、焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 8層 にぶい黄褐色土 灰黄褐色土ベースローム多量炭化粒(φ1~10mm)・焼土粒(φ1~3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 9層 にぶい黄褐色土 灰黄褐色土ベースローム多量炭化粒(φ1~5mm)少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 10層 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~3mm)均一にやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
 - 11層 黒褐色土 ローム粒(φ1~3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 12層 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~4mm)を均一にやや多く、焼土粒(φ1~2mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 13層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ3~8mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
 - 14層 暗赤褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒・ブロック(φ3~15mm)を微量含む。粘性強い。しまり強い。
 - 15層 にぶい黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~30mm)をやや多く、焼土粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性やや強い。しまり強い。

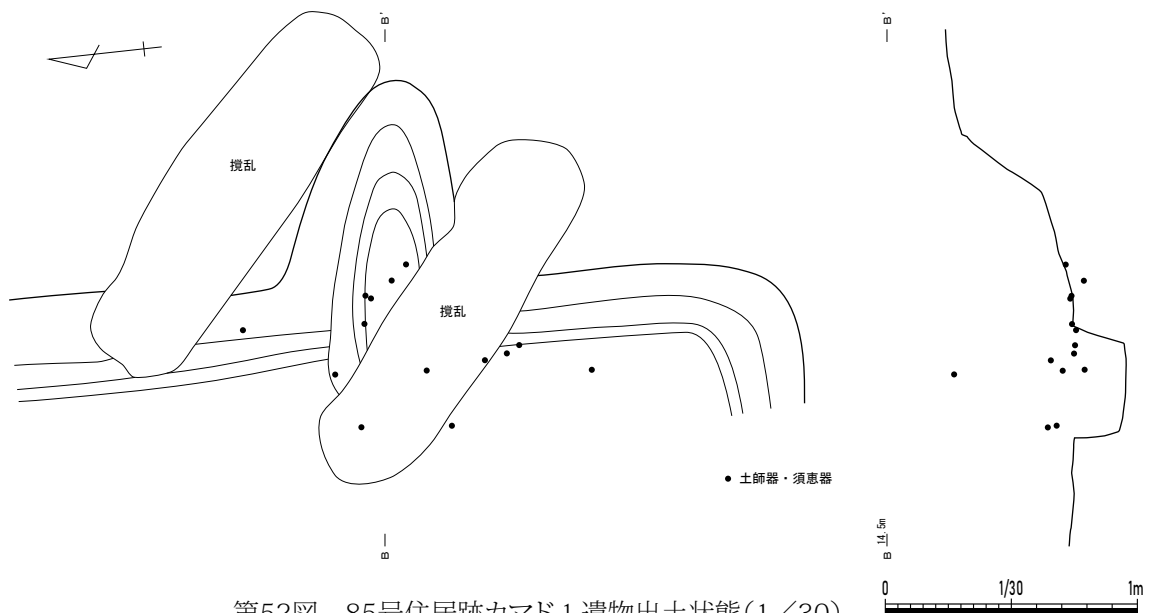
第49図 85号住居跡カマド2 (1/30)



第50図 85号住居跡炉跡(1/30)



第51図 85号住居跡遺物出土状態(1/60)

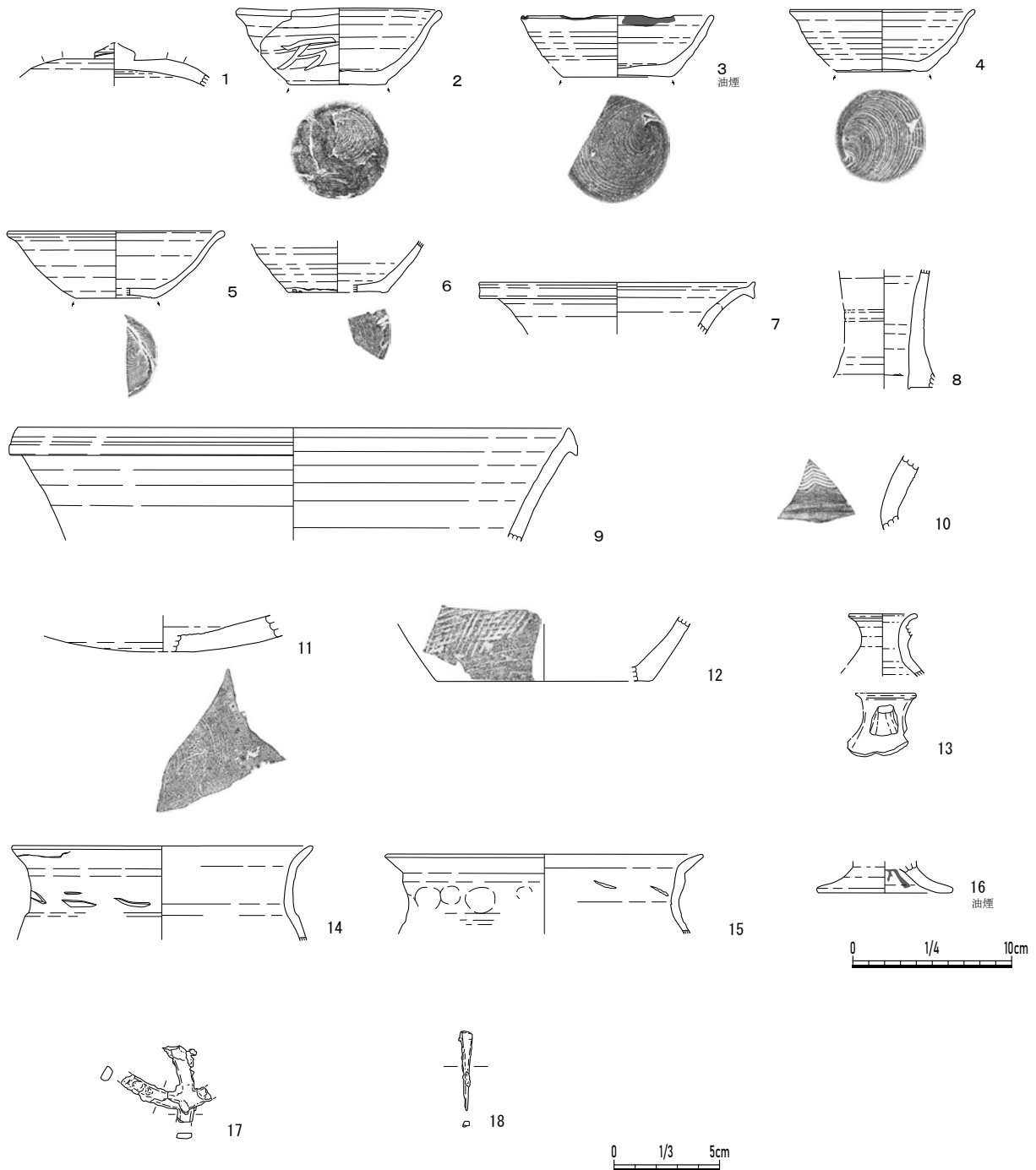


第52図 85号住居跡カマド1 遺物出土状態(1/30)

明使用が想定される坏、墨書土器など覆土中上層から特徴的な遺物が出土している。後考を要する。また、床面中央には地床炉が検出されている。椀型滓が1点出土しているが、地床炉周辺に還元面や小鍛冶を伺わせる遺物もなく、その性格は不詳である。

遺物 (第53図、図版17-3・18-1、第13表)

1は須恵器蓋、2～6は須恵器坏、7・8は須恵器長頸瓶、9～12は須恵器大甕片である。2には「万」の墨書が、10には頸部上に櫛描波状文の一部が、11は丸底、12は平底となる。13は灰釉陶器の小型手付瓶の頸部、14・15は土師器甕、16は土師器の台付甕である。17・18は鉄製品である。



第53図 85号住居跡出土遺物 (1 / 4 ・ 1 / 3)

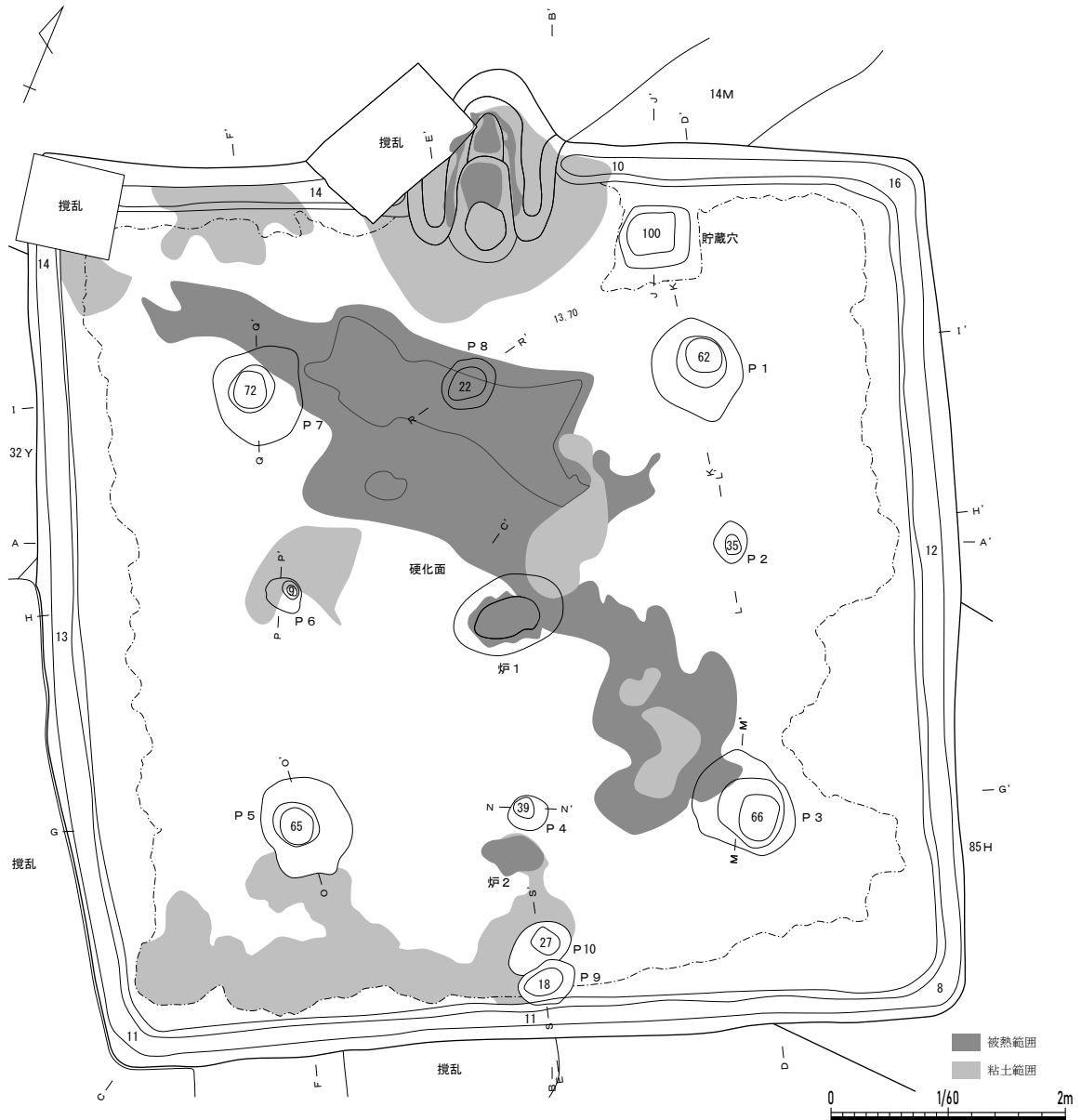
86号住居跡

遺構 (第54～61図)

[位置] (L-8、M・N-7、L・M・N-8・9) グリッド

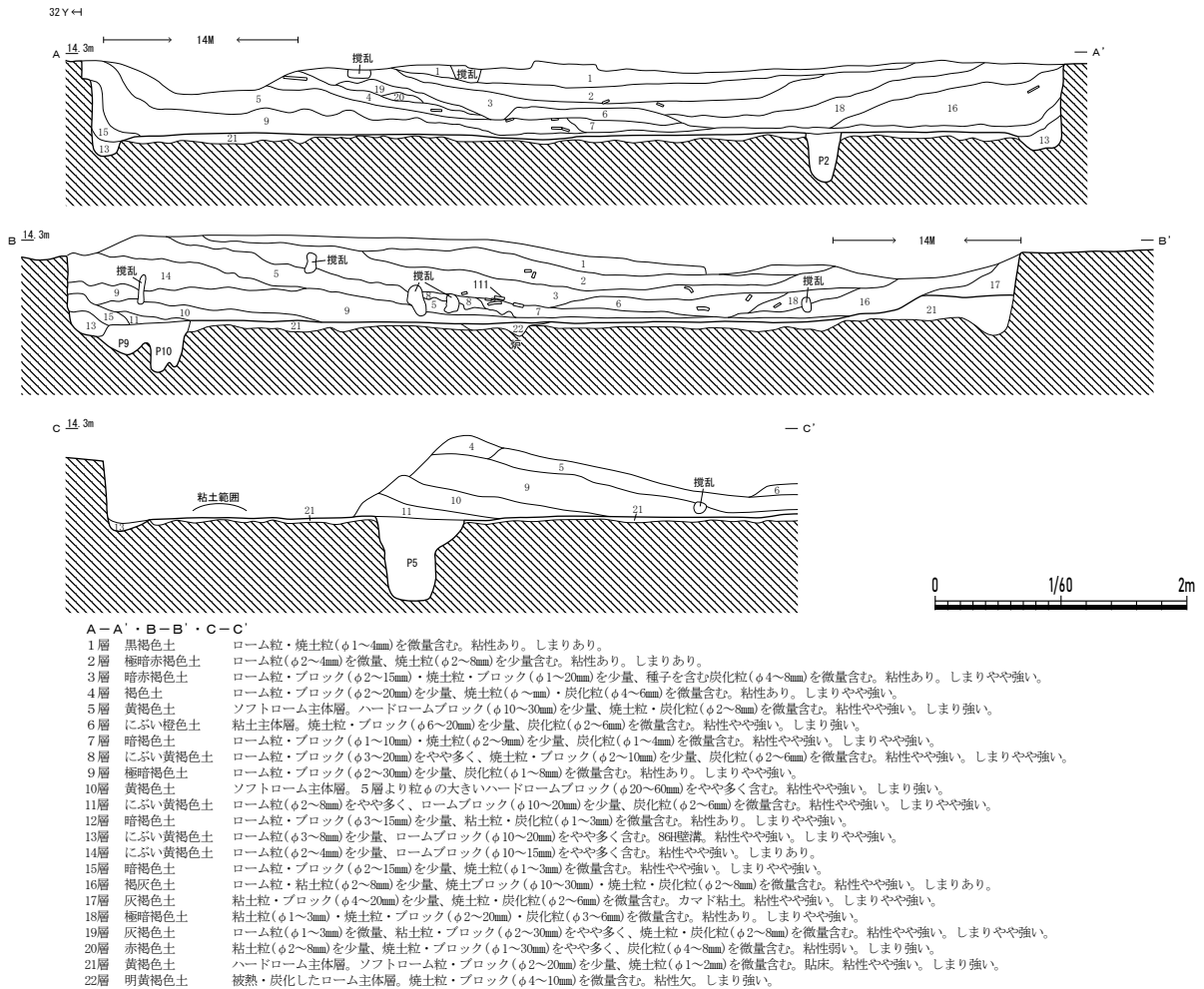
[検出状況] 2区北東にて検出した。32Yを切り、85H、14M、308D、312Dに切られ、南西隅は近現代の攪乱を受ける。

[構造] 平面形：方形。規模：長軸7.86m / 短軸7.64m / 深さ70cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-25°-W。壁溝：カマドを除いて全周する。規模は上幅30cm前後 / 下幅15cm前後 / 深さ8～16cm。床面：貼床の厚さは4cm前後である。カマド：北壁中央に長軸167cm、短軸122cm、深さ56cmのカマドを検出。炉1：住居の中心に確認された。範囲は、長軸98cm / 短軸53cm / 深さ8cm。炉2：P4の南脇に粘土と焼土の分布を確認した。範囲は長軸 / 55cm、短軸35cm / 深さ4cm。貯蔵穴：カマドの東脇で確認。範囲は、長軸70cm / 短軸55cm / 深さ101cm。柱穴：ピットが8本(主柱穴4本、補助柱4本)確認された。炉1を中心に住居コーナー対角線上に主柱穴4本をおき、各主柱穴を辺で結んだ



第54図 86号住居跡1 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



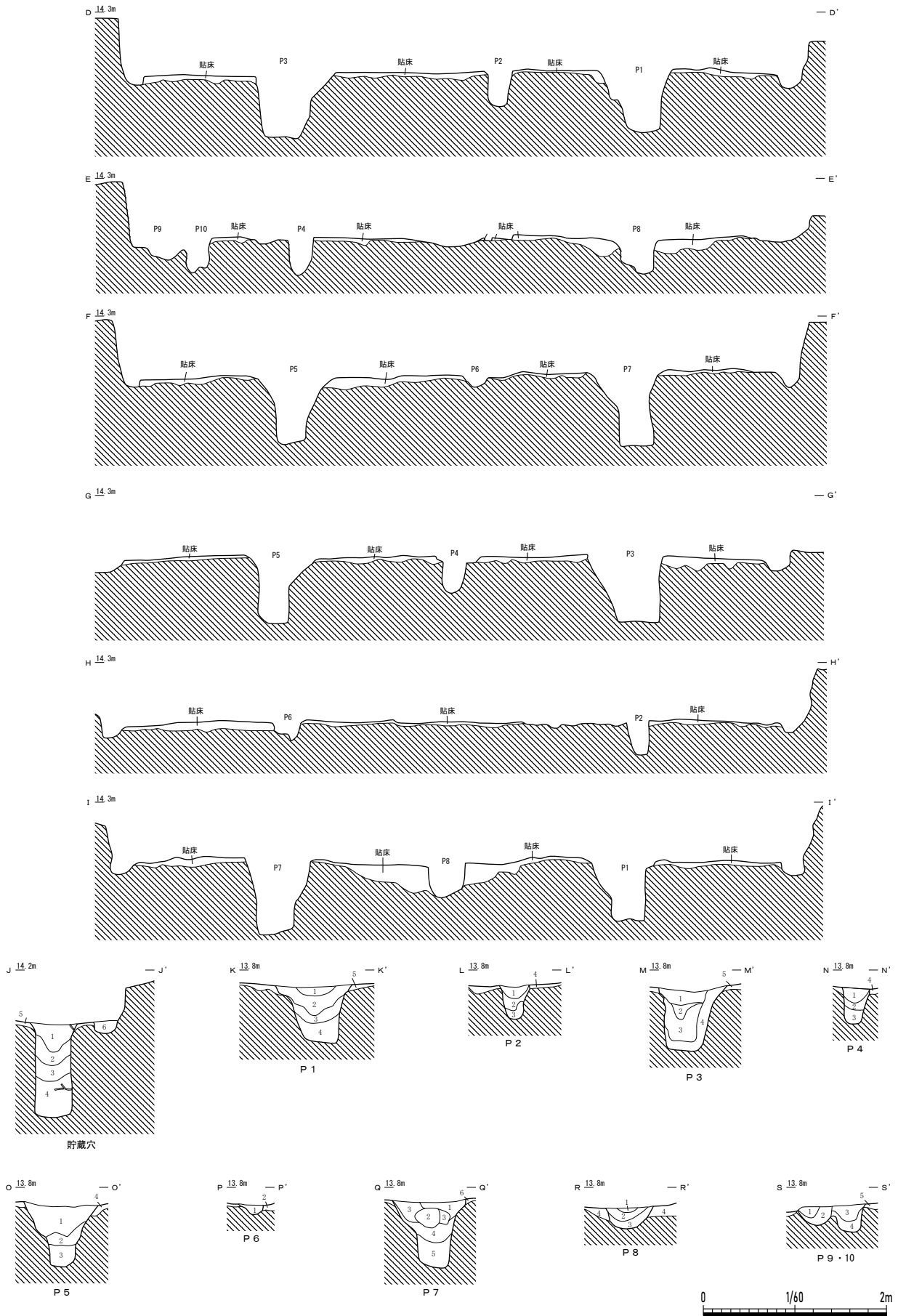
第55図 86号住居跡2(1/60)

間に補助柱穴4本を配する整った構成となる。深さは、支柱穴が62~72cm、支柱穴が9~35cmである。入口施設：南壁中央の壁際に重複ぎみに2本の出入口ピットが検出された。深さはP9が18cm、P10が27cm。

〔覆土〕 覆土は22層に分層できた。上層(1・2層)は黒褐色土を主体とする自然堆積土で、中~下層(3~11層)は、粘土層、焼土層、ロームブロック層を含む人為的な堆積土(第56図、図版8-5・9-2)であった。この堆積土は、西壁から南コーナーを挟んだ南壁方向から人為的に埋め戻されたと想定され、当該土層北東側の中位から裾にかけて東西方向に不定に広がる焼土・粘土層がその上に被っている状況であった。炭化種子(モモ・スモモ)が260点余り、出土遺物の総点数も8000点を超えることから覆土形成過程に特異な状況が想定される。

〔遺物〕 大量の遺物が出土し、完形品を含め混入した時代の資料も合わせた総破片点数は、8989点にのぼった。この内、住居に伴う遺物には土師器坏、高坏、鉢、甕、須恵器蓋、土製支脚、土製紡錘車、土製の装飾品類、ガラス小玉、穿孔貝巢穴跡軟質泥岩、磨石、鉄製品、鉄滓、炭化種子などがあり、図示したのは62点である。炭化種子については、〔付編〕自然科学分析を参照いただきたい。

出土状況は、床直とその周辺の遺物を除けば前述の3~11層を中心とする一括埋め土の中には遺物は少ない傾向で、埋め土の後に廃棄されたものが大部分である。その状況は第55図下段の埋め土のセクション図、そして遺物の平面分布と垂直分布を示した第61図に記録されている。また、炭化種子の大量出土も、この住居の特殊な埋没過程のあり方を考える時、極めて示唆的である。



第56図 86号住居跡3・貯藏穴・ピット(1/60)

第3章 検出された遺構と遺物

J-J' (貯蔵穴)	
1層 極暗褐色土	ローム粒(φ1~6mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層 黒褐色土	ローム粒(φ2~8mm)・焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
3層 黒褐色土	ローム粒(φ2~8mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
4層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
5層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層粘性やや強い。しまり強い。
6層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ3~8mm)を少量、ロームブロック(φ10~20mm)をやや多く含む。壁溝。86H3層。粘性やや強い。しまり強い。
K-K' (P1)	
1層 極暗褐色土	ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒(φ1~8mm)・炭化粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量、焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
3層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~50mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
4層 黄褐色土	ローム粒・ブロック(φ4~40mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりあり。
5層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
L-L' (P2)	
1層 褐灰色土	ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
3層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
4層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
M-M' (P3)	
1層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~40mm)を少量、粘土粒・ブロック(φ3~30mm)・焼土粒・ブロック(φ2~30mm)・炭化粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。
2層 極暗褐色土	ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
3層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ6~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
4層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~60mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
5層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
N-N' (P4)	
1層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~30mm)を少量、粘土粒・焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
2層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ4~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
3層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
4層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。

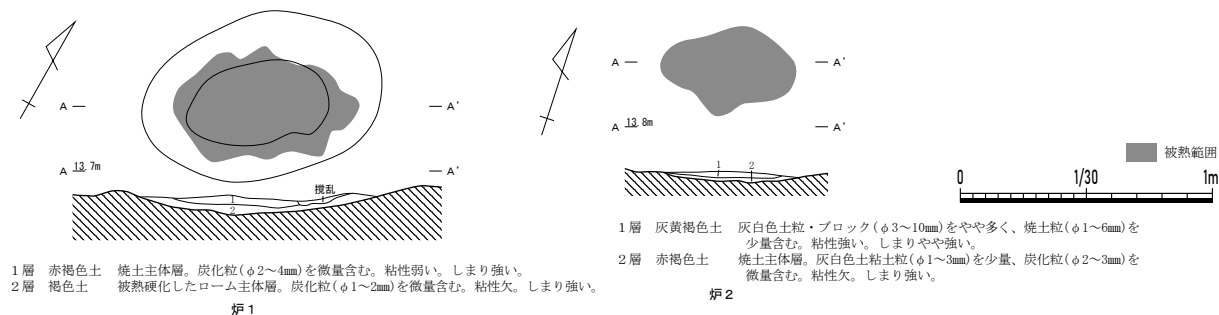
O-O' (P5)	
1層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~100mm)を少量、焼土粒・粘土粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1~9mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
3層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
4層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
P-P' (P6)	
1層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
2層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
Q-Q' (P7)	
1層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ3~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層 黒色土	ローム粒(φ1~3mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。
3層 黒褐色土	ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
4層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ4~80mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
5層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~60mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
6層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
R-R' (P8)	
1層 極暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層 黒褐色土	ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
3層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
4層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。
S-S' (P9・10)	
1層 褐灰色土	ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、粘土粒・焼土粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
2層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
3層 暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒・粘土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
4層 にぶい黄褐色土	ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~50mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
5層 黄褐色土	ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。貼床。86H21層。粘性やや強い。しまり強い。

[時期] 古墳時代後期(7世紀後葉)。

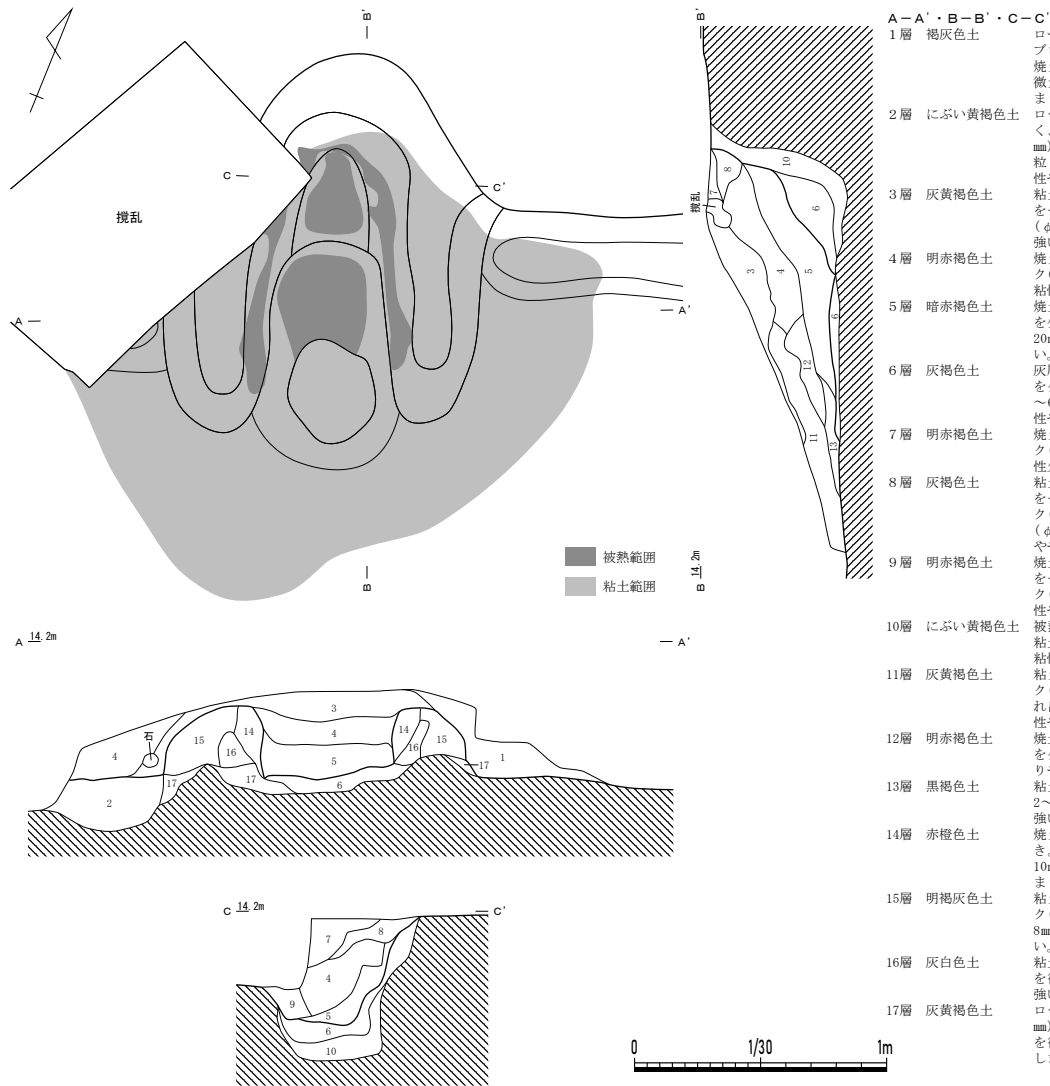
[所見] 当86Hと88Hは確認面レベルで最短50cmの距離を隔てるのみで、88Hのカマドは先端を攪乱で失うが86Hの西壁に向かっており、概ね100cm前後の距離となっている。上屋構造の想定は、ここではできないが一般的に周堤又は軒先が接してしまうような距離と思われる。両住居の覆土内の遺物からは双方が併存した可能性もあるが、その位置関係からは一考を要する。第4章まとめにて若干の分析を試みたい。

遺物 (第62~66図、図版18-2・19~21、第14表)

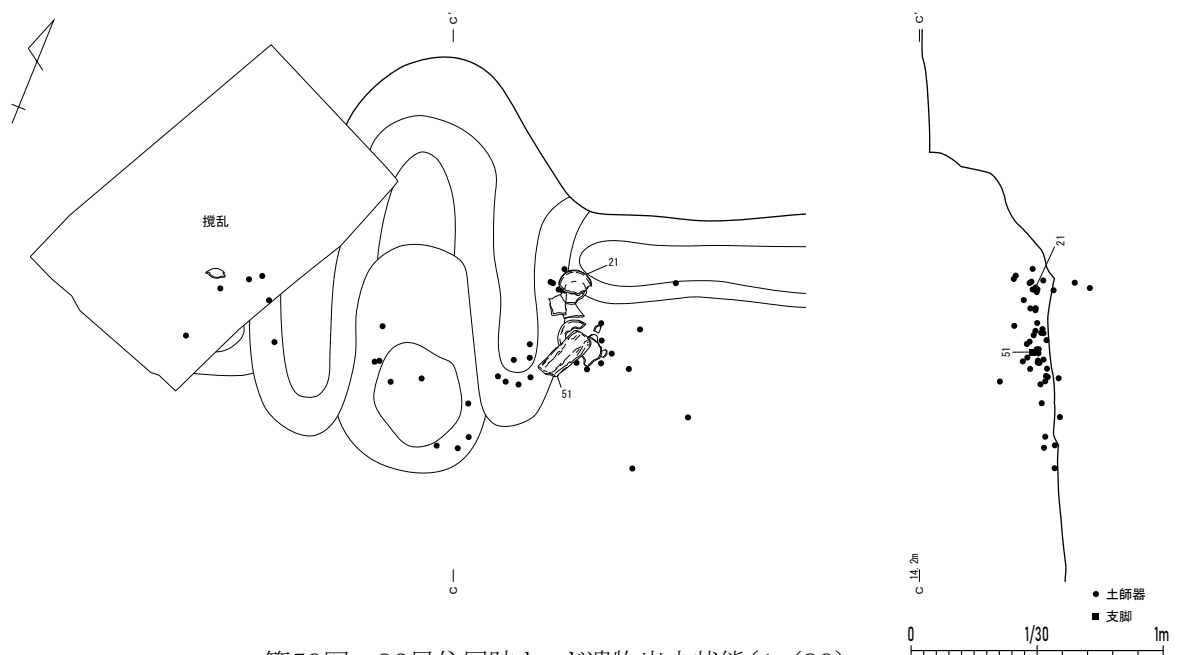
1は湖西産IV-1後期の須恵器坏蓋、2~27・29は土師器坏、28は土師器高坏、30は土師器鉢である。31は小形の土師器甕で、胴部の傾きに不安定要素をもつが、器形や器壁厚から85Hに伴う遺物の可能性がある。32~47は土師器甕、48は土師器甕である。49~51は土製支脚、52~54は土玉、55・56は勾玉形土製品で、57は形状から垂飾であろうか。59はいわゆる穿孔貝巢穴跡軟質泥岩、60~62は石製品で磨石、63は鉄製品で鎌である。



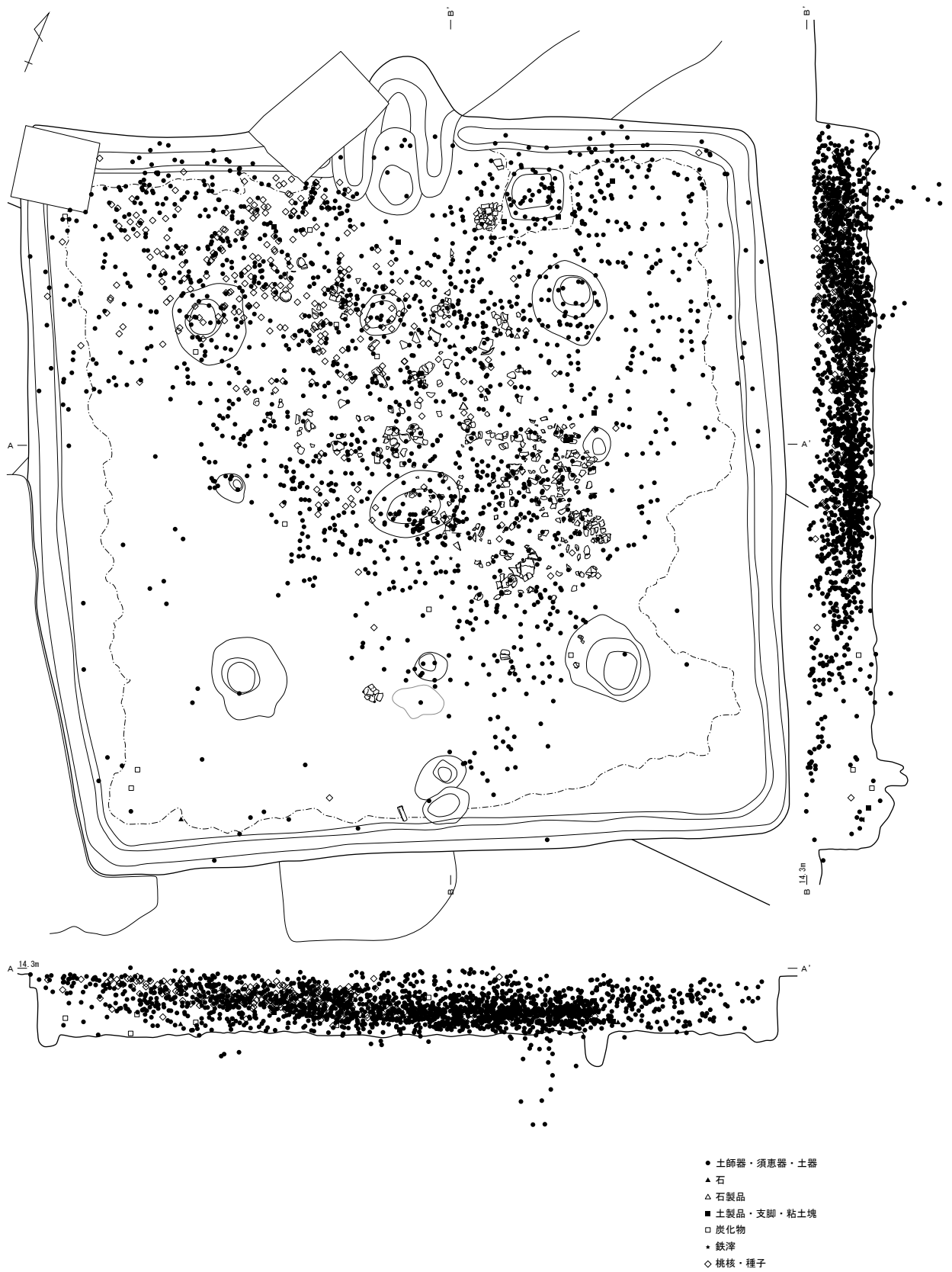
第57図 86号住居跡炉跡(1/30)



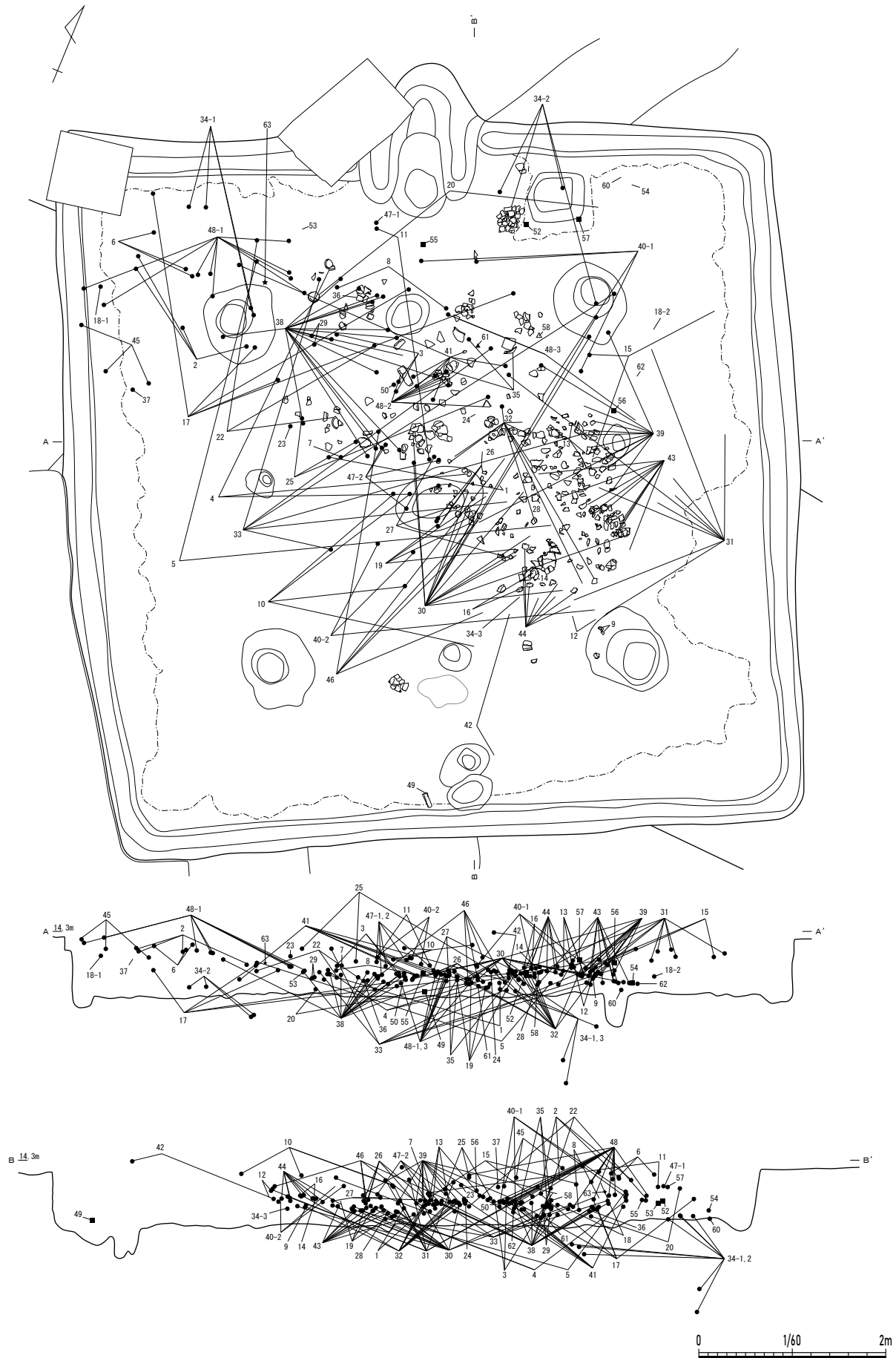
第58図 86号住居跡カマド(1/30)



第59図 86号住居跡カマド遺物出土状態(1/30)

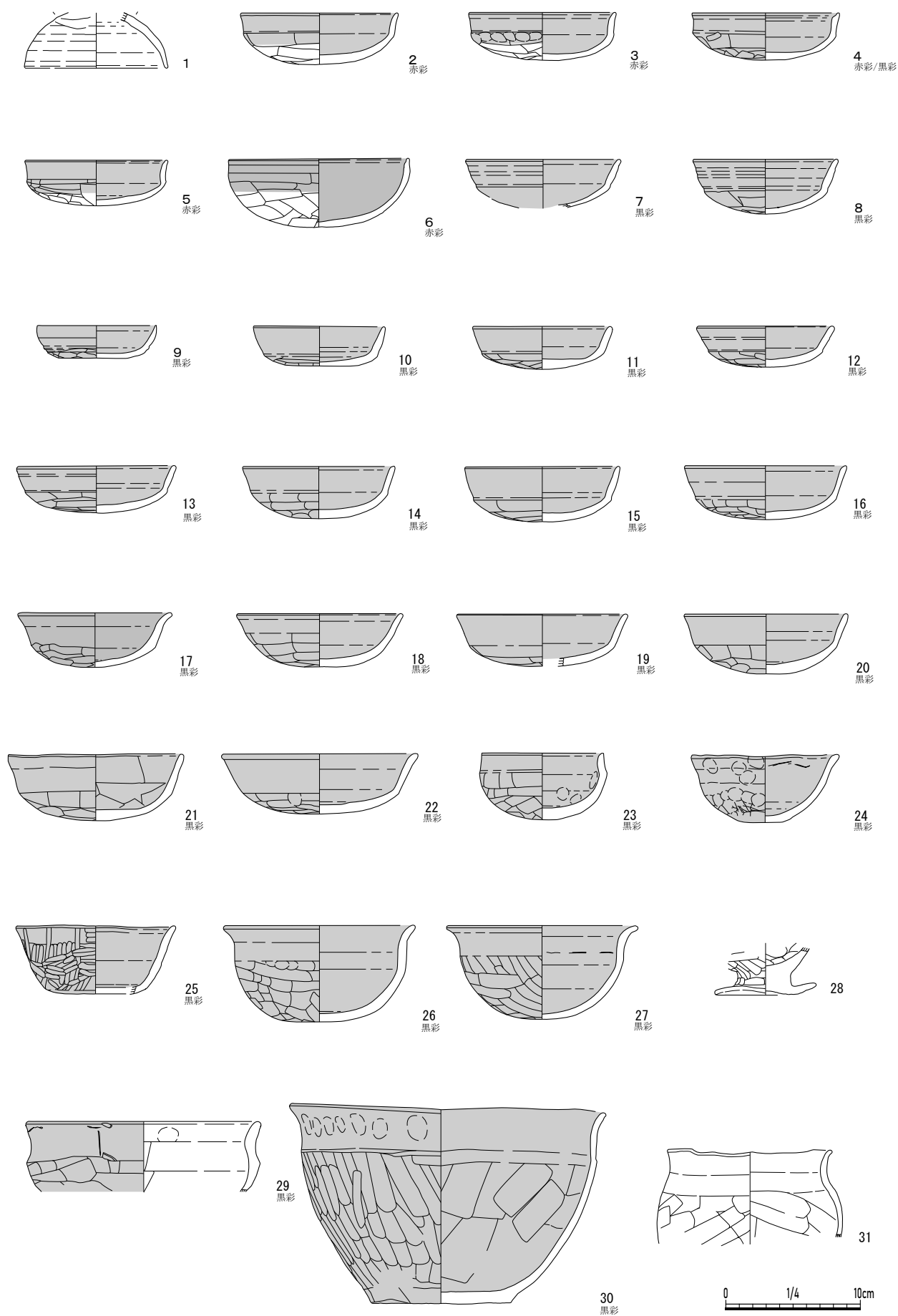


第60図 86号住居跡遺物出土状態 1 (1/60)

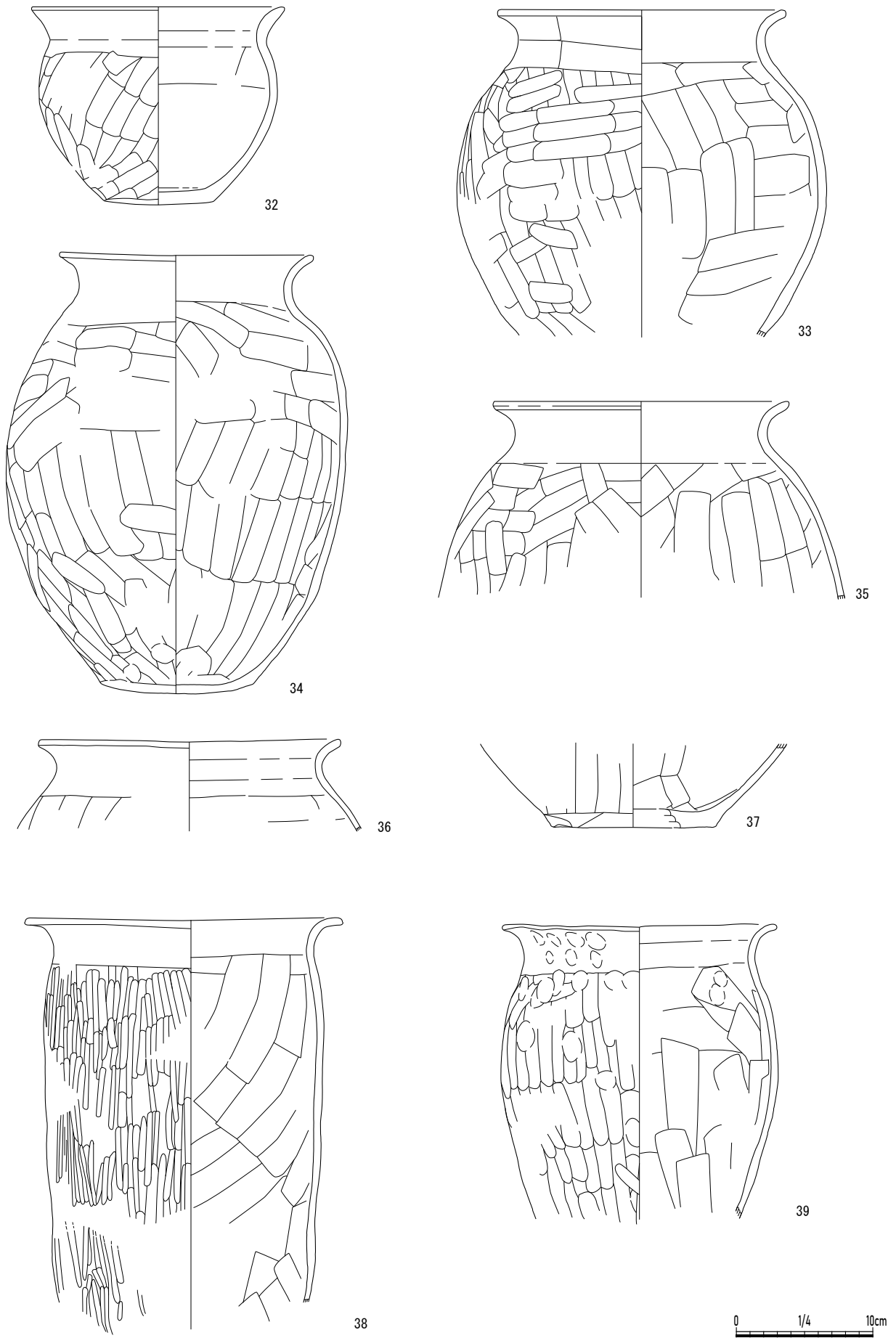


第61図 86号住居跡遺物出土状態2 (1/60)

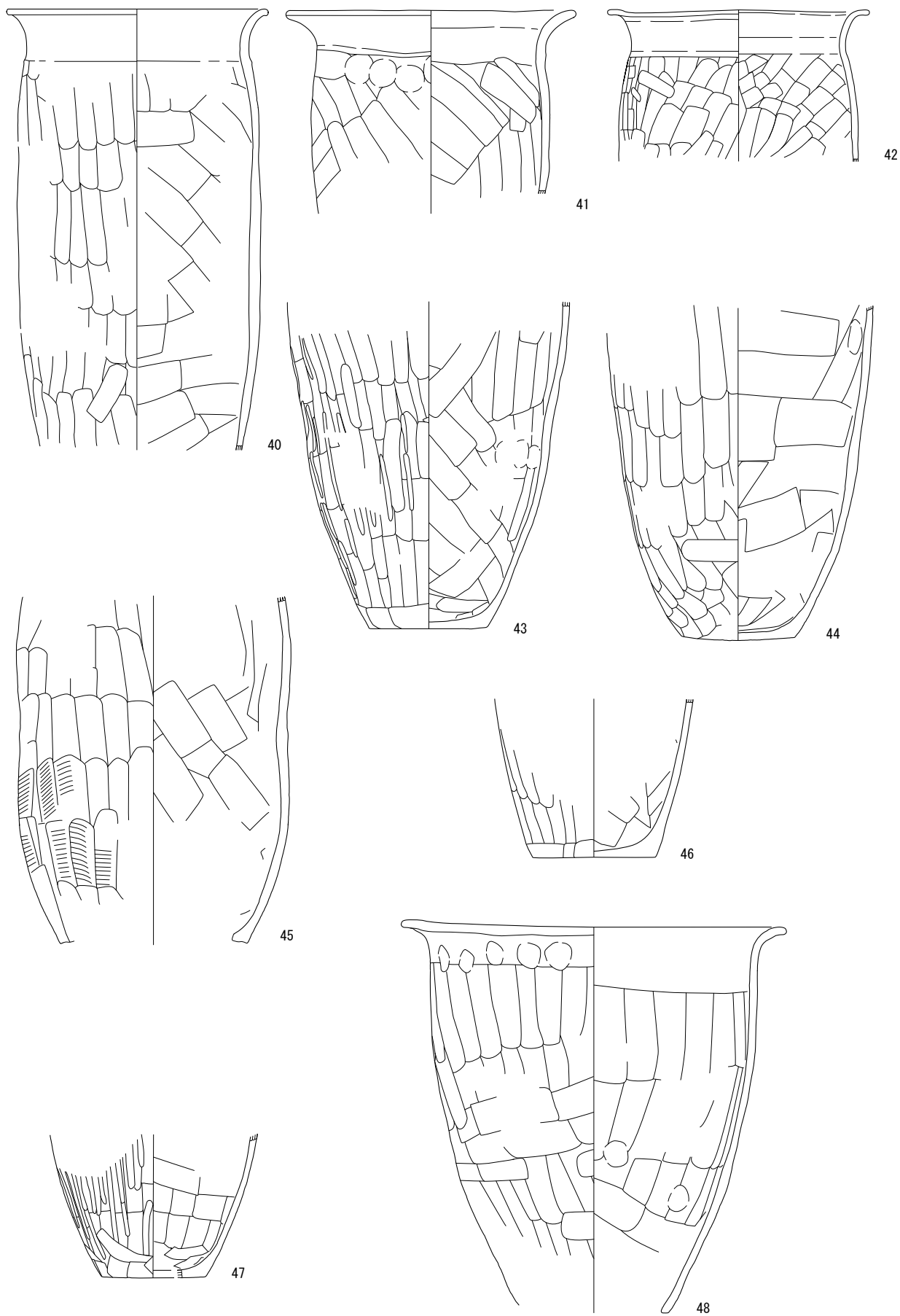
第3章 検出された遺構と遺物



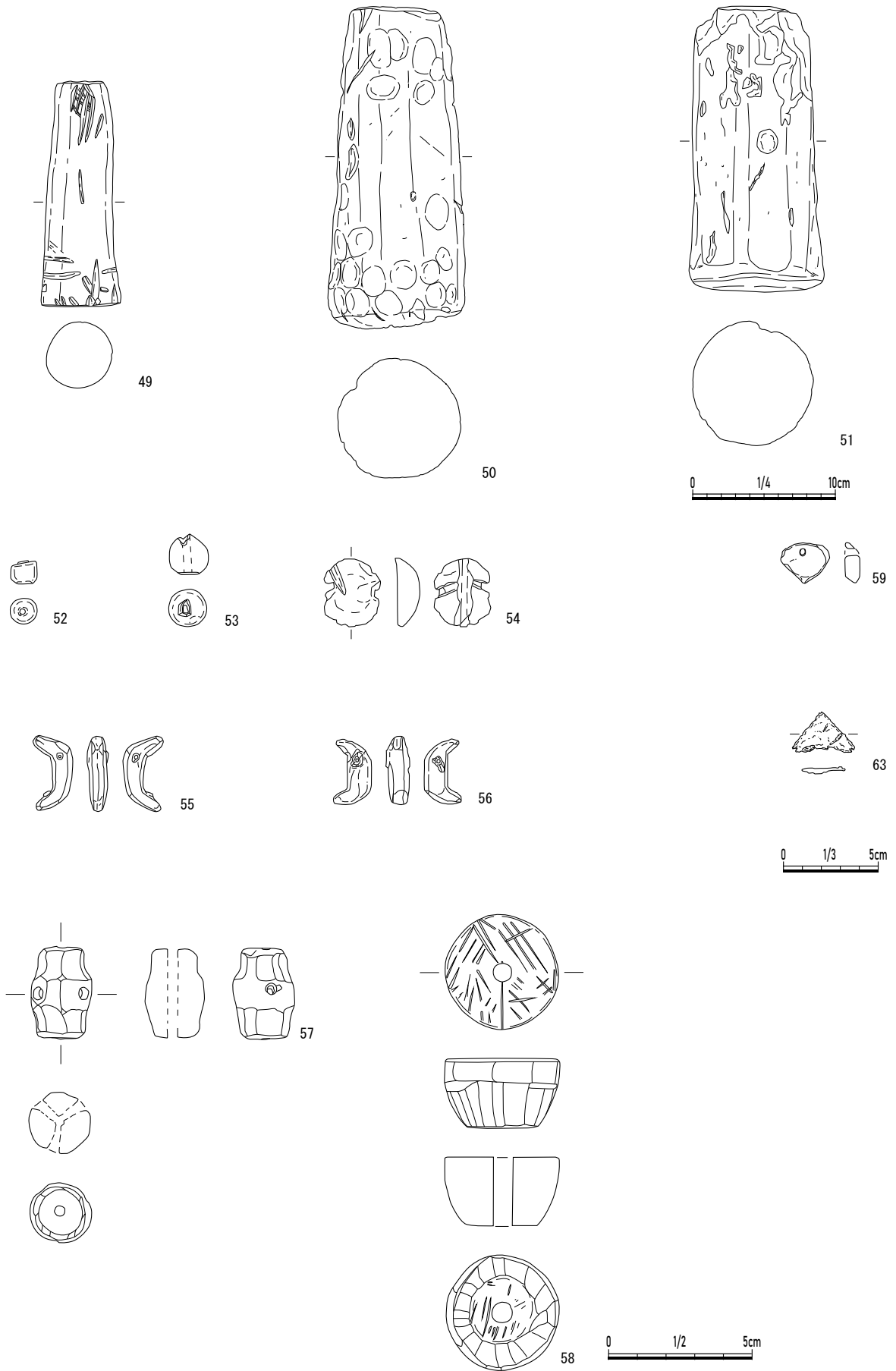
第62図 86号住居跡出土遺物 1 (1 / 4)



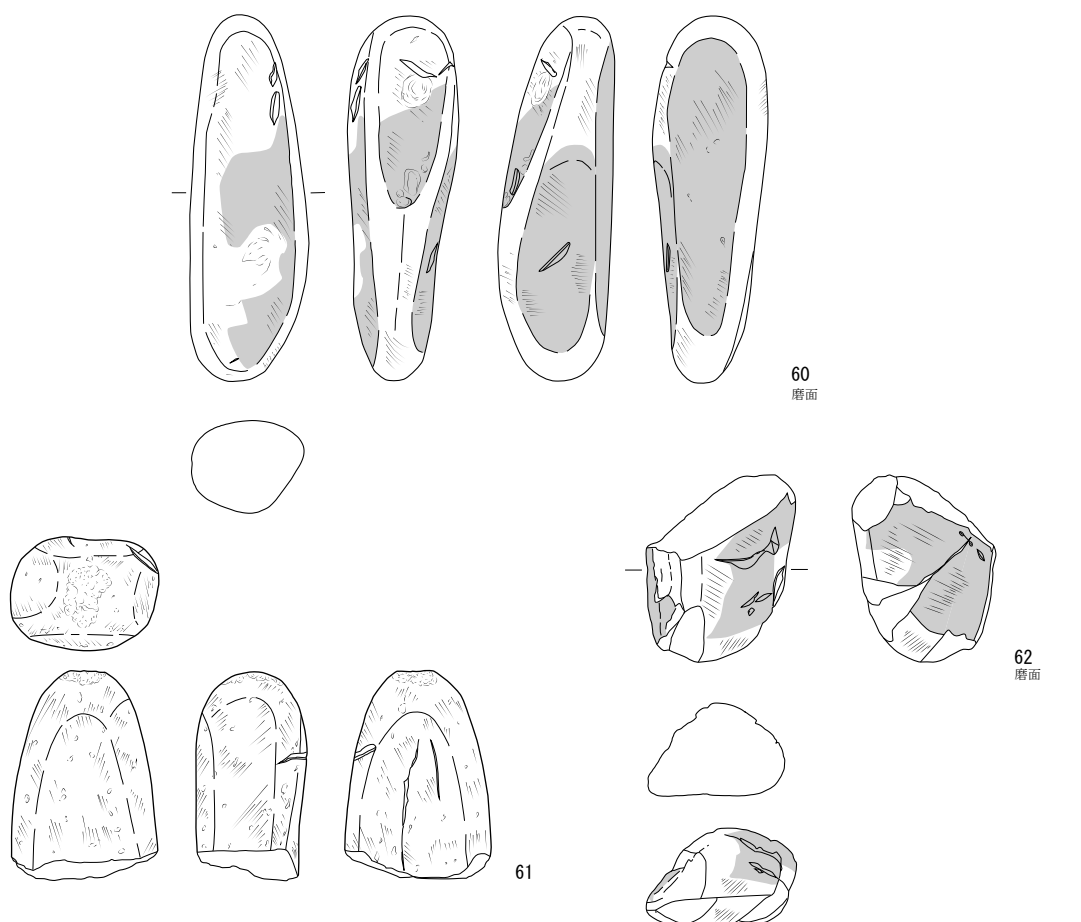
第63図 86号住居跡出土遺物 2 (1 / 4)



第64図 86号住居跡出土遺物 3 (1 / 4)



第65図 86号住居跡出土遺物 4 (1 / 4 · 1 / 3 · 1 / 2)



第66図 86号住居跡出土遺物 5 (1 / 3)

87号住居跡

遺 構 (第67・68図)

[位 置] (J・K-11) グリッド

[検出状況] 2区南西端で検出した。東南コーナー付近とカマドの一部が調査され、以外は西側調査区外となる。17Mと50Pに切られる。

[構 造] 平面形：不明。東南コーナーのみ検出。規模：不明。南壁検出長1.30m / 東壁検出長0.90m / 深さ36cm。壁：確認部分では75°で立ち上がる。主軸方位：N-42°-E。壁溝：調査部分では確認された。規模は上幅20～25cm / 下幅10cm / 深さ5cm。床面：貼床の厚さは5～7cm。カマド：調査できたのは全体の半分以下で、残りは北西調査区外となる。規模は不明。確認できた深さ56cm。柱穴・入り口施設：調査できた中では検出されなかった。

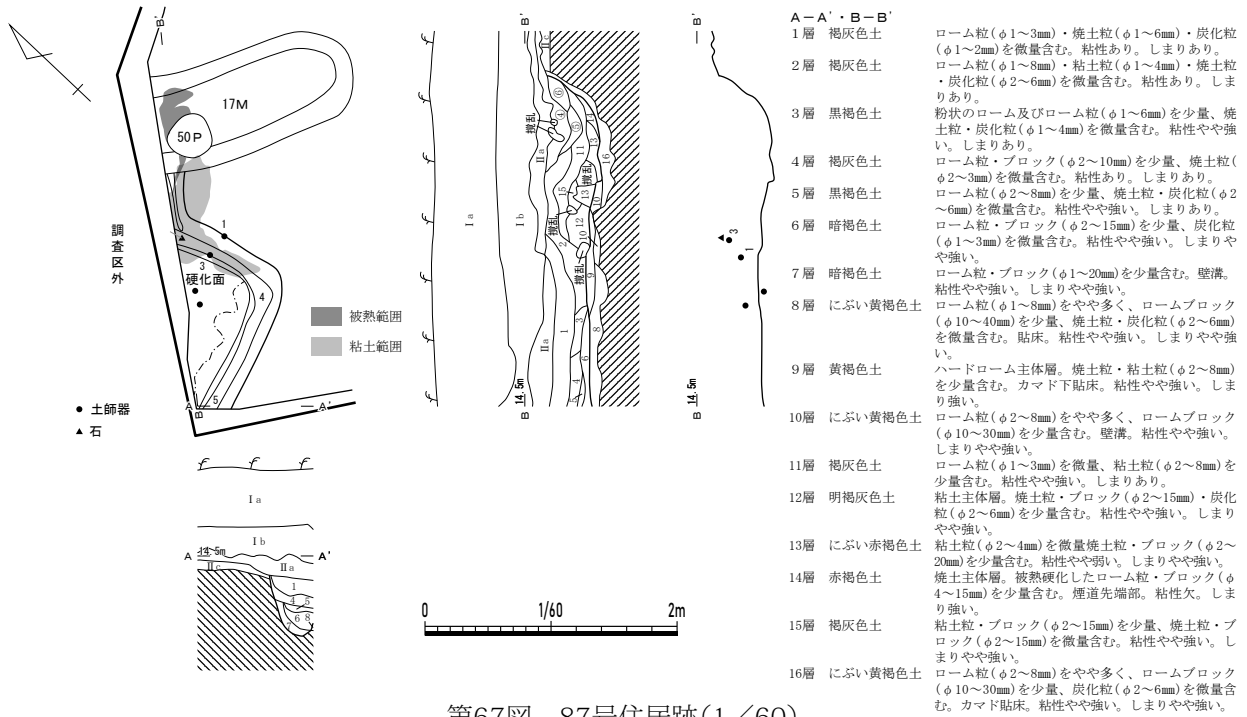
[覆 土] 16層に分層でき、上層は焼土・炭化物を含んだ褐灰色土と黒褐色土、中～下層は黒褐色土と暗褐色土を主体とする。

[遺 物] 須恵器1点、土師器及び土師質土器片22点ほか、混入と思われる緑泥石片岩製剥片1点が出土した。このうち、図示したのは3点である。

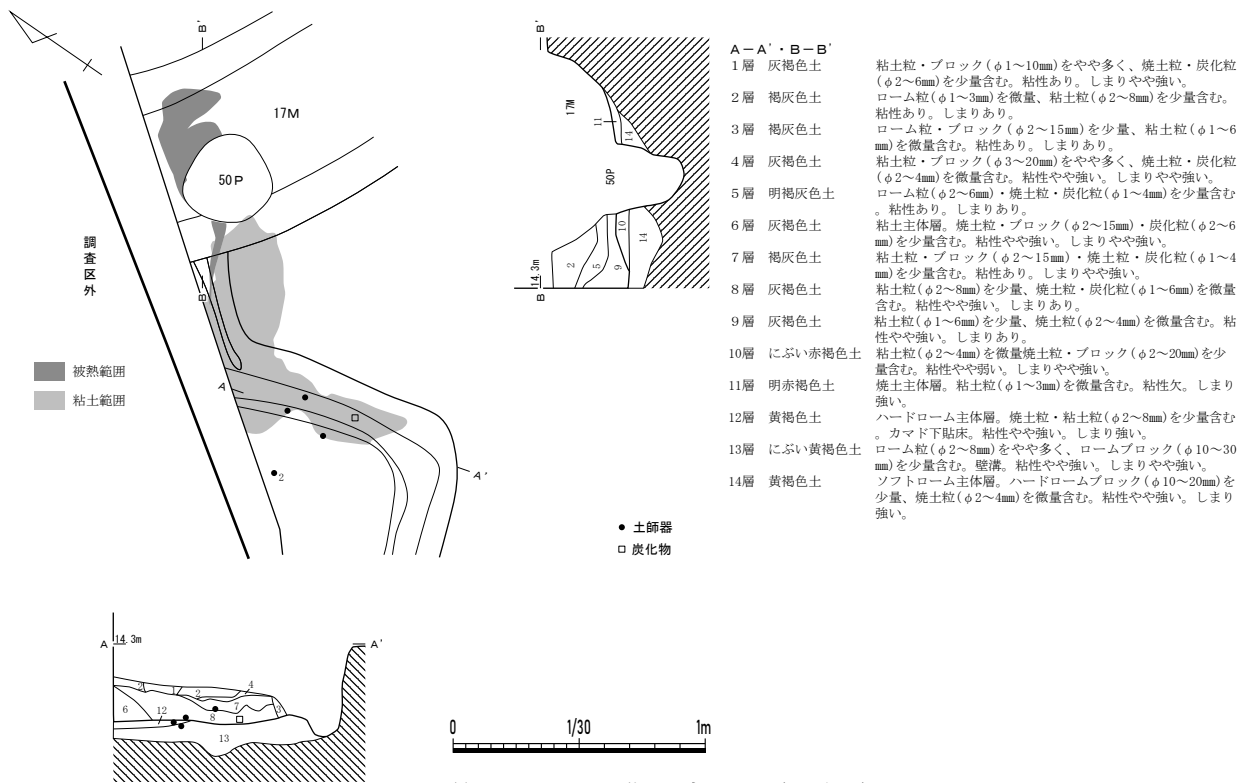
[時 期] 平安時代(8世紀後葉～9世紀前葉)。

遺 物 (第69図、図版22-1、第15表)

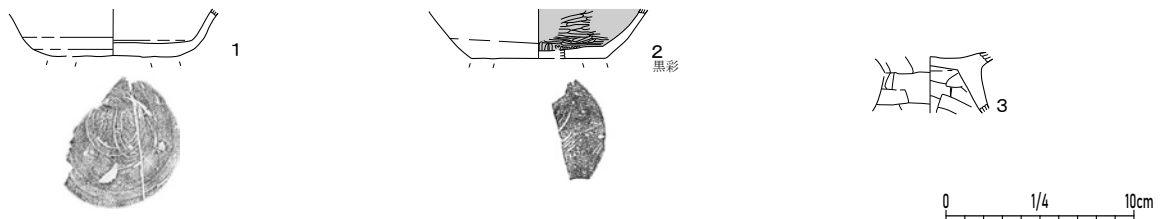
1・2は須恵器坏で、2はいわゆる内黒坏。底部は周辺へラ削り調整される。3は土師器台付甕の脚部付近の資料である。



第67図 87号住居跡(1/60)



第68図 87号住居跡カマド(1/30)



第69図 87号住居跡出土遺物(1/4)

88号住居跡

遺 構 (第70～78図)

[位 置] (L・M-9、L・M・N-10・11) グリッド

[検出状況] 2区南西寄りに検出した。309～311D、14Mに切られ、カマド北端付近に攪乱を受ける。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸9.30m（張出含む）／短軸8.20m／深さ76cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-10°-W。壁溝：カマドを除いて全周し、張出部は壁溝を埋め掘り直したものである。規模は上幅30cm／下幅15cm／深さ10～20cm。床面：貼床の厚さは2～6cmである。カマド：北壁中央に現況確認長軸120cm／現況確認短軸120cm／深さ68cmのカマドを検出。北側煙道部は攪乱を受け未検出。炉：住居の中心に確認された地床炉。範囲は、長軸72cm／短軸65cm／深さ5cm。貯蔵穴：カマドの東脇で確認。範囲は、長軸87cm／短軸27cm／深さ88cm。柱穴：ピットが11本（うち支柱穴4本、補助柱4本）確認された。地床炉を中心に住居コーナー対角線上に支柱穴4基をおき、各支柱穴を辺で結んだ間に補助柱穴4基を配する整った構成となる。深さは支柱穴が62～94cm、支柱穴が25～38cmである。入口施設：南壁中央の壁際に入出口ピットP4が、張出部の両基部にP10、P11が検出された。当初の入り口施設がP4により構成され、張出部分は壁溝を埋め拡張して作り直したものである。張出部の平面形状は、隅丸の台形状で長辺両基部にP10、P11を設ける。住居床面と同一面で構築されていた。規模は長辺3.00m／短辺1.20m／長辺短辺間の長さ1.40m。

[覆 土] 覆土は黒色土を中心とする18層に分層できた。概ね自然堆積の様相を呈するが、古墳時代後期の当住居の覆土中には一定量の平安時代の遺物が含まれていた。垂直分布を確認したところ覆土の1・2層にほぼ重なることが判明し、住居廃絶後の埋没状況を示す。

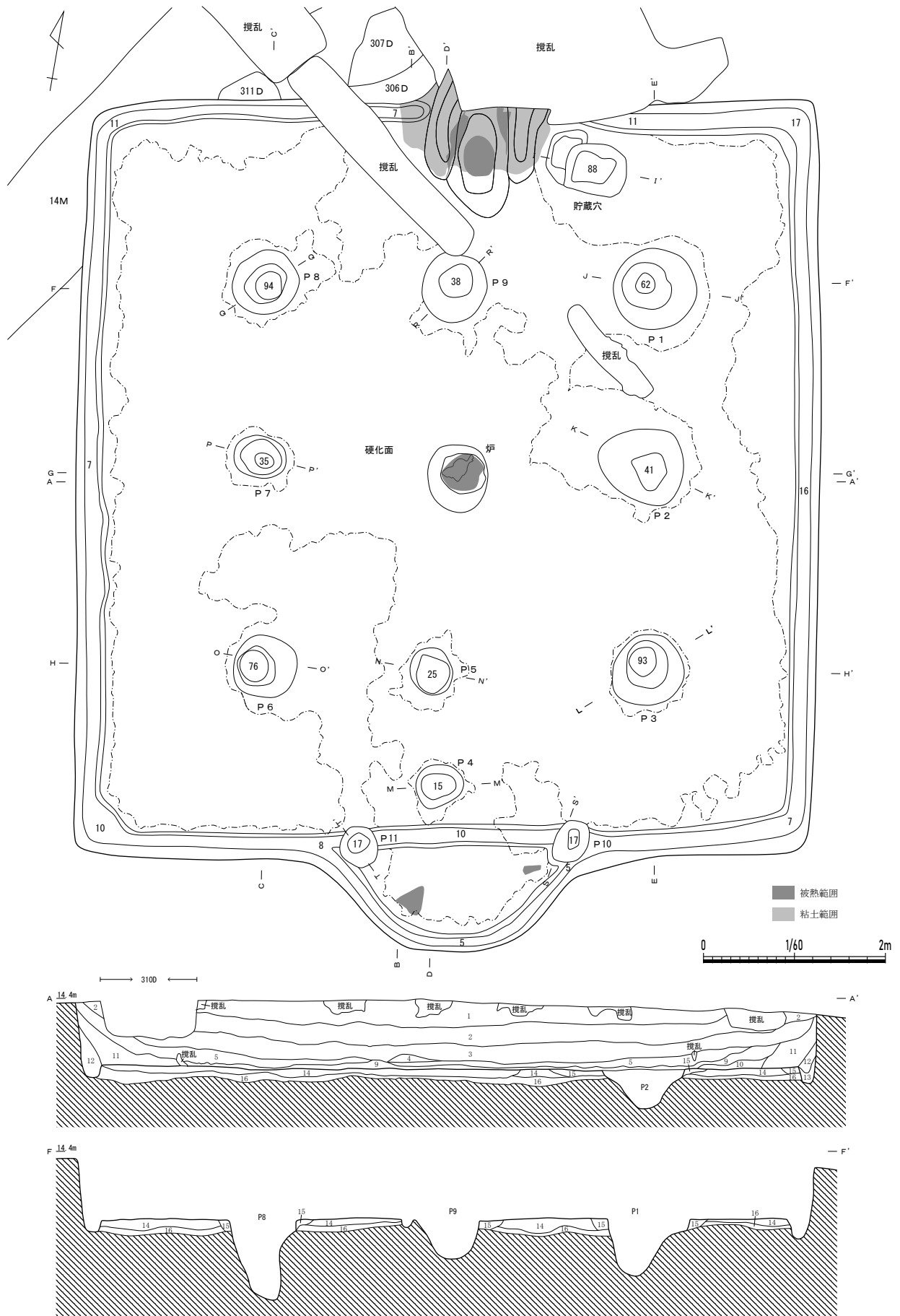
[遺 物] 大量の遺物が出土し、完形品及び混入遺物も含め総破片点数は3508点であった。住居に伴う遺物は、須恵器坏蓋、土師器坏、高坏、壺、甕、丸玉、土玉があり、住居跡埋没最終段階に当る平安時代の遺物には須恵器蓋、坏、高台碗、小形長頸壺、甕、灰釉陶器があった。その他に鉄製品として釘と石製紡錘車が出土している。また、椀型滓が1点出土している。図示したのは45点である。

[時 期] 古墳時代後期（7世紀末葉）。

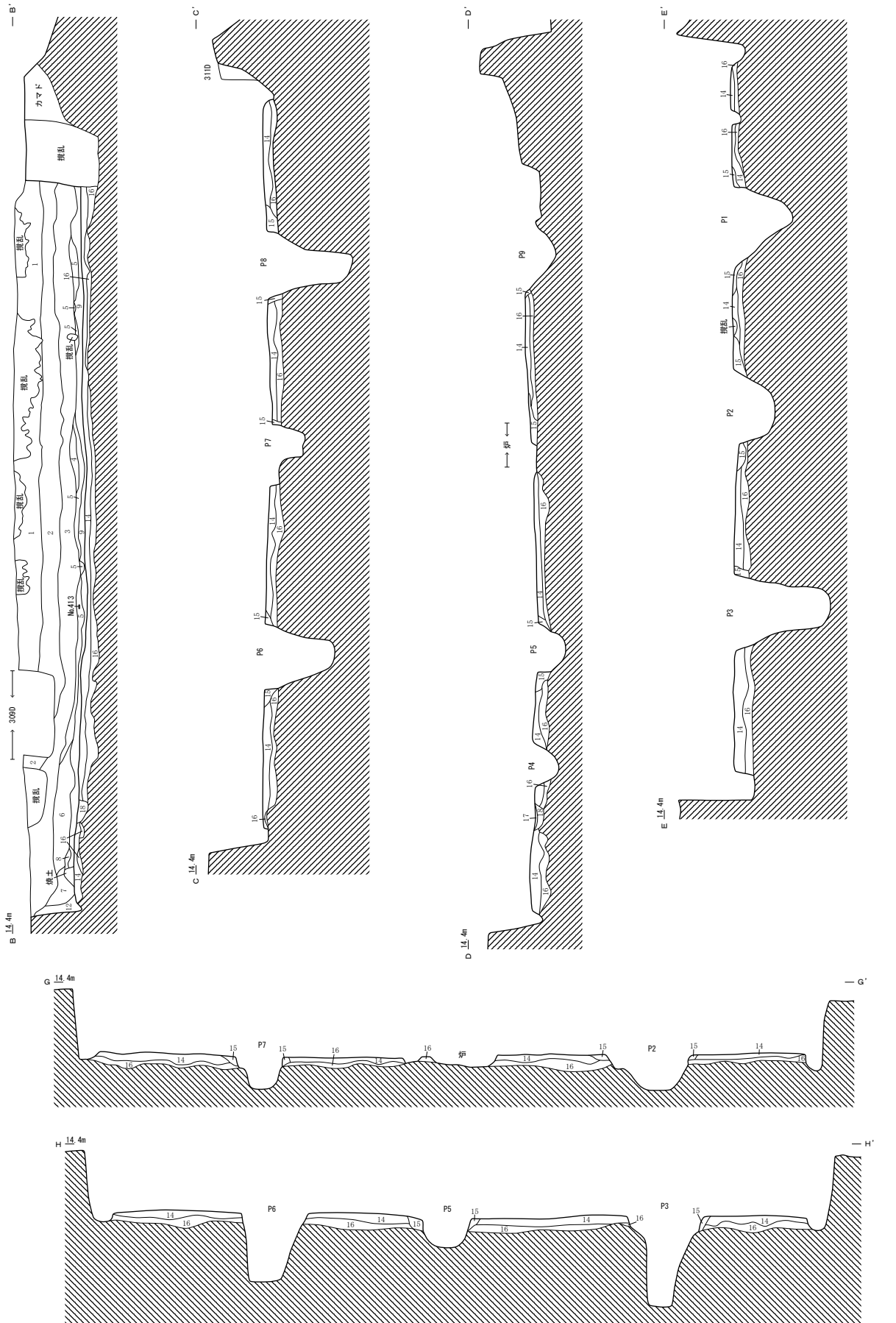
[所 見] 古墳時代後期で、拡張後の最終段階ではあるがカマドの正対面に隅丸台形の張出部による入口施設を敷設した竪穴住居跡が確認されたのは、本市では初めてである。市内の調査では、調査地点の関係で完掘に至らない例も多く今後の調査動向に注目したい。また、当住居と76・86Hに共通して床面中央に地床炉を検出している。いずれの遺構も浅く皿状に掘りくぼめただけで被熱により硬化した燃焼面または焼土層をもつのみである。僅かに椀型滓が出土するも積極的に鍛冶を伺わせるような状況は確認できず、現状ではその可能性は低い。性格は不明で課題としておきたい。

遺 物 (第79～80図、図版22-2・23・24-1、第16表)

1～3は湖西産IV-2期須恵器坏蓋、4～11は土師器坏、12は土師器高坏、13は比企型と同様に赤い胎土で赤彩（器面が荒れて内面以外剥離）された土師器の小形壺、14～26は土師器の甕で19と21はカマドの袖芯に使用されていたものである（第79図、図版10-6～8）。43はやや大きい土玉、44は石製丸玉、45は滑石製の紡錘車で、南西コーナーやや西寄りで床面から10cm程度浮いて出土した。27～42は平安時代の遺物である。27は須恵器蓋、28～38は須恵器坏、39は灰釉陶器の碗、40は須恵器高台碗、41は小形の長頸壺の頸部、42は甕の口縁部である。46は鉄製品の角釘であるが、住居内の攪乱からの一括遺物で帰属時期は不詳である。



第70図 88号住居跡1 (1/60)

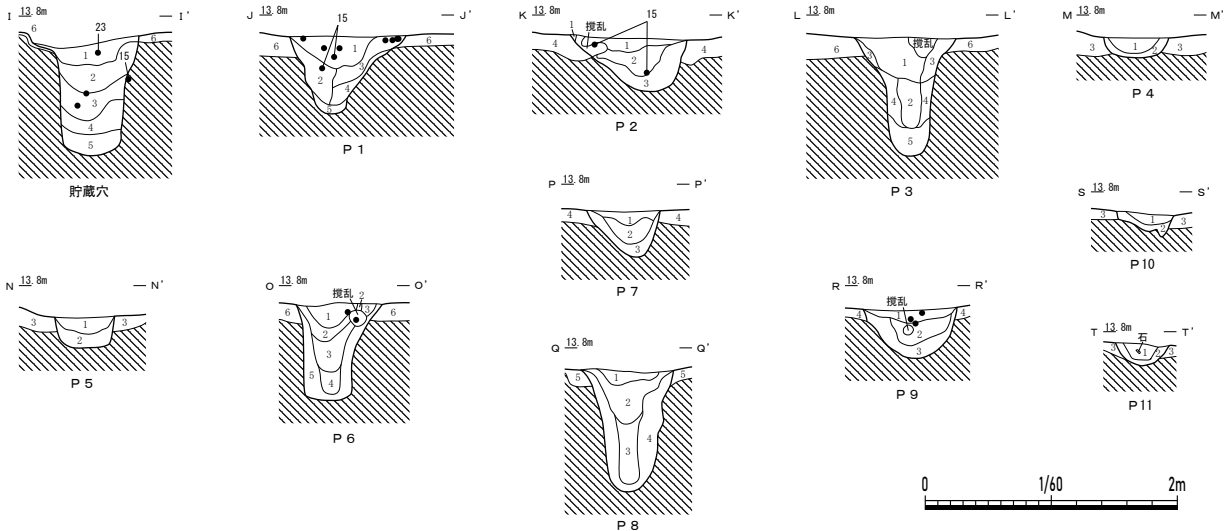


第71図 88号住居跡 2 (1/60)

0 1/60 2m

A-A'・B-B'・C-C'・D-D'・E-E'・F-F'・G-G'・H-H'

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)・焼土粒・炭化粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 褐灰色土 ローム粒(φ2~4mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。
- 3層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)・焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 4層 極暗褐色土 ローム粒(φ1~6mm)を微量、焼土粒(φ2~8mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 5層 黒色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、炭化粒・ブロック(φ1~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 6層 黒褐色土 ローム粒(φ2~4mm)・焼土粒・炭化粒(φ1~5mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 7層 褐灰色土 ローム粒(φ1~3mm)・焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 8層 暗褐色土 焼土粒・ブロック(φ2~10mm)を少量、炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや弱い。しまりやや強い。
- 9層 ぶい黄褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~15mm)を少量、焼土粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 10層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 11層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~8mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。三角堆積。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 12層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。壁溝。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 13層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~25mm)をやや多く含む。壁溝。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 14層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 15層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。ピット両脇。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 16層 明黄褐色土 ハードローム主体層。ソフトローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 17層 褐灰色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。旧壁土層。粘性やや強い。しまり強い。
- 18層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~40mm)を少量含む。旧壁下層。粘性やや強い。しまりやや強い。



I-I' (貯蔵穴)

- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~4mm)・粘土粒(φ1~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 5層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~50mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 6層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

J-J' (P1)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ4~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~10mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 5層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性強い。しまりやや強い。
- 6層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

K-K' (P2)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ3~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ3~8mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 4層 暗褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

L-L' (P3)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~6mm)・焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 5層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ15~40mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 6層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

M-M' (P4)

- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~20mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 3層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

N-N' (P5)

- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
- 3層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

O-O' (P6)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~3mm)・焼土粒(φ2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 褐灰色土 ローム粒(φ2~4mm)を少量、ロームブロック(φ20~25mm)・焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~50mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 5層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ15~40mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 6層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

P-P' (P7)

- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ1~4mm)・炭化粒(φ2~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。

Q-Q' (P8)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~3mm)・焼土粒・炭化粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 褐灰色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量含む。焼土粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 ぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~50mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 5層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

R-R' (P9)

- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~4mm)・焼土粒(φ2~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ3~6mm)・炭化粒(φ4~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

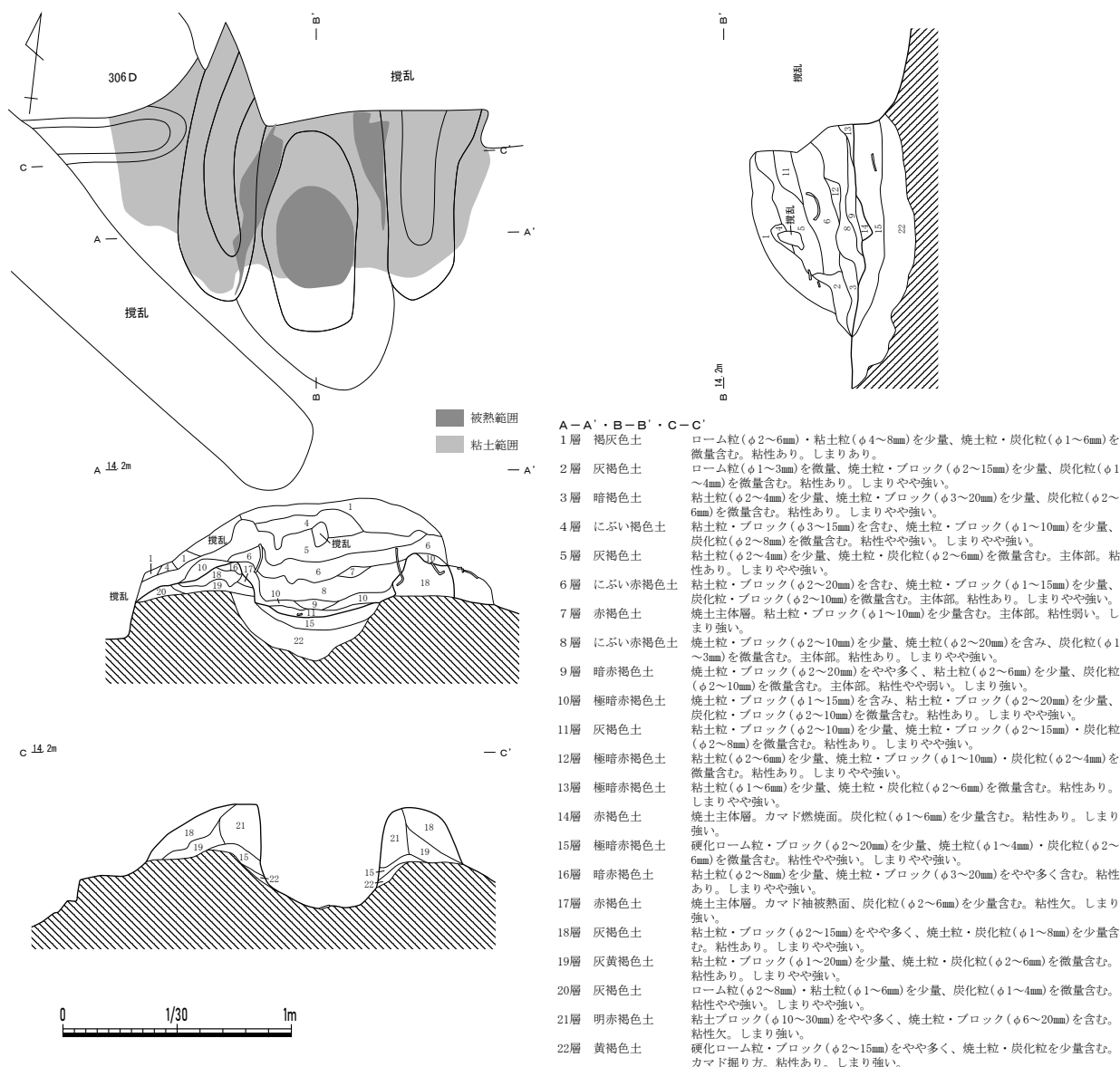
S-S' (P10)

- 1層 褐灰色土 ローム粒・粘土粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ3~8mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 3層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

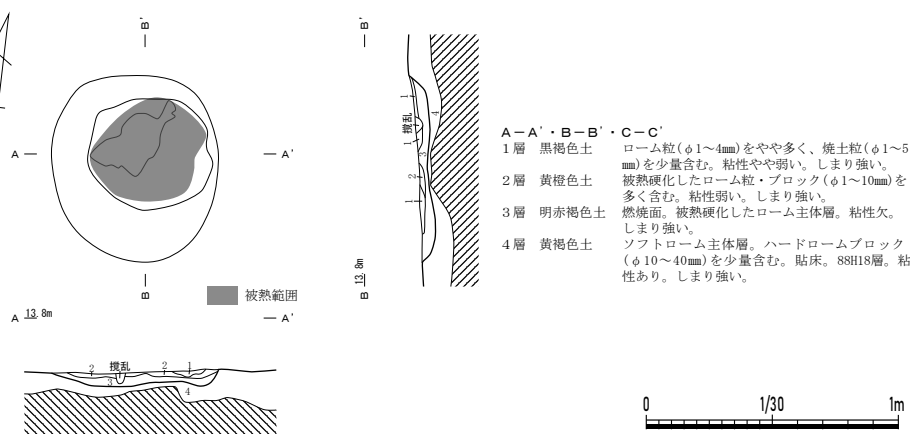
T-T' (P11)

- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ1~4mm)を少量、ロームブロック(φ20~40mm)・焼土粒・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~20mm)を少量、焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 3層 黄褐色土 ソフトローム主体層。ハードロームブロック(φ10~40mm)を少量含む。貼床。88H18層。粘性やや強い。しまり強い。

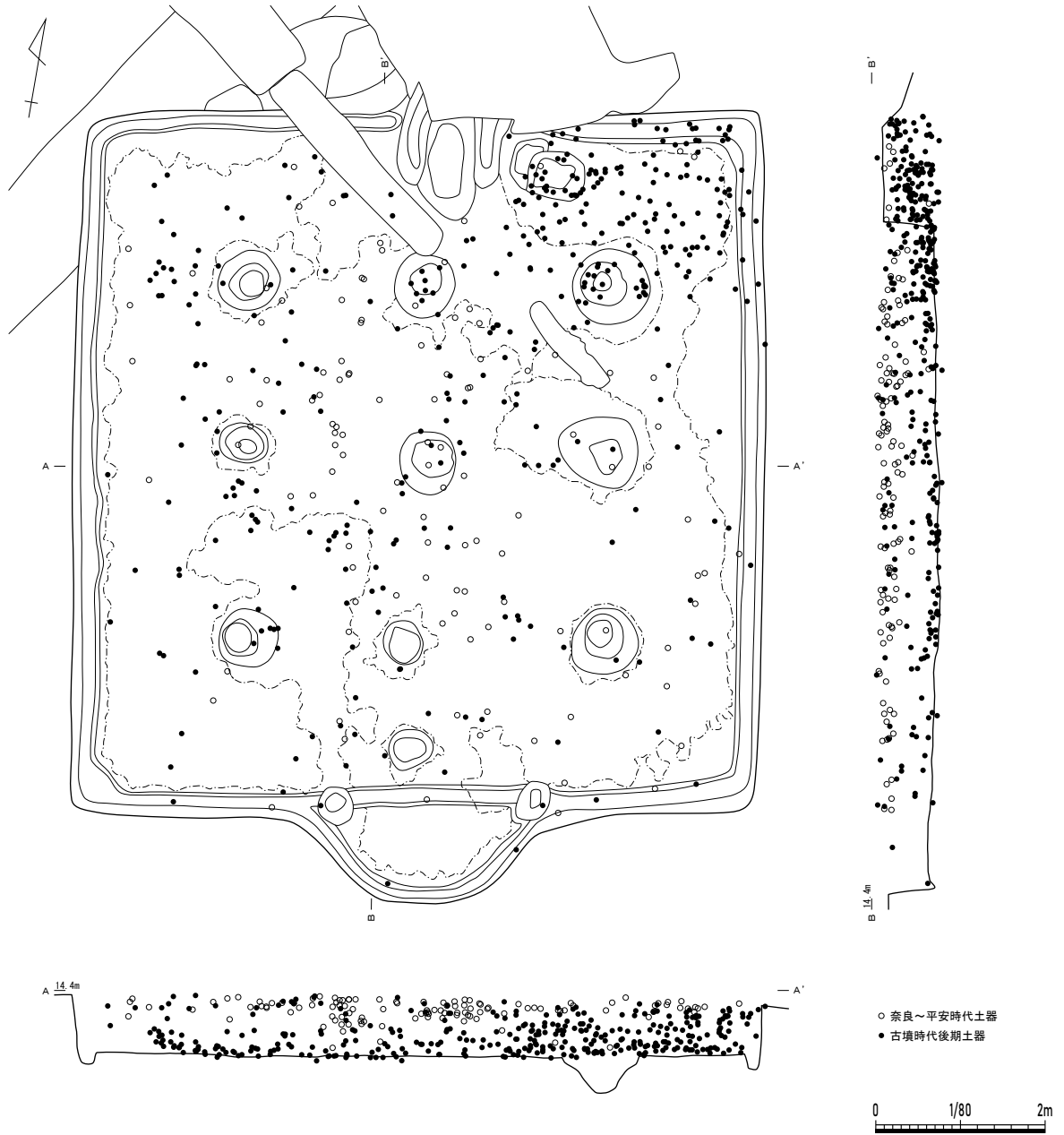
第72図 88号住居跡3(1/60)



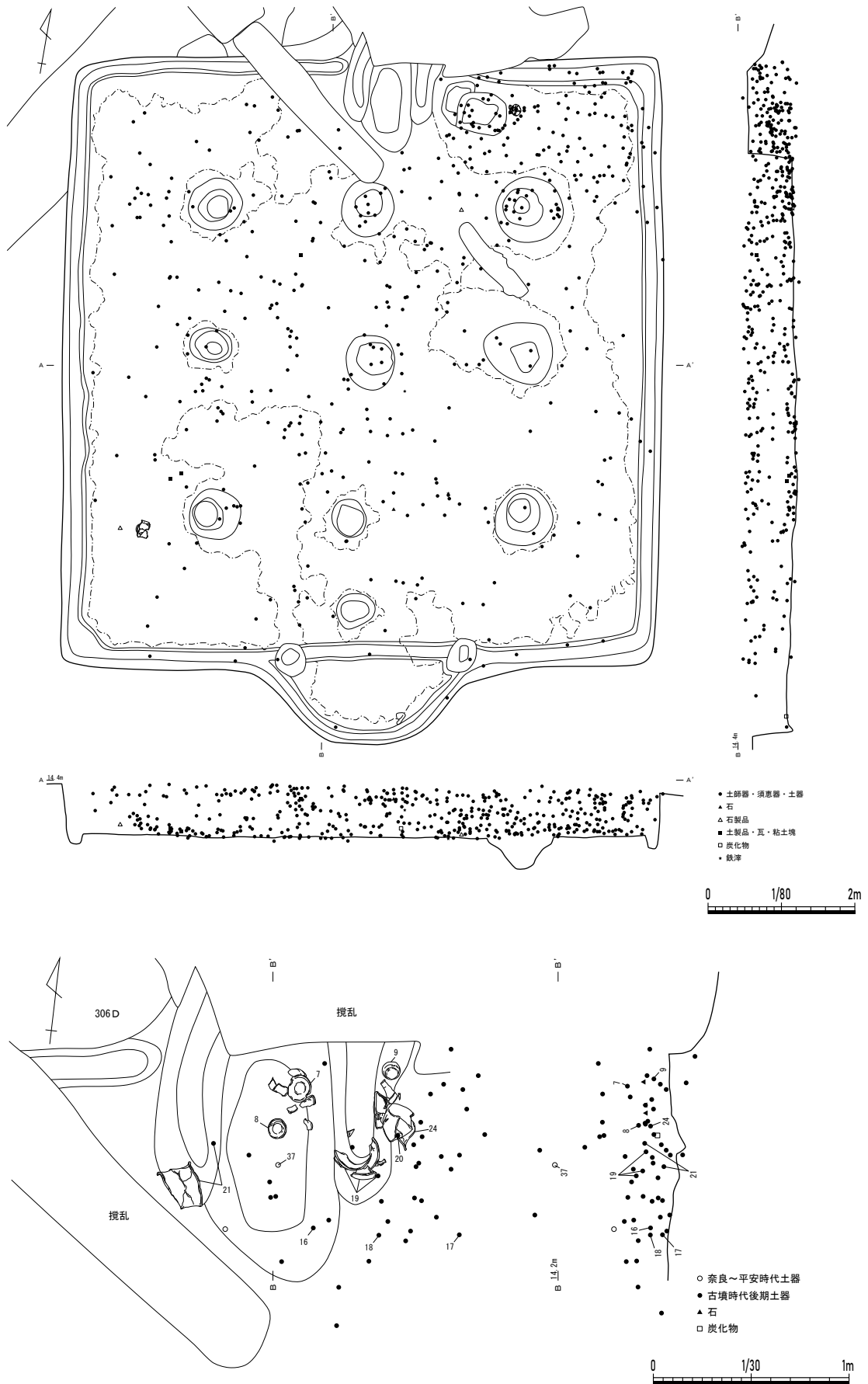
第73図 88号住居跡カマド(1/30)



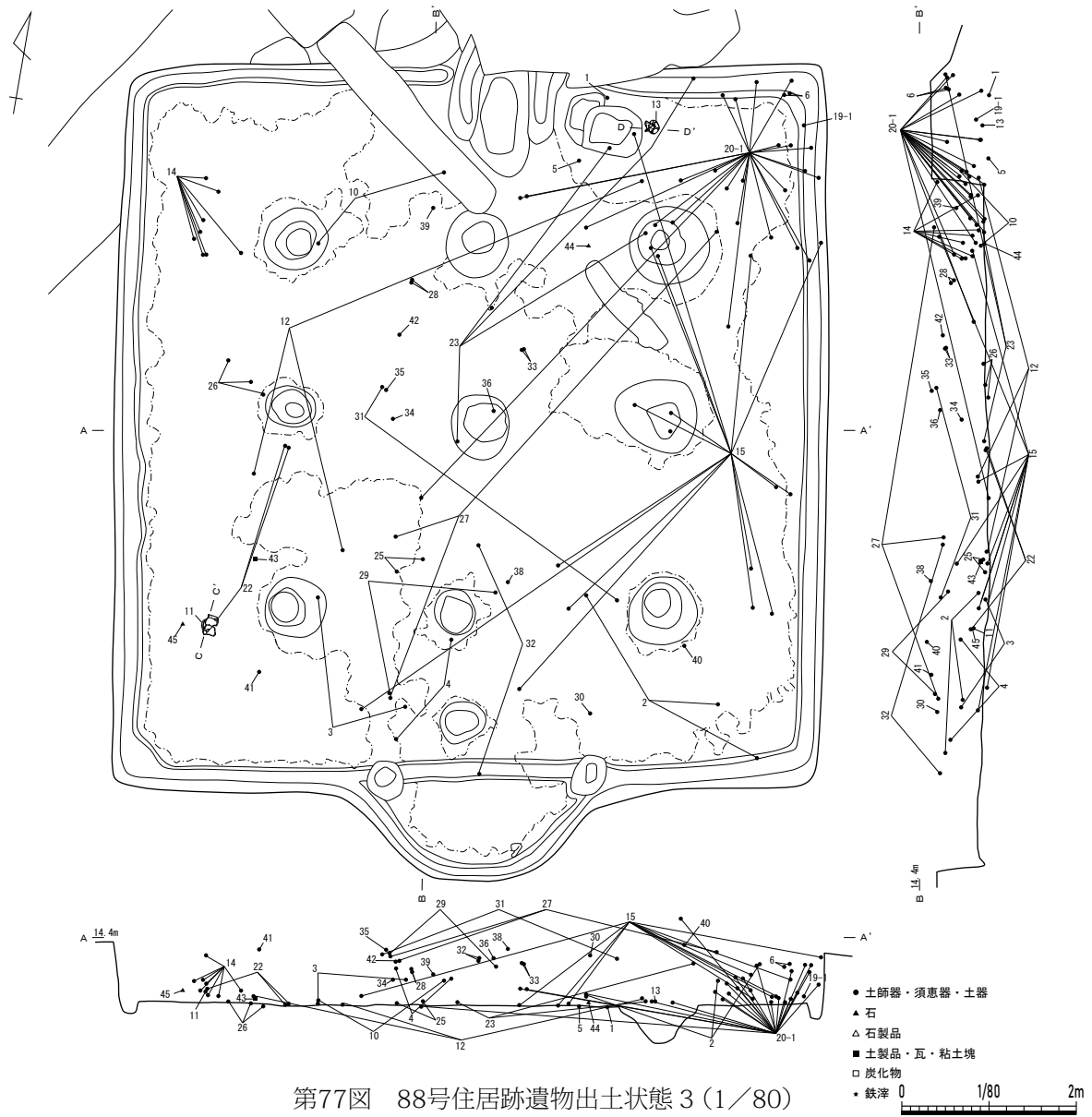
第74図 88号住居跡炉跡(1/30)



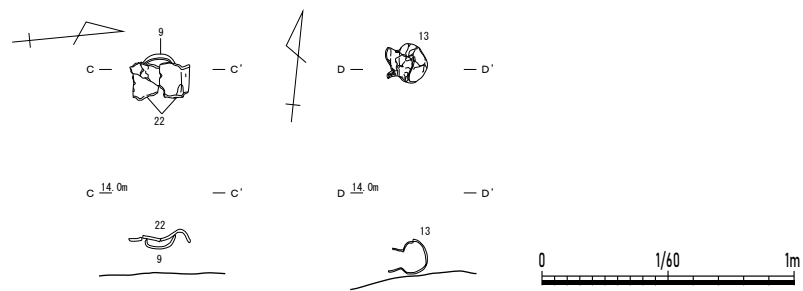
第75図 88号住居跡遺物出土状態 1 (1/80)



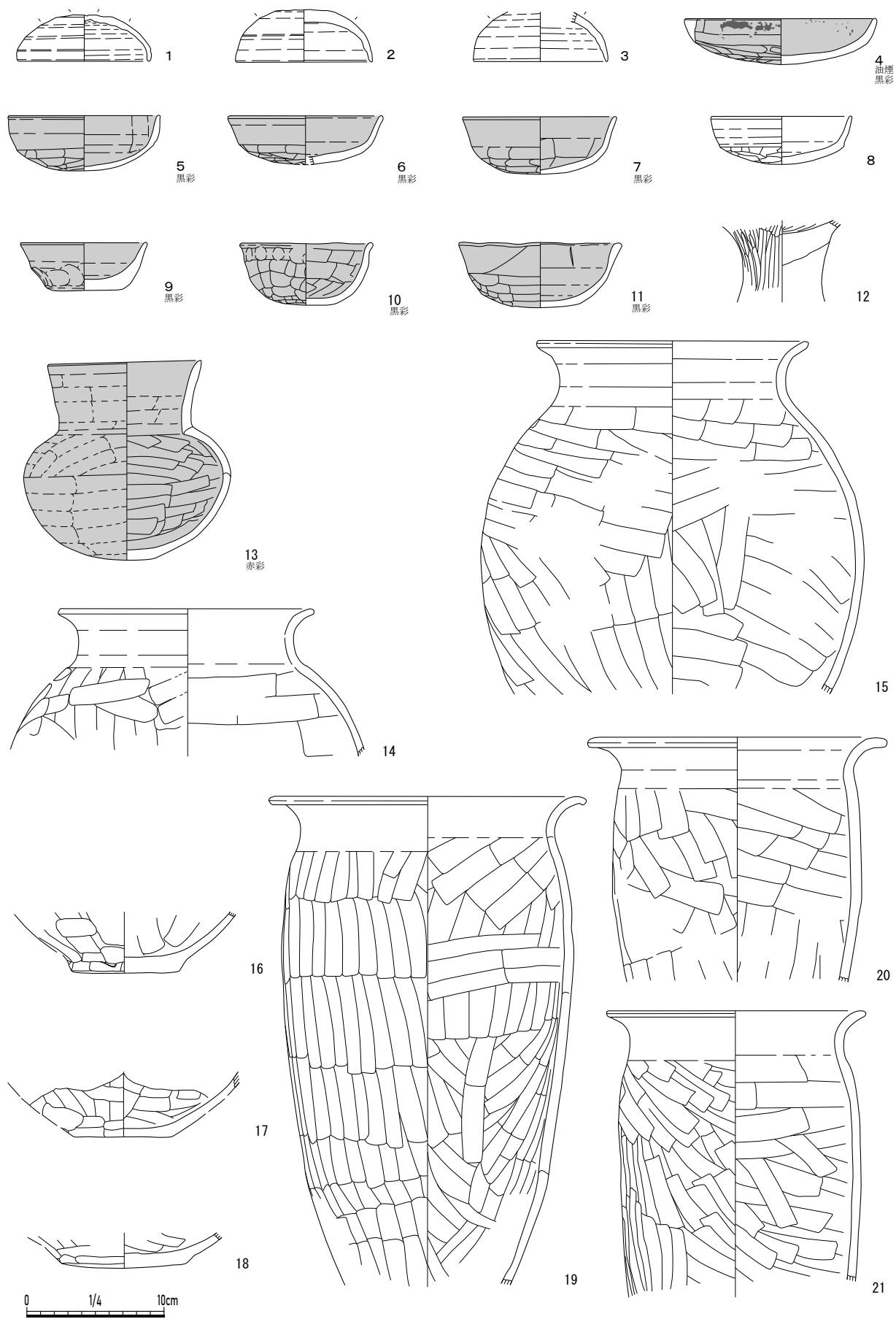
第76図 88号住居跡遺物出土状態2 (1/80)・カマド遺物出土状態(1/30)



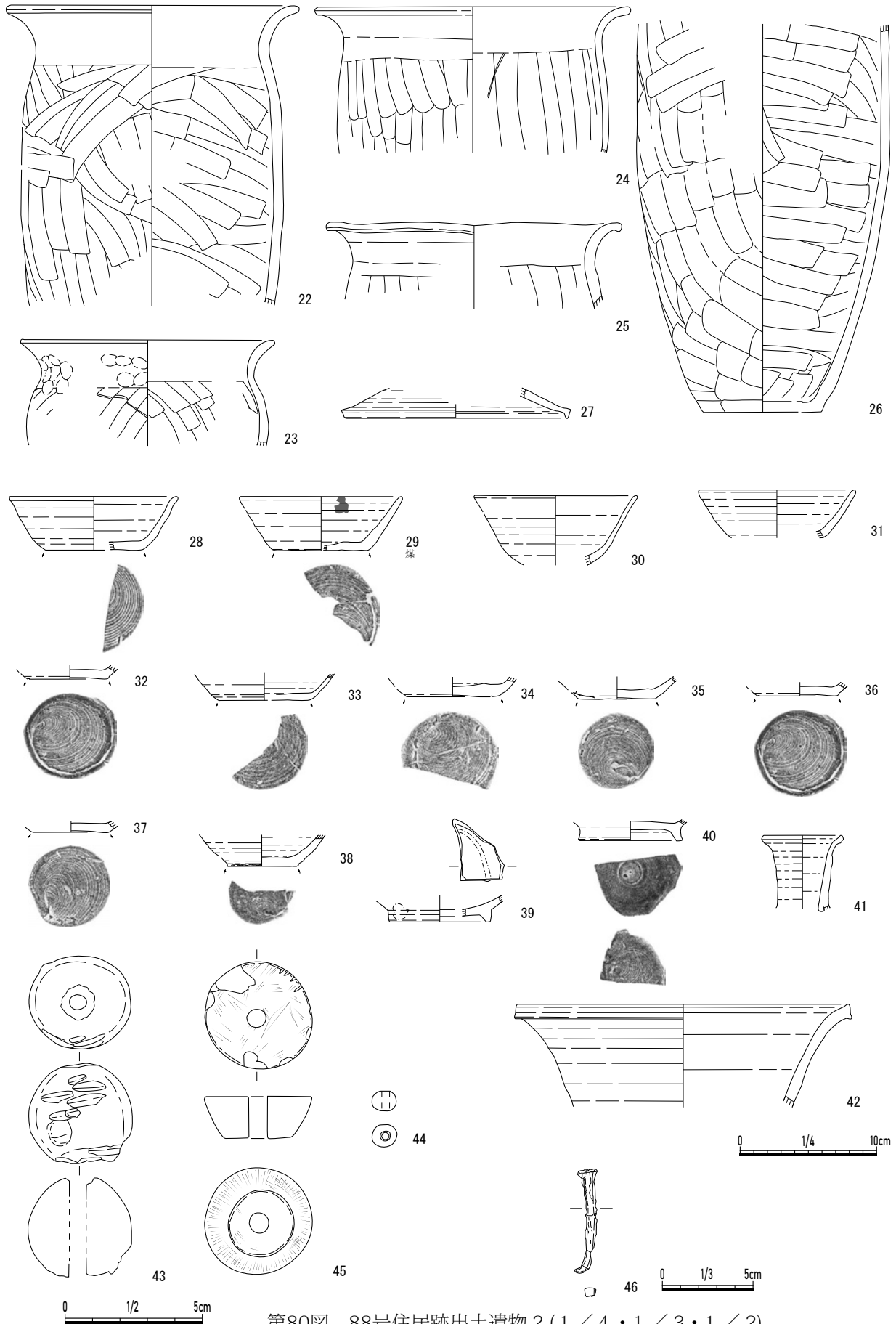
第77図 88号住居跡遺物出土状態3 (1/80)



第78図 88号住居跡遺物出土状態4 (1/60)



第79図 88号住居跡出土遺物 1 (1 / 4)



第80図 88号住居跡出土遺物 2 (1 / 4 · 1 / 3 · 1 / 2)

(3) 掘立柱建築遺構

本遺構は調査段階では不詳であったが、整理段階において判明し設定したものである。

6号掘立柱建築遺構

遺 構 (第81図)

[位 置] (O・P-8、P-9) グリッド

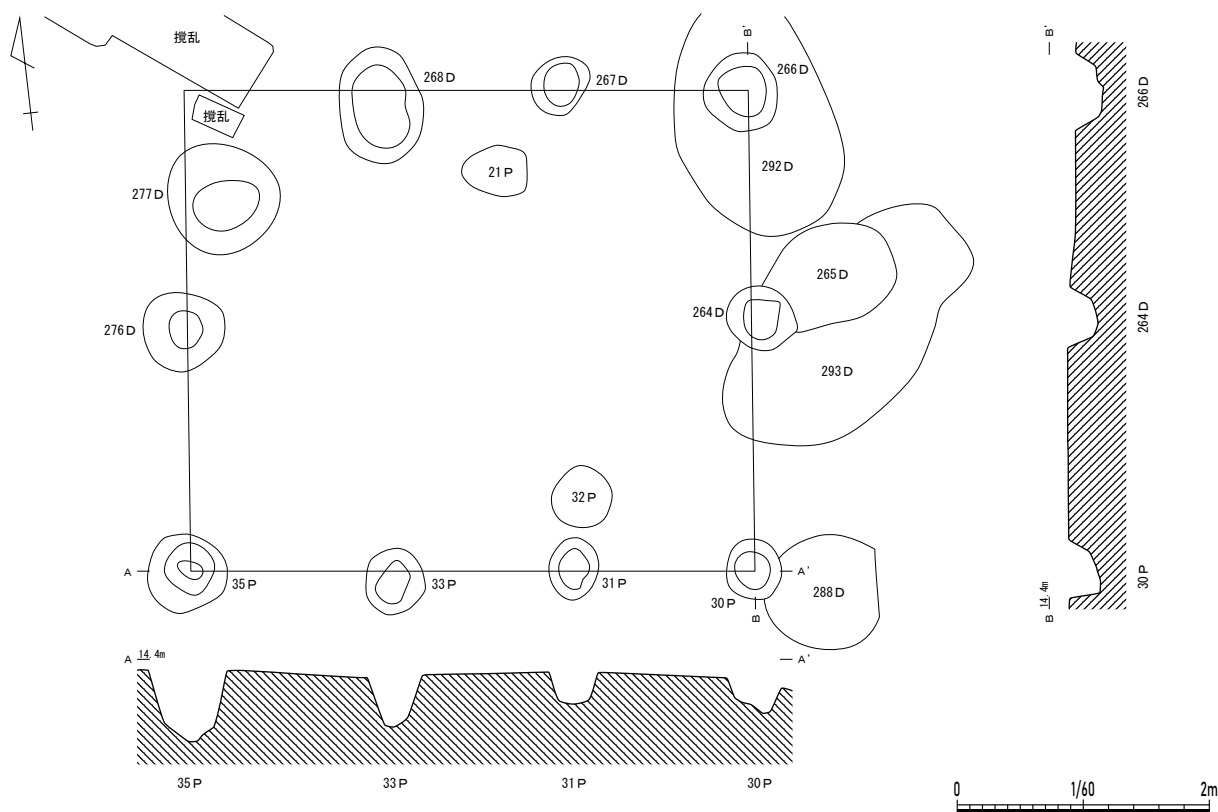
[建物構造] 北西隅柱を欠き、梁行き2間で、桁行き3間の東西棟と推定される。構成する柱穴は30・31・33・35Pと264・266～268・276Dで、平面規模は268D以外50～60cmの略円形を基調として比較的揃っている。

[覆 土] いずれの覆土も平安時代又は平安時代以降の黒褐色土を主体としたものである。柱痕状の立ち上りや、柱の設置を反映したものか下方に逆凸形で分層できる覆土がそれぞれのピット、土坑に認められた。

[遺 物] すべての柱穴を合わせて地点上げ遺物、一括遺物合わせて15点が出土した。3点の古墳時代後期の土師器片が混入する以外は、平安時代の土師器片、須恵器片であった。いずれも小片であるため不掲載。

[時 期] 平安時代。

[所 見] 81・83・85Hに囲まれた中のやや東寄りに、それら住居の主軸と柱筋を合わせて存在する。北西隅の柱を欠くが、梁行3.80m、桁行4.46mの2×3間に復元されよう。北西隅柱を欠き、柱間も不揃いな部分もあり小屋的な性格か、或は北西を出入口とする列柱による方形の区画の可能性もあるかもしれない。32Pと277Dもこの建物に関係する遺構の可能性はある。



第81図 6号掘立柱建築遺構(1/60)

(4) 土坑

古墳時代後期と認識される土坑は検出されなかった。平安時代の土坑4基、平安時代以降の土坑39基が検出された。その内で調査時には確認できなかったが、平面図と土層、写真を検討した結果、81・83・85Hに囲まれた中に掘立柱建築遺構(264・266～268・276D、30・31・33・35Pより構成)が確認できた(前項掘立柱建築遺構を参照)。

252号土坑

遺 構 (第82図)

[位 置] (Q-8) グリッド。76Hを切る。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。断面形：北壁は段をもち、南壁は外反して立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸140cm/短軸95cm/深さ47cm。主軸方位：N-20°-W。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物40点と地点上げ遺物9点として、弥生時代末～平安時代の遺物が出土。特に、76Hを切るため定量的古墳時代後期の遺物が混入。その内、図示したのは平安時代の内黒土器1点である。

[時 期] 出土遺物と覆土の観察により平安時代と想定される。

遺 物 (第86図、図版24-2-1、第18表)

1は酸化炎焼成の須恵器杯。口縁～体部中位付近の小片である。内面は黒色研磨されている。胎土に白色針状物質を含まない。口唇に油煙痕があり、灯明として使用か。

253号土坑

遺 構 (第82図)

[位 置] (R-7) グリッド。76Hを切る。

[構 造] 平面形：隅丸方形。断面形：北壁は70°で南壁は段をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸142cm/短軸120cm/深さ33cm。主軸方位：N-56°-W。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物9点と地点上げ遺物5点として、古墳時代後期～平安時代の遺物が出土。76Hを切るため古墳時代後期の遺物が混入。9世紀代の須恵器と土師器が出土しているが、小片のみの為不掲載。

[時 期] 出土遺物と覆土の観察により平安時代と想定される。

254号土坑

遺 構 (第82図)

[位 置] (P-10) グリッド。更に東側調査区外に続く。

[構 造] 平面形：不明(円形か)。断面形：60°で壁は立ち上がる。底面中央がやや窪む。規模：長軸105cm/短軸検出長50cm/深さ50cm。主軸方位：N-40°-E。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物2点と地点上げ遺物3点として、古墳時代後期～平安時代の遺物が出土。平安時

代の須恵器、土師器が出土したが小片の為不掲載。

[時期] 出土遺物と覆土の観察により平安時代と想定される。

255号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (N-5) グリッド。更に西側調査区外に続く。

[構造] 平面形：不明（楕円形か）。断面形：南西壁は60°、北東壁は35°で直線的に立ち上がる。底面は尖底状となる。規模：不明。長軸検出長55cm／短軸55cm／深さ34cm。主軸方位：N-70°-W。

[覆土] 3層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

256号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (N-4) グリッド。更に西側調査区外に続く。

[構造] 平面形：不明（楕円形か）。断面形：南西壁は70°、北東壁は段を持ちながら20°前後で立ち上がる。底面は尖底状となる。規模：長軸検出長75cm／短軸55cm／深さ37cm。主軸方位：N-60°-W。

[覆土] 4層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

258号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (N-5) グリッド。

[構造] 平面形：隅丸長方形。断面形：南壁は55°、北壁は段を持ちながら30°前後で立ち上がる。底面中央はやや盛り上り、立ち上がり際が窪む。規模：長軸75cm／短軸65cm／深さ13cm。主軸方位：N-37°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

261号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (O-5) グリッド。14Mと重複するも新旧不明。

[構造] 平面形：円形か。断面形：南壁は55°で直線的に、北壁は30°で緩やかに立ち上がる。底面中央はやや盛り上り、立ち上がり際が窪む。規模：長軸85cm／短軸検出長65cm／深さ14cm。主軸方位：N-8°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 一括で2点、地点上げ遺物で1点出土。古墳時代後期の土師器と平安時代の須恵器。いずれも小片の為、不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

262号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (O-6) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。断面形：西壁は60°前後で内湾気味に緩やかに、東壁は45°で直線的に立ち上がる。底面は丸底。規模：長軸70cm／短軸55cm／深さ20cm。主軸方位：N-87°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 一括で3点出土。古墳時代後期から平安時代の土師器。いずれも小片の為、不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

263号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (Q-8) グリッド。縄文時代の18Pを切る。

[構造] 平面形：楕円形。断面形：浅い皿形を呈する。南壁、北壁とも25～30°で緩やかに立ち上がる。規模：長軸85cm／短軸65cm／深さ11cm。主軸方位：N-37°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

264号土坑

遺構 (第82図)

[位置] (P-8) グリッド。縄文時代の293Dと平安時代以降の265Dを切る。

[構造] 平面形：円形。断面形：西壁は55°で直線的に、東壁は30～50°で内湾して立ち上がる。底面は丸底気味である。規模：長軸60cm／短軸47cm／深さ21cm。主軸方位：N-60°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

[所見] 当264D及び266～268・276D、30・31・33・35Pにより北西隅を欠くが掘立柱建築遺構を構成する可能性が高い。いずれも、平安時代以降の遺構で、柱痕状の土層が確認できる。

265号土坑

遺 構 (第82図)

[位 置] (P・Q-8) グリッド。縄文期の18Pを切る。平安時代の264Dに切られる。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：浅い皿状。東壁は20～50°で緩やかに立ち上がる。西壁は264Dに切れ残っていない。規模：長軸検出長110cm／短軸75cm／深さ17cm。主軸方位：N-87°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。264Dより古い。

266号土坑

遺 構 (第82図)

[位 置] (P-8) グリッド。縄文時代の292Dを切る。

[構 造] 平面形：円形。断面形：完掘時には中央付近が盛り上がり立ち上り付近はやや窪む。北壁は20～50°で緩やかに立ち上がる。西壁は264Dに切れ残っていない。規模：長軸62cm／短軸58cm／深さ25cm。主軸方位：N-87°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。上層の1層は下方凸形に堆積する。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。264Dより古い。

267号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (P-8) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。断面形：中央付近が盛り上がり、立ち上り付近がやや窪む。南西壁は60°で、北東壁は70°それぞれ外反気味に立ち上がる。規模：長軸50cm／短軸40cm／深さ18cm。主軸方位：N-58°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

268号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (P-8) グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：北側に低く底面はやや段をもち丸底である。南壁は20°、北壁は60°で立ち上がる。規模：長軸92cm／短軸72cm／深さ37cm。主軸方位：N-7°-E。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 一括にて2点。縄文土器1点と古墳時代後期土師器小片。流れ込みのため、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

269号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (P-10) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。断面形：浅い皿形を呈する。北西壁、南東壁とも50°前後で立ち上がり、底面は平坦。規模：長軸115cm／短軸105cm／深さ14cm。主軸方位：N-50°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物で、古墳時代後期から平安時代の須恵器、土師器の小片が出土した。小片のため不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

270号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (O-9・10) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。断面形：北西壁、南東壁とも30～50°前後で立ち上がる。規模：長軸116cm／短軸106cm／深さ12cm。主軸方位：N-50°-E。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 地点上げ遺物で4点、一括遺物で18点出土した。古墳時代後期から平安時代の須恵器、土師器の小片が出土した。小片のため不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

271号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (O-10) グリッド。

[構 造] 平面形：不定形。断面形：南西壁はほぼ垂直に、北東壁はなだらかに20°で立ち上がる。規模：長軸82cm／短軸80cm／深さ9cm。主軸方位：N-26°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 地点上げ遺物で3点、一括遺物で1点出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕形土器片、平安時代の土師器が出土した。小片のため不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

272号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (O・P-10) グリッド。41Pを切る。

[構 造] 平面形：円形。断面形：皿形。南西壁は50°で内湾して、北東壁は30°で直線的に立ち上がる。規模：長軸65cm／短軸55cm／深さ10cm。主軸方位：N-34°-E。

[覆 土] 単層。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

273号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (O-10) グリッド。

[構 造] 平面形：不定形。断面形：立ち上がり中位に段を持つ。北西壁は30°で、南東壁は下位で50°、中段以降は30°で立ち上がる。規模：長軸55cm／短軸50cm／深さ12cm。主軸方位：N-30°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 一括で土師器2点。小片の為、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

274号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (P-9) グリッド。275Dと重複。新旧関係は不明。

[構 造] 平面形：隅丸方形。断面形：すり鉢状を呈し、東壁、西壁とも50°で立ち上がる。規模：長軸55cm／短軸55cm／深さ31cm。主軸方位：N-54°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

275号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (P-9) グリッド。274Dと重複。新旧関係は不明。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。断面形：底面はやや凸凹があり、北東側に小ピットをもつ。南西壁は60°、北東壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模：長軸80cm／短軸検出長60cm／深さ27cm。主軸方位：N-21°-E。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

276号土坑

遺 構 (第83図)

[位 置] (O・P-8) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。断面形：底面狭く丸底気味。立ち上がりはロート状で、南壁は50°前後で中位に段をもって、北壁は、40°で直線的に立ち上がる。規模：長軸65cm／短軸60cm／深さ27cm。主軸方位：N-64°-E。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 地点上げ遺物で2点出土。古墳時代後期の土師器小片。流れ込みの為、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

[所 見] 6Tを構成する、柱穴と思われる。

277号土坑

遺構 (第83図)

[位置] (O・P-8) グリッド。

[構造] 平面形：円形。断面形：底面はほぼ平坦。立ち上がりは、西壁、東壁とも直線的に50°で立ち上がる。規模：長軸90cm／短軸85cm／深さ24cm。主軸方位：N-35°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 一括遺物にて1点出土。土師器小片の為不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

278号土坑

遺構 (第83図)

[位置] (O-9) グリッド。304Dを切る。

[構造] 平面形：不正円形。断面形：丸底の鉢状。立ち上がりは、内湾して西壁は、30°～40°で、東壁は20°～50°で立ち上がる。規模：長軸100cm／短軸85cm／深さ23cm。主軸方位：N-60°-E。

[覆土] 2層に分層できた。上層の1層は波打った堆積である。

[遺物] 地点上げ遺物で古墳時代の土製支脚片、一括遺物で平安時代の土師器小片。流れ込み及び小片の為、不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

279号土坑

遺構 (第84図)

[位置] (O-8) グリッド。280Dを切る。

[構造] 平面形：不正楕円形。断面形：丸底で立ち上がりは、南西壁は70°前後でやや段を持ち、北東壁は30°～60°前後で内湾気味に立ち上がる。規模：長軸50cm／短軸30cm／深さ26cm。主軸方位：N-83°-E。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 一括遺物で平安時代の土師器が4点出土。小片の為、不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。280Dより新しい。

280号土坑

遺構 (第84図)

[位置] (O-8) グリッド。279Dに切られる。

[構造] 平面形：円形。断面形：底面は狭くすり鉢状か。北東壁は30°前後で段をもって立ち上がる。規模：長軸検出長70cm／短軸55cm／深さ29cm。主軸方位：N-52°-E。

[覆土] 2層に分層でき、一部に攪乱が入る。279Dより古い。

[遺物] 一括遺物で古墳時代後期から平安時代の土師器が5点出土。小片の為、不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

281号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (N-8) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。断面形：底面はほぼ平坦。西壁は60°前後で、東壁は50°前後で直線的に立ち上がる。規模：長軸110cm／短軸104cm／深さ19cm。主軸方位：N-69°-E。

[覆 土] 2層に分層でき、一部に攪乱が入る。

[遺 物] 一括遺物で古墳時代後期から平安時代の土師器が6点出土。小片の為、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

287号土坑

遺 構 (第85図)

[位 置] (P-9) グリッド。24・27・28Pに切られる。

[構 造] 平面形：円形。断面形：浅い皿形で底面はほぼ平坦。西壁は40°～60°で内湾して立ち上がる。東壁は3つのピットに切られ残らない。規模：長軸検出長95cm／短軸85cm／深さ12cm。主軸方位：N-57°-E。

[覆 土] 6層。24・27・28Pに切られた以外の部分に炭化材が充填されたように検出された。

[遺 物] 地点上げ遺物で縄文土器片1点、平安時代の土師器高台椀片1点、一括遺物で古墳時代後葉から平安時代の土師器が8点出土。その内、高台椀片を掲載。

[時 期] 覆土及び遺物の観察により10世紀を前後する時期の所産と想定される。

[所 見] 第160地点で唯一多量の炭化材が出土したが、性格は不詳である。

遺 物 (第86図、図版24-2-1、第18表)

1は酸化炎焼成の須恵器高台椀の破片である。胎土中に5mm前後の小礫をまとめて含み、雲母片を微量含む。内底面は、盛り上がって渦巻状にロクロ目が顕著に残る。

288号土坑

遺 構 (第85図)

[位 置] (P・Q-8・9) グリッド。305Dを切り、81Hに切られる。30Pと重複するも新旧関係は不詳。

[構 造] 平面形：円形。断面形：浅い皿状。底面はほぼ平坦。西壁は70°前後で内湾して、北壁は20°で直線的緩やかに立ち上がる。規模：長軸検出長100cm／短軸90cm／深さ12cm。主軸方位：N-57°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 地点上げ遺物で土師器甕片1点、一括遺物で平安時代の須恵器、土師器片。いずれも小片の為、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

297号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (P-9) グリッド。

[構 造] 平面形：不正楕円形。断面形：立ち上り際がやや低く、底面中央は高くほぼ平坦である。

東壁、西壁とも50°前後で直線的に立ち上がる。規模：長軸115cm／短軸90cm／深さ21cm。主軸方位：N-47°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物で平安時代の須恵器、土師器片6点が出土。いずれも小片の為、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

300号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (O-8) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。断面形：底面は丸底気味で、西壁は40°で直線的に、東壁は50°前後で内湾気味に立ち上がる。規模：長軸60cm／短軸55cm／深さ16cm。主軸方位：N-56°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 一括遺物で土師器甕片が1点出土。小片の為、不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

301号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (O-9) グリッド。302Dを切り、37Pに切られる。

[構 造] 平面形：円形。断面形：底面は丸底気味で、西壁は60°で直線的に、東壁は40～60°前後で内湾気味に立ち上がる。規模：長軸60cm／短軸40cm／深さ21cm。主軸方位：N-74°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

302号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (O-9) グリッド。303Dに切られ北西側を攪乱により壊されている。

[構 造] 平面形：不明。断面形：底面は皿状で底面はほぼ平坦。北東壁は60°前後で、南西壁は30°それぞれ直線的に立ち上がる。規模：長軸検出長120cm／短軸検出長60cm／深さ24cm。主軸方位：N-23°-E。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] 地点上げ遺物9点、一括遺物8点出土。いずれも古墳時代後期～平安時代にかけての土師器甕、坏などで小片の為不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

303号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (O-9) グリッド。302Dを切る。北西側を攪乱により破壊されている。

[構造] 平面形：不明。断面形：底面は丸底。北東壁、南西壁とも30°前後で直線的に立ち上がる。規模：長軸55cm／短軸検出長30cm／深さ16cm。主軸方位：N-18°-E。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 一括遺物で縄文時代早期末葉の土器片1点出土。小片の為不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

304号土坑

遺構 (第84図)

[位置] (O-8・9) グリッド。278Dに切られる。

[構造] 平面形：円形。断面形：浅い皿形で底面は平坦。西壁、東壁とも30°前後で直線的に立ち上がる。規模：長軸82cm／短軸80cm／深さ14cm。主軸方位：N-68°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 確認面最上層で土師質の小皿状製品が出土。写真掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。

遺物 (図版24-2-1)

1は小皿であろうか。酸化炎焼成で底部は摩滅しており判然としないがヘラ削り調整と解される。口唇部はとがり、立ち上がりの内外面には回転台を利用した横位の擦痕が観察される。胎土中に微細な金雲母と砂粒が含まれる。10世紀中葉以降の小皿と想定しておくが、或いは中世段階のカワラケとなる可能性もあるかもしれない。

306号土坑

遺構 (第84図)

[位置] (L・M-9) グリッド。307Dを切り、北東側は攪乱により壊されている。

[構造] 平面形：不明(楕円型か)。断面形：底面は平坦。西北壁、東南壁とも60°前後で直線的に立ち上がる。規模：長軸検出長85cm／短軸80cm／深さ24cm。主軸方位：N-40°-E。

[覆土] 単層。

[遺物] 一括遺物で縄文時代中期の土器片1点、古墳時代後期から平安時代の土師器、須恵器片出土。古墳時代以降の遺物は小片の為、不掲載。縄文土器は、遺構外遺物として掲載(第98図)。

[時期] 覆土及び遺物の観察により平安時代以降と想定される。307Dより新しい。

307号土坑

遺構 (第84図)

[位置] (L・M-9) グリッド。306Dに切られ、北東側を攪乱により壊されている。

[構造] 平面形：不明(楕円形か)。断面形：底面はほぼ平坦。西北壁は50°前後で外反して立ち上がる。規模：長軸検出長105cm／短軸90cm／深さ32cm。主軸方位：N-67°-E。

[覆土] 3層に分層できた。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。306Dより古い。

308号土坑

遺 構 (第84図)

[位 置] (M-8・9) グリッド。86Hを切る。

[構 造] 平面形：不明（円形か）。断面形：底面は平坦。北西壁はほぼ垂直に、南東壁は立ち上がり下端で45°前後で内湾し、以降はオーバーハング気味に立ち上がる。規模：長軸105cm／短軸100cm／深さ38cm。主軸方位：N-5°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。最上層に攪乱層が入る。

[遺 物] 地点上げ遺物で3点、一括遺物で11点出土した。古墳時代後期の土師器、平安時代の土師器・須恵器が出土し、平安時代の須恵器には南比企産が含まれていた。いずれも、小片の為不掲載。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。86Hより新しい。

309号土坑

遺 構 (第85図)

[位 置] (M-11) グリッド。88Hを切る。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：浅い皿形。底面は中央が最も深く緩やかな弧を描き、立ち上がり際に向かって高さを増す。西壁、東壁とも30°前後で緩やかに内湾して立ち上がる。規模：長軸135cm／短軸85cm／深さ9cm。主軸方位：N-55°-W。

[覆 土] 単層。

[遺 物] 地点上げ遺物で1点、一括遺物で19点出土した。弥生時代末～古墳時代初頭の甕形土器片。古墳時代後期～平安時代の土師器。7世紀末葉～8世紀初頭の須恵器坏片、平安時代の須恵器片などが出土。何れも小片であるが、当土坑が88Hを切るため、同住居跡に関わる遺物として混入した可能性もあり写真掲示（図版24-2-309D）。

[時 期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。88Hより新しい。

遺 物 (図版24-2-309D)

1は須恵器坏の口縁から立ち上り付近の小片である。口唇部はややとがり気味に造り、立ち上がり体部はハの字に直線的な立ち上がりを基調とするが、僅かに内湾傾向を伺うことができる。当該資料には底部が遺存しないが外面の腰部と内面の立ち上りの形状から、その形状は丸底となることが想定される。焼成は、還元炎焼成で胎土も混ざりものの少ない精良なものである。

310号土坑

遺 構 (第85図)

[位 置] (L-10) グリッド。88Hを切る。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：略箱型を呈する。底面は、一部に凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。西壁、東壁ともほぼ垂直に立ち上がる。規模：長軸120cm／短軸90cm／深さ42cm。主軸方位：N-69°-W。

[覆 土] 4層に分層できた。一部に攪乱が入る。

[遺 物] 地点上げ遺物で1点、一括遺物で4点出土した。古墳時代後期～平安時代の土師器、須恵器片でいずれも、小片の為不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。88Hより新しい。

311号土坑

遺構 (第85図)

[位置] (L-9・10) グリッド。88Hを切る。14Mとも重複するも新旧関係は不明。

[構造] 平面形：不定形。断面形：底面は、ほぼ平坦。北壁は60°前後で直線的に立ち上がる。南壁は30°前後で緩やかに立ち上がり中位以上を失う。規模：長軸90cm／短軸70cm／深さ46cm。主軸方位：N-0°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 一括遺物で4点出土した。古墳時代後期～平安時代の土師器小片の為不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。88Hより新しい。

312号土坑

遺構 (第85図)

[位置] (M-8) グリッド。86Hを切る。

[構造] 平面形：円形。断面形：底面は、東にやや傾斜するもほぼ平坦。東壁は40°前後で直線的、西壁は中位まで30°で直線的に、上位は80°で鋭角に立ち上がる。規模：長軸85cm／短軸75cm／深さ24cm。主軸方位：N-20°-E。

[覆土] 2層に分層できた。86Hより新しい。

[遺物] 地点上げ遺物で15点、一括遺物で38点出土し、ほぼ古墳時代後期の土師器片であり、86Hに関わるものと推定される。遺構に伴わない為不掲載。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。88Hより新しい。

314号土坑

遺構 (第85図)

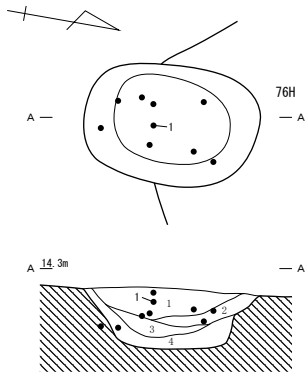
[位置] (N-12) グリッド。

[構造] 平面形：不正楕円形。断面形：緩やかなすり鉢状。底面は、狭く丸底気味で、南西壁、北東壁ともに中位に腰を持ち40°前後で緩やかに逆ハの字開いて立ち上がる。規模：長軸105cm／短軸70cm／深さ24cm。主軸方位：N-40°-E。

[覆土] 3層に分層できた。

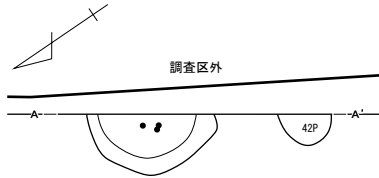
[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察により平安時代以降と想定される。



- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性やや弱い。しまりやや弱い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒(φ2~9mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
- 3層 黒褐色土 ローム粒(φ1~5mm)を微量、炭化粒(φ2~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

252号土坑



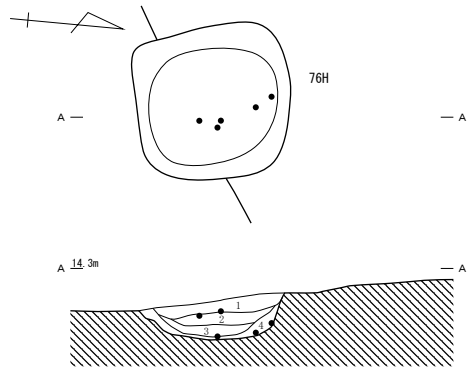
- 1層 黒褐色土 ローム粒・焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

254号土坑



- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

255号土坑



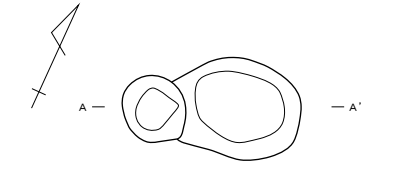
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~5mm)を少量、焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を少量、焼土粒(φ2~5mm)・炭化粒(φ5mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~15mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~20mm)を少量、焼土粒(φ2~5mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。

253号土坑



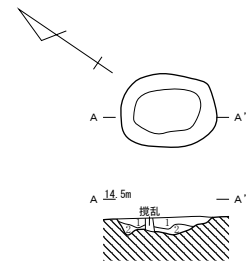
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ2~4mm)・焼土粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒(φ4~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 褐灰色土 ローム粒(φ1~4mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。
- 5層 褐灰色土 ローム粒(φ2~8mm)・焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 6層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 7層 にぶい黄褐色土 ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

256号土坑



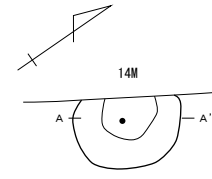
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)・炭化粒(φ4~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

263号土坑



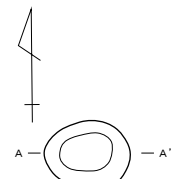
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

258号土坑



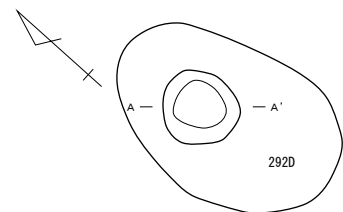
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

261号土坑



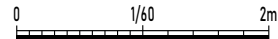
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。

262号土坑

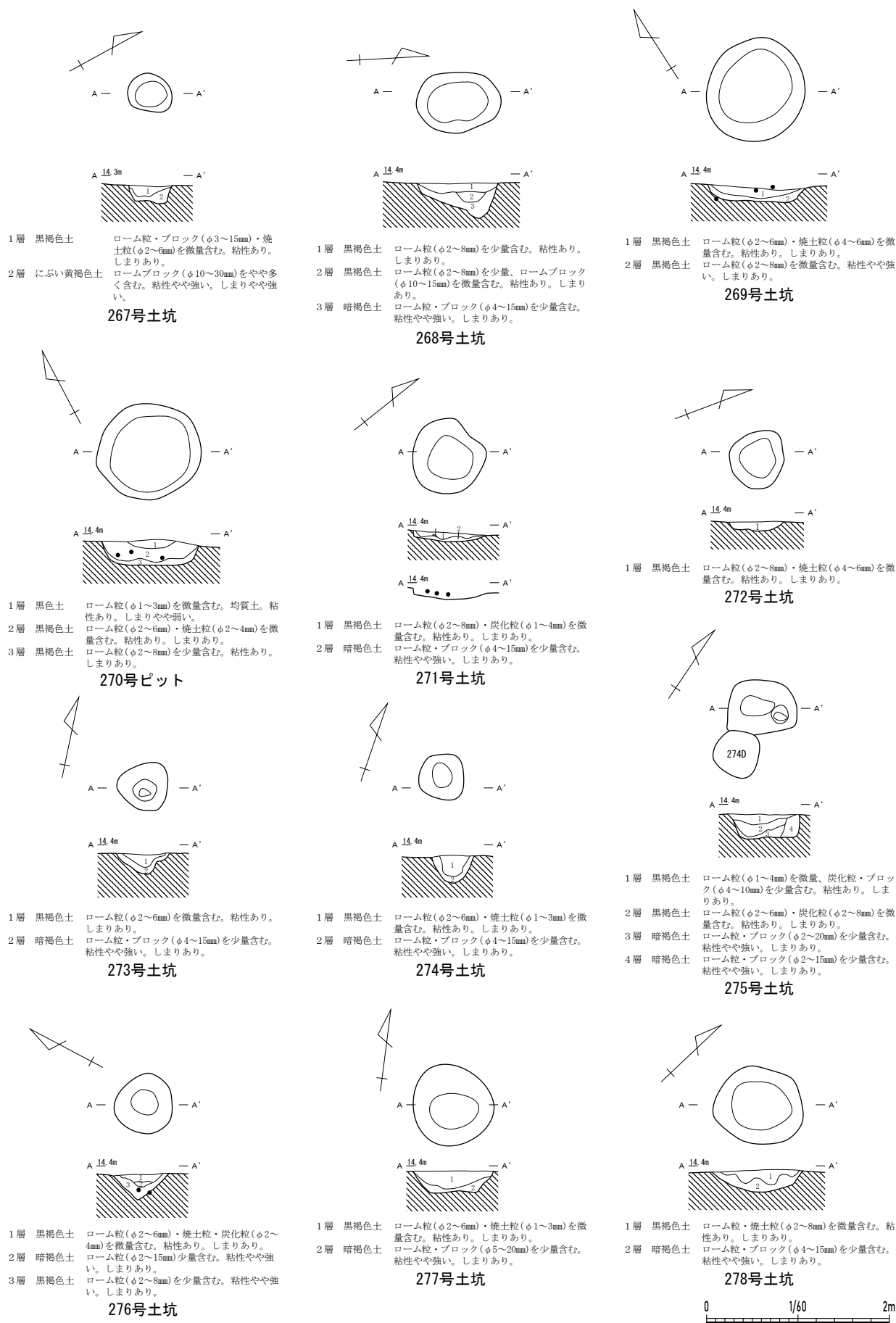


- 1層 黒褐色土 ローム粒・焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

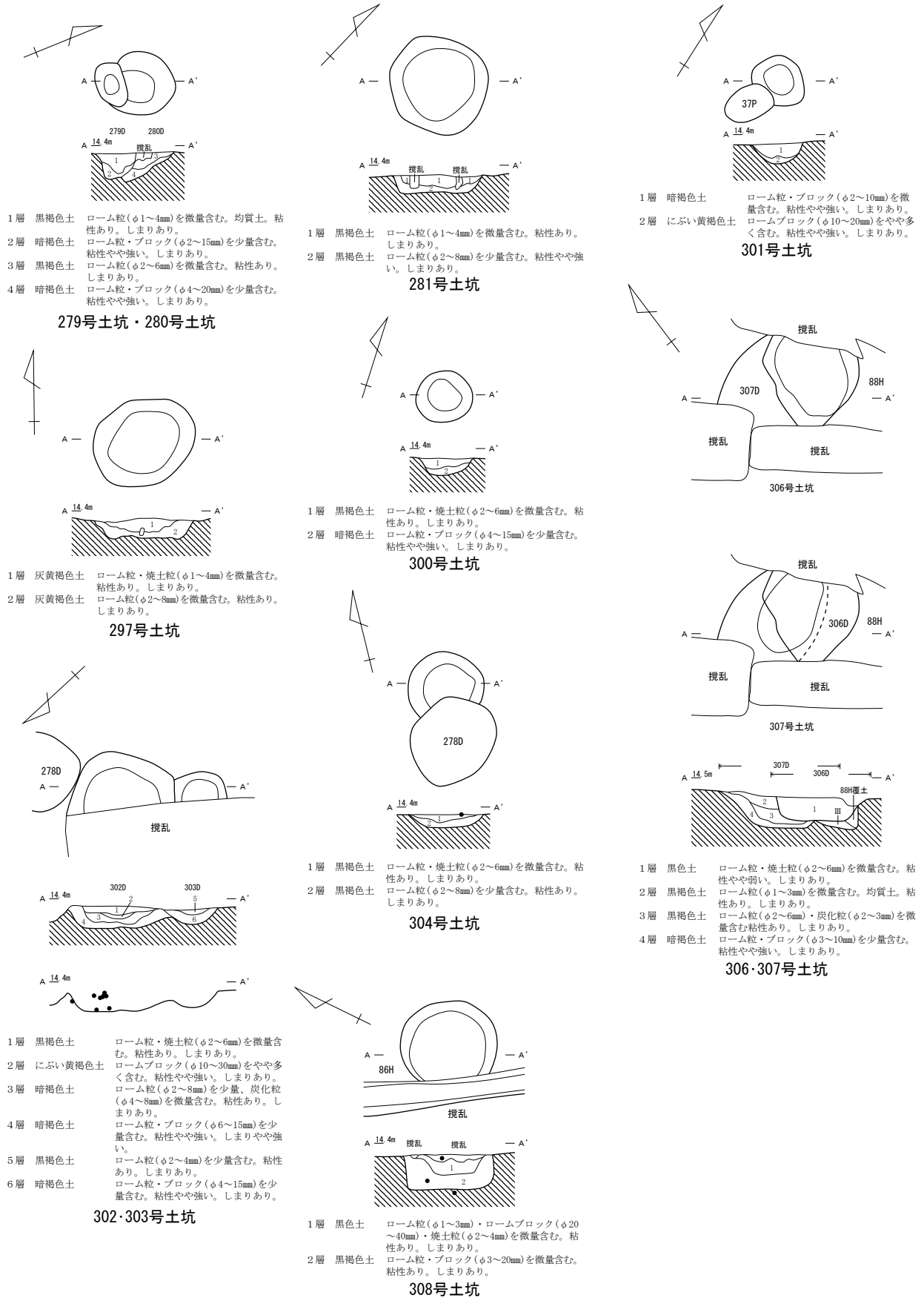
264号土坑



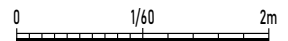
第82図 平安時代土坑 1 (1/60)

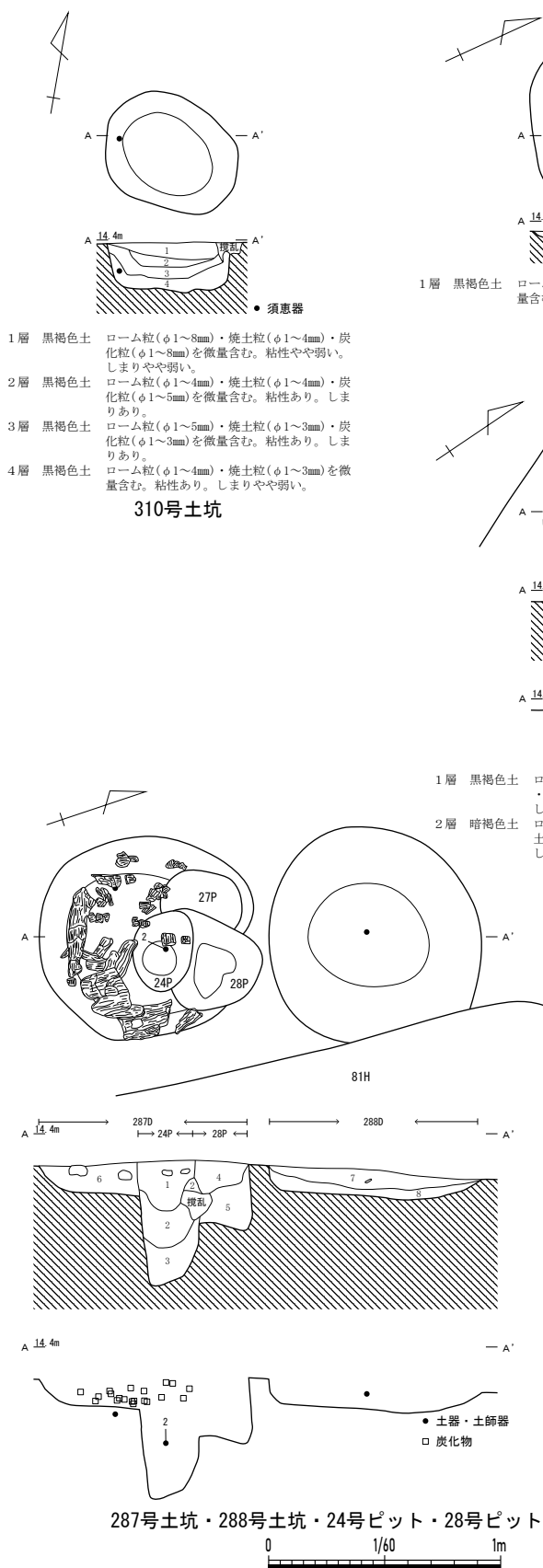


第83図 平安時代土坑 2 (1/60)

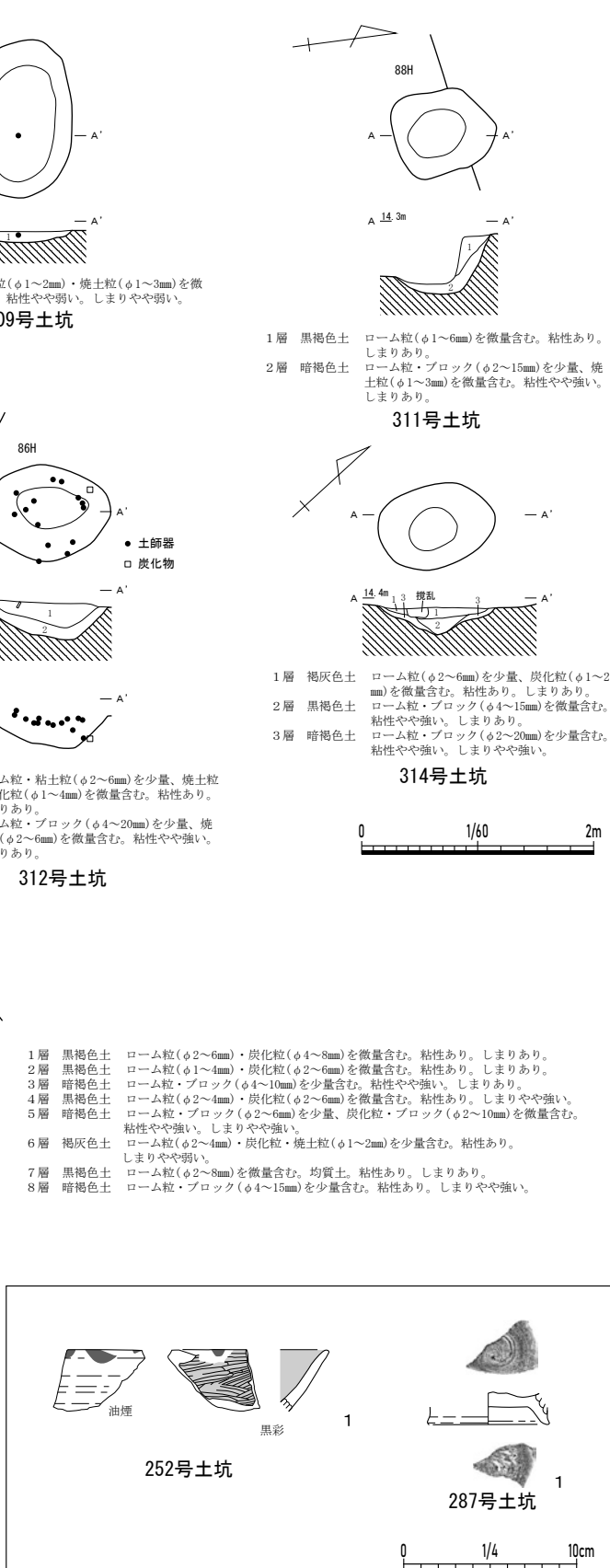


第84図 平安時代土坑3(1/60)





第85図 平安時代土坑4(1/60)



第86図 252・287号土坑出土遺物(1/4)

(5) 溝跡

14号溝跡

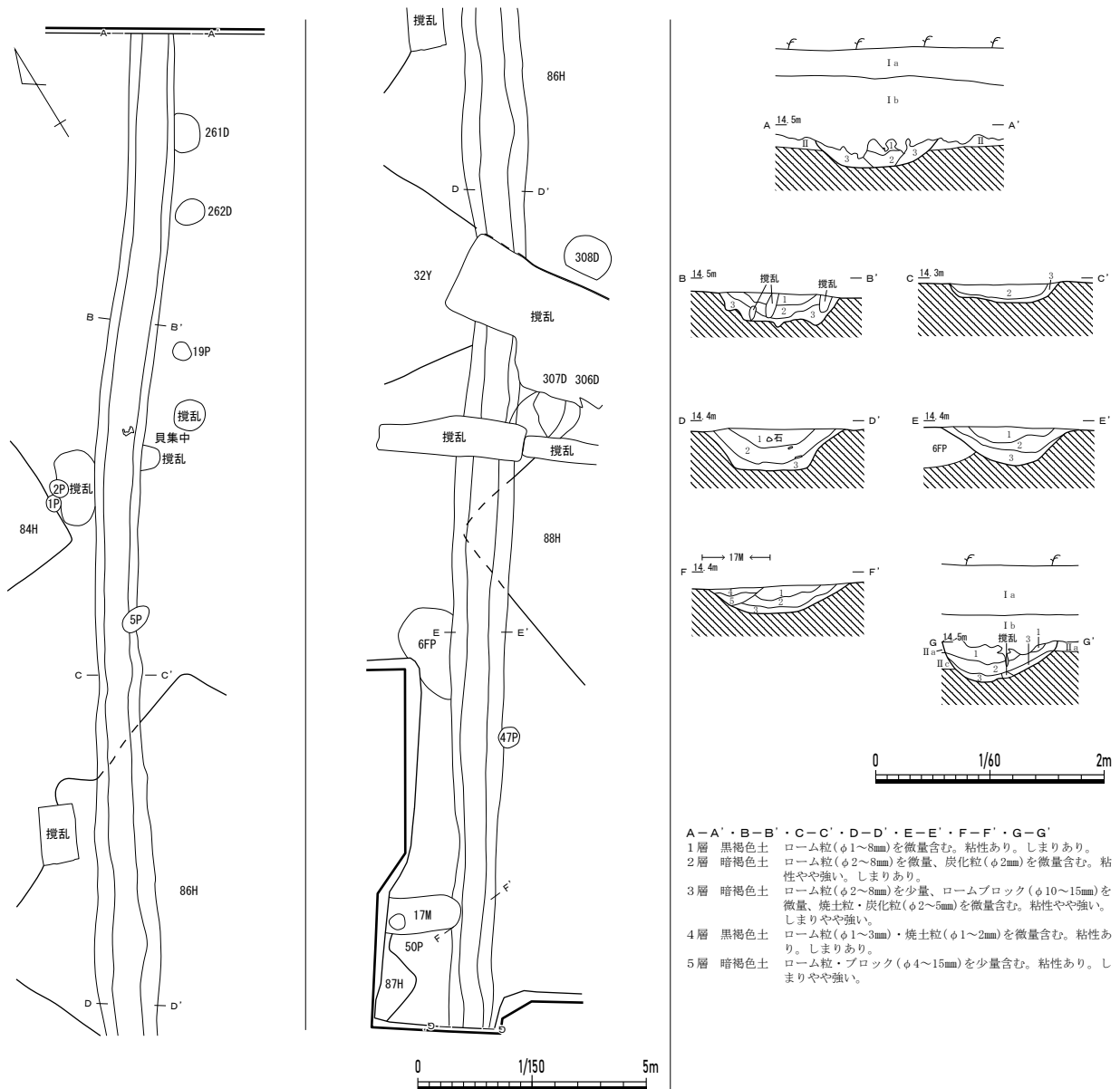
遺 構 (第87・88図)

[位 置] (O-5) ~ (K-11) グリッド。6 FP、86・88Hを切る。17Mに切られる。216・307・311・312D、47 Pと重複する。新旧は不明。

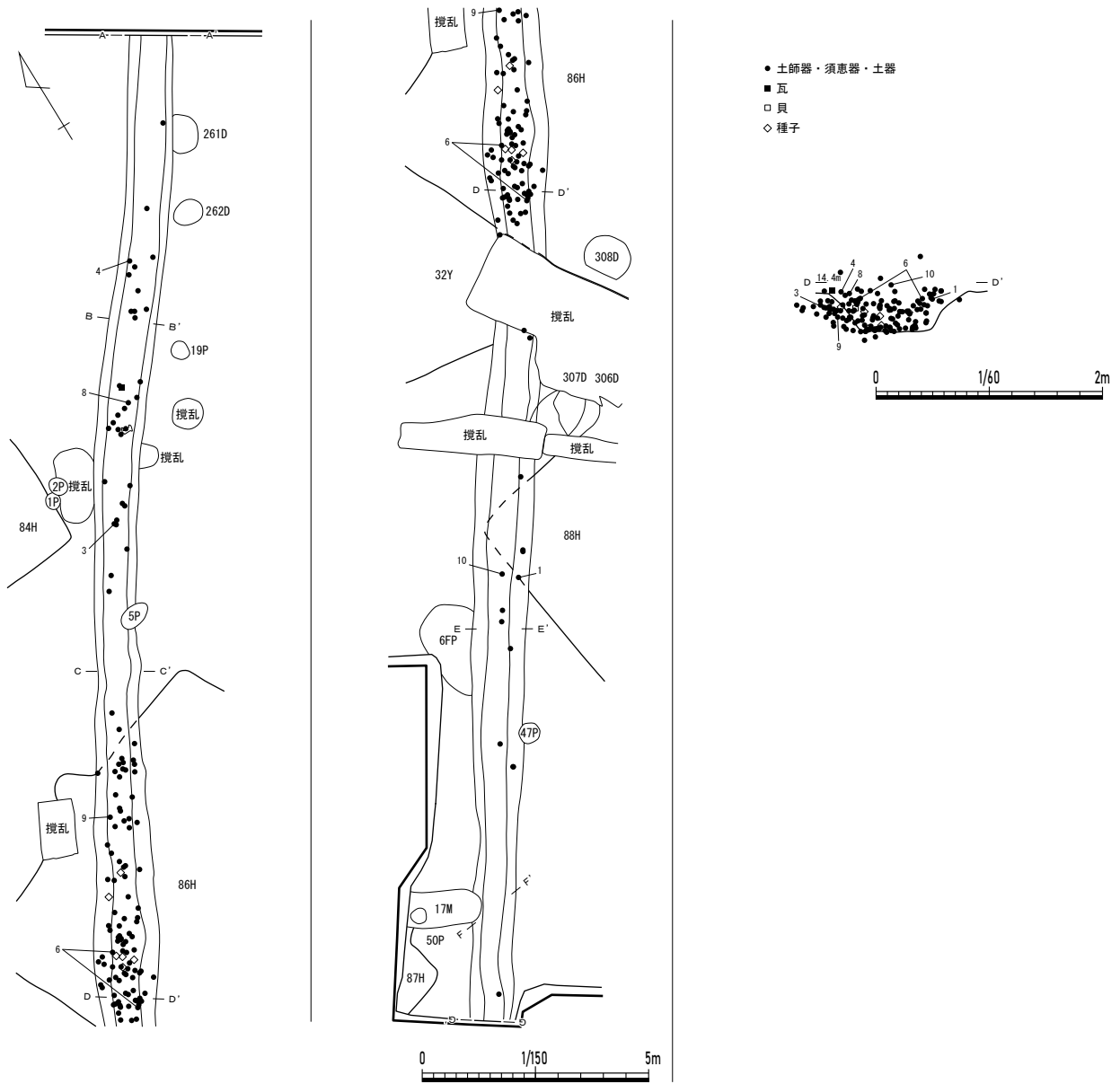
[構 造] 平面形：直線的。断面形：底面平坦又は丸底で60°前後で外反して立ち上がる部分、浅い皿状で平坦な底面から30°~40°で緩やかに立ち上がる部分、丸底の底面から30°~60°立ち上がる部分、底面に凹凸が目立つ部分など安定しない。規模：長軸検出長30.75m / 短軸0.60m / 深さ36cm。主軸方位：N-35°-E。

[覆 土] 5層に分層できた。

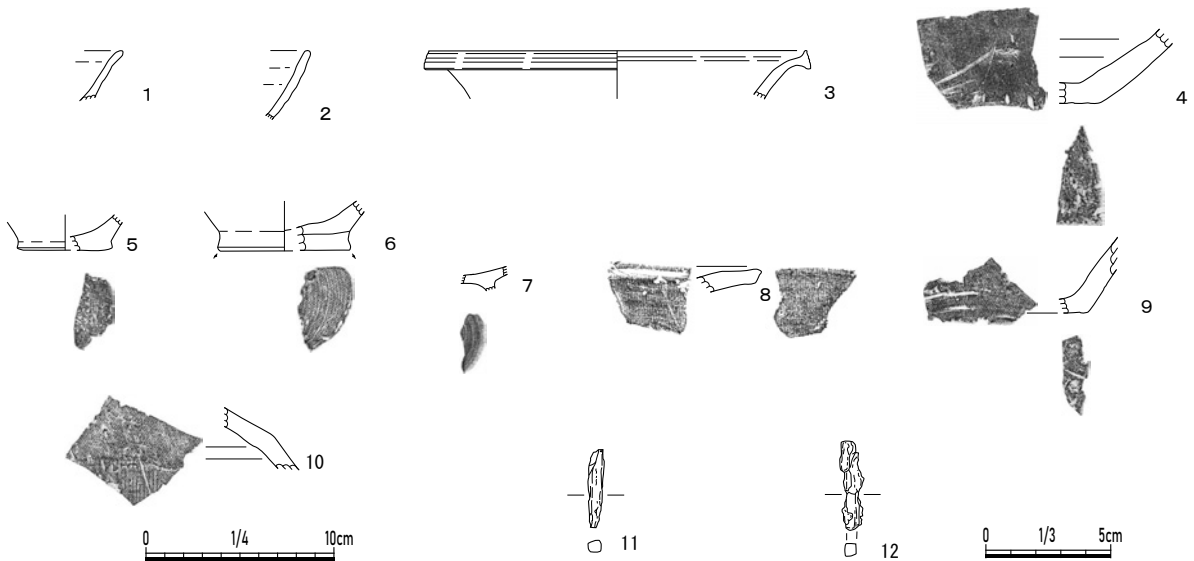
[遺 物] 地点上げ遺物で157点、一括遺物で1204点出土した。弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期と平安時代の遺物が出土しているが、多くの遺物は86・88Hを切るため古墳時代後期の遺物で



第87図 14号溝跡(1/150・1/60)



第88図 14号溝跡遺物出土状態(1/150・1/60)



第89図 14号溝跡出土遺物(1/4・1/3)

あった。掲載したのは遺構時期である平安時代以降に関わる、平安時代から中世前期の12点である。

[時期] 第131地点の成果より平安時代（9世紀後葉）以降。

[所見] 溝の走行方向は平安時代の遺構群の主軸とは異なる。

遺物（第89図、図版24-3・25-1、第17表）

1～7は須恵器である。1・2は坏、3は小形の甕か長頸瓶の口縁部であろう。4は平底の大甕底部である。5は小さな底部から僅かに底を高く造る。底部調整は摩滅しているが周辺ナデを施し中心部は皺状痕跡を残す。6は埴で、低いながらも底部を柱状にするもので、細い糸切りの痕跡ときめ細かい胎土は12世紀代の柱状高台土器に近い。7は酸化炎焼成の高台坏か。8は小片ながら所謂常陸型または常総型の土師器甕で口縁部の頸部より上の部分。9は陶器の甕、10は常滑大甕の胴部小片で叩き目が残る。薄く白色の釉が掛けられ、器壁も薄い。12世紀末～13世紀初頭か。11・12は鉄製品で釘であろう。

17号溝跡

遺構（第90図）

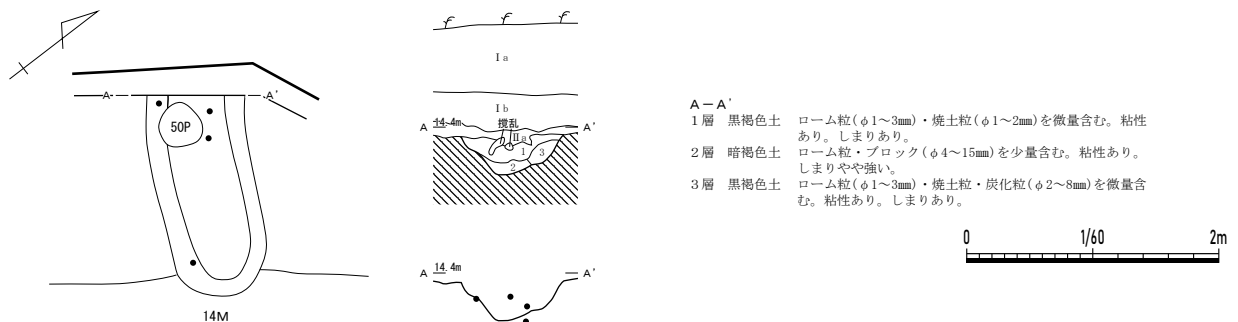
[位置] (K-11) グリッド。87H、14Mを切る。西側調査区外に延びる。

[構造] 平面形：溝。断面形：逆台形。底面は、中央が最も低く、壁は60°前後で外反気味に立ち上がる。規模：長軸検出長1.46m / 短軸0.80m / 深さ29cm。主軸方位：N-61°-E。14Mにほぼ直行。

[覆土] 5層に分層できた。

[遺物] 地点上げ遺物で4点、一括遺物で1点が出土した。小片または流れ込みの遺物の為、不掲載。

[時期] 平安時代（9世紀後葉）以降で、14Mよりは新しい。北西壁セクションで薄くIIa層に覆われていた。



第90図 17号溝跡(1/60)

(6) ピット (第91～95図)

ピットは64本検出された。そのうち古墳時代以降と想定されるピットは10本、平安時代以降と想定されるピットは54本であった。分布の傾向は、平安時代及び平安時代以降のピットを合わせると①O-7～10南北列、O～R-7東西列の内側にまとまりがあり土坑と同様の傾向が伺える。②81～84・87Hと重複または周辺にピットが認められた。③それらの中で、土坑の頁で述べたとおり81・83・85Hに囲まれた中に掘立柱建築遺構の存在が想定された。また古墳時代後期以降のピットは、2区の南西側の主に2か所に遍在した。いずれも覆土と出土遺物が確実に結びつく事例はなかったため一覧表（第7表）での報告とする。

7号ピット

遺 構 (第91図)

[位 置] (O-7) グリッド

[検出状況] 調査区やや北東寄りで検出し、奈良時代の83Hを切る。

[構 造] 平面形：隅丸方形。断面形：壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。規模：長軸120cm／短軸95cm／深さは23cm。

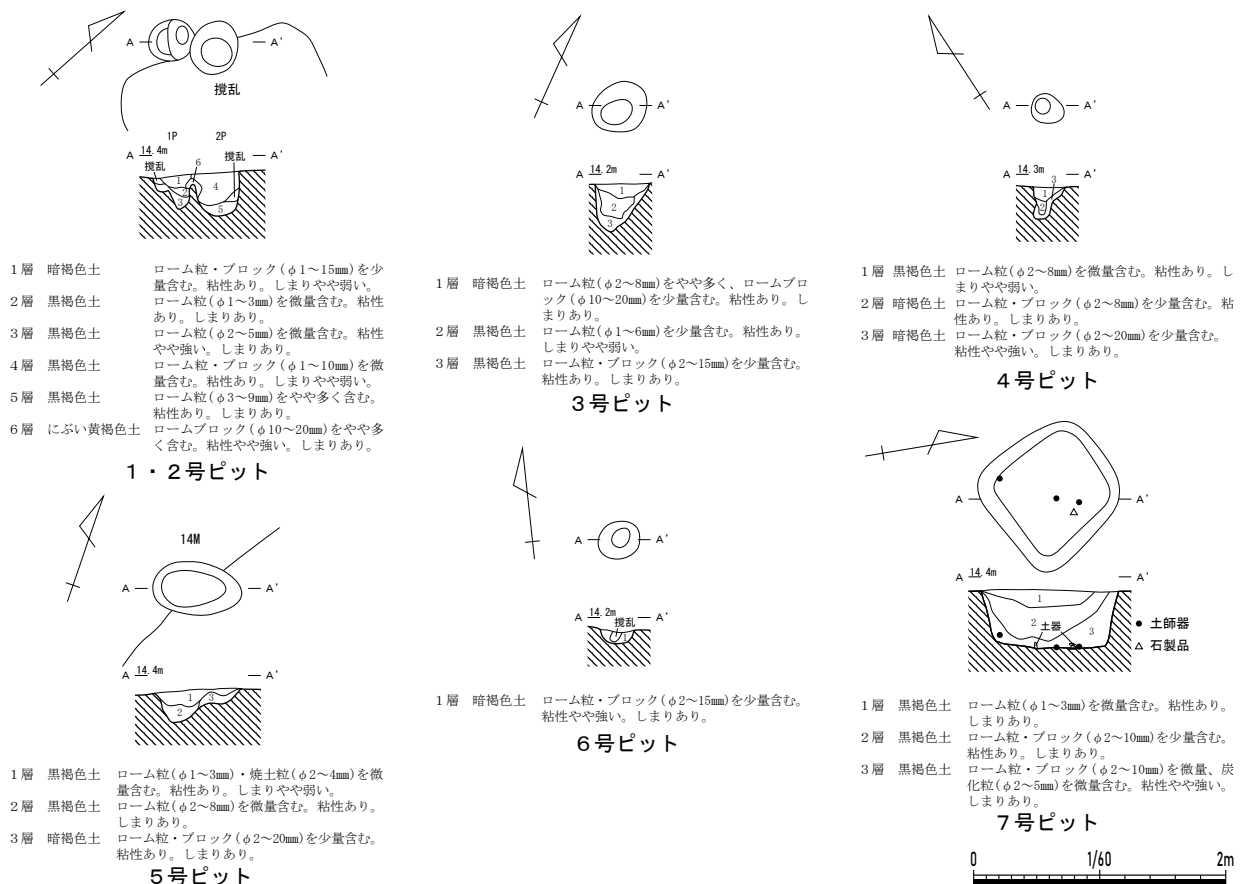
[覆 土] 3層に分層できた。83Hより新しい。

[遺 物] 地点上げ遺物として4点、一括遺物として28点が出土しており、古墳時代後期と平安時代の須恵器が確認でき、平安時代の資料に、底部成形、調整にバリエーションが伺われるものが存在する。その内、掲示するのは平安時代の内黒土器である。

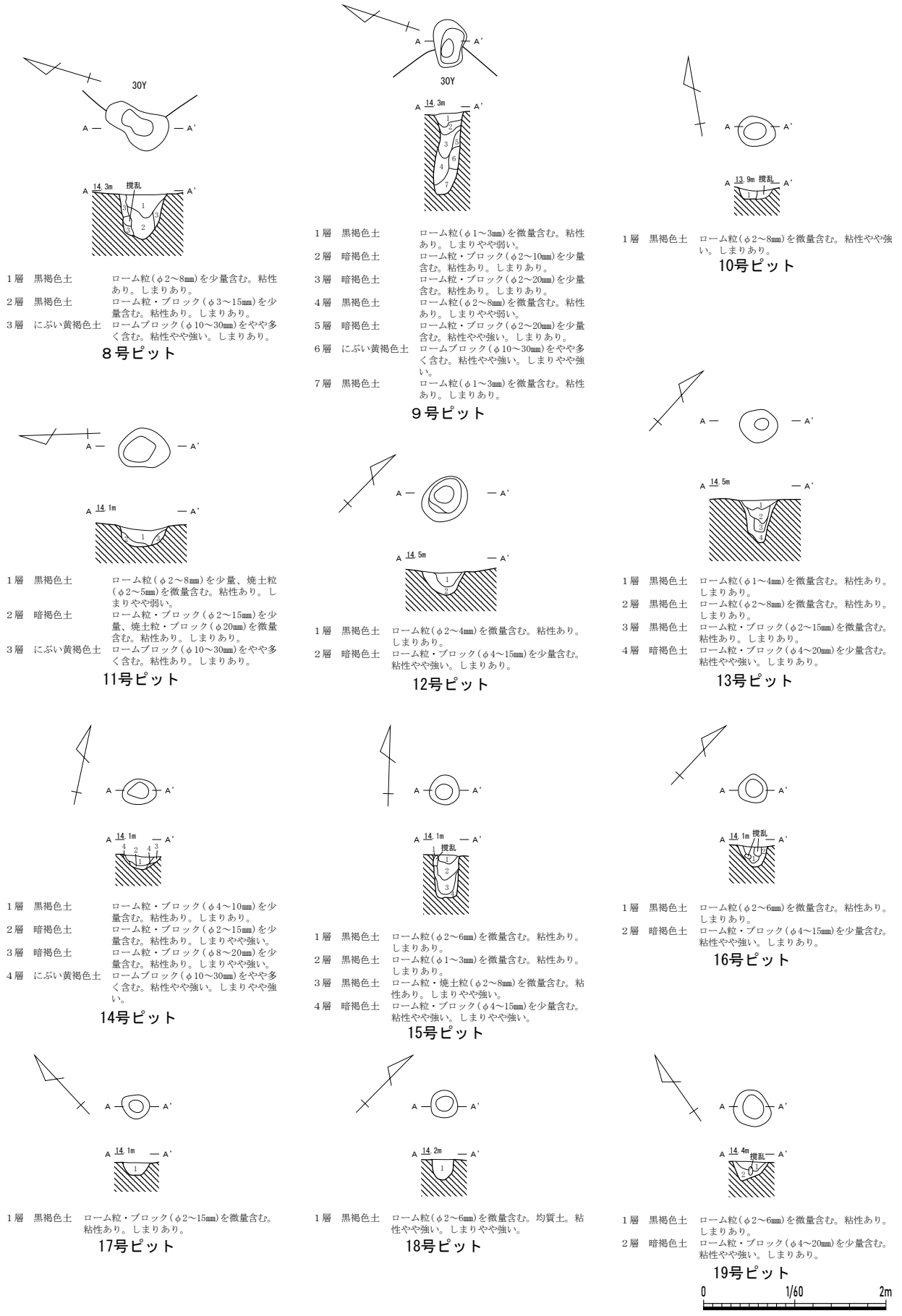
[時 期] 覆土と出土遺物から平安時代(10世紀後葉～11世紀初頭)と推測する。

遺 物 (第96図、図版25-2、第19表)

1は須恵器の坏で内面は黒色処理された内黒土器である。底面は、完存しないが同心状の砂粒の移動痕が見え、回転ヘラ削りと理解できよう。回転の中心と思しき所が僅かに膨らんで残る。底径は不明ながら、内底径は4cm強程度と推測される。このほか小片の為、図示しないが底部調整がヘラ切りと推測される須恵器坏(図版25-2-2)の底部や小形の高台椀、坏の口縁部などが出土している。

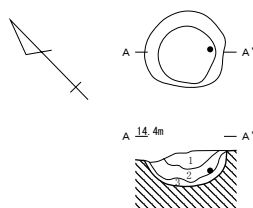


第91図 古墳・平安時代ピット1(1/60)



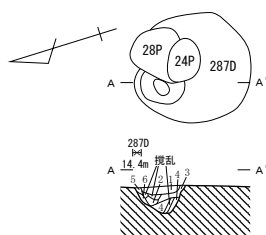
第92図 古墳・平安時代ピット2(1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



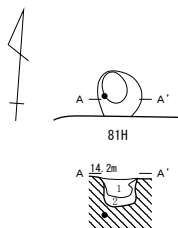
- 1層 極暗赤褐色 ローム粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 極暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量、焼土粒・ブロック(φ2~15mm)・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。

20号ピット



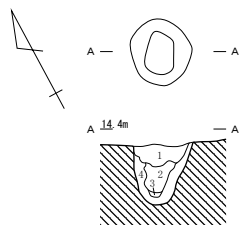
- 1層 褐灰色土 ローム粒(φ1~3mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりやや弱い。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~10mm)を少量、焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 5層 黒褐色土 ローム粒(φ2~4mm)・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。287D層粘性あり。しまりやや強い。
- 6層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。287D2層粘性あり。しまりあり。

27号ピット



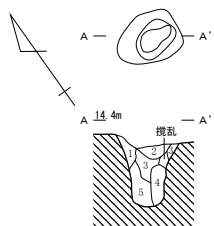
- 1層 黒褐色土 ローム粒・焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。

29号ピット



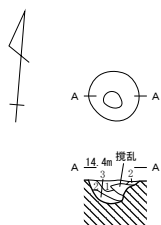
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)・焼土粒・炭化粒(φ3~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)・炭化粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~20mm)をやや多く、焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。柱痕アタリ部分。粘性やや強い。しまり強い。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ3~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。

33号ピット



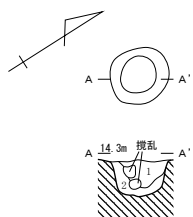
- 1層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ6~20mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 5層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

21号ピット



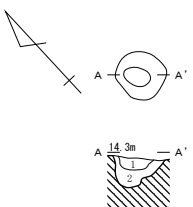
- 1層 黒褐色土 ローム粒・焼土粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~20mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。

25号ピット



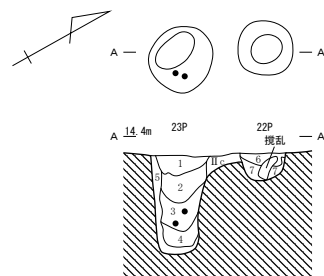
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~10mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

30号ピット



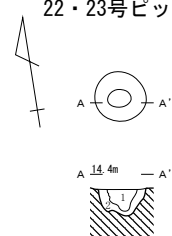
- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~4mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ3~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。

34号ピット



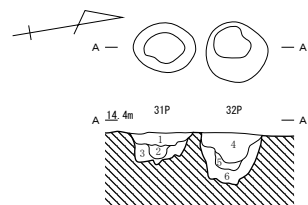
- 1層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒(φ2~8mm)をやや多く、ロームブロック(φ10~30mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~20mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 4層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 5層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 6層 黒褐色土 ローム粒(φ10~30mm)・炭化粒(φ1~3mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 7層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~10mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。

22・23号ピット



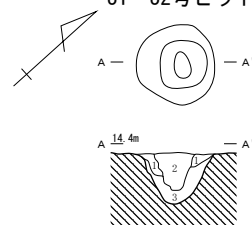
- 1層 黒褐色土 ローム粒・炭化粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~10mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。

26号ピット

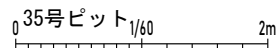


- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ2~8mm)・焼土粒(φ4~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ1~3mm)を微量含む。均質土。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 4層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)・焼土粒(φ1~4mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 5層 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10~20mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- 6層 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ4~15mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。

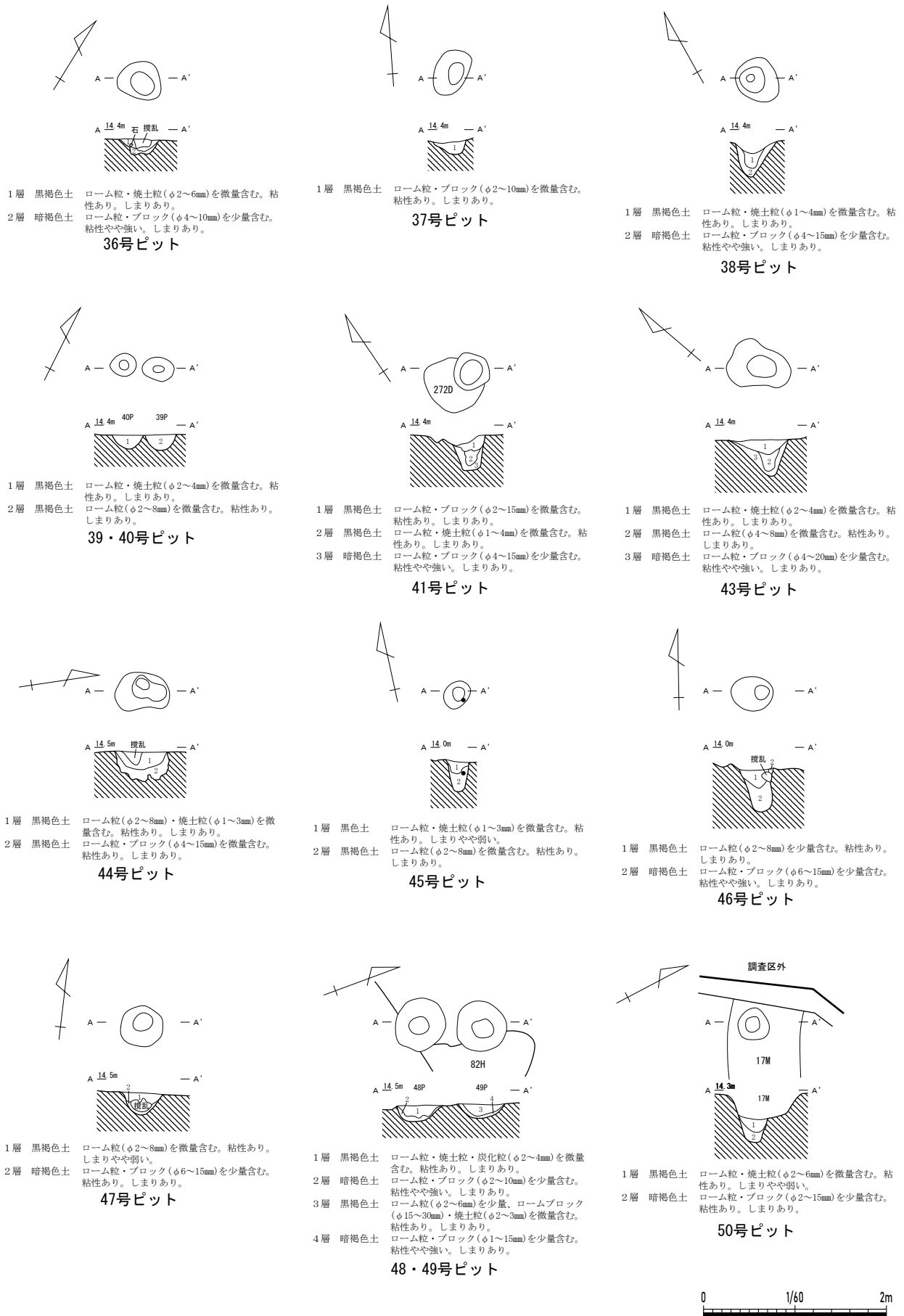
31・32号ピット



- 1層 黒褐色土 ローム粒(φ1~4mm)・焼土粒・炭化粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 2層 黒褐色土 ローム粒(φ2~6mm)を少量、焼土粒(φ1~8mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 3層 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ2~15mm)を少量含む。粘性やや強い。しまりあり。

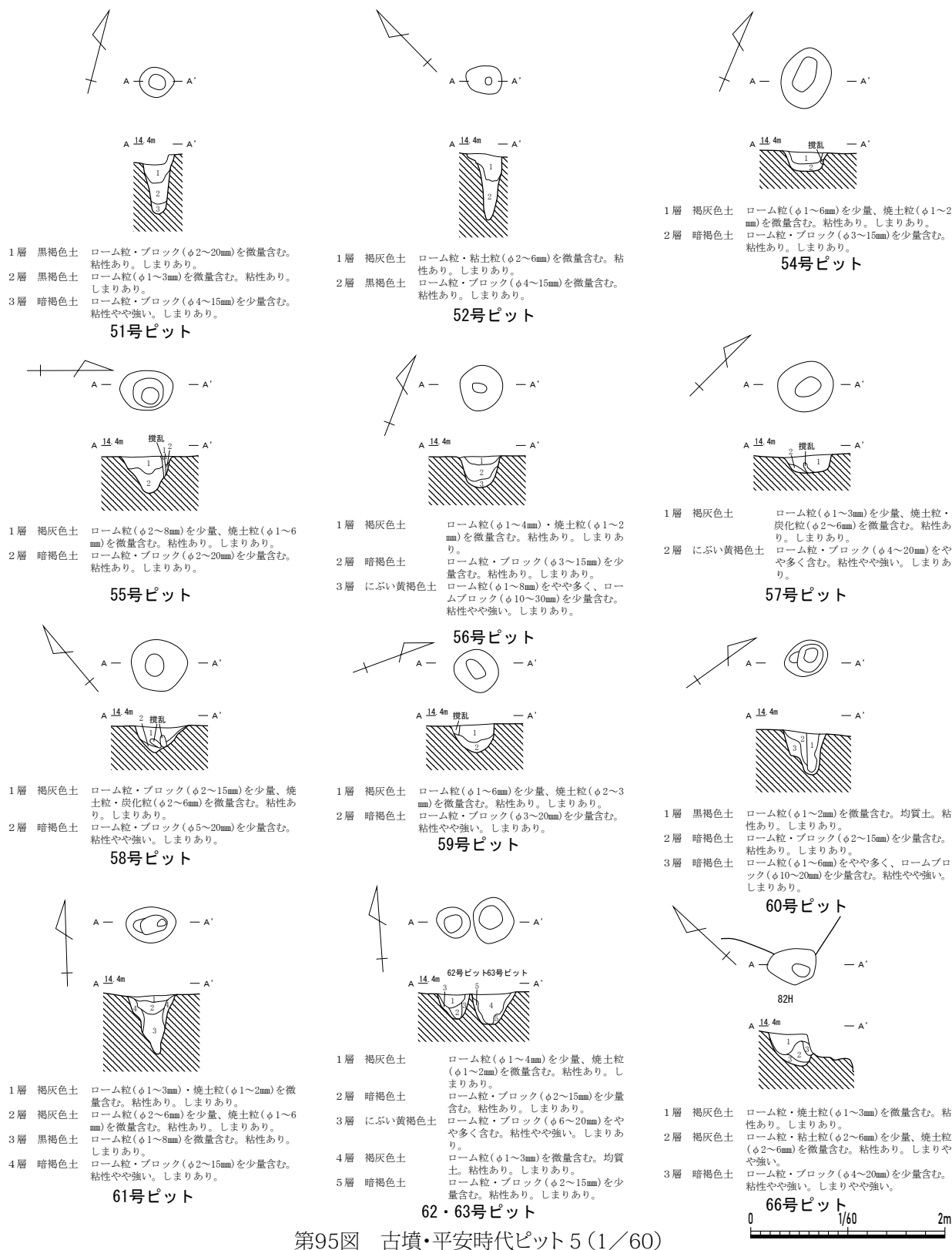


第93図 古墳・平安時代ピット3(1/60)

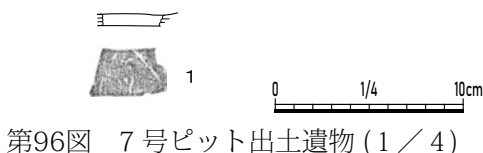


第94図 古墳・平安時代ピット4 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



第95図 古墳・平安時代ピット5(1/60)



遺構名	グリッド	形状	主軸方位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物の有無	推定年代	備考(主な覆土、重複関係)
1P	N 6	円形	N-31°-E	35	35	26	無	平安	暗褐色土 2P重複
2P	N 6	円形	N-37°-W	45	40	33	有	平安	黒褐色土 1P重複
3P	Q 7	円形	N-30°-E	45	40	37	有	平安	暗褐色土
4P	M 6	円形	N-40°-W	37	32	25	有	平安	黒褐色土 84H重複
5P	N 7	楕円形	N-80°-E	70	42	23	有	平安～	黒褐色土
6P	M 6	円形	N-85°-W	35	30	11	無	平安～	暗褐色土 84H重複
7P	O 7	隅丸方形	N-73°-W	120	95	23	有	平安～	黒褐色土 83Hより新
8P	P 9	不定形	N-10°-E	70	30	47	有	平安～	黒褐色土 30Y重複
9P	Q 9	不定形	N-80°-E	55	30	88	無	平安～	黒褐色土 30Y重複
10P	P 9	円形	N-78°-W	40	30	11	無	平安～	黒褐色土 30Y重複
11P	Q 9	不定形	N-0°	55	40	19	無	平安～	黒褐色土 81H重複
12P	N 4	円形	N-0°	55	45	24	無	平安～	黒褐色土
13P	N 5	円形	N-61°-E	40	35	46	有	平安～	黒褐色土
14P	R 7	楕円形	N-68°-E	35	30	14	有	平安～	黒褐色土
15P	R 7	円形	N-12°-E	35	30	46	無	平安～	黒褐色土
16P	Q 8	円形	N-50°-W	32	30	22	無	平安～	黒褐色土
17P	Q 8	円形	N-14°-W	30	25	13	無	平安～	黒褐色土
18P	Q 8	円形	N-0°	32	27	22	無	平安～	黒褐色土
19P	N 6	不定形	N-15°-W	45	35	19	有	平安～	黒褐色土
20P	P 7・O 6	円形	N-84°-W	65	60	26	有	平安～	極暗赤褐色土
21P	P 8	不定形	N-49°-W	52	40	48	無	平安～	暗褐色土
22P	M 7	円形	N-6°-W	55	50	76	有	平安	黒褐色土
23P	M 7	円形	N-44°-W	47	45	21	無	平安	黒褐色土
24P	P 9	円形	N-47°-W	35	25	53	無	平安	黒褐色土 287D・27・28P重複
25P	O 7	円形	N-25°-W	40	35	18	無	平安	黒褐色土
26P	O10・P10	円形	N-80°-W	40	40	21	無	平安	黒褐色土
27P	P 9	隅丸長方形	N-40°-E	40	15	22	有	平安	褐灰色土 287D・24・28P重複
28P	P 9	不定形	N-80°-E	47	30	27	無	平安	黒褐色土 287D・24・27P重複
29P	Q 8	円形	N-30°-W	40	30	22	有	平安	黒褐色土 305D重複
30P	P 8・9	円形	N-19°-W	50	45	27	無	平安	黒褐色土 288D重複
31P	P 8	円形	N-6°-E	50	40	25	有	平安	黒褐色土
32P	P 8	円形	N-8°-W	50	45	30	有	平安	黒褐色土
33P	P 8・9	円形	N-20°-E	50	45	48	有	平安	黒褐色土
34P	O 9	円形	N-53°-W	40	35	24	有	平安	黒褐色土
35P	O 8	円形	N-15°-E	65	60	41	有	平安～	黒褐色土
36P	O 9	不定形	N-48°-E	50	40	17	有	平安～	黒褐色土
37P	O 9	隅丸長方形	N-50°-E	60	40	13	無	平安～	黒褐色土 301D重複
38P	O10	不定形	N-37°-W	65	50	25	有	平安～	黒褐色土
39P	O10	円形	N-53°-E	30	25	13	無	平安～	黒褐色土
40P	P10	楕円形	N-54°-E	35	25	14	無	平安～	黒褐色土
41P	O10・P10	不定形	N-77°-E	40	35	33	無	平安～	黒褐色土 272D重複
43P	P 7	不定形	N-36°-W	67	50	39	有	平安～	黒褐色土
44P	R 7・8	不定形	N-0°	60	40	32	有	平安～	黒褐色土
45P	O 7・P 7	隅丸長方形	N-26°-E	42	25	32	有	平安～	黒色土 83H重複
46P	O 7	円形	N-53°-W	40	35	45	無	平安～	黒褐色土 83H床下
47P	L10・11	円形	N-43°-E	45	45	25	無	平安～	黒褐色土 14M重複
48P	N12	円形	N-27°-W	60	50	17	有	平安～	黒褐色土 82H重複
49P	N12	円形	N-80°-E	55	50	15	有	平安～	黒褐色土 82H重複
50P	K11	円形	N-55°-E	35	30	24	有	平安～	黒褐色土 17Mより古
51P	L 9	円形	N-70°-E	35	30	50	無	平安～	黒褐色土 32Yより新
52P	L 9	隅丸長方形	N-20°-W	45	30	67	無	平安～	褐灰色土 32Yより新
53P	N12	不定形	N-88°-W	45	35	35	有	平安	褐灰色土・黒褐色土 82Hカマドより新
54P	O11	楕円形	N-15°-W	60	50	20	無	古墳～	褐灰色土
55P	O11	楕円形	N-10°-E	50	40	37	無	古墳～	褐灰色土
56P	O11	円形	N-10°-W	50	45	31	無	古墳～	褐灰色土
57P	N12	円形	N-34°-E	55	50	18	無	古墳～	褐灰色土
58P	M12	円形	N-50°-E	60	50	26	無	古墳～	褐灰色土
59P	N12	円形	N-30°-E	45	40	27	無	古墳～	褐灰色土
60P	P10	円形	N-10°-E	45	35	41	無	古墳	黒褐色土・暗褐色土 柱痕状堆積あり
61P	O11	楕円形	N-86°-E	50	35	60	有	古墳	褐灰色土・暗褐色土 柱痕状堆積あり
62P	M12	円形	N-44°-W	35	25	26	有	古墳～	褐灰色土
63P	M12	円形	N-20°-E	50	40	31	有	古墳～	褐灰色土
64P	O10	円形	N-34°-W	65	50	22	有	平安	褐灰色土 313Dより新
66P	N12	不定形	N-43°-W	50	35	33	有	平安～	褐灰色土 82Hカマドより新

第7表 ピット一覧

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第28図7 図版14-7	土師器 環	完形	□11.0 高3.1	貯蔵穴付近床面上	いわゆる比企型環/口縁部はやや外傾する/口唇内面に沈線がめぐる/口縁部と底部の境に弱い段をもつ/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ/以下ヘラ削り	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	にぶい橙色
第28図8 図版14-8	土師器 環	60%	□10.0 高3.8	貯蔵穴付近覆土中	いわゆる比企型環/口縁部はやや外傾する/口唇内面に沈線がめぐる/口縁部と底部の境に弱い段をもつ/内面及び外面口縁部赤彩/遺存底部の8割程度は黒彩/入間系土師器	内面：横ナデ、底部はナデ/外面：口縁部横ナデ、口縁部と底部境直下に横位ヘラ削り、以下ヘラ削り	砂粒・小石をやや多く含む	赤褐色
第28図9 図版14-9	土師器 環	完形	□11.2 高4.0	貯蔵穴付近ほぼ床面上	いわゆる比企型環/口縁部はやや外反する/口唇内面に沈線がめぐる/口縁部と底部の境に弱い段をもつ/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器	内面：横ナデ、底部はナデ/外面：口縁部横ナデ、口縁部と底部境直下に横位ヘラ削り、以下ヘラ削り	茶褐色粒子・砂粒・8mm前後のやや大きなものを含め小石をやや多く含む	明赤褐色 (赤彩部分：赤色)
第28図10 図版14-10	土師器 環	40%	□10.2 高3.8	旧カマド左袖覆土中	いわゆる比企型環/口縁部は中位で僅かに拵れ外反する/口唇内面に沈線はめぐる/口縁部と底部の境に弱い段をもつ/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	明赤褐色を基調とする
第28図11 図版14-11	土師器 環	完形	□15.6 高5.4	旧カマド右袖前方覆土中	いわゆる統比企型環/大型/丸底気味の底部から内湾傾向で立上り、殆ど境なく口縁部となる/内面及び外面口縁部濃い赤彩/外面立上りは薄い赤彩、底部付近は黒彩	内面：横ナデ、底部付近はヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	明赤褐色
第28図12 図版14-12	土師器 環	完形	□10.6 高3.1	貯蔵穴付近床面上	有段環/口縁部と底部の境に小さな段をもつ/口縁部は直立気味ながら内湾傾向/全面が薄く焼けた黒彩となる	内面：口縁部から頸部付近まで横ナデ、以下ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	金雲母・砂粒を含む	橙色を基調とし、内面黒く焼ける
第28図13 図版14-13	土師器 環	40%	□11.1 高3.5	P 5及びP 5付近床面上	有段環/口縁部と底部の境に小さな段をもつ/口縁部は外傾しつつ内湾傾向/底部内面中心が僅かに出っ張る/回転台使用による在地系か/全面が薄く焼けた黒彩となる	内面：口縁部から頸部付近まで横ナデ、以下同心状にヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒と僅かに小石・角閃石細片を含む	外面：灰黄褐色 内面：黒色
第28図14 図版14-14	土師器 環	完形	□10.2 高3.1	P 2付近床面上	有段環/口縁部と底部の境に沈線がめぐり形骸化した段を形成する/口縁部は僅かに外傾する/全面黒彩	内面：口縁部から頸部付近まで横ナデ、以下ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・金雲母を含む	外面：にぶい黄褐色 内面：黒褐色
第28図15 図版14-15	土師器 環	80%	□9.7 高3.0	貯蔵穴付近床面上	有段環/口縁部と底部の境に僅かな段を形成する/口縁部は僅かに外傾する/内面黒彩、外面は口縁部及び底部の一部が焼け黒彩	内面：口縁部から頸部付近まで横ナデ、以下ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・金雲母を含む	にぶい橙色
第28図16 図版14-16	土師器 環	完形	□11.1 高3.4	貯蔵穴付近床面上	口縁部と底部の境が僅かに段をなす/口縁部は内湾気味に外傾する/底部内面中央がへソ状となり僅かにへこむ部分と膨らむ部分がある、外面は平底気味/全体に器壁が厚手/全面黒彩ながら内面及び外面口縁部は特に濃い	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ、/外面：口縁部横ナデ、口縁との境に一周する横位の連続ヘラ削り、以下ヘラ削り	砂粒・小石・金雲母を含む	橙色を基調とする
第28図17 図版14-17	土師器 環	60%	□10.4 高3.3	中央から北西覆土中に散在	口縁部と底部の境には弱い段をもつ/口縁部は外傾する/全体にうっすらと焼けた黒彩	内面：口縁部から底部付近まで横ナデ、以下ヘラナデ、/外面：口縁部横ナデ、段下を1周横位ヘラ削り、以下ヘラ削り	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	にぶい赤褐色を基調とする
第28図18 図版14-18	土師器 環	完形	□10.4 高3.4	P 6付近床面上	口縁部と底部の境には弱い段をもつ/口縁部は内湾気味に外傾する/内面底部中心が僅かに窪む/全体にうっすらと焼け部分的に濃く残る部分があり黒彩と判断する	内面：口縁部から底部にかけて同心状の横ナデ、回転台使用か/外面：口縁部横ナデ、段下を1周横位ヘラ削り、以下ヘラ削り	砂粒・小石・金雲母・角閃石細粒を含む	橙色を基調とする
第28図19 図版14-19	土師器 環	略完形	□9.6 高3.4	貯蔵穴付近床面上	口縁部と底部の境は僅かに段をもつ/口縁部はほぼ直立する/内面底部中心が僅かに窪む/内面及び口縁外面黒彩、底部外面はうっすらと焼ける	内面：口縁部から頸部下まで横ナデ、以下ナデ、回転台使用か/外面：口縁部横ナデ、段下を横位ヘラ削り、以下ヘラ削り	砂粒・小石・金雲母・茶褐色粒子を含む	黒褐色
第28図20 図版14-20	土師器 環	略完形	□11.0 高3.0	P 7付近覆土中	口縁部と底部の境は弱い段をもつ/口縁部は外傾する/中央にへソ状の僅かな窪み/内面と外面は口縁を中心に部分的に焼け、黒彩と判断した	内面：口縁部から底部付近まで横ナデ、以下ヘラナデ、/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	淡赤褐色を基調とする
第28図21 図版14-21	土師器 環	95%	□11.6 高3.7	貯蔵穴付近床面上	口縁部と底部の境が僅かに段をなす/口縁部は内湾気味に外傾する/全面焼ける黒彩	内面：口縁部は横ナデ、以下回転台を用いた同心状痕跡を残すナデ/外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・金雲母・角閃石細粒を含む	にぶい橙色を基調とする

第8表 76号住居跡出土遺物一覧(1)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第28図22 図版14-22	土師器 環	完形	□11.4 高3.8	東側ほぼ床面上	口縁部と底部の境が僅かに段をなす／口縁部は内湾気味に外傾する／底面は平底気味／内面は煤け、外面は口縁を中心に濃い部分を有し、全面黒彩か	内面：口縁部から頸部付近まで横ナデ、以下ナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り、底面を平らに削る	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	暗灰色
第28図23 図版14-23	土師器 環	95%	□10.8 高4.0	P10付近覆土中	口縁部と底部の境は弱い段による／口縁部は内湾気味にほぼ直立する／底部は丸底となる／内面には放射状の暗文を模したものが針状工具による刻線が4本施される	内面：口縁部から頸部下まで横位のミガキ、以下同心状のナデ／外面：口縁部横ナデ後ミガキ、以下ヘラ削り	砂粒・金雲母・茶褐色粒子を含む	にぶい黄橙色を基調とする
第28図24 図版14-24	土師器 環	95%	□11.8 高3.7	炉付近ほぼ床面上	口縁部と底部の境は段をなす／口縁部は外傾する／底部内面中央にヘソ状の窪みと僅かに膨らむ部分がある、外面は平底気味／内面は薄っすら煤け、外面は口縁を中心に部分的に煤ける、黒彩と判断した	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ、／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り、底面に弧線状痕が見られる	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	にぶい橙色を基調とする
第28図25 図版14-25	土師器 環	完形	□11.7 高4.4	第28図28の上に重なる	有段環／口縁部と底部の境に小さな段をもつ／口縁部はほぼ直立／内外面底部付近以外と全面が薄く煤けた黒彩となる	内面：口縁部から頸部付近まで横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・金雲母を含む	にぶい褐色
第28図26 図版14-26	土師器 環	完形	□9.6 高3.5	P3とP8の間床面上 北側覆土中	口縁部と底部の境にヘラ削りによる稜を形成する／口縁部は外傾する／内面と外面の一部が煤ける黒彩の部分と底部の一部が赤採される混在タイプ／在地系の金属器模倣環か	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・金雲母と僅かに小石を含む	にぶい橙色
第28図27 図版14-27	土師器 環	完形	□9.5 高2.9	炉とP3の間床面上	口縁部と底部の境は稜による／口縁部は外傾する／底部は丸底となる／内面と外面の一部が薄っすらと赤斑状になる／在地系	内面：口縁部横ナデ後ミガキ。以下ヘラナデ、底部周辺横位ミガキ／外面：口縁部横ナデ後ミガキ。以下ヘラ削り	砂粒・小石・茶褐色粒子、角閃石細粒を含む	にぶい橙色
第28図28 図版14-28	土師器 環	完形	□10.9 高4.3	炉とP3の間床面上	口縁部と底部の境は稜による／口縁部は外傾する／底部は丸底となる／外面の一部が薄っすらと黒斑状及び赤斑状となる／在地系	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・小石・金雲母・角閃石細粒を含む	内面外面： 橙色 外面に黒斑有り
第28図29 図版14-29	土師器 環	完形	□11.4 高7.1	貯蔵穴付近覆土中	口縁部と体部の境はほぼ見られず、調整により区別される／口縁部は直線的に外反する／底部は丸底風となる／口縁部外面下に粘土紐が見られる／内面の一部に赤斑状の痕跡が見られる、外面の一部に黒斑状に煤ける部分と薄っすらと赤斑される部分が見られる／在地系	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ後、部分的に仕上げに磨きが施される／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後、口縁部上端を中心にミガキを施す	砂粒・小石・金雲母・角閃石細粒を含む	にぶい橙色を基調とする
第28図30 図版14-30	土師器 環	90%	□11.3 高5.0 底5.5	炉付近覆土中	口縁部と体部の境は僅かに段をもつ／口縁部は直立する／体部は外傾して立ち上がる／底部は平底風となる／内面中央が凸状盛り上がる／外面の一部に薄く赤化した部分がある／在地系	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ミガキ	砂粒・小石・茶褐色粒子、角閃石細粒を含む	にぶい黄橙色を基調とする
第28図31 図版14-31	土師器 環	40% (器体に歪みがあるか)	□12.3 高6.0 底3.8	中央から西側覆土中に散在	口縁部と体部の境は僅かに稜をもつ／口縁部は外反する／体部は外傾して内湾気味に立ち上がる／底部は平底となる／内外面部分的に煤ける。	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	橙色を基調とする
第28図32 図版14-32	土師器 環	60%	□11.4 高7.0	南コーナー覆土中	口縁部と体部の境は稜による／口縁部は直立し、上端は緩やかに外反する／底部から体部は丸底風となる／外面の一部に黒斑状に煤ける／在地	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後部分的なミガキを施す	砂粒・小石・茶褐色粒子、角閃石細粒を含む	にぶい黄橙色を基調とする
第28図33 図版14-33	土師器 環	70%	□10.5 高8.8 底3.8	東側覆土中	口縁部と体部の境は稜による／口縁部は内傾する／体部は丸みをもって立ちあがる／底部は平底となる	内面：口縁部下まで横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り、一部ミガキが見られる	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	にぶい橙色を基調とする
第28図34 図版14-34	土師器 環	完形	□9.8 高3.8	P3とP8の間床面上 北側覆土中	口縁部と底部の境は調整の別による／口縁部は直立する／底部は丸底となる／内面の一部に最終段階のナデによる補修痕跡／畿内系暗文土器	内面：口唇内側は小さく内傾、口縁部横位ミガキ後、口唇以下を中心に放射状暗文磨き、／外面：口縁部横ナデ後ミガキ、以下指頭押捺による成形痕	砂粒・小石を含む	橙色
第29図35 図版15-35	土師器 鉢	40%	□24.4 高13.0 底7.5	中央から南側ほぼ床面上	体部下半から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁部は外反する／底部に木葉痕	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後部分的にナデ（スリップか）	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	にぶい橙色を基調とする
第29図36 図版15-36	土師器 丸甕	40%	□20.8 高29.5	西側床面上から覆土中に散在	胴部上半に最大径を持ち口縁部は「コ」の字状／在地系	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後上部は横方向、中位付近は縦又は斜位にナデ（スリップか）後ミガキ、遺存する下部は削りのまま	砂粒・小石・角閃石細粒を含む	にぶい橙色を基調とする

第8表 76号住居跡出土遺物一覧（2）

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第29図37 図版15-37	土師器 甕	60% (口縁部は欠損が大きい)	口16.4 高37.5 底6.0	炉付近覆土中	復元実測では胴部中位付近に最大径を持ち、口縁部は外反する／底部に木葉痕／外面中位から底部にかけて部分的に煤ける／在地系	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後上部は縦位中位以下は粗く斜位にナデ	砂粒・角閃石細粒含む	にぶい橙色を基調とする
第29図38 図版15-38	土師器 甕	30%	口20.7 高[19.5]	西側P 3付近覆土中	胴中位以下を欠失するが口縁部に最大径をもつと想定され、口縁部は大きく外反する／在地系	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ (スリッパか)	砂粒・小石・角閃石細粒含む	にぶい橙色を基調とする
第29図39 図版15-39	土師器 甕	30%	口20.8 高[15.0]	東側と西側覆土中に散在	胴中位以下を欠失するが口縁部に最大径をもつと想定され、口縁部は大きく外反する／在地系	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後頸部は横位ナデ、中位付近は縦方向のナデ (スリッパか)、その後ミガキか	砂粒・小石・金雲母・角閃石細粒含む	胎土はにぶい橙色を基調とする
第29図40 図版15-40	土師器 甕	20%	口20.8 高[15.1]	P 2・P 7付近覆土中	胴中位以下を欠失するが口縁部に最大径をもつと想定され、口縁部は大きく外反する／在地系	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後斜位ナデ	砂粒・小石・茶褐色粒子・角閃石細粒含む	胎土はにぶい橙色を基調とする
第29図41 図版15-41	土師器 甕	10%	口20.8 高[15.2]	西側P 3付近覆土中	胴中位以下を欠失するが口縁部に最大径をもつと想定され、胴部は遺存する上半が僅かに膨らみ底部に向かってつぼまる、口縁部は大きく外反する／遺存する外面胴部は黒彩の可能性もある／在地系	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦位ヘラ削り後ナデ、その後横位のミガキか	砂粒・小石・茶褐色粒子・金雲母・角閃石細粒含む	外面：褐灰色 内面：にぶい褐色
第30図42 図版15-42	土師器 甕	75%	口32.8 高30.9 底11.6	中央付近床面上～床下	筒抜け式／口縁部に最大径を持ち、胴部は上半が僅かに膨らみ緩やかにすぼまる、口縁部は若干くの字状に屈曲して外反する／外面は大きく黒斑する部分と橙斑する部分が見られる	口縁部内外面：横ナデ、以下内面はヘラナデ後中下位以外をミガキ、外面はヘラ削り後ナデ、その後上半を中心に所々ミガキ	砂粒・小石・角閃石細粒含む	にぶい橙色を基調とする
第30図43 図版15-43	土製品 支脚	80% (詳細は不詳)	—	東側覆土中	支脚／現存高14.7cm・下底径9.0cm／中心部は下部まで穿孔される／底面は部分的に薄く剥離し僅かに木葉状の痕跡が確認される／外面は薄っすらと白味を帯びる	表面は全面指頭痕がみられ中央付近は手で握ったような痕跡である	砂粒・金雲母・角閃石細粒含む	にぶい橙色を基調とする
第30図44 図版15-44	石製品 磨石	—	—	P 3とP 7の間床面上	長さ17.9cm・幅4.8cm・厚さ5.6cm・重さ795.0g／全体に磨り痕がみられ頂部に敲打痕、基部周辺を中心に凹	—	砂岩	—

第8表 76号住居跡出土遺物一覧 (3)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第33図 1 図版16-1-1	須恵器 坏	胴部～底部破片	高[1.5] 底7.5	南側覆土中	内底面中心部は強く窪む／東金子窯製品か	ロクロ成形／底面に糸切り離し痕が残る	砂粒・橙色粒子・小石少量含む	にぶい橙色
第33図 2 図版16-1-2	須恵器 坏	口縁部破片	高[3.9] 厚0.5	覆土中	口縁は直線的／東金子窯製品か	ロクロ成形／胴部内面のロクロ目が顕著に見られる	砂粒・褐色土粒	橙色
第33図 3 図版16-1-3	土師器 甕	口縁部～胴部破片	口(29.6) 高[9.9]	東側床面上	口縁は強く屈曲し、口唇端面は1段窪み、下端がやや張り出す／胴部はなだらかに膨らみ最大径を測る／常陸または常総型	口縁内外面横位ナデ、以下内面は横位ヘラナデ、外面はヘラ削り後縦位・斜位のヘラナデ／内外面に指頭痕が多数観察される	砂粒・白色・赤褐色粒子含む	にぶい橙色

第9表 81号住居跡出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第37図 1 図版16-2-1	須恵器 蓋	80%	口15.8 高4.3	北側床面上に散在	口縁は波状に歪む／鈕は擬宝珠形で、1/4程度欠損／口縁端部は僅かに内湾する／外面の胴部中位に「山田二」の墨書／東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は左回転／鈕周辺はヘラ削り調整	砂粒多量・小石少量含む	浅黄褐色
第37図 2 図版16-2-2	須恵器 蓋	60%	口15.7 高3.7	北側床面上	鈕は扁平な擬宝珠形で、口縁端部は僅かに内湾／東金子窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は左回転／天井外面に糸切痕が残る、周辺の肩部にヘラ削り調整	砂粒・白色粒子多量、小石わずかに含む	灰黄色
第37図 3 図版16-2-3	土師器 甕	口縁部～胴部破片	口17.8 高[15.3]	カマド内覆土中	口縁は強く外反、胴部上方は口縁と同値であり、最大径を測る／外面に薄っすら煤付着／武蔵型	口縁内外面は横位ナデ以下横位ヘラナデ、外面は斜位ヘラ削り	砂粒・石英・雲母・茶褐色粒含む	にぶい赤褐色
第37図 4 図版16-2-4	土師器 甕	口縁部破片	口20.8 高[7.0]	53P付近床面上	口縁は外反し、胴部との境に弱い稜を有する／いわゆる武蔵型	口縁内外面は横位ナデ、外面には横位の連続した刻みが残る／以下内面は横位ヘラナデ、外面は横位ヘラ削り	砂粒・石英・雲母含む	灰褐色

第10表 82号住居跡出土遺物一覧 (1)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第37図5 図版16-2-5	土師器 甕	口縁部破片	□13.0 高[4.9]	53P付近床面上	口縁は緩やかに外反する／口縁と胴部の間に弱い稜を有する／いわゆる武蔵型	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は横位ヘラナデ、外面は横位ヘラ削り／いわゆる武蔵型	砂粒・石英・雲母含む	にぶい橙色
第37図6 図版16-2-6	土師器 甕	底部破片	高[8.9] 底6.6	カマド正面覆土中	底部から胴部は直線的に外傾し、上方は内湾気味に立ち上がる	内面は斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後ナデ／いわゆる武蔵型	砂粒・茶褐色粒多量含む	にぶい褐色
第37図7 図版16-2-7	鉄製品 刀子か	全形	—	西側壁溝内床下	長さ13.8cm・幅1.4cm・厚さ0.6cm・重さ12.2g／全面錆に覆われ、部分的に錆ぶくれも目立つ／刀身と茎の断面は長三角形、茎の断面は長方形である	—	—	—

第10表 82号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第42図1 図版16-3-1	須恵器 蓋	天井部～口縁部15%	高[2.5] 底18.8	南コーナー床面上	天井から口縁にかけ僅かに弓なりに成形され、口縁端部は直角に垂下する／東金子窯製品	ロクロ成形／天井部はヘラ削り調整	白色砂粒多量含む	内面：黄灰色 外面上部：灰黄褐色 下部：黒褐色
第42図2 図版16-3-2	須恵器 環	底部片	高[1.1] 底6.4	カマド正面覆土中	胴部は緩やかに立ち上がる／南比企製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部に糸切り難し痕が僅かに残り、外周はヘラ削り調整／底面に粘土の削り屑が付着	砂粒多量、石英・白色針状物質含む	灰白色
第42図3 図版16-3-3	須恵器 環	完形	□(11.8) 高4.0 底6.8	南側壁溝付近覆土中	胴部は僅かに内湾しつつ外傾する／口唇内側がやや薄く調整される／胴部から底面にかけ火傷が見られる／東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部に糸切り難し痕が残り、外周はヘラ削り調整	細礫を少量含む	灰黄色
第42図4 図版16-3-4	須恵器 環	口縁部～底部30%	□12.3 高3.9 底7.0	西側壁溝付近覆土中	胴部は直線的に外傾し、口縁部は僅かに外反する／内底面に煤付着／南比企製品／H-IV期	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部に糸切り難し痕が残り、外周はヘラ削り調整	白色砂粒多量、白色針状物質含む	灰オリーブ色
第42図5 図版16-3-5	須恵器 環	底部片	高[1.0] 底7.2	西側覆土中	胴部は底面から緩やかに立ち上がる／東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部に糸切り難し痕が残り、外周はヘラ削り調整が2段にわたり施される	砂粒・小石含む	灰白色
第42図6 図版16-3-6	須恵器 環	口縁部～底部片	□11.8 高3.6 底6.8	中央覆土中	胴部はやや腰が張り、直線的に外傾する／底部は平底／東金子窯製品	ロクロ成形／底面に糸切り難し痕が残る	砂粒・白色粒多量、小石少量含む	灰色
第42図7 図版16-3-7	須恵器 壺	胴部～底部破片	高[9.8] 底(9.1)	南側覆土中と床面上	ロクロ成形／底面外周にヘラ削り調整痕が残る／東金子窯製品	胴部内面にヘラナデと多数の指頭圧痕が見られる／外面下部にも指頭圧痕／内外面共に自然釉が付着、特に外面は艶がある	砂粒・白色粒多量、小石わずかに含む	外面：オリーブ黒色 内面：灰色
第42図8 図版17-1-8	土師器 台付甕	口縁部～胴下部片	高13.1 底[13.2]	カマド右袖付近床面上	口縁は緩やかに外反する／胴部中央部で最大径を測る／胴部外面に煤付着／いわゆる武蔵型	口縁部内外面横位ナデ、以下内面は横位ヘラナデ、外面は横位ナデと指頭押圧が施され、下部は斜位のヘラ削り	細粒砂・白色砂粒含む	外面：褐色 内面：暗褐色
第42図9 図版17-1-9	土師器 甕	口縁部～底部80%	□20.7 高27.1 底3.9	カマド内及びカマド周辺と南側覆土中と床面上に散在	口縁部で最大径を測る長胴甕／口縁は緩やかに外傾し、端部は僅かに内湾／胴部中位は丸みを持ち、下位でやや括れて底部に至る／胴部外面に煤付着／いわゆる武蔵型	口縁部内外面横位ナデ、以下内面横位ヘラナデ、外面は縦位・斜位のヘラ削り後ナデ調整	細粒砂・長石・雲母含む	橙色
第42図10 図版17-1-10	土師器 甕	口縁部～胴部片	□13.5 高[8.1]	南東側床面上	口縁は緩やかな「コ」の字形を呈す／胴部は丸みが強く、中央付近で最大径を測る／内外面に煤付着／いわゆる武蔵型	口縁内外面は横位ナデ、外面には連続した2段の指頭圧痕も見られる／以下内面は横位のヘラナデ、外面は横位→斜位のヘラ削り	砂粒・石英・雲母多量含む	暗赤褐色
第42図11 図版17-1-11	土師器 台付甕	口縁部片	□10.4 高[3.3]	南東側覆土中	小ぶりの台付甕／口縁は中位で強く屈曲し、外傾する／いわゆる武蔵型	口縁部内外面横位ナデ、内面に粘土接合痕が明瞭に残り、外面には強いヘラナデが見られる／以下内面は丁寧なナデ、外面は横位のヘラ削り	砂粒・石英・雲母・白色粒子含む	暗赤褐色
第42図12 図版17-1-12	土師器 台付甕	脚台接合部	高[5.8]	南側と北側床面上に散在	胴部は僅かに内湾しつつ立ち上がる／いわゆる武蔵型	内面は縦位のヘラナデ後丁寧なナデにより艶がある／外面は斜位のヘラ削り後、脚部との境目付近に横位ナデが施される	細粒砂少量、石英・角閃石わずかに含む	外面：明赤褐色 内面：黒褐色
第42図13 図版17-1-13	土師器 台付甕	脚台部	高[3.6] 底(9.3)	南側と南東側床面上	裾部は下方で大きく開く／底面と裾部の器壁は薄い／いわゆる武蔵型	内面は斜位の丁寧なナデ、外面は胴部との境に1条の沈線を巡らせ、以下は縦位のナデ	細砂粒少量、赤褐色粒子含む	にぶい赤褐色
第42図14 図版17-1-14	土師器 甕	胴下部～底部片	高[5.5] 底5.0	カマド内覆土中から煙道上	胴部は直線的に外傾し、底部は丸みをもつ／いわゆる武蔵型	内面は斜位のヘラナデ、外面は縦位の粗いヘラ削り	砂粒多量、雲母少量含む	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙色

第11表 83号住居跡出土遺物一覧

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第46図1 図版17-2-1	須恵器 坏	胴部～底部破片	高[1.9] 底5.8	カマド内覆土中	体部はわずかに内湾する／内底面中央はやや窪む／新開窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部には回転糸切痕が残る	雲母・砂粒含む	橙色
第46図2 図版17-2-2	須恵器 坏	底部破片	高[1.1] 底4.9	中央よりやや南側床面上	胴部は外反し、底面はやや上げ底／新開窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部は回転糸切痕が残る	小石・砂粒・石英含む	にぶい褐色
第46図3 図版17-2-3	須恵器 坏	底部破片	高[1.6] 底5.2	覆土中	内底面の外縁は窪む／内底面の調整からいわゆる「円柱造り」との関連を思わせる／新開窯製品か	ロクロ回転は右回転／内底面・底面共に回転糸切痕が残る／底面に「×」字状の窠記号が見られる	砂粒・白色粒子含む	にぶい黄褐色
第46図4 図版17-2-4	須恵器 坏	底部破片	高[1.2] 底5.8	覆土中	内底面の外縁は窪む／新開窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部は糸切痕が残る	砂粒・赤色粒子含む	にぶい橙色
第46図5 図版17-2-5	土師器 甕	口縁部～胴部破片	口9.7 高[5.9]	東側壁溝上層覆土中	口縁は直線的に外傾し、口唇部でさらに外反／口縁部で最大径を測る／胴部は上方が張り出す／外面は煤ける／いわゆる武蔵型	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ後、指頭による庄痕が見られ、外面は縦位のヘラ削りが粗く施される	砂粒・雲母含む	外面：黒褐色 内面：にぶい黄褐色
第46図6 図版17-2-6	土製品 土鉢	完形	—	覆土中	長さ1.8cm・幅0.8cm・孔径0.1cm・重さ1.4g／長楕円形／本体に対して斜位に穿孔される	表面は滑らかに調整される	砂粒少量含む	灰褐色

第12表 84号住居跡出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第53図1 図版17-3-1	須恵器 蓋	鈕～天井部片	高[2.7]	南西コーナー付近覆土中	扁平な擬宝珠状の鈕貼付／東金子窯製品	ロクロ整形、天井部周辺をヘラ削り調整	砂粒含む	浅黄色
第53図2 図版17-3-2	須恵器 坏	75%	口12.5 高4.9 底6.0	中央付近覆土中	胴部は緩やかに内湾しつつ外傾／口縁部はさらに外反し、歪みが強い／胴部外面に「万」の墨書が見られる／東金子窯製品	ロクロ回転は右回転／底部は糸切痕が残る	砂粒・小石含む	黄灰色
第53図3 図版17-3-3	須恵器 坏	口縁～底部片	口11.9 高3.6 底6.7	カマド左前方覆土中	体部は僅かに内湾しつつ外傾する／口縁内面に油煙の付着が観察される／東金子窯製品	ロクロ回転は右回転／底面に糸切痕が残る	小石・砂粒・黒色粒子含む	黄灰色
第53図4 図版17-3-4	須恵器 坏	70%	口11.4 高3.9 底5.6	北西側床下	口縁は強く外反する／胴部の稜が目立つ／内外面に薄く煤が付着／南比企製品／H-VIII期	ロクロ回転は右回転／底部は回転糸切痕が残る	砂粒・白色針状物質含む	黄灰色
第53図5 図版17-3-5	須恵器 坏	口縁～底部片	口(13.4) 高4.2 底(5.0)	カマド1左袖付近覆土中	器壁は薄い／胴部は大きく外傾し、口縁でさらに外反する／口唇部の一部に自然釉付着／東金子窯製品	ロクロ回転は右回転／底面は回転糸切痕が残る	白色粒子含む	灰色
第53図6 図版17-3-6	須恵器 坏	胴～底部破片	高3.2 底6.5	中央付近覆土中	胴部はわずかに内湾しつつ外傾する／東金子窯製品	ロクロ回転／底面には糸切痕が残る	砂粒・白色粒子多量含む	オリーブ灰
第53図7 図版17-3-7	須恵器 甕	口縁～頸部破片	口17.3 高[3.2]	地床炉付近覆土中	口縁部は強く外反し、口唇部は揃み出されるように整形される／東金子窯製品	内外面横位ナデ	小石・砂粒含む	灰黄色
第53図8 図版17-3-8	須恵器 長頸壺	頸部破片	高[7.5]	カマド2前方周辺覆土中	頸部は緩やかに外傾する／外面中に2本の平行沈線が巡る／東金子窯製品	ロクロ回転は右回転／内外面横位ナデ	白色砂粒・小石含む	灰色を基調とする
第53図9 図版18-1-9	須恵器 甕	口縁～頸部破片	口34.6 高[7.2]	炉付近覆土中	頸部は直線的に外反する／口唇上下端部は鋭角／外面は自然釉がかなり艶がある／東金子窯製品	内外面はナデ調整される	砂粒多量・小石含む	暗オリーブ灰
第53図10 図版18-1-10	須恵器 甕	頸部破片	高4.0 厚1.2	南側覆土中	頸部は外傾する／東金子窯製品か	ロクロ成形／内外面横位ナデ／外面は7本以上の櫛歯による波状文が施される	白色・褐色粒子多量含む	黄灰色
第53図11 図版18-1-11	須恵器 甕	底部破片	高[2.2] 厚1.5	中央より東側覆土中	胴部に向かって緩やかに立ち上がる／南比企製品	ロクロ成形／内面は自然釉がザラメ状に付着／外面は横位ナデ	砂粒・白色針状物質・白色粒子含む	外面：オリーブ黒 内面：灰褐色
第53図12 図版18-1-12	須恵器 甕	胴～底部破片	高[4.0] 底13.5	カマド1右袖付近覆土中	胴部は直線的に外反する	内面は横位ナデ、外面は横位ナデ後、叩き目が格子状に施される	砂粒・白色粒子多量含む	にぶい黄褐色
第53図13 図版18-1-13	灰釉 手付小瓶	口縁～肩部破片	口4.2 高3.9	中央より東側覆土中	口縁は緩やかに外反し端部で強く外反する／頸部は中ほど1カ所に把手の欠損が見られる	口縁内面と外面に灰釉が施される	砂粒含む	灰オリーブ
第53図14 図版18-1-14	土師器 甕	口縁～頸部破片	口18.8 高[5.0]	炉内及び北側床面上に散在	口縁は「コ」の字形に外反する／外面に煤付着／いわゆる武蔵型	口縁部内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面は横位ヘラケズリ調整	砂粒多量含む	にぶい赤褐色
第53図15 図版18-1-15	土師器 甕	口縁～頸部破片	口19.8 高5.0	南東コーナー覆土中	口縁は「コ」の字形に強く外反する／外面に煤付着／いわゆる武蔵型	口縁～頸部まで内外面は横位ナデ、外面には指頭庄痕が連続して施される	砂粒多量含む	橙
第53図16 図版18-1-16	土師器 台付甕	脚部破片	高2.0 底8.3	南側覆土中	「ハ」の字状で、裾部はさらに開く／内面の中心付近にまだらに油煙が付着	内外面横位のナデ	砂粒少量含む	にぶい赤褐色

第13表 85号住居跡出土遺物一覧（1）

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第53図17 図版18-1-17	鉄製品	不明	—	覆土中	器種不明／長さ4.7cm・幅4.4cm・厚さ0.4cm・重さ5.5g／弧線が交差した形状／3方は先端が欠損	断面は扁平な四角形	—	—
第53図18 図版18-1-18	鉄製品	全形	—	覆土中	針状の製品／長さ3.7cm・幅0.5cm・厚さ0.2cm・重さ1.1g／上方から下方に向かって細くなる	中位の断面は台形	—	—

第13表 85号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第62図1 図版18-2-1	須恵器 蓋	口縁部～天井部 破片 20%	□10.6 高4.1	地床炉1付近覆土中	口縁部は内湾しながら垂下する／口縁部外面に僅かに自然釉が付着する／湖西産、IV - 2後期	ロクロ成形／ロクロ回転は左回転／天井部外面は回転ヘラ削り調整	黄褐色粒子・黒色粒子含む	黄灰色
第62図2 図版18-2-2	土師器 杯	70%	□11.6 高3.8 底11.1	P7付近と北西側覆土中	いわゆる比企型環／口縁と底部の間に稜を有する／口縁はやや外反する／内外面赤彩／人間系土師器	口縁内外面は横位ナデ、以下内面はナデ、外面は粗いヘラ削り	砂粒・小石多量含む	橙色
第62図3 図版18-2-3	土師器 杯	80%	□10.8 高3.6	P8付近覆土中に散在	いわゆる比企型環／口縁と底部の間に稜を有する／口縁は直立し、口縁内面に浅い沈線を1条巡らせる／内外面赤彩／人間系土師器	口縁内外面横位ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削り後、稜直下に指頭圧痕が連続して施される	砂粒・小石含む	赤褐色
第62図4 図版18-2-4	土師器 杯	80%	□10.8 高3.5	炉1周辺と北側覆土中	いわゆる比企型環／口縁と底部の間に明瞭な稜を有する／口縁は直立気味に開き、口唇内側に沈線を1条巡らせる／内外面は赤彩で、底面の8割が黒彩／人間系土師器	口縁部内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	小石・砂粒・橙色粒子含む	赤褐色
第62図5 図版18-2-5	土師器 杯	70%	□10.5 高3.4	東側と北側覆土中	いわゆる比企型環／口縁と底部の間に明瞭な稜を有する／口縁は外反しつつ直立／内面と外面底部以外の部分に赤彩	口縁内外面は横位ナデ、口唇内面に幅約1mmの沈線がめぐる／以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り後ナデ	砂粒・小石わずかに含む	赤褐色
第62図6 図版18-2-6	土師器 杯	80%	□13.4 高5.1 底8.0	北西コーナーからP7付近覆土中	いわゆる続比企型環／深身のもの／底部から口縁まで丸みをもって立ち上がり、口縁は短く直立／口縁内側に1条沈線を巡らせる／内外面赤彩	口縁内外面横位ナデ、以下内面は丁寧なナデ、外面はヘラ削り	砂粒・赤色粒子含む	赤褐色
第62図7 図版18-2-7	土師器 杯	50%	□11.4 高3.7 底9.9	P6付近覆土中	有段口縁環／口縁と底部の間に稜を有する／口縁は厚みを持って外傾し、口唇部はさらに外反する／内外面は煤けているため黒彩と思われる／在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面ナデ、外面はヘラ削り調整と見られるが、器壁の剥落が著しく、図化は困難である	砂粒・石英含む	赤褐色
第62図8 図版18-2-8	土師器 杯	80%	□10.6 高4.0	P8付近覆土中	有段口縁環／口縁と底部の間に明瞭な稜を有する、口縁外面中ほどに2本の沈線を巡らせる／内外面黒彩／在地系	口縁内外面横位ナデ／以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	砂粒・石英含む	褐灰色
第62図9 図版18-2-9	土師器 杯	25%	□8.8 高2.4 底5.1	P3内覆土中	有段杯／口縁と底部の間に明瞭な稜を有する／口縁外面は膨らみを持ち、やや内湾しつつ外傾する／内外面黒彩／在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	砂粒・石英多く含む	にぶい橙色
第62図10 図版18-2-10	土師器 杯	80%	□9.7 高3.0 底5.7	中央から南側覆土中に散在	有段杯／底面と口縁の間に稜を有する／口縁はやや厚みがあり、直線的に外傾する／内外面黒彩／在地系	口縁内外面横位のナデ、以下内面は横位のナデ、外面はヘラ削り	砂粒多量に含む	外面：にぶい褐色 内面：黒褐色
第62図11 図版18-2-11	土師器 杯	略完形	□10.1 高3.2 底9.0	カマド左袖側と炉1付近覆土中	有段杯／口縁と底部の間に稜を有する／口縁は厚みを持ち、直線的に外傾する／内外面黒彩／在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	砂粒多量、小石わずかに含む	にぶい橙色
第62図12 図版18-2-12	土師器 杯	口縁部～底部 破片 50%	□10.0 高3.0	P3付近覆土中	有段杯／口縁と底部の間に明瞭な稜を有し、口縁中ほどに1条の沈線を巡らせる／口縁は直線的に外反／外面はうすすら煤けているため黒彩と思われる／在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	砂粒多量含む	にぶい褐色
第62図13 図版18-2-13	土師器 杯	75%	□11.6 高3.5 底10.0	P2付近覆土中	有段杯／口縁と底部の間に明瞭な稜を有する／口縁は直線的に外傾する／外面口唇下部に1条の沈線を巡らせる／内外面は薄く煤けているため黒彩と思われる／在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	砂粒多量・石英含む	にぶい橙色
第62図14 図版18-2-14	土師器 杯	75%	□11.1 高3.9	炉1とP3の間粘土土	有段杯／口縁と底部の間に稜を有する／口縁部は直線的に外傾する／内外面黒彩／在地系	口縁部内外面横位ナデ以下内面ナデ、外面ヘラ削り	砂粒・石英多量含む	外面：にぶい褐色 内面：暗赤褐色
第62図15 図版18-2-15	土師器 杯	50%	□11.3 高4.1	北東側覆土中に散在	有段杯／口縁と底部の間に稜を有する／口縁は僅かに内湾しつつ外傾する／内外面は薄く煤けているため黒彩と思われる／在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り後ナデ	砂粒・白色粒子多く含む	にぶい褐色

第14表 86号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第62図16 図版18-2-16	土師器 坏	口縁部～底部 破片	□11.7 高4.0	炉1とP3の間 粘土上	有段坏/口縁と底部の間に稜を有する/口縁部は直線的に外傾する/全体が煤けているため内外面黒彩であろう/在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り後ナデ	砂粒やや多く、石英・金雲母含む	橙色
第62図17 図版19-17	土師器 坏	75%	□11.2 高3.9	北側覆土中に散在	有段坏/口縁部と底部の間には稜を有する/口縁は厚みがあり、強く外反する/内外面黒彩/在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面はナデ、外面は粗めのヘラ削り	砂粒・石英含む	外面：にぶい橙色 内面：オリーブ黒
第62図18 図版19-18	土師器 坏	75%	□12.1 高4.0	西側と東側覆土中に散在	有段坏/口縁から底部までなだらかに移行/口縁部は僅かに外反する/内外面黒彩/在地系	口縁内外面横位のナデ、以下内面は横位のナデ、外面は粗いヘラ削り後ナデ	砂粒多量、小石わずかに含む	にぶい橙色
第62図19 図版19-19	土師器 坏	口縁部～底部 30%	□12.4 高3.9	中央から東側覆土中に散在	有段坏/口縁と底部の間に弱い稜を有する/口縁は直線的に外傾する/内外面とも煤けていることから黒彩と思われる/在地系	口縁内外面横位のナデ、以下内面は横位のナデ、外面はヘラ削り	砂粒多量に含む	灰褐色
第62図20 図版19-20	土師器 坏	75%	□12.0 高4.4	P7付近と貯蔵穴付近覆土中と床面上	有段坏/口縁部と底部の間には稜を有する/口縁は直線的に外反する/内外面とも煤けていることから黒彩と思われる/在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面は丁寧な横ナデ、外面は粗いヘラ削り後ナデ	砂粒多量、白色粒を少量含む	にぶい橙色
第62図21 図版19-21	土師器 坏	70%	□12.8 高4.9	カマド右袖上粘土上	有段坏/口縁部と底部の間には稜を持ち、口縁部は僅かに外反する/口縁端部は歪む/内外面はうすうす煤けているため黒彩であろう/在地系	口縁部内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面はヘラ削り	砂粒多量含む	橙色
第62図22 図版19-22	土師器 坏	70%	□14.3 高4.5	北西側覆土中に散在	有段坏/口縁と底部の間に稜を有する/口縁部は直線的に大きく開き、口唇部はさらに外反する/内外面黒彩/在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は丁寧な横ナデ、外面は粗いヘラ削り後ナデ	砂粒多量、赤褐色粒子少量含む	外面：灰褐色 内面：にぶい赤褐色
第62図23 図版19-23	土師器 坏	80%	□8.9 高4.9	P6付近覆土中	有段坏/深身のもの/口縁部との境には稜を有し、口縁部はやや内傾/内外面黒彩/在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ後指頭圧痕が残る、外面は細かなヘラ削りで丸みが調整される	砂粒多量含む	にぶい橙色
第62図24 図版19-24	土師器 坏	口縁部～底部 (略完形)	□10.8 高5.0	炉1付近覆土中	深身のもの/口縁から底部へ丸みを帯びて内湾し、口唇部は外反する/口縁から胴部はやや歪む/内外面黒彩/在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下ヘラナデ/外面は横位ナデ、以下ヘラ削りが施され、境目には指頭による圧痕が連続して見られる	砂粒少量、石英・雲母・角閃石わずかに含む	にぶい橙色
第62図25 図版19-25	土師器 坏	口縁部～底部 30%	□11.6 高5.0 底4.9	P6付近覆土中に散在	深身のもの/口縁部は直線的に外傾し、口唇部でさらに外反する/底部は平底/口縁部はやや歪む/内外面黒彩/在地系	内面は横位ナデ/外面は横位ナデ後、縦・横・斜位の細かな磨き調整が外面下方を中心に施される	小石・砂粒・石英含む	にぶい橙色
第62図26 図版19-26	土師器 坏	口縁部～底部	□14.0 高7.1	炉1上及び付近覆土中	深身のもの/口縁は外反し、底部との境に弱い稜を有する/内外面黒彩/在地系	口縁内外面は横位のナデ、以下内面は丁寧なナデ、外面はヘラ削り後横・斜位のヘラナデ/稜付近には指頭圧痕も見られる	砂粒多量、石英・金雲母わずかに含む	にぶい橙色
第62図27 図版19-27	土師器 坏	口縁部～底部	□13.9 高6.9	炉1上及び付近覆土中	深身のもの/口縁は外反し、底部との境に弱い稜を有する/内外面黒彩/在地系	口縁内外面は横位のナデ、以下内面は横位の丁寧なナデ、外面はヘラ削り後横・斜位のヘラナデ	砂粒多量、石英わずかに含む	内面は灰褐色で、外面はにぶい褐色
第62図28 図版19-28	土師器 器台	胴部～脚部 片	高[3.8] 底7.5	炉1付近粘土上	脚部は大きく歪み、脚部は短く直立する/胴部は内湾しながら立ち上がる	胴内面はナデと指頭圧痕が多く見られ、外面は横・斜位のヘラナデ/底面には粗い掻き目の調整痕が観察される	砂粒多量、赤褐色粒少量含む	にぶい橙色
第62図29 図版19-29	土師器 坏	口縁部～胴部	□17.0 高[5.3]	P7の付近覆土中	有段坏/口縁は強く外反し、胴部との境に明瞭な稜を有する/外面黒彩	口縁部内外面横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面は横位ヘラ削り	砂粒多量含む	内面：にぶい橙色 外面：オリーブ黒色
第62図30 図版19-30	土師器 鉢	略完形	□23.1 高14.9 底10.3	中央から東側及びP1覆土中に散在	胴部はやや扁平気味に潰れ、口縁も歪む/口縁は外反し、胴部との境に弱い稜を有する/内外面煤付着	口縁内外面横位のナデ口縁外面に指頭圧痕も見られる/以下内面は斜位のヘラナデ/外面は胴部に斜位のヘラ削り後、ヘラ磨き調整/底部付近は横位のヘラ削り	砂粒・石英多量含む	にぶい赤褐色
第62図31 図版19-31	土師器 甕	口縁部～胴部 片	□12.0 高[7.1]	東側覆土中に散在	胴部上方で最大径を測る小型の丸甕/口縁は緩やかに外反し、歪む/外面に薄く煤付着/在地系	口縁内外面横位ナデ、以下内面は斜位のヘラナデ、外面はヘラ削り後斜位のヘラナデ	砂粒多く含む	橙色
第63図32 図版19-32	土師器 甕	口縁部～底部 片 50%	□18.2 高14.5 底8.0	中央から南西側覆土中に散在	口縁部で最大径を測る小型の丸甕/口縁内側が肥厚し、外反する/外面に薄く煤付着/在地系	口縁部内外面は横位ナデ、以下内面は横位ナデ、外面は斜位のナデ	砂粒多量含む	橙色
第63図33 図版19-33	土師器 甕	口縁部～胴部 片	□20.5 高[23.9]	中央から北側覆土中と床面上に散在	胴部中央で最大径を測る丸甕/口縁は外反する/内外面煤付着/在地系	口縁内外面は横位ナデ/以下内面は縦・横位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後、縦・横位の丁寧なヘラナデ	砂粒・石英多量、小石少量含む	にぶい赤褐色
第63図34 図版19-34	土師器 甕	口縁部～底部 片 50%	□18.5 高32.0 底11.2	北側及びP1・P7覆土中と床面上に散在	胴部で最大径を測る丸甕/底面は丸みを持つ/在地系	口縁内外面は横位ナデ/以下内面は縦位のヘラナデ後斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後、横・斜位のナデ(スリップか)/底部周辺には指頭圧痕も見られる	砂粒多量含む	にぶい橙色

第14表 86号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第63図35 図版19-35	土師器 甕 (丸甕)	口縁部破片	□21.3 高[14.0]	P 8 付近覆土中	胴部で最大径を測る丸甕/口縁は外反する/外面に濃く煤付着/在地系	口縁内外面は横位ナデ/以下内面は縦・斜位のヘラナデ、外面は横・斜位のヘラ削り後丁寧なナデ	砂粒・石英多量含む	内面：にぶい 橙色 外面：黒褐色
第63図36 図版19-36	土師器 甕	口縁部破片	□21.6 高[7.2]	P 8 付近覆土中	胴部上方で最大径を測る丸甕/口縁は外反する/内外面に薄く煤付着/在地系	口縁部内外面は横位のナデ/以下内面は横位のナデ、外面は縦位のヘラナデ	砂粒多量混入	橙色
第63図37 図版19-37	土師器 甕	胴部～底部片	高[6.3] 底11.6	北西壁溝付近覆土中	丸甕/胴部は僅かに外反しながら外傾する/在地系	内面は斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後、ナデ(スリップか)/底部周辺のみ横位ヘラナデ	砂粒・白色粒子多量含む	にぶい橙色
第63図38 図版19-38	土師器 甕	口縁部～胴部片	□24.2 高[30.9]	中央から北側覆土中に散在	胴部上位で最大径を測る/口縁は強く外反する/外面に煤付着/在地系	口縁部内外面は横位のナデ/以下内面は斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後幅狭のヘラ磨き	砂粒・石英・黄褐色粒子多量含む	にぶい橙色
第63図39 図版20-39	土師器 甕	口縁部～胴部片	□19.5 高[22.0]	東側と北側覆土中に散在	胴部上位で最大径を測る/口縁は外反する/内外面に煤付着/在地系	口縁部内外面は横位のナデ/以下内面は縦・横・斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後ヘラ磨き/所々光沢を帯びる/口縁から胴部上方に指頭圧痕が観察される	砂粒・石英多量含む	灰黄褐色
第64図40 図版20-40	土師器 甕	口縁部～胴部片	□18.7 高[31.9]	炉1周辺とカマド正面付近覆土中	口縁部で最大径を測る長胴甕/口縁は外反する/内外面に薄く煤付着/在地系	口縁部内外面は横位のナデ/以下内面は横・斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後縦位の丁寧なナデ(スリップか)	砂粒・石英多量含む	にぶい橙色
第64図41 図版20-41	土師器 甕	口縁部～胴部片	□20.6 高[14.9]	P 8 と P 7 の周辺覆土中に散在	口縁部で最大径を測る長胴甕/口縁は外反する/在地系	口縁部内外面は横位のナデ/以下内面は縦・斜位のヘラナデ、外面はヘラ削り後斜位の丁寧なナデ(スリップか)/口縁部直下に連続した指頭圧痕が見られる	砂粒多量、小石少量含む	にぶい橙色
第64図42 図版20-42	土師器 甕	口縁部～胴部片	□18.7 高[11.0]	P10付近と南側覆土中	口縁部で最大径を測る長胴甕/口縁は外反し、歪む/在地系	口縁部内外面は横位ナデ/以下内面は斜位ヘラナデ、外面はヘラ削り後斜位のナデ(スリップか)	砂粒・石英多量含む	にぶい橙色
第64図43 図版20-43	土師器 甕	胴部～底部片	高[23.7] 底8.6	東側覆土中	底部から胴部上方に向かって緩やかに開く長胴甕/内外面に煤付着/在地系	内面は縦・斜位のヘラナデ、一部に指頭圧痕が見られる/外面は縦位のヘラ削り後、底面付近は横位のヘラ削り、さらに縦位の丁寧なナデが施される	砂粒・石英多量含む	にぶい赤褐色
第64図44 図版20-44	土師器 甕	胴部～底部片	高[24.5] 底8.2	炉1とP 3の間付近覆土中	長胴甕の胴部/底面は僅かに丸みを持つ/在地系	内面は横・斜位のヘラナデ/外面は底部付近が斜位、胴部が縦位のヘラ削り後、縦位の丁寧なナデ	—	にぶい橙色
第64図45 図版20-45	土師器 甕	胴部片	高[25.1]	北西側覆土中	長胴甕の胴部/胴部は緩やかな括れをもつ/在地系	内面は斜位のヘラナデ/外面は縦位のヘラ削り後丁寧なヘラナデ/胴部中ほどから下部にかけてヘラナデの中に等間隔の波板状圧痕が多数観察される	砂粒多量、小石わずかに含む	橙色
第64図46 図版20-46	土師器 甕	胴部～底部片	高[11.5] 底9.0	炉1周辺覆土中に散在	直線的に外傾する胴部/底面は平底/在地系	内面は斜位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後ナデ、底面周辺のみ横位のヘラナデ	砂粒多量、小石わずかに含む	内面：橙色 外面：褐色
第64図47 図版20-47	土師器 甕	胴部～底部片	高[10.7] 底7.5	中央とカマド左袖前覆土中	長胴甕/胴部は内湾しながら立ち上がる/在地系	内面は横位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後、縦位の丁寧なヘラナデ	砂粒・石英多量含む	にぶい橙色
第64図48 図版21-48	土師器 甕	口縁部～底部30%	□27.0 高28.0 底10.8	北西側覆土中に散在	筒抜け式/口縁で最大径を測り、底部に向かって緩やかにすぼまる/口縁部は強く外反する/内外面に煤付着/在地系	口縁部内外面は横位のナデ、口縁外面には指頭圧痕が等間隔で観察される/以下内面は縦位のヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後、縦・横位の丁寧なナデ	砂粒多量、小石少量含む	橙色
第65図49 図版21-49	土製品 支脚	完形	—	P 9 付近床面上	現存高さ15.6cm・上底径3.2cm・下底径5.5cm/形状は裾広がり/断面は円形	全体に丁寧なナデ調整/上下端部に横・斜位の刻みが施される	石英・チャート・長石含む	橙色
第65図50 図版21-50	土製品 支脚	完形	—	P 8 と炉1の間覆土中	現存高さ22.5cm・上底径5.7cm・下底径8.5cm/形状は裾広がり/断面は円形	縦位のヘラ削り調整後、上下端部中心に指頭による圧痕が多数見られる	砂粒・茶褐色粒子含む	黄褐色
第65図51 図版21-51	土製品 支脚	75%	—	カマド右袖上粘土土	現存高さ19.9cm・上底径4.7cm・下底径9.4cm/形状はやや裾広がる/断面は円形	縦位の粗いヘラ削り調整が施される/一部指頭圧痕もみられる	茶褐色粒子含む	橙色
第65図52 図版21-52	土製品 土玉	完形	—	貯蔵穴付近覆土中	長さ0.8cm・幅0.9cm・孔径0.4cm・重さ1.0g/円筒状で上下は平坦/上面の穴端が僅かに隆起	—	砂粒少量含む	暗灰黄
第65図53 図版21-53	土製品 土玉	完形	—	P 7 付近覆土中	長さ1.5cm・幅1.4cm・孔径0.2cm・重さ2.8g/いびつな球状で、穿孔もやや斜方向になされる	穿孔の断面は三角形/上面は粘土が裂けたような鋸歯状で、下面は平坦である	砂粒・赤褐色粒子少量含む	明褐色
第65図54 図版21-54	土製品 土玉	50%	—	貯蔵穴付近覆土中	長さ2.4cm・幅2.0cm・孔径0.5cm・重さ3.7g/球状の土製品が中心の穿孔を境に割れたもの	外面にはナデと斜位の刻みが施される/中位の両端から中心の上下方向の穿孔に向かってそれぞれ穿孔される	砂粒・赤褐色粒含む	にぶい褐色

第14表 86号住居跡出土遺物一覧(3)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第65図55 図版21-55	勾玉形 土製品	完形	—	カマド南側覆土 中	長さ2.7cm・幅0.8cm・厚さ0.8cm・重さ2.5g / 蒲鉾状の粘土の両端を屈曲させ、勾玉に似た形状	全体の2/3ほどの所にφ1mmの穿孔がなされる / 片穴の端部が僅かに隆起する	石英・白色砂粒含む	黒褐色
第65図56 図版21-56	勾玉形 土製品	完形	—	P 2の付近覆土 中	長さ2.4cm・幅0.8cm・厚さ0.8cm・重さ2.2g / 蒲鉾状の粘土の両端を屈曲させ、勾玉に似た形状	全体の2/3ほどの所にφ1mmの穿孔 / 穴の両端は楕円形に窪む / 片穴の端部が僅かに隆起する	砂粒含む	明褐色
第65図57 図版21-57	土製品 垂飾か	完形	—	貯蔵穴付近覆土 中	長さ3.2cm・幅2.1cm・厚さ2.1cm・重さ14.0g / 円筒状粘土の両端に指頭圧痕を連続して施され径1.4cmほどにすぼめられた形状 / 胴中央部3方から中心の縦位の貫通孔に横位の穿孔が施される	—	石英・白色砂粒含む	にぶい黄褐色
第65図58 図版21-58	土製品 紡錘車	完形	—	P 1の付近覆土 中	高さ2.5cm・上底径3.8cm・下底径2.4cm重さ43.1g / 上下面平滑で、側面はやや膨らみを持つ / 中心にφ5～6mmの穿孔	上下面には擦痕が多く見られる / 側面は上面周縁が横位のヘラ削り、下面周縁が縦位のヘラ削り調整	砂粒・黄褐色粒子含む	褐灰色
第65図59 図版21-59	泥岩	全形	—	覆土中	長さ2.1cm・幅2.6cm・厚さ0.9cm・重さ2.3g / φ3mmの穿孔が見られ、両面に煤けたような部分も見られる / 穿孔貝巢穴跡軟質泥岩	—	—	浅黄褐色
第66図60 図版21-60	石器 磨石	完形	—	貯蔵穴付近床面 上	長さ14.5cm・幅4.7cm・厚さ3.7cm・重さ352.0g / 細長い礫を使用 / 全面に擦痕・敲打痕・磨跡が見られる	—	—	—
第66図61 図版21-61	石器 磨石	下部欠損	—	P 8の付近覆土 中	長さ8.2cm・幅5.8cm・厚さ4.5cm・重さ322.5g / 下部欠損 / 扁平な礫を使用 / 前面に擦痕、頂部に敲打痕が観察される	—	閃緑岩	—
第66図62 図版21-62	石器 磨石	上部欠損	—	P 1の付近覆土 中	長さ7.5cm・幅6.0cm・厚さ3.7cm・重さ176.8g / 石英脈のある砂岩使用 / 表裏面と端面に擦痕・磨跡が見られる	—	—	—
第65図63 図版21-63	鉄製品 鏃	鏃身部	—	P 7の付近覆土 中	長さ2.2cm・幅3.2cm・厚さ0.4cm・重さ1.9g / 基部欠損 / 鏃身部の両端部に1.5mmの挟りが入る	—	—	—

第14表 86号住居跡出土遺物一覧(4)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第69図1 図版22-1-1	須恵器 杯	胴部～底部片	高[2.5] 底6.6	東コーナー覆土 中	胴部はわずかに外反する / 東金子窯製品	ロクロ回転は右回転 / 底部糸切り後、周辺ヘラ削り調整	砂粒・赤褐色粒子多量含む	にぶい褐色
第69図2 図版22-1-2	土師器 杯	胴部～底部片	高[2.7] 底7.1	カマド左袖前床 面上	胴部はやや内湾する / 内底面中位から中央に向かって凹む / 内面は黒色処理が施され、光沢を帯びる	ロクロ成形 / 底部は糸切後周辺ヘラ削り調整 / 内面横位の丁寧な磨き調整 / 外面横位のナデ、無彩	砂粒・白色針状物質多量、橙色粒子含む	外面：にぶい橙色 内面：黒色
第69図3 図版22-1-3	土師器 台付甕	脚台部片	高[3.2]	東コーナー覆土 中	胴部と脚の裾部欠損 / 脚は「ハ」の字状に開く / いわゆる武蔵型	胴部内面はナデ / 脚部内面の胴部付け根付近は横位ナデ、以下斜位のヘラナデ / 外面は胴部が縦位ナデ、以下縦位ヘラ削り後横位ナデ	砂粒・石英・褐色粒子多量含む	橙色

第15表 87号住居跡出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第79図1 図版22-2-1	須恵器 杯蓋	天井部～口縁部80%	□9.5 高3.4	貯蔵穴付近床面 上	天井部～口縁まで丸みを帯び、口縁部は内湾気味に垂下する / 湖西産、IV - 2期	ロクロ成形 / ロクロ回転は左回転 / 外面の天井部外縁はヘラ削り調整 / 天井部内面のロクロ目顕著	砂粒・長石含む	灰色
第79図2 図版22-2-2	須恵器 杯蓋	略完形	□9.6 高3.7	南東側覆土中に 散在	天井部から口縁まで丸みを帯び、天井と口縁の間に稜を有する / 稜と口縁内面に1条の沈線がめぐると湖西産、IV - 2期	ロクロ成形 / ロクロ回転は左回転 / 外面の天井部と天井部周辺は回転ヘラ削り調整	細粒砂・白色砂粒含む	外面：灰色 内面：灰褐色
第79図3 図版22-2-3	須恵器 杯蓋	肩部～底部50%	□9.6 高[3.6]	P 4・P 6付近 覆土中と床面上	天井部から口縁の境に弱い稜を1段有する / 天井部から稜まで丸みを帯び、口縁部は垂下する / 湖西産、IV - 2期	ロクロ成形 / 口縁内面に1条の沈線がめぐると湖西産、IV - 2期	白色砂粒少量、石英わずかに含む	外面：青灰色 内面：灰黄褐色

第16表 88号住居跡出土遺物一覧(1)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第79図4 図版22-2-4	土師器 杯	口縁部～底部	□13.7 高2.9	P4・P5付近 覆土中	いわゆる統比企型環ノ浅身のもの ノ口縁と底部の間に弱い稜を有する ノ口縁は外傾するノ内外面黒彩 ノ口縁内外面に油煙が少量付着	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は丁寧な横位ナデ、外面はヘラ削 り後ヘラナデ	砂粒・角閃石・雲 母少量含む	橙色
第79図5 図版22-2-5	土師器 杯	完形	□10.7 高4.0	貯蔵穴付近床面 上	口縁と底部の間に稜を有するノ口 縁は外面が膨らみを持ち、僅かに 外傾ノ内外面黒彩ノ在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は縦・横位のヘラナデ、外面はヘ ラ削り後ヘラナデ	砂粒・石英多量含 む	外面：橙色 内面：黒色
第79図6 図版22-2-6	土師器 杯	口縁部～底部	□11.0 高3.5	北東コーナー上 層覆土中	口縁と底部の間に稜を有するノ口 縁は僅かに外反しつつ外傾するノ 内外面薄く煤けているため、黒彩 と思われるノ在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は横位ナデ、外面は粗いヘラ削り	白色粒子・砂粒多 量含む	にぶい黄褐 色
第79図7 図版22-2-7	土師器 杯	略完形	□11.0 高4.2	カマド内覆土中	口縁と底部の間に稜を有するノ口 縁部は外傾し、底面中心部は薄く 成形されるノ内外面黒彩ノ在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は横位のヘラナデ、外面はヘラ削 り後ナデ	砂粒多量、石英含 む	外面：にぶ い橙色 内面：黒褐 色
第79図8 図版22-2-8	土師器 杯	完形	□10.0 高3.5	カマド内覆土中	口縁と底部の間に稜を有するノ口 縁は僅かに内湾しながら外傾する ノ口縁外面に極わずかに煤が付着 するノ在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は横位のヘラナデ、外面はヘラ削 り	砂粒、石英多量含 む	橙色
第79図9 図版22-2-9	土師器 杯	略完形	□9.0 高3.5 底4.5	カマド右袖奥粘 土中	口縁部と底部との間に稜を有し、 口縁部は直線的に外傾するノ内外 面は薄く煤けていることから、黒 彩されたと思われるノ在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は横位のヘラナデ、外面はヘラ削 り後横位ナデ、さらに指頭圧痕が 連続して施され、口縁直下は括れ る	砂粒、石英多量含 む	橙色
第79図10 図版22-2-10	土師器 碗	略完形 60%	□9.4 高4.5	P8上層とカマ ド左袖前方覆土 中と床面上	深身のものノ底面から口縁まで丸 みを持って立ち上がり、口縁は僅 かに外反する口縁と底部の間に弱 い稜を有するノ内外面は薄く煤け ていることから、黒彩と思われる	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は横・斜位のナデ、外面は横位の 細かなヘラ削り	細砂粒少量、石 英・チャート微量 含む	外面：赤褐 色 内面：明褐 色
第79図11 図版22-2-11	土師器 杯	略完形	□11.5 高4.8	南西側覆土中	口縁と底部の間、底面よりに弱い 稜を有するノ口縁は肥厚し、波状 に歪むノ内外面は薄く煤けている ことから、黒彩と思われるノ在地 系	口縁内外面は強めの横位ナデによ り、明瞭なナデ痕が残るノ以下内 面は横位ナデ、外面は稜を挟んで 底面の接地面まで粗いヘラ削りと ヘラナデ、接地面のみ横位のヘラ ナデ	砂粒多量、茶褐色 粒含む	にぶい黄褐 色
第79図12 図版22-2-12	土師器 高環	脚台部片	高[5.9]	西側と北東側の 床面上から覆土 中に散在	胴部との接合部に向かって緩やか に外反するノ破断面に粘土接合痕 が明瞭に残る	胴部内面は縦位のヘラナデノ外面 は縦位のヘラ削り後、幅狭のヘラ 磨き	細粒砂少量、長石 わずかに含む	にぶい橙色
第79図13 図版22-2-13	土師器 壺	80%	□(11.0) 高14.5	貯蔵穴付近覆土 中	胴部上方で最大径を測る壺ノ口縁 から頸部は僅かに外反しつつ上方 にのびるノ胴部中心から丸底の底 部までなだらかに移行するノ内外 面赤彩	口縁から頸部は内外面横位のヘラ ナデ、以下内面は横・斜位のヘラ ナデ、外面は胴部上方が横・斜位 のヘラナデ、胴部下方が横位の ヘラナデノ外面の器壁の剥落が著し い	細礫を少量、白色 粒子含む	外面：赤褐 色 内面：明赤 褐色
第79図14 図版22-2-14	土師器 甕	口縁部～胴部	□18.2 高[10.9]	北西側覆土中	胴部中ほどで最大径を測る丸甕ノ 口縁は丸みを持って外反するノ在 地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は横位ヘラナデ、外面はヘラ削り 後縦位・横位のヘラナデ	砂粒多く含む	にぶい橙色
第79図15 図版22-2-15	土師器 甕	口縁部～胴部	□19.5 高[25.6]	P1・P2内と 東側から南側床 面上の覆土中に 散在	胴部中ほどで最大径を測る丸甕ノ 口縁は丸みを持って外反するノ在 地系	口縁内外面は横位のヘラナデ、以 下内面は横・斜位の丁寧なヘラナ デ、外面はヘラ削り後、横・斜位 の丁寧なナデ(スリップか)	細粒砂少量、細礫 わずかに含む	にぶい橙色
第79図16 図版22-2-16	土師器 甕	胴下部～底部片	高[4.5] 底7.7	カマド内覆土中	丸甕ノ底面は平底ノ在地系	内面は斜位のヘラナデ、外面は縦 位のヘラナデ、底面周辺は粗い横 位ヘラナデ	砂粒・茶褐色粒多 量含む	にぶい橙色
第79図17 図版22-2-17	土師器 甕	胴部～底部片	高[4.6] 底7.1	カマド右袖前方 ほぼ床面上	胴部が緩やかに立ち上がる丸甕ノ 在地系	内面は横・斜位のヘラナデ、外 面は縦位のヘラ削り後ヘラナデ、 底部周辺は横位のヘラナデ	砂粒多量、石英・ 角閃石含む	褐灰色
第79図18 図版22-2-18	土師器 甕	胴部～底部片	高[2.7] 底9.2	カマド右袖前方 覆土中	丸甕ノ底面は丸みを帯びるノ在 地系	内面は斜位のナデ、外面は縦位の ナデ、底面の周囲は横位ナデ	砂粒・茶褐色粒多 量含む	外面：暗赤 褐色 内面：橙色
第79図19 図版23-19	土師器 甕	口縁部～胴下 部片	□22.0 高[35.7]	カマド右袖粘土 内	口縁で最大径を測る長胴甕ノ口縁 は強く外反するノ在地系	内外面横位のナデノ以下内面は多 方向のヘラナデ、外面は縦位のヘ ラ削り後ヘラナデ	砂粒やや多く、細 礫少量、石英をわ ずかに含む	橙色
第79図20 図版23-20	土師器 甕	口縁部～胴部 中	□20.5 高[18.0]	北東コーナー及 び中央・カマド 右袖覆土中と床 面上に散在	口縁で最大径を測る長胴甕ノ口縁 は強く外反するノ在地系	口縁内外面は横位ナデ、以下内面 は縦・横位のヘラナデ、外面はヘ ラ削り後ナデ(スリップか)	砂粒やや多く角閃 石・金雲母をわず かに含む	にぶい橙色
第79図21 図版23-21	土師器 甕	口縁部～胴下 部	□18.4 高[20.9]	カマド左袖前方 粘土中	口縁で最大径を測る長胴甕ノ口縁 は強く外反するノ在地系	口縁内外面は横位のナデ、以下内 面は横・斜位のヘラナデ、外面は 縦・斜位のヘラ削り後ナデ(ス リップか)	細粒砂・白色粒子 含む	浅黄褐色
第80図22 図版23-22	土師器 甕	口縁部～胴部	□20.6 高[22.3]	P6・P7の付 近床面上と覆土 中	口縁で最大径を測る長胴甕ノ口縁 は強く外反するノ在地系	口縁内外面は横位のナデ、以下内 面斜位のヘラナデ、外面ヘラ削り 後縦・斜位のナデ(スリップか)	細礫少量、石英・ 金雲母をわずかに 含む	明黄褐色

第16表 88号住居跡出土遺物一覧(2)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第80図23 図版23-23	土師器 甕	口縁部～胴部	口(18.4) 高[7.7]	貯蔵穴・炉・北 東壁溝上層の覆 土中と床面上	口縁で最大径を測る長胴甕／口縁 は強く外反する／在地系	口縁外面は横位のナデ、以下内面 は斜位のヘラナデ、外面はヘラ削 り後斜位のヘラナデ／頸部外面に 指頭圧痕がまがって見られる	砂粒多量、石英含 む	外面：灰黄 褐色 内面：橙色
第80図24 図版23-24	土師器 甕	口縁部～胴部 片	口(22.8) 高[10.7]	カマド右袖ほぼ 床面上	口縁で最大径を測る長胴甕／口縁 は強く外反する／在地系	口縁内外面横ナデ／以下内面は縦 位のヘラナデ、外面はヘラ削り後 丁寧なナデ（スリップか）	砂粒・石英多く含 む	橙色
第80図25 図版23-25	土師器 甕	口縁部～胴部	口(21.6) 高[6.2]	P 5 付近床面上	口縁で最大径を測る長胴甕／口縁 は強く外反する／口唇部は玉縁状 ／在地系	口縁部内外面横位ナデ、以下内面 は縦位のヘラナデ、外面は縦位ヘ ラ削り後ヘラナデ	石英・砂粒多量含 む	にぶい橙色
第80図26 図版23-26	土師器 甕	胴部～底部	高[28.6] 底8.6	P 7 付近床面上	胴部中位が張り出す長胴甕／在地 系	内外面横位のナデ、以下内面は 横・斜位のヘラナデ、外面は粗い ヘラ削り後粗いヘラナデ／底部周 縁のみ横位のヘラナデ	細礫少量、石英・ 雲母をわずかに含 む	橙色
第80図27 図版23-27	須恵器 蓋	口縁部～天井 部片	口(16.2) 高[2.2]	P 5 付近覆土中	胴部は直線的に口縁に至り、口縁 端部は内湾する／口縁外面端部と 内面に自然釉がまばらに付着した 痕が残る／東金子窯製品か	ロクロ成形	砂粒含む	にぶい黄橙 色
第80図28 図版23-28	須恵器 坏	口縁部～底部	口13.0 高3.9 底7.0	P 9 付近覆土中	やや腰が張り、口縁は強めに外反 する／東金子窯製品	ロクロ成形／底面に糸切り離し痕 が残る	白色砂粒多量、小 石わずかに含む	黄灰色
第80図29 図版23-29	須恵器 坏	口縁部～底部 片	口11.7 高3.9 底6.7	P 5 付近覆土中	口縁は直線的に外傾する／内底面 中央は薄く成形される／口縁内面 に少量の油煙付着／東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底面には糸切り離し痕が残る	砂粒多量、黒褐色 粒・小石わずかに 含む	灰黄褐色
第80図30 図版23-30	須恵器 坏	口縁部～胴部 片	口11.8 高5.0	南側覆土中	深身で器壁は薄手／胴部は直線的 に外傾する／東金子窯製品	ロクロ成形／外面のロクロ目がや や顕著	砂粒・白色粒子多 量、小石少量含む	灰白色
第80図31 図版23-31	須恵器 坏	口縁部～底部 片	口(11.3) 高3.5	P 3・P 7 付近 覆土中に散在	口縁部は直線的に外傾する／東金 子窯製品	ロクロ成形／内外面のロクロ目顕 著	砂粒・白色粒子多 量、小石少量含む	灰色
第80図32 図版23-32	須恵器 坏	胴部～底部片	高[1.5] 底7.3	P 4・P 5 付近 覆土中	胴部は僅かに外反し、底面は上げ 底状／東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底面には糸切り離し痕が残る	白色砂粒多量、小 石わずかに含む	灰色
第80図33 図版23-33	須恵器 坏	底部片	高[2.0] 底6.6	炉付近覆土中	胴部は直線的に立ち上がる／東金 子窯製品	ロクロ成形／底部は糸切り離し痕 が残る	砂粒・茶褐色粒・ 小石含む	灰白色
第80図34 図版23-34	須恵器 坏	胴部～底部片	高[1.5] 底6.6	P 7 と炉の間覆 土中	胴部は丸みを帯びて立ち上がる／ 東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底面には糸切り離し痕が残る／ 内底面にナデによる稜が1段巡る	砂粒多量、小石少 量含む	橙色
第80図35 図版23-35	須恵器 坏	胴部～底部	高[1.6] 底5.6	P 7 と炉の間覆 土中	胴部は緩やかに立ち上がる／外底 面中央付近はやや上げ底状／東金 子窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底面に糸切り離し痕が残る	砂粒・茶褐色粒子 含む	灰黄褐色
第80図36 図版23-36	須恵器 坏	底部	高[1.0] 底5.8	炉の上層覆土中	内底面の周縁はやや窪む／外底面 中央付近はやや上げ底状／東金子 窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底面には糸切り離し痕が残る	砂粒多量、小石わ ずかに含む	灰色
第80図37 図版24-1-37	須恵器 坏	底部	高[0.8] 底5.5	カマド内覆土中	底面は僅かに上げ底状／東金子窯 製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底面に糸切り離し痕が残る	白色砂粒多量、小 石わずかに含む	灰色
第80図38 図版24-1-38	須恵器 坏	胴下部～底部 片	高[2.3] 底5.0	P 5 付近覆土中	胴部は僅かに内湾しつつ立ち上 がる／東金子窯製品	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／底部糸切り離し痕が残る	砂粒・黄色粒子含 む	灰黄色
第80図39 20-39 図版24-1-39	灰釉陶 器 高台付 碗	底部片	高[1.9] 底7.4	P 9 付近覆土中	高台は直角に付く	底面には糸切り離し痕が僅かに残 る／内底面と外面の一部に灰釉を 施釉／内底面には重ね焼き痕も見 られる	微砂粒含む	灰白色
第80図40 図版24-1-40	須恵器 高台付 碗	底部	高[1.5] 底7.5	P 3 付近覆土中	高台は「ハ」の字状に開く／底面 は平底で、内面外縁に向かって薄 くなる／新開窯製品か	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転 ／内底面のロクロ目は顕著／外底 面には糸切り離し痕が残り、周辺 ヘラ削り調整が観察される	砂粒・金雲母多 量、赤色粒子僅か に含む	にぶい橙色
第80図41 図版24-1-41	須恵器 長頸壺	口縁部～頸部 片	口6.0 高5.5	P 6 付近覆土中	上方に向かって直線的に外傾し、 口縁部で外反しつつ開く／口唇内 面はやや内湾する／内面上方はそ ぼろ状、外面は全面に自然釉が掛 かり、艶がある	ロクロ成形／頸部の屈曲部内面に 粘土接合痕が見られる	砂粒・白色粒子含 む	外面：オ リーブ褐色 内面：黄灰 色
第80図42 図版24-1-42	須恵器 甕	口縁部片	口(24.3) 高[7.5]	P 8 と炉の間覆 土中	頸部は直線的に外傾し、口縁部は さらに外反する／口唇端部は平坦 で、下端部は外へ少し張り出す	ロクロ成形	砂粒多量、小石少 量含む	褐灰色
第80図43 図版24-1-43	土製品 土玉	完形	—	P 6 付近覆土中	長さ3.7cm・幅3.7cm・孔径0.6 cm・重さ47.8g／やや扁平な球状 ／上下端が僅かに欠損	全体は滑らかに整えられ、側面に 丸棒状工具による横位の圧痕が見 られる	砂粒含む	にぶい褐色
第80図44 図版24-1-44	石製品 丸玉	完形	—	P 1 とP 9 の間 床面上	長さ0.7cm・幅0.7cm・孔径0.25 cm・重さ0.78g／上下端面は平坦 に整えられ、中心に穿孔	全面丁寧に磨かれ、鈍い光沢があ る	—	黒色
第80図45 図版24-1-45	石製品 紡錘車	完形	—	P 6 付近覆土中	高さ1.5cm・上底径3.9cm・下底径 2.4cm重さ39.5g／上下面は平滑／ 側面はやや膨らむ／上表面に剥離 が見られる	側面に縦位の微細な擦痕が施さ れ、上面に多方向・強めの擦痕が 観察される	滑石製	オリーブ褐 色（赤褐色 結晶多く含 む）

第16表 88号住居跡出土遺物一覧（3）

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土 (石材)	色調
第80図46 図版24-1-46	鉄製品 釘か	完形	—	覆土中	長さ5.7cm・幅1.1cm・厚さ0.5cm・重さ4.8g／頭部は平坦に僅かに張り出す／先端は細く、「J」字状に屈曲する／断面は方形	—	—	—

第16表 88号住居跡出土遺物一覧(4)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第89図1 図版24-3-1	須恵器 坏	口縁部片	高[2.7] 厚0.5	88H北西コーナー付近覆土中	器壁は薄く、口唇部がやや強く外反する／東金子窯製品か	ロクロ成形／内外面横位ナデ	砂粒多量、茶褐色粒含む	灰色
第89図2 図版24-3-2	須恵器 坏	口縁部片	高[4.0] 厚0.5	覆土中	口縁部は僅かに内湾しつつ外傾する／東金子窯製品	ロクロ成形／内外面のロクロ目顕著	白色砂粒多量、小石わずかに含む	黄灰色
第89図3 図版24-3-3	須恵器 甕	口縁部片	口20.0 高[2.1]	84H南コーナー付近床面下	口縁は大きく外反し、口唇下端部が外へ張り出す／口唇端面には2本の沈線がめぐる／東金子窯製品	ロクロ成形／内外面横位ナデ／外面に自然釉の付着が見られる	白色砂粒多量、小石わずかに含む	灰色
第89図4 図版24-3-4	須恵器 甕	胴部～底部破片	高4.0 厚1.5	262土坑の西側覆土中	胴部は大きく外傾する／東金子窯製品	ロクロ成形／内外面に自然釉が付着し、外面は艶がある／外面の一部に細かいハケ目、底部との境に数か所の刻み目が観察される	白色砂粒多量、小石わずかに含む	灰色
第89図5 図版24-3-5	須恵器 坏	胴部～底部破片	高[1.9] 底4.5	覆土中	胴部と底面の境目が窪む	ロクロ成形／外面の摩滅が著しく、底面の成形は観察できない	砂粒・赤褐色粒多量含む	にぶい橙色
第89図6 図版24-3-6	須恵器 埴	胴部～底部破片	高[2.7] 底6.9	Dセク付近覆土中	胴部と底部の間に粘土接合痕が観察されるため、通常の底部ではなく円柱状の底部を意識した作りと思われる	ロクロ成形／底面に糸切り離し痕が残る	砂粒・褐色粒子含む	にぶい橙色
第89図7 図版24-3-7	須恵器 高台坏か	底部破片	高[1.4]	覆土中	高台は外へ開く	ロクロ成形／外底面に糸切り離し痕が残る、周縁はナデ調整	砂粒・雲母少量含む	にぶい橙色
第89図8 図版24-3-8	土師器 甕	口縁部破片	高[1.9]	84Hの南東側覆土中	口縁部は強く外傾する／口唇部は摘み出されるように成形される／常陸型または常総型	内外面横位のナデ	白色砂粒多量、小石わずかに含む	にぶい橙色
第89図9 図版25-1-9	陶器 甕	胴部～底部破片	高4.0 厚1.1	86Hカマド付近床面下	胴部は直線的に外傾する	胴部内外面横位ナデ、底面はへら削り調整	白色砂粒・小石多量含む	黒色
第89図10 図版25-1-10	陶器 甕	肩部破片	高[3.3] 厚1.0	88H北西コーナー付近覆土中	内傾する肩部で、外面は調整により屈曲する／常滑産	内面は横位ナデ、外面下端部に明瞭な平行叩き目が残る	砂粒・白色粒子含む	外面：灰白～黄灰色 内面：にぶい黄褐色
第89図11 図版25-1-11	鉄製品 釘か	全形	—	覆土中	長さ3.1cm・幅0.7cm・厚さ0.4cm・重さ1.5g／ほぼ全面を錆に覆われる／断面は方形に近い	—	—	—
第89図12 図版25-1-12	鉄製品 釘か	下部欠損	—	覆土中	長さ3.6cm・幅0.7cm・厚さ0.5cm・重さ3.0g／ほぼ全面を錆に覆われる／断面は方形に近い	—	—	—

第17表 14号溝跡出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第86図1 図版24-2-1	須恵器 坏	口縁部破片	高[3.5] 厚0.7	252号土坑上層覆土中	口縁部は僅かに丸みを帯びながら緩やかに外反する／口縁部は欠失後、油煙が内面に極わずか、外面に少量の付着が観察される	内面は横位の磨き調整後黒色処理／外面はロクロ目が顕著	砂粒・石英をわずかに含む	外面：橙色 内面：黒褐色
第86図1 図版24-2-2	須恵器 高台付埴	底部破片	高[1.9] 底(6.8)	287号土坑内24P中層覆土中	高台は「ハ」の字状に開き、端部でさらに外反する／内底面のロクロ目が顕著である	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／高台内面に僅かに糸切り離し痕が残る	砂粒・石英・雲母・小石含む	にぶい橙色

第18表 252・287号土坑出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第96図1 図版25-2-1	須恵器 坏	底部破片	高[0.7]	中央床面上	平底／端部が僅かに立ち上がる／内面黒彩	ロクロ成形／糸切り離し後、回転へら削り調整と思われる／内面は磨き調整	砂粒・石英・茶褐色粒含む	外面：にぶい橙色 内面：褐灰色

第19表 7号ピット出土遺物一覧

第4節 近世以降

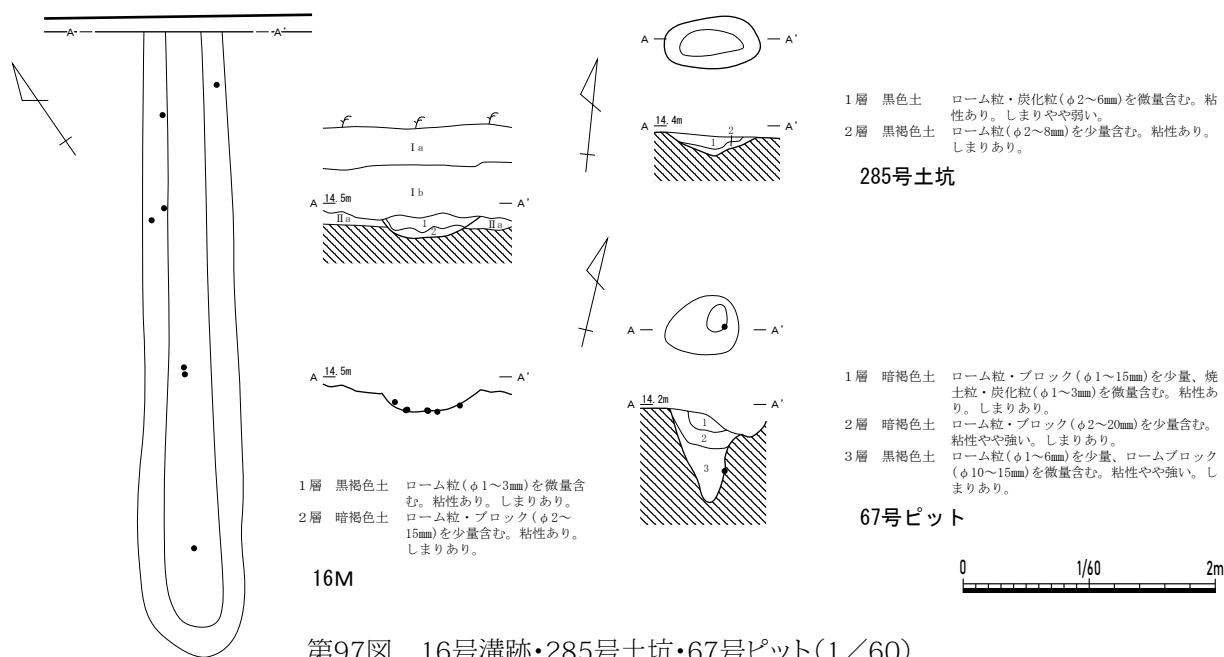
(1) 概要

近世以降の遺構としては溝跡1本、土坑1基、ピット1本が検出された。

(2) 溝跡

16号溝跡

遺 構 (第97図)



第97図 16号溝跡・285号土坑・67号ピット(1/60)

[位置] (P-5・6、O-6) グリッド。

[検出状況] 調査区北東端にて検出し、更に調査区外に延びる。

[構造] 平面形：溝状。断面形：やや丸みをもった浅い鉢形。底面はほぼ平坦。壁は30°前後で緩やかに立ち上がる。規模：長軸検出長4.92m / 短軸検出長0.65m / 深さ17cm。主軸方位：N-35°-E。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 地点上げ遺物で7点、一括遺物で19点出土した。瓦は実測不可の細片、その他は混入遺物で不掲載。

[時期] 覆土及び出土した瓦細片により近世以降と判断される。

(3) 土坑

285号土坑

遺 構 (第97図)

[位置] (L-8) グリッド。

- [構造] 平面形：隅丸長方形。断面形：底面は尖底気味。東壁、西壁とも30°前後で直線的に立ち上がる。規模：長軸75cm／短軸42cm／深さ14cm。主軸方位：N-80°-E。
- [覆土] 2層に分層できた。
- [遺物] なし。
- [時期] 覆土より近世以降と想定される。

(4) ピット

67号ピット

遺構 (第97図)

- [位置] (M-12) グリッド。
- [検出状況] 調査区南端で検出した。
- [構造] 平面形：不整円形。断面形：尖底形。規模：長軸60cm／短軸45cm／深さ79cm。
- [覆土] 3層に分層できた。
- [遺物] 地点上げ遺物として鉄釉摺鉢片1点が出土した。遺構外遺物として掲載。(第98図15)
- [時期] 覆土より近世と判断される。

第5節 遺構外出土遺物

(1) 概要

ここでは、試掘や表土から出土した遺物、遺構内であるが明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の遺物と区別し、遺構外遺物として扱うものである。

今回は遺構外出土遺物として、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器、古墳・平安時代の遺物、中近世以降の遺物に分類する。

(2) 縄文時代の土器 (第98図1～12、図版25-3-1～12)

1～3は早期末葉～前期初頭の土器、4は前期前葉羽状縄文系、5は前期後葉の浮島・興津系である。6は中期中葉勝坂式、7～9中期後葉加曾利EIV式、10は縄文の施文された加曾利E式である。11は後期初頭称名寺式、12は後期前葉堀之内式の注口土器か。

(3) 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器 (第98図13、図版25-3-13)

13は弥生時代の高環で、外面は細かなヘラ磨きが施される。

(4) 古墳・平安時代の遺物 (第98図14・16～18、図版26-14・16～18)

[土器] 14は平安時代の土師器小形甕の底部で、立ち上がり部に横位のヘラ削りが施される。

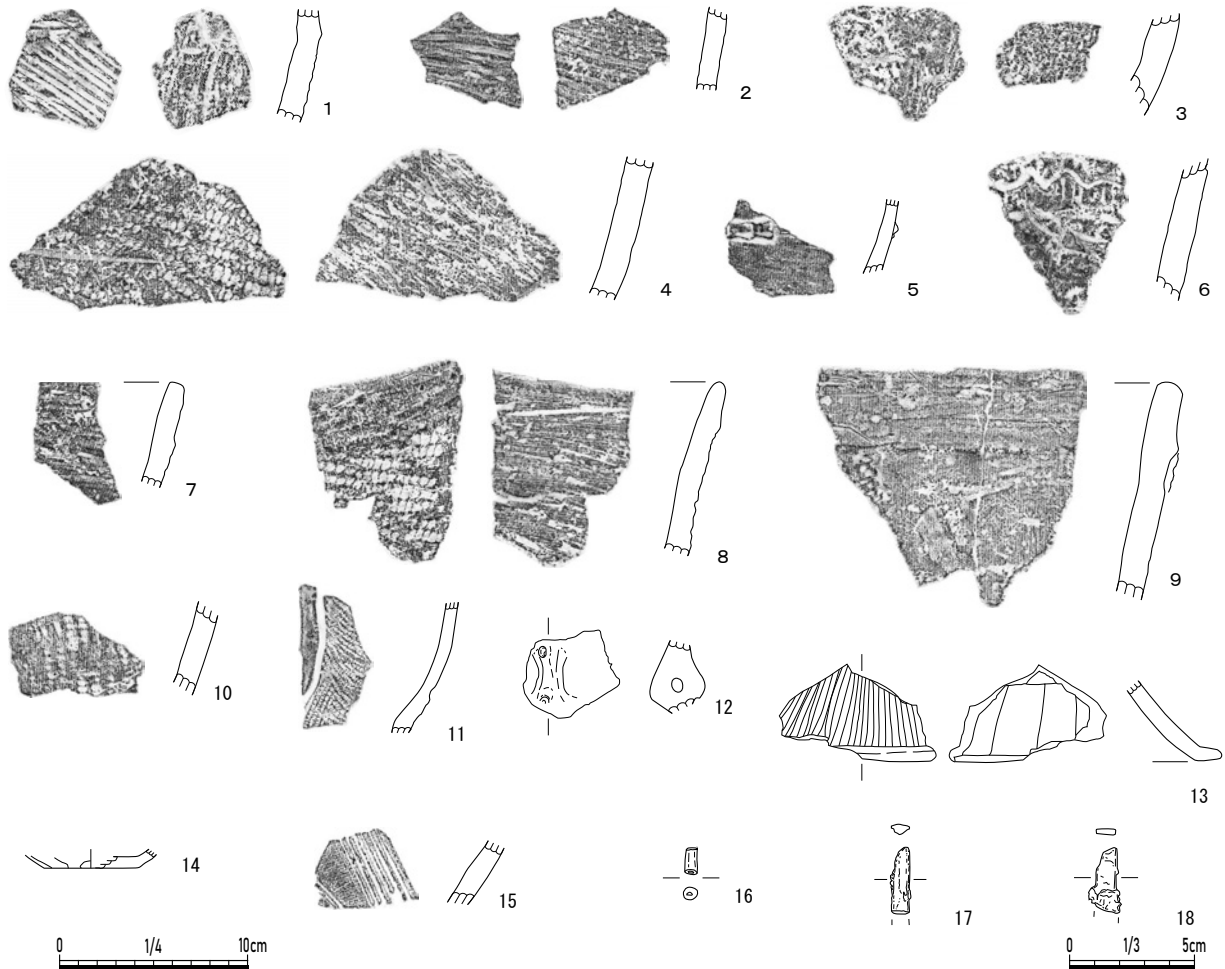
[土製品] 16は土製の管玉で、外面は滑らかに調整されている。古墳時代の所産か。

[鉄製品] 17・18は断面形状から刀子と考えられる鉄製品である。詳細な時代は不明ながら、検出遺構

の時代から古墳時代後期か平安時代の所産であろう。

(5) 中近世の遺物 (第98図15、図版26-15)

15は内外面に鉄釉が施される播鉢の小片。淡黄色のきめ細かい胎土から瀬戸美濃系である。戦国時代から江戸時代初頭のものか。



第98図 遺構外出土遺物 (1 / 4・1 / 3)

挿図番号 図版番号	器種	遺存部位	法量 (cm)	出土位置	特徴	調整	胎土	色調
第98図1 図版25-3-1	縄文 深鉢	口縁部破片	高[4.5] 厚1.0	試掘	器形は外傾する／早期末葉条痕文系	内面には斜位の条痕文／外面には斜位の微隆起線文の区画下に斜位の多条線が施文される	砂粒・石英・赤褐色粒子含む	外面：褐灰色 内面：明褐色
第98図2 図版25-3-2	縄文 深鉢	胴部破片	高[3.3] 厚0.8	14M	器形は外傾する／早期末葉条痕文系	内外面とも斜位の条痕文が施文される	砂粒含む	橙色
第98図3 図版25-3-3	縄文 深鉢	胴部破片	高[4.1] 厚1.2	試掘	器形は外傾する／尖底部に近い部位と思われる／早期	内外面無文	砂粒・角閃石・繊維含む	外面：橙色 内面：にぶい橙色
第98図4 図版25-3-4	縄文 深鉢	胴部破片	高[5.8] 厚1.1	14M	器形は外傾する／前期前葉羽状縄文系	縦位のLRR（正反の合）縄文を粗く施文	砂粒・小石・褐色土粒・繊維多量含む	にぶい橙色
第98図5 図版25-3-5	縄文 深鉢	胴部破片	高[3.0] 厚0.7	14M	器形は外傾する／前期後葉浮島、興津式系	横位の結節浮線文を貼付	砂粒含む	橙色
第98図6 図版25-3-6	縄文 深鉢	口縁部破片	高[5.3] 厚1.0	試掘	器形は外傾する／中期中葉勝坂式	縦位の連続した刻みの上に鋸歯状の沈線が横位施文される	砂粒・茶褐色粒含む	外面：橙色 内面：にぶい褐色
第98図7 図版25-3-7	縄文 深鉢	口縁部破片	高[4.2] 厚1.0	14M	器形は外傾する／中期後葉加曾利EIV式	口縁部無文帯と無文の胴部を微隆起線文で区画	砂粒・小石・茶褐色粒子含む	にぶい黄褐色
第98図8 図版25-3-8	縄文 深鉢	口縁部破片	高[7.0] 厚1.0	14M	緩やかな波状口縁／中期後葉加曾利EIV式	地文は縦位のLR縄文／微隆起線文により口縁部無文帯と胴部を区画	砂粒・黄色土粒含む	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色
第98図9 図版25-3-9	縄文 深鉢	口縁部破片	高[8.7] 厚1.5	306D	器形は外傾する／中期後葉加曾利EIV式	口縁と胴部は微隆起線文で区画し、縦位の隆帯を貼付／隆帯にLR縄文施文	砂粒・小石・黄色土粒含む	にぶい橙色
第98図10 図版25-3-10	縄文 深鉢	胴部破片	高[3.5] 厚0.9	6FP	器形は外傾する／中期後葉加曾利E式	LR縄文縦位施文	砂粒・小石含む	にぶい橙色
第98図11 図版25-3-11	縄文 深鉢	胴部破片	高[5.2] 厚0.7	85H	瓢形の深鉢胴部／後期初頭称名寺式	RL縄文の縦・横位施文された地文に弧状の磨消縄文区画	砂粒含む	にぶい赤褐色
第98図12 図版25-3-12	縄文 注口土器	頸部破片	高[3.2] 厚2.2	試掘	「く」の字状に屈曲する頸部／橋状の把手が付く／後期前葉堀ノ内式	内外面無文／橋状把手の上下端部付近にはφ4mmの盲孔が穿たれる	砂粒多量含む	橙色
第98図13 図版25-3-13	弥生 高環	脚部破片	高[3.8] 厚0.6	14M	裾部は「ハ」の字状に開き、端部は外側へ強く屈曲して接地する	内面は縦位のヘラナデ、外面は縦位の細かなヘラ磨き／裾部は内外面とも横位ナデ	赤色粒・砂粒含む	にぶい橙色
第98図14 図版26-14	土師器 甕	底部	高[1.0] 底5.0	試掘	平底	内面は横位ナデ、外面は横位のヘラ削り	砂粒多量含む	にぶい橙色
第98図15 図版26-15	陶器 播鉢	胴部破片	高[2.5] 厚0.8	67P	瀬戸美濃系鉄釉播鉢／櫛目は8本以上か	ロクロ成形	混ざりなくきめ細かい土	胎土は淡黄色／内外面褐色釉
第98図16 図版26-16	土製品 管玉	完形	—	83H	長さ1.0cm・幅0.5cm・孔径0.1cm・重さ0.3g／円筒状の体部中央に穿孔される／穴の形状はやや扁平	表面は滑らかに調整される	微砂粒含む	にぶい橙色
第98図17 図版26-17	鉄製品 刀子	刃先のみ	—	表土一括	長さ2.7cm・幅0.8cm・厚さ0.4cm・重さ1.0g／刃先のみ残存／断面は扁平な方形	—	—	—
第98図18 図版26-18	鉄製品 刀子	刃先のみ	—	表土一括	長さ2.5cm・幅1.2cm・厚さ0.2cm・重さ1.8g／刃先のみ残存／断面は扁平な方形	—	—	—

第20表 遺構外出土遺物一覧

第4章 調査のまとめ

第1節 縄文時代

土坑19基、炉穴1基、ピット1本が検出された。19基検出された土坑については、径0.7～1.0m程度で略円形のものと同径2m強で楕円形はやや大形のものがあった。全ての遺構も含めたこの期の遺構分布では、14Mのほぼ北西側に散在するものとグリッドO～Q-8～10周辺にややまとまりをもつものであった。出土土器は小片で占められたが、その中でも早期末葉の条痕文系土器と中期後葉の加曾利E IV式土器（金子1996、細田2008）が目についた。前者の条痕文系土器については、遺構に伴わなかったが6FPの所在に関わるものの可能性がある。

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期

住居跡4軒、ピット1本が検出された。調査区の関係で区域外に延びるもの2軒、古墳時代後期以降の遺構に切られるもの1軒、全掘できた住居は1軒であった。このような状況から今次調査区での、出土遺物は総じて少ない。24Yは第131地点と今次第160地点の両方に及ぶが未だ全掘とはなっていない。今のところ双方の成果とも焼失住居であることを示している。また、31Yは極めて調査範囲が少なく、詳細が判明するのは未調査である西側に調査が及んだ折であろう。なお、粘土板炉を30Yで、赤色砂利層を30・32Yで検出している。

掲載した出土遺物について、触れておきたい。24Yでは、第131地点でS字状結節文が施される壺頸部、底部に木葉痕が残り外面に横位・斜位のハケ目調整がある壺胴部、沈線区画内に無節の斜縄文・円形赤彩文が施される壺頸部片、内外面とも赤彩され全面に丁寧なヘラ磨き調整が施される高坏が出土している。当第160地点では、胴中央に最大径を持ち口縁部が短く直立する内外面ヘラ調整を基調とする壺、内外面ともハケ目調整を基調とする甕胴部小片、閃緑岩製の磨製石斧刃部破片が出土した。時期としては、第131地点で想定された弥生時代後期末葉で齟齬は無いと思われる。

30Yでは外面に末端結節羽縄文＋横位RL縄文＋末端結節羽縄文を施す壺肩部片、口唇に連続した刻みを持ち内外面ハケ目調整のある口縁から胴下位までの甕片、内外面にハケ目調整が施される甕胴部片、閃緑岩製の破損した磨石が出土している。時期としては、壺肩部と甕の様相から弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭（比田井 1997、柿沼 2019）としておきたい。

32Yでは、胴中央付近に最大径を持ち下半は大きくすばまる器形で口唇に連続した刻み目を施し、外面はハケ目調整を基調として一部に指頭による圧痕が見られる台付甕、内外面ともヘラ調整で直線的にハの状に開く台付甕脚部、釘状の鉄製品が出土した。台付甕の様相から、時期としては弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭（比田井 1997、柿沼 2019）としておきたい。

第3節 古墳時代後期～平安時代

第160地点報告の中心的な時代である。古墳時代後期の住居跡3軒、古墳時代以降のピット10本、平安時代の住居跡6軒、平安時代の掘立柱建築遺構1棟、平安時代の土坑4基、平安時代以降の土坑37基、ピット54本、溝跡2本が検出された。そうした中で、まず住居の構成など総論的な部分について述べ、順次各論的に成果、注目点或いは課題点などについて該当する住居毎に触れることとしたい（註1）。

（1）古墳時代後期の住居跡と構成について

遺構は、住居跡とピットから成っていた。76Hと86Hは主軸がN-25～32°-Wと北よりやや西に振られてほぼ同一方位であるのに対し、88Hは、N-10°-Wでそれより西に振れる幅が小さく異なる。86Hと88Hの位置関係はかなり接近し、上屋構造を想定するのはなかなか難しいが、同時に存在したものとするには判断に苦しむ位置関係である。出土遺物的には、それほど大きな時期差はない。カマドについては、当地点ではすべて当初は北カマドで、76Hでは北→東への作り替えが確認された。貯蔵穴はカマド右脇としている。柱穴は、いずれも8本（主柱穴4本、支柱穴4本）となる。また今回の3軒には、いずれも床面中央に地床炉が確認され、それぞれ鉄滓、椀型滓が僅かに出土している。ただし羽口や地床炉周辺の還元面など鍛冶を伺わせる状況は確認されず、その性格は不明である。

今次調査で確認された3軒は攪乱を受ける部分もあるが、ほぼ全容が判明し、その構造が窺える。仮に、それを市内中野遺跡で示唆された高麗尺（尾形 2001）に当てはめてみると、主柱穴間は、76・88Hで12尺（420cm÷35cm）、86Hは11尺（385cm÷35cm）で律することができるようだ。ただし、壁から柱穴までの距離を当てはめてみると一致をみなかった。これはそもそも3軒の平面プランが厳密に正方形ではないことに依る当然の帰結ではあるが（註2）、中野遺跡で想定された高麗尺（一尺=35cm）の使用が、市内の他遺跡である田子山遺跡でも追認できる可能性がある。中野遺跡の事例は、7世紀前葉から中葉であるので、引き続き良好な検出状況をとらえて検証していく必要がある。

（2）古墳時代後期の遺物について

76号住居跡出土遺物（第28～30図）

第131地点で北東側が（尾形・徳留・宮下 2015）、今次で南側の大部分を調査し北東コーナー以外全掘された。よって、第131地点出土土器と接合を試みたが、同地点の土器はカマド周辺から出土した完形の坏と土師器鉢の大形破片のみで、接合するものは無かった。

本住居跡から出土した遺物をまとめると、土器は全て土師器で赤彩されたいわゆる比企型坏（水口 1989、尾形 1999）、同じく赤彩され大形で深身の続比企型坏（富田 1992）、在地系で薄っすらと煤けたものも含めた黒彩で有段の坏、有稜の坏（註3）、在地系の浅身の無彩坏、在地系で無彩の深身と浅身の坏（尾形 2000・2005・2006）、在地の不定形な坏形土器、畿内系暗文坏（奈良国立文化財研究所 1978・西山1984・1985）、鉢、長甕、丸甕、甑（尾形 2001）からなる。その他に土製支脚と砂岩製磨石が出土した。その内、年代の指標となる小形の坏では、比企型坏が口径10.2～11.0cm、第131地点も含めた在地系黒彩と無彩の坏が9.7～11.7cmで概ね7世紀後葉から末葉の状況を示し、第28図34の畿内系暗文坏と11の続比企型坏からは8世紀初頭も視野に入る可能性がある（尾形 1999・2000）。大型

品の長甕については、第29図37が僅かに口縁部径が胴部径を上回りながらも胴部中位付近がふっくらと膨らみ古態を呈する（尾形 2001）。その他の長甕は最大部径を口縁にもち以下スムーズに底部に向かってつぼまる器形で坏の年代観とは矛盾しない。以上の土師器の様相からは、坏形土器、甕形土器いづれも尾形編年（尾形 2000・2001）の15期に概ね合致し、その時期は7世紀末葉～8世紀初頭としておきたい。やや古相を示す甕形土器については、この住居がカマドの作り替えが行われ一定の期間の使用が想定されたためと解しておきたい。

86号住居跡出土遺物と炭化種子（第60～66図）

出土遺物の構成は、須恵器では坏蓋、土師器では比企型坏、続比企型坏、薄ら煤けた黒彩で二段の有段口縁坏（田中 2004）、薄い茶褐色系の胎土をもつ黒彩の有段坏、薄ら煤けたものも含め黒彩の在地系有段・有稜の坏、短脚の高坏、鉢、丸甕、長甕、甑があった。土製品としては、土製支脚、土製模造品、土玉、紡錘車があり、石器として磨石があった。また、製塩及び塩の流通を伺わせる、いわゆる「穿孔貝巢穴跡軟質泥岩」（坂本 2015）が出土している。鉄関係では、鎌と椀形滓が出土している。その他に、モモを主体として一部スモモを含む260点余りの炭化種子の大量出土があった（第60図）。

まず土師器であるが、小形品の比企型坏の口径は10.5～10.8cm、在地系の黒彩坏では8.8～11.4cmで双方10cm代を中心に10cmを切る9cmや更に小型化を窺わせるようなもの（残存率1/4）も存在し、坏形土師の尾形編年（尾形 2000）の14～15期に相当する。続比企型坏は、口径13.4cm、器高5.1cmのやや大振り深身のタイプで坂戸市稲荷前遺跡A区SJ77号住居跡出土の資料に類似し7世紀末葉～8世紀初頭の様相と推定する（富田 1992）。長甕は、口縁部に最大径を持つもの、或いは底部に向かいスムーズにつぼまるものを中心に、一部胴中上位に最大径をもつ39・45があるが、これらも甕形土師の尾形編年（尾形 2001）の概ね14～15期に相当すると思われる。なお45は、器壁が極めて乾燥した段階での器面調整を示すロッキングの痕跡が顕著に認められた。同様の事例は市内城山遺跡42地点135H出土遺物に報告例がある（尾形・深井・青木 2005）。須恵器坏蓋は、湖西産と推定され1/5程度の残存率、口径は10.6cmで器形法量にぶれが有る可能性もあるが、同じく小型化が窺われる。後藤建一氏の湖西編年（後藤 2015）によるとIV期2に該当すると思われる。高坏は、上部を欠失するが明らかに短脚式で器高も極めて低いことが予想できる。これらを総合すると、7世紀末葉の時期を示しているよう。これらの坏類は、殆どが覆土中上層からの出土であるが、住居廃絶後ほどなく埋め戻された可能性も含み、当住居の時期を示しているものと見なしたい。

また当住居跡からは、発掘段階で268点の炭化種子の出土があり科学分析を行っている（付編 第2節参照）。それによると、大部分はモモの炭化種子で、数点のヤマモモが含まれるという。栽培種であるモモ自体や類する炭化種子の出土は、市内の発掘調査でも一定の頻度で出土が確認され、枚挙にいとまがない程である。なお、田子山遺跡では当地点から南東に約100m程離れた第5地点11H（佐々木・尾形 1992）からも大量のヤマモモの炭化種子が出土しており、周辺地域の特性となる可能性もあり、その出土を注視する必要がある。因みに、当住居跡から出土した炭化種子の放射性炭素年代測定の年代は、後段で述べるとおり7世紀第二四半期後葉から第三四半期前葉の値を示していた。

88号住居跡出土遺物（第83～85図）

出土遺物の構成は、古墳時代後期の遺物として、須恵器坏蓋、在地系の黒彩坏・無彩坏、続比企型坏、高坏、赤彩小型壺、丸甕、長甕、土玉、ガラス玉、石製紡錘車が出土した。また、覆土1・2層に相当する上位層より、9世紀後葉から10世紀代の須恵器蓋、坏、高台椀、小型長頸瓶、大甕、灰釉陶器

椀が出土している。

まず古墳時代後期の遺物であるが、在地系黒彩・無彩杯の口径は、やや変則的な器形のものを除くと10.0～11.0cmである。尾形編年（尾形 2000）の14～15期に該当する。4は薄らと赤彩の痕跡が下地にあり、その上に薄く煤けた黒彩処理を施すもので、口径13.7cm、器高は3.5cm、広義の続比企型杯の範疇で理解できるものと判断しておく（富田 1992）。13は、外面の器壁が荒れ剥落が激しく表面が不鮮明であるが、内面は赤彩が残っており、本来は全面赤彩された小型壺であろう。焼成は堅緻で所謂比企型の土器の胎土による。丸甕は全形を知るものはないが、14・15とも、口縁部径より胴中位径が勝ることが見て取れる。長甕は、いずれも口縁部径が最大となり、胴の上半が僅かに膨らむも、以下スムーズにつぼまり底部に移行するものである。甕及び丸甕とも尾形編年（尾形 2001）14～15期にあたる。須恵器杯蓋はいずれも湖西産と想定され、判明する口径は、9.5、9.6cmと小型化が更に進行した段階である。後藤建一氏の湖西編年（後藤 2015）で、IV期2に併行するものと思われる。以上の状況を総合すると、当住居跡の年代は、7世紀末葉のものとして推定しておきたい。

当住居からは、地点上げ遺物として116点、一括遺物としてはその倍以上となる平安時代の遺物も出土している。こうした事例は、市内では田子山遺跡第51地点56H（尾形・大久保・深井 2018）、城山遺跡第60地点215H（尾形・藤波・鈴木・中村 2008）でも検出されており、当住居では改めて平安期の遺物を抜き出し水平・垂直分布図を作成してみた（第77図）。結果としては、平安期の遺物は垂直分布では住居跡の上層でレンズ状に綺麗に分布し、水平分布では北東コーナー以外ほぼまんべんなく散在することが判明した。因みに、この垂直分布を、土層図（第75・76図）と対比してみると、ほぼ1層・2層と重なることが見て取れる。即ち、88Hが廃絶したのち、7世紀末葉から8世紀の初頭頃にかけて廃屋と化し、次第に自然埋没してゆく過程において9世紀後葉頃には未だこの住居跡は埋まり切っておらず、緩やかな皿状の窪みとなって残っていた可能性が指摘されよう。そこに周辺の居住者が廃棄場所として土器などを遺棄していった結果の積み重ねが水平垂直分布に表れていると思われる。出土した土器からは、こうした廃棄行為が10世紀頃までは続いていたことが推定される。

（3）奈良・平安時代の住居跡と構成

奈良・平安時代の集落については、時期的には大きく捉えれば8世紀後葉～10世紀中・後葉以降までのもので、住居跡、掘立柱建築跡、土坑、ピットなどからなっていた。10世紀段階以降の詳細は流動的で判然としない部分を含むが、当地点の主体は9世紀後葉から10世紀代で、遺跡全体としても同様の傾向が示唆されている（大久保 2018）。住居跡の占地は調査区（第6図1・2区）中央からやや北側に位置するものと南端調査区外へ延びるものがあり、主軸が不明なものも含むが、住居跡の掘込み自体は北から僅かに東へ振る一群と西へ振る一群がある。前者には、81・83・85H、6Tがあり、後者には、82・84・87Hがあつて更に南に隣接する第131地点（尾形・徳留・宮下 2015）に同じ方位指向をもつグループが展開している。出土遺物は多くはないが、厳密な時期比定は難しいが、同時存在の可能性の有る住居は81Hと85H程度で、カマドの造り替えは認められるが、この期の住居同士の切り合いはないようで、当地点では同時期に1～2軒程度の景観となるのかもしれない。住居プランはさまざまで、略正方形又は長方形で、若干歪みを呈し柱穴も無いが不規則なものも成っている。判明するカマドの位置は、東カマドか東から北へ作り替えたものが確認された。また所謂「隅カマド」が84Hで確認され同住居跡出土遺物とも整合している。

(4) 奈良・平安時代の遺物について

81号住居跡出土遺物 (第33図)

遺物は、僅かな出土であったが注目しておきたい遺物があるので触れておきたい。3は、所謂「常陸型甕（或いは常総型甕とも）」（佐々木 2007）と呼ばれるもので、市内では初めての出土である。当該資料が小片であるため、口径や角度については些か不安定要素があることを断っておきたい。口唇部を摘み上げ外面には凹面を作って段状となす。頸部は「く」の字に強く屈曲し緩やかに膨らみをもたせて胴上半に至る。体部外面はヘラ削りする。橙色系で酸化炎焼成気味であるが、硬質で硬緻な焼き上がりである。図示しないが同一個体の胴下部の破片も出土している。全体にこのタイプとしては厚手で、その特徴から10世紀を前後する頃のものであり、この段階では下総や下野南東部も視野に入り生産地も常陸産とは限定できないとのことである（註4）。また、14Mからも3と類似する口縁部小片（第89図8）が出土している。問題となるのは、その搬入ルートで、古代東海道と東山道武蔵路を結ぶ東西ルート、具体的には東の上遺跡方面から足立郡衙方面を結ぶルートが動脈として関わる可能性があるが、遺跡間を結ぶ支脈的なルートの詳細は不明である。既に志木市内では下総国方面からの土器流入が指摘されており（尾形・深井・青木 2009）（註5）、その関連が注視されよう。

82号住居跡出土遺物 (第37図)

須恵器椀蓋、土師器甕、鉄製刀子が出土している。出土遺物は少ないながら、土師器甕は口縁部の形態が判明し、いわゆるコの字口縁が確立する直前のもと思われる。東の上遺跡で煮沸具を系統的に扱った根本靖編年（根本 1999）に拠ればVからVI期の初頭にかけてのも推定される。また須恵器椀蓋1、2は、いずれも白色針状物質を含まず、天井部を厚く造り、特に2は砂粒を多く含むことから東金子窯産の可能性が高い。この段階の東金子窯（坂詰 1971、1984）は周知のとおり窯式に欠けるため仮に南比企窯の編年（渡邊 1990）を援用すると、椀蓋のため振れもあろうが、口径15cm代後半で鳩山窯跡群V期に相当する。以上を総合すると、当住居の年代は9世紀前葉のもので想定しておきたい。

また、この住居跡からは、墨書土器が出土している。上述1の須恵器蓋がそれで、天井部から折り返しに至る中間に横位の縦書きで「山田二」と判読した。「二」の続きは資料が欠損しており存在の可否は不明である。なお、当遺跡から柳瀬川を4kmほど遡った新座市大和田カミ遺跡で「山田」の墨書土器（川端 2018）が見つかった。

83号住居跡出土遺物 (第40図、付編第4節)

この住居跡からは、須恵器の蓋、坏、小型壺、土師器の甕、台付甕が出土している。須恵器坏は2～5が所謂底部周辺ヘラ削り調整が施され、6は底部回転糸切り後未調整である。産地は、2、4が白色針状物質（海綿骨針とも）を胎土に含むことから南比企産、その他は胎土に砂粒と小石を目立って含み総体として器壁厚く量感ある質感で東金子窯産と目される。回転実測を含むが口径、底径、器高の判明する3個体から鳩山編年（渡辺 1990）を援用して時期を求めると、口径は11.8～12.3cm、底径は6.8～7.2cm、器高は3.6～4.0cmに分布し鳩山IV期に該当する。また土師器甕はいずれも武蔵型甕で口縁形態は「コ」の字が確立する以前であり根本編年（根本 2003）第5期に当たる。これらをまとめて、時期を考えると須恵器坏6が底部回転糸切り後未調整で新相を持つが、他の資料の年代相は揃うことから8世紀後葉となろう。

また、ほぼ床直上で大形の鉄滓が出土しており、この点にもふれておきたい。この遺物についても科学分析（付編第4節）を行っており、その概要は鉄が少なく、チタンが比較的多いとのこと、その他

の成分も踏まえた特徴から製錬滓の可能性が高いとの結果を得た。志木市内では、今のところ製鉄遺跡は確認されておらず、現状では市外の他遺跡から持ち込まれたものと判断するのが妥当であろう。83号住居跡の年代は8世紀後葉で、同時代で確実に遺構が検出されている製鉄遺跡としては、ふじみ野市東台遺跡（高崎・穴山 2005）が直線距離6 km弱に位置し一つの候補となるかもしれない。十分に運搬可能な距離とのことである（註6）。残念ながら、他に手掛かりがなく持ち込まれた目的は不詳であるが、周辺部の調査が進んだ段階での検討が望まれる。

84号住居跡出土遺物（第46図）

焼きの甘い須恵器環4点と口縁から胴中位付近まで遺存する小型の土師器甕、斜めに穿孔された小型の土錘状土製品が出土している。年代の参考となるのは須恵器環4点だが、いずれも底部から僅かな立ち上がりを残すのみで情報は少ない。1、2は底部厚1 cm未満の薄造り、3、4は底部厚約1 cmの厚造りとし、胎土は基本的に夾雑物の少ない良好なものである。また、3の内底面には拓本で提示したとおり糸切り痕が観察され、「底部円柱糸切り技法」（松本 1981）との関係を窺わせる。以上の所見からこれら4点は新開窯産と推定される。一方、住居形態でカマドを隅カマドとする点は注意される。それ自体で時期を特定することは難しいのだが、平安後期に多い形態であることも事実である（坂詰・高林・福田 1997）。時期は情報が限られ、出土土が新開窯産と目されることと、出土した住居の形態が隅カマドとなることも踏まえ10世紀としておく。

14号溝跡と7号ピット出土の遺物について

14Mと7Pに10世紀後葉以降の可能性のある遺物が出土しているので触れておきたい。いずれも、小片でありそれぞれから得られる情報は限られる。14Mでは1・2・5～8が、総じて新しく9世紀末葉～10世紀代の遺物と解される。この中の一点として、6は底部の一部しかない小片であるが、薄い肌色の色調ときめ細かい胎土で特に目を引く土器である。底部は2枚重ねで厚く、柱状とは言わないまでも明らかに高さを志向するものである。新久窯（坂詰 1984）の新しい段階や新開窯（松本 1981・1982）など10世紀段階に至る須恵器でも小さな底径からやや厚手に底部を作る坏があるが、それらとは一線を画する資料である。地域的に共有される南武蔵で確認してみると、やはり類例は少ないのだが、編年された資料では府中市の国府周辺に見られ国府編年を参考としておきたい（註7）。ただし、このタイプにはバリエーションが見られ11世紀段階・12世紀段階と幅がある。14Mからは、12世紀末葉～13世紀初頭の常滑大甕の肩部小片も出ていており判断は難しいが、田子山遺跡の調査歴からは10世紀中葉から後葉の住居跡である第49地点55H（尾形・深井 1999）が検出されており遺構の継続性から、同段階の遺構は少ないながらも前者即ち10世紀末葉～11世紀初頭の資料である可能性を示唆しておきたい。もう一点は、7P出土で写真提示したヘラ切底を持つ底部小片である（図版25-2-7P）。底部の切り離し技法でヘラを継続的に使用するのは通例として東関東的である（窪田・黒田・黒澤 1997、比毛 2020）。問題は、古いか新しいかであるが、平底の造りと酸化炎焼成そして僅かに残る底部から推測される底径が5.5cmから6.0cm程度であることから小皿となる可能性があり、新しい段階と推測したい。こちらについては、深谷市（旧岡部町）の大寄遺跡146、148号住居跡（富田 2000）からヘラ切りの底部を持つ小皿が出土しており、伴出遺物などから10世紀末葉から11世紀初頭の年代を与えられている。当資料も同様の年代を想定しておきたい。

市内では、この10世紀後葉～11世紀前葉段階の様相は未だ不明確ではあるが、不定形の小竪穴やカマドを持たず床面に地床炉状の焼土痕を残す住居などが検出されていて（尾形・深井 1999、尾形・深

井 2000)、今後確実な遺構遺物が発見され、或は再検証される可能性があるのではないだろうか。

市内では、引き続き継続的な発掘調査と弛まずその報告書刊行事業が続けられ、志木市の歴史像が次第に顕かになっている。田子山遺跡に関する理解も僅かずつではあるが前進している。

註

- 註1 2018年に『新羅郡の時代を探る』と題する企画展と同時開催でシンポジウムが行われ、古墳時代後期末葉から奈良平安時代至る和光市・朝霞市・志木市・新座市の成果が公開されており参考とした。
- 註2 様々な意味で誤差が生じる可能性がある。同時代での設計段階、掘削段階、施工段階そして現代の発掘段階など。確認対象とした3軒は厳密に正方形ではないから当然歪みやしわ寄せは生じる。尾形氏も誌上でその難しさを述べているが、今回は、全掘されることの少ない田子山遺跡と他遺跡間で敢えて比較検証することに意義を見いだしている。
- 註3 本地点では、薄らと煤けたまたは、その痕跡が窺えるものについては極力黒彩と表記するよう務めたが、極めて部分的なものだと判断されるものについては観察表で黒斑と表記したものもある。大方の了解を得たい。
- 註4 大洗町教育委員会の蓼沼香未由氏の仲介により、ひたちなか市教育委員会の佐々木義則氏より貴重な助言をいただいている。両氏に感謝申し上げるとともに、文責は筆者に帰すものであることを断っておく。
- 註5 市内では、同じ田子山遺跡第5地点で同様なものが出土している(佐々木1992)。なお、2009年度報文の「比企地方ではこの製品の生産はないと思われる(尾形・深井・青木2009)」に関連し、まず渡邊一による南比企窯跡群での土器焼成坑による限定的なロクロ土器生産の可能性の指摘がある(渡邊2006)。実際に坏タイプでは、南比企産と目される白色針状遺物(海綿骨針とも)を含む内黒土器が少量、狭域流通ながら複数地点での出土している(石川1992)。ただし、比企例は坏タイプで底部も回転糸切り後未調整、まるで南比企産須恵器坏を酸化炎焼成して内黒処理を施したものであるのに対し、田子山例は2点とも深身の椀タイプで全体として土師器然として、系譜はまるで異なるものと思う。現段階では、尾形氏の指摘どおり田子山例は下総方面からの供給と考えるのが妥当であろう。
- 註6 製錬においては「砂鉄3里に炭7里」の例えがあり十分に運搬可能との助言を村上伸二氏に頂いた。また、滓の外観や成分分析の結果についても助言をいただいている。お礼申し上げる。
- 註7 府中市郷土の森博物館深澤靖幸氏よりご助言をいただいた。お礼申し上げる。

[引用・参考文献]

- 石川安司 1992『節新田遺跡I』玉川村教育委員会
- 大久保聡 2018「志木市の遺跡」『「新羅郡の時代を探る」シンポジウム資料集』
- 大谷弘幸 2002「炭化種子から見た農耕生産物の推定」『研究紀要』23 千葉県文化財センター
- 尾形則敏 1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 尾形則敏 2000「志木市内における古墳時代の土師器の編年(1)―5世紀から7世紀の坏形土器の変遷―」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
- 尾形則敏 2001「志木市内における古墳時代の土師器の編年(2)―5世紀から7世紀の甑・甕形土器の変遷―」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 尾形則敏 2005「第4章まとめ第2節 148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市教育委員会
- 尾形敏則 2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義―武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例―」『埼玉の考古学II』埼玉考古第41号 埼玉考古会 六一書房
- 尾形則敏・深井恵子1999「第6章 田子山遺跡第49地点の調査」『志木市遺跡群9 中野遺跡第43地点 富士前遺跡第15地点 田子山遺跡第47地点 田子山遺跡第48地点 田子山遺跡第49地点 中道遺跡第41地点 城山遺跡第34地点 城山遺跡第35地点 西原大塚遺跡第36地点』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 2000「田子山遺跡第25地点の調査」『埋蔵文化財調査報告1 田子山遺跡第19地点 田子山遺跡第21地点 田子山遺跡第25地点 中道遺跡第27地点 大原遺跡第1地点』志木市の文化財第29集 志木市教育委員会

- 尾形則敏・深井恵子・青木修 2005『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集 志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・藤波啓容・鈴木徹・中村真理 2008『城山遺跡第58・60地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集 志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・深井恵子・青木修 2009『志木市遺跡群 18 田子山遺跡第91地点 田子山遺跡第96地点 西原大塚遺跡第137地点 西原大塚遺跡第155地点』志木市の文化財第41集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・徳留彰紀・宮下孝優 2015『田子山遺跡第第131地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市教育委員会
- 尾形則敏・大久保聡・深井恵子 2018「田子山遺跡第51地点」『埋蔵文化財調査報告書8』志木の文化財第71集 志木市教育委員会
- 柿沼幹夫 2019「午王山遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ」『午王山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 金子直行 1996「加曾利E式土器」『大川清・鈴木公雄・工楽善通編 日本土器辞典』雄山閣
- 川端隼人 2018「新座市の遺跡」『「新羅郡の時代を探る」シンポジウム資料集』
- 窪田恵一・黒田友紀・黒澤春彦 1997『入ノ上遺跡』土浦市教育委員会
- 後藤建一 2015『遠江湖西窯跡の研究』(株)六一書房
- 坂詰秀一 1971『武蔵新久窯跡』雄山閣出版
- 坂詰秀一 1984『武蔵八坂前窯跡』雄山閣出版
- 坂詰秀一・高林均・福田健司 1996『落川遺跡Ⅰ〔遺構編―第一分冊〕―都営落川第2アパート建設に伴う発掘調査報告―』日野市落川遺跡調査会
- 坂本和俊 2015「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』第50号 埼玉考古学会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1992『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1996『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 佐々木義則 2007「常陸型甕の生産と流通―奈良時代以前の様相―」『波良岐考古』第29号 波良岐考同人会
- 高崎直成・穴山義功 2005『東台製鉄遺跡』大井町教育委員会
- 田中広明 2004『北島遺跡Ⅸ』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1992「Ⅸ 調査のまとめ」『稻荷前遺跡(A区)』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 2000『大寄遺跡Ⅰ』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
- 西山克己 1984・1985「東国出土の暗文を有する土器(上・下)」『史館』第17・18号 史館同人
- 根本 靖 1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究Ⅱ ―土器器煮沸具の変遷について―」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 根本 靖 2005「所沢市東の上遺跡の基礎研究Ⅴ ―土器編年の予察―」『あらかわ』第6号 あらかわ考古談話会
- 比毛君男 2020『古代から中世へー常陸における社会と文化の変動期ー 第23回企画展パンフレット』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 比田井克仁 1997「弥生時代後期における時間軸の検討―南武蔵地域の検討を通して―」『古代』第103号
- 細田 勝 2008「加曾利E式土器」『小林達雄編 総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 松本富雄 1981『新開遺跡Ⅰ』三芳町教育委員会
- 松本富雄 1982『新開遺跡Ⅱ』三芳町教育委員会
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 渡邊 一 1990「第4章 成果と問題点」『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 渡邊 一 2006『古代東国の窯業生産の研究』青木書店

[付 編]

自然科学分析

第 1 節 田子山遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

志木市の田子山遺跡24Yから出土した炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、24Yから出土した炭化材から5点の分析を行った。調査所見から、遺構の時期は弥生時代末葉～古墳時代初頭と推測されている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、試料5点はいずれも広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）であった。結果を第21表に示す。以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版27 1a-1c (No. 7)、2a-2c (No. 8)、3a (No. 9)、4a (No.10)、5a (No.11)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアバマキがある。材は重硬および強韌で、加工困難である。

4. 考察

24Yから出土した炭化材のうち、今回分析を行った試料5点は、いずれもクヌギ節であった。クヌギ節は陽樹で、二次林に多く生育し、材は重硬で加工困難である（平井 1996）。埼玉県で確認されている弥生時代から古墳時代の住居跡出土の炭化材では、クヌギ節が多い傾向がみられる（伊東・山田編 2012）。今回の分析結果も、周辺地域の木材利用傾向と一致している。

地区	遺構	No.	樹種	形状	推定時期
3区	24Y	7	コナラ属クヌギ節	不明	弥生時代末期～古墳時代初頭
3区	24Y	8	コナラ属クヌギ節	不明	弥生時代末期～古墳時代初頭
3区	24Y	9	コナラ属クヌギ節	不明	弥生時代末期～古墳時代初頭
3区	24Y	10	コナラ属クヌギ節	不明	弥生時代末期～古墳時代初頭
3区	24Y	11	コナラ属クヌギ節	不明	弥生時代末期～古墳時代初頭

第21表 樹種同定結果

[引用文献]

平井信二 1996 木の百科 394p 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編 2012 木の考古学—出土木製品用材データベース— 449p 海青社.

第2節 田子山遺跡から出土した炭化種実について

バンダリ スタルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

埼玉県志木市の田子山遺跡の第160地点では、炭化種実が出土している。ここでは、7世紀後葉の住居跡や溝から得られた炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。なお、同一試料を用いて年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

分析試料は、株式会社中野技術によって採取された。試料は、肉眼で確認され、遺物番号を付けて取り上げられた277試料で、内訳は84Hから採取された2試料、85Hから採取された1試料、86Hから採取された268試料、14Mから採取された6試料である。考古学的な所見による遺構の時期はいずれも7世紀後葉であり、放射性炭素年代測定の結果、86H出土のモモ炭化核は飛鳥時代の暦年代を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。モモやスモモは形態を観察し、完形、動物食痕のある個体、半割の個体、破片に分類した。計数が困難な分類群については、記号(+)で示した。試料は、志木市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物である広葉樹のモモ炭化核とスモモ炭化核の2分類群が得られた。この他に、不明の炭化材がみられたが、同定の対象外とした（第22表）。

以下に、得られた炭化種実について遺構別に記載する。

84H：モモの破片が4点得られた。

85H：モモの破片が2点得られた。

86H：モモが414点（完形167点、動物食痕3点、半割1点、破片243点）、スモモが15点（完形9点、破片6点）得られた。

14M：モモが8点（完形1点、破片7点）得られた。

次に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。完形の核の大きさは、高さ25.3mm、幅18.9mm、厚さ14.1mm(図版28-1)、高さ21.0mm、幅15.9mm、厚さ15.0mm(図版28-2)、高さ16.0mm、幅15.6mm、厚さ13.8mm(図版28-3)、高さ13.9mm、幅12.5mm、厚さ12.4mm(図版28-4)、動物食痕の

分類群	AMS年代測定結果	遺構名			
		84H	85H	86H	14M
	考古学的な推定時期			7世紀後葉	
				飛鳥時代	—
モモ	炭化核 (完形)			167	1
	炭化核 (動物食痕)			2 (1)	
	炭化核 (半割)			(1)	
	炭化核 (破片)	(4)	(2)	(243)	(7)
スモモ	炭化核 (完形)			9	
	炭化核 (破片)			(6)	
不明	炭化材			(+)	
+: 1-9		※括弧内は破片数			

第22表 田子山遺跡から出土した炭化種実

ある個体は、高さ19.6mm、残存幅16.0mm、厚さ15.2mm（図版28-5）、半割の個体は、高さ14.5mm、幅11.7mm、残存厚5.7mm（図版28-6）、破片の大きさは、残存高8.5mm、残存幅12.0mm（PLD-41276、図版28-7）。

(2) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 炭化核 バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな楕円形。縫合線に沿ってやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。高さ11.6mm、幅9.3mm、厚さ6.1mm（図版28-8）。

4. 考察

住居跡（84H、85H、86H）から出土した炭化種実を検討した結果、栽培植物であるモモの炭化核とスモモの炭化核が得られた。また、14Mからはモモ炭化核が得られた。モモやスモモの核は、果肉を食べた後に捨てられた可能性がある。あるいは、モモは食利用以外にも、観賞用や薬用、呪術用、祭祀用などさまざまな目的で利用されており（那須 2015）、何らかの用途で用いられた後に堆積した可能性もある。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長は24.6～26.5mmと比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は23.6～26.6mmで、鎌倉期には大きさの変異幅が大きくなり、江戸時代後期になると大型になって、平均核長26.9mm、最大で38.0mm程度の核がみられるとしている。今回、7世紀後葉の遺構とされる86Hから出土したモモ核の完全な完形個体133個体の大きさを計測した結果、高さ平均 18.8 ± 2.4 mm（最大25.3mm）、幅平均 15.7 ± 1.7 mm、厚さ平均 13.8 ± 1.5 mmで（第23表）、山梨県内の古代のモモ核の平均値よりもかなり小さい傾向がみられた。金原（1996）によると、古墳時代の遺跡から出土したモモの核は、小さくて丸いA類と細長くて大きいB類、やや大型で先端がピンと尖るC類の計3種類の形態が見られるとされている。今回、住居跡から得られたモモの核は上記の3種類にそれぞれ該当する形態が見られた。また、14Mから得られた完形1個体のモモは、高さ21.3mmで、山梨県で出土している奈良・平安時代のモモと比較すると、やはり小さい傾向が認められた。

[引用文献]

- 金原正明 1996 古代モモの形態と品種 考古学ジャーナル 409, 15-19
那須浩郎 2015 古代のモモ BIOSTORY 22, 58-61
新津 健 1999 遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から— 山梨考古学論集 IV 361-374 山梨県考古学協会
米倉浩司・梶田 忠 2003 BG Plants 和名-学名インデックス (YList) <http://ylist.info>

第2節 田子山遺跡から出土した炭化種実について

遺構	出土位置	分類群	部位	産出数	高さ	幅	厚さ
86H	No.41	モモ	炭化核	1	22.1	15.4	13.5
	No.42	モモ	炭化核	(4)			
	No.43	モモ	炭化核	(1)			
	No.44	モモ	炭化核	(2)			
	No.45	モモ	炭化核	1	19.6	17.0	14.1
	No.46	モモ	炭化核	(1)			
	No.47	モモ	炭化核	(1)			
	No.48	モモ	炭化核	1	20.5	16.5	13.7
	No.60	モモ	炭化核	1	20.0	15.4	12.6
	No.61	モモ	炭化核	1	15.9	14.3	12.4
	No.79	モモ	炭化核	(1)			
	No.80	モモ	炭化核	1	16.5	14.6	13.5
	No.85	モモ	炭化核	1	17.5	17.6	13.1
	No.100	モモ	炭化核	(1)			
	No.103	モモ	炭化核	(1)			
	No.105	モモ	炭化核	(1)			
	No.118	モモ	炭化核	1			
	No.119	モモ	炭化核	1	20.4	18.1	15.4
	No.120	モモ	炭化核	(2)			
	No.121	モモ	炭化核	1			
	No.122	モモ	炭化核	1	17.1	13.8	13.3
	No.126	モモ	炭化核	1			
	No.131	モモ	炭化核	1	14.7	11.6	11.6
	No.140	モモ	炭化核	1			
	No.141	モモ	炭化核	1	20.9	18.7	17.6
	No.153	モモ	炭化核	1			
	No.154	モモ	炭化核	1			
	No.155	モモ	炭化核	(2)			
	No.156	モモ	炭化核	1			
	No.157	モモ	炭化核	1	16.8	16.5	14.6
No.158	モモ	炭化核	1				
No.159	モモ	炭化核	1				
No.160	モモ	炭化核	1	19.0	17.8	13.7	
No.161	モモ	炭化核	1	20.0	16.8	14.9	
No.162	モモ	炭化核	1	22.0	18.1	15.9	
No.163	モモ	炭化核	1				
No.183	モモ	炭化核	(3)				
No.190	モモ	炭化核	(3)				
No.191	モモ	炭化核	(5)				
No.192	モモ	炭化核	(2)				
No.193	モモ	炭化核	(3)				
No.194	モモ	炭化核	1	21.9	20.1	18.6	
No.195	モモ	炭化核	(1)				
No.196	モモ	炭化核	1	19.0	15.9	13.6	
No.197	モモ	炭化核	1	20.4	17.1	15.6	
No.203	モモ	炭化核	1	18.6	17.0	15.7	
No.207	モモ	炭化核	1	21.2	16.0	12.3	
No.226	モモ	炭化核	1	20.9	17.1	16.1	
No.227	モモ	炭化核	(4)				
No.230	モモ	炭化核	1	19.2	16.1	15.5	
No.231	モモ	炭化核	1	18.2	14.0	12.0	
No.232	モモ	炭化核	1	20.1	15.9	13.3	
No.233	モモ	炭化核	1	16.1	14.7	14.0	
No.234	モモ	炭化核	(2)				
No.235	モモ	炭化核	1	17.4	16.0	13.9	
No.236	モモ	炭化核	1	17.6	15.6	13.1	
No.237	モモ	炭化核	(6)				
No.279	モモ	炭化核	1	16.6	13.6	12.2	
No.280	モモ	炭化核	1	20.8	18.7	14.6	
No.281	モモ	炭化核	1	19.5	16.7	13.9	
No.282	モモ	炭化核	1	16.6	14.3	13.3	
No.283	モモ	炭化核	1				
No.284	モモ	炭化核	1	16.5	13.6	12.4	
No.285	モモ	炭化核	1	17.0	14.7	13.1	
No.286	モモ	炭化核	1	20.2	16.4	14.2	
No.287	モモ	炭化核	(1)				
No.288	モモ	炭化核	1	15.7	13.2	12.6	
No.289	モモ	炭化核	1				
No.290	モモ	炭化核	1				
No.300	モモ	炭化核	1				
No.301	モモ	炭化核	(1)				
No.302	モモ	炭化核	(1)				

遺構	出土位置	分類群	部位	産出数	高さ	幅	厚さ
86H	No.304	モモ	炭化核	1	23.2	20.8	18.7
	No.305	モモ	炭化核	1			
	No.306	モモ	炭化核	1			
	No.307	モモ	炭化核	1	18.6	15.8	13.3
	No.308	モモ	炭化核	(1)			
	No.310	モモ	炭化核	1	16.9	14.4	13.6
	No.311	モモ	炭化核	(1)			
	No.326	モモ	炭化核	1	24.1	18.1	14.8
	No.327	モモ	炭化核	1			
	No.328	モモ	炭化核	(1)			
	No.329	モモ	炭化核	1	17.6	16.3	15.3
	No.330	モモ	炭化核				
	No.331	モモ	炭化核	1	16.0	14.3	13.7
	No.338	モモ	炭化核	1	17.0	12.9	11.8
	No.339	モモ	炭化核	1	16.6	14.2	13.0
	No.340	モモ	炭化核	(3)			
	No.341	モモ	炭化核	1	18.9	15.0	13.6
	No.342	モモ	炭化核	1	15.0	12.6	12.0
	No.356	モモ	炭化核	1	17.2	15.8	15.1
	No.357	モモ	炭化核	(1)			
	No.363	モモ	炭化核	(3)			
	No.364	モモ	炭化核	(4)			
	No.365	モモ	炭化核	(2)			
	No.367	モモ	炭化核	1	18.7	14.6	10.8
	No.450	モモ	炭化核	1	16.9	15.9	14.3
	No.451	モモ	炭化核	1	17.9	13.7	13.5
	No.452	モモ	炭化核	(2)			
	No.453	モモ	炭化核	1	13.9	12.5	12.4
	No.455	モモ	炭化核	1	15.3	13.2	10.9
	No.456	モモ	炭化核	1	16.5	15.0	13.1
	No.457	モモ	炭化核	1(2)	20.6	15.3	12.5
	No.458	モモ	炭化核(動物食痕)	(1)			
	No.459	モモ	炭化核	1			
	No.460	モモ	炭化核	1			
	No.461	モモ	炭化核	(9)			
	No.462	モモ	炭化核	1	20.0	16.1	13.6
	No.463	モモ	炭化核	1	17.3	16.1	14.2
	No.464	モモ	炭化核	1	19.8	16.4	14.7
	No.465	モモ	炭化核	1	22.1	17.9	16.9
	No.466	モモ	炭化核	1	16.8	15.6	14.4
	No.468	モモ	炭化核	1	21.7	20.2	17.3
	No.469	モモ	炭化核	1	15.8	12.7	12.5
	No.470	モモ	炭化核	1	20.8	16.9	14.4
	No.492	モモ	炭化核	1	21.8	16.7	12.9
	No.493	モモ	炭化核	1	17.2	14.5	13.3
	No.494	モモ	炭化核	1	20.9	15.1	13.7
	No.495	モモ	炭化核	(1)			
	No.525	モモ	炭化核	1	18.0	14.1	12.1
	No.526	モモ	炭化核	1			
	No.527	モモ	炭化核	1	20.8	14.5	14.0
	No.528	モモ	炭化核	1			
	No.529	モモ	炭化核	1			
	No.530	モモ	炭化核	(1)			
	No.531	モモ	炭化核(動物食痕)	1			
	No.556	モモ	炭化核	(1)			
	No.557	モモ	炭化核	1	15.7	15.7	13.7
	No.574	モモ	炭化核	1	23.0	17.0	14.0
	No.661	モモ	炭化核	1	16.1	14.1	12.4
	No.662	モモ	炭化核	1	14.9	13.5	11.7
	No.663	モモ	炭化核	1	18.8	14.9	13.6
	No.664	モモ	炭化核	1	20.9	19.1	19.8
	No.665	モモ	炭化核	(1)			
	No.666	モモ	炭化核	1			
	No.667	モモ	炭化核	1	19.4	16.0	13.0
	No.668	モモ	炭化核	1	17.2	15.7	12.1
	No.669	モモ	炭化核	1	15.3	13.2	12.4
	No.670	モモ	炭化核	1			
No.671	モモ	炭化核	1				
No.672	モモ	炭化核	1				
No.673	モモ	炭化核	(3)				
No.674	モモ	炭化核	1				
No.675	モモ	炭化核	1				

第23表 炭化種実同定結果(1)

遺構	出土位置	分類群	部位	産出数	高さ	幅	厚さ
86H	No.676	モモ	炭化核	(1)			
	No.677	モモ	炭化核	(1)			
	No.678	モモ	炭化核	(3)			
	No.679	モモ	炭化核	1			
	No.715	モモ	炭化核	1	14.8	14.2	13.1
	No.716	モモ	炭化核	1	16.7	14.0	12.8
	No.717	モモ	炭化核	1	19.7	16.3	15.3
	No.730	モモ	炭化核	(1)			
	No.731	モモ	炭化核	1	21.6	18.6	16.2
	No.732	モモ	炭化核	1	16.4	13.6	12.9
	No.806	モモ	炭化核	1	20.8	18.0	16.7
	No.807	モモ	炭化核	(2)			
	No.808	モモ	炭化核	1	25.3	18.9	14.1
	No.809	モモ	炭化核	1	17.0	15.7	14.0
	No.810	モモ	炭化核	1	22.4	16.6	15.2
	No.820	モモ	炭化核	(3)			
	No.821	モモ	炭化核	1	21.9	17.3	15.9
	No.822	モモ	炭化核	1			
	No.852	モモ	炭化核	(3)			
	No.855	モモ	炭化核	(1)			
	No.856	モモ	炭化核	(1)			
	No.857	モモ	炭化核	(1)			
	No.858	モモ	炭化核	(1)			
	No.859	モモ	炭化核	1	16.1	13.8	12.2
	No.860	モモ	炭化核	1	17.0	15.4	13.7
	No.861	モモ	炭化核	1	21.9	16.7	14.2
	No.862	モモ	炭化核	1	18.1	16.2	14.7
	No.863	モモ	炭化核	1	14.6	12.9	12.6
	No.864	モモ	炭化核	1	20.3	17.4	14.0
	No.868	モモ	炭化核	1			
	No.939	モモ	炭化核	1	17.6	15.3	13.4
	No.940	モモ	炭化核	1	21.0	14.8	12.7
	No.942	モモ	炭化核	1	19.3	15.9	13.6
	No.943	モモ	炭化核(動物食痕)	1			
	No.996	モモ	炭化核	1	21.9	17.8	16.3
	No.997	モモ	炭化核	1			
	No.998	モモ	炭化核	1	19.5	15.5	13.8
	No.999	モモ	炭化核	1	19.7	16.2	13.1
	No.1000	モモ	炭化核	(7)			
	No.1001	モモ	炭化核	(4)			
	No.1002	モモ	炭化核	(3)			
	No.1003	モモ	炭化核	1	17.9	14.7	12.3
	No.1004	モモ	炭化核	(2)			
	No.1005	モモ	炭化核	1	21.8	17.4	13.9
	No.1056	モモ	炭化核	(1)			
	No.1057	モモ	炭化核	1	22.9	17.3	13.4
	No.1058	モモ	炭化核	(3)			
	No.1059	モモ	炭化核	(1)			
	No.1063	モモ	炭化核	1	15.9	13.9	10.9
	No.1064	モモ	炭化核	(2)			
	No.1065	モモ	炭化核	(2)			
	No.1066	モモ	炭化核	1	16.7	15.0	13.5
No.1067	モモ	炭化核	1	19.0	17.7	13.3	
No.1068	モモ	炭化核	(1)				
No.1069	モモ	炭化核	(3)				
No.1070	モモ	炭化核	1	19.3	16.3	14.5	
No.1071	モモ	炭化核	1	20.7	15.3	13.2	
No.1088	モモ	炭化核	1	16.1	15.8	14.6	
No.1133	モモ	炭化核	(2)				
No.1239	モモ	炭化核	1	21.6	15.8	13.0	
No.1287	モモ	炭化核	1	23.1	16.4	14.4	
No.1410	モモ	炭化核	1	21.6	16.8	13.7	
No.1412	モモ	炭化核	1	18.2	15.6	13.8	
No.1437	モモ	炭化核	1	17.4	16.7	13.1	
No.1445	モモ	炭化核	(4)				
No.1447	モモ	炭化核	(8)				
No.1461	モモ	炭化核	(3)				
No.1462	モモ	炭化核	1				
No.1542	モモ	炭化核	1	17.8	16.9	14.9	

遺構	出土位置	分類群	部位	産出数	高さ	幅	厚さ		
86H	No.1550	モモ	炭化核	(1)					
	No.1555	モモ	炭化核	1	16.6	13.9	12.9		
	No.1556	モモ	炭化核	(1)					
	No.1557	モモ	炭化核	(3)					
	No.1573	モモ	炭化核	(2)					
	No.1579	モモ	炭化核	(20)					
	No.1584	モモ	炭化核	(5)					
	No.1585	モモ	炭化核	1	18.5	15.2	13.3		
	No.1586	モモ	炭化核	1	18.5	15.3	13.4		
	No.1587	モモ	炭化核	(2)					
	No.1632	モモ	炭化核	1					
	No.1633	モモ	炭化核	1	24.4	15.9	12.3		
	No.1634	モモ	炭化核	(18)	18.0	16.1	14.9		
	No.1670	モモ	炭化核	1					
	No.1671	モモ	炭化核	1	21.7	16.0	14.3		
	No.1672	モモ	炭化核	1	19.2	16.2	15.6		
	No.1673	モモ	炭化核	(1)					
	No.1679	モモ	炭化核	(1)					
	No.1699	モモ	炭化核	(1)					
	No.1700	モモ	炭化核	1	15.0	12.3	11.4		
	No.1701	モモ	炭化核	(1)					
	No.1705	モモ	炭化核	(1)					
	No.1706	モモ	炭化核	(12)					
	No.1707	モモ	炭化核	(1)					
	No.1726	モモ	炭化核	1	16.3	14.6	13.9		
	No.1735	モモ	炭化核	1	16.0	15.6	13.8		
	No.1736	モモ	炭化核	(1)					
	No.1751	モモ	炭化核	1	18.8	13.6	12.8		
	No.1753	モモ	炭化核	(3)					
	No.1822	モモ	炭化核	1	15.6	15.5	14.0		
	No.1823	モモ	炭化核	1	21.7	17.4	12.6		
	No.1826	モモ	炭化核	1	20.7	16.8	13.6		
	No.1876	モモ	炭化核	1	21.0	15.9	15.0		
	No.1967	モモ	炭化核	1	19.5	15.5	14.4		
	No.1968	モモ	炭化核	1	20.1	16.3	13.5		
	No.1969	モモ	炭化核	1	19.2	16.1	13.0		
	No.1974	モモ	炭化核	1	16.8	13.1	11.6		
	No.1975	モモ	炭化核	(3)					
	No.1976	モモ	炭化核	(3)					
	No.1983	モモ	炭化核	1	20.6	17.1	14.1		
	No.2001	モモ	炭化核	(4)					
	No.2014	モモ	炭化核	1	19.4	15.8	14.3		
	No.2175	モモ	炭化核	(11)					
						最小	13.9	11.6	10.8
						最大	25.3	20.8	19.8
						平均	18.8	15.7	13.8
						標準偏差	2.4	1.7	1.5
	84H	No.109	モモ	炭化核	(3)				
		No.112	モモ	炭化核	(1)				
	85H	No.301	モモ	炭化核	(2)				
		No.189	不明	炭化材	(+)				
	86H	No.303	スモモ	炭化核	1				
No.454		スモモ	炭化核	1					
No.853		スモモ	炭化核	1					
No.854		スモモ	炭化核	1					
No.941		スモモ	炭化核	1					
No.944		スモモ	炭化核	1					
No.1087		スモモ	炭化核	1					
No.1288		スモモ	炭化核	1					
No.1302		スモモ	炭化核	1					
No.2000		スモモ	炭化核	(3)					
14M	No.2008	スモモ	炭化核	(3)					
	No.57	モモ	炭化核	(1)					
	No.126	モモ	炭化核	(1)					
	No.127	モモ	炭化核	(2)					
	No.128	モモ	炭化核	(1)					
No.129	モモ	炭化核	(2)						
No.130	モモ	炭化核	1	21.3	16.0	15.8			

※括弧内は破片数

第23表 炭化種実同定結果(2)

第3節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・森 将志

1. はじめに

田子山遺跡第160地点86Hより検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、7世紀後葉の遺構とされる86Hから出土したモモ炭化核1点（遺物No.457：PLD-41276）である。測定試料の情報、調製データは第24表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-41276	遺構:86H 調査区: 2区 遺物No.457	種類:炭化種実 (モモ 炭化核) 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)

第24表 測定試料および処理

3. 結果

第24表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、第26表に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-41276 遺物No.457	-26.87 \pm 0.14	1383 \pm 17	1385 \pm 15	647-659 cal AD (68.27%)	609-618 cal AD (3.97%) 640-667 cal AD (91.48%)

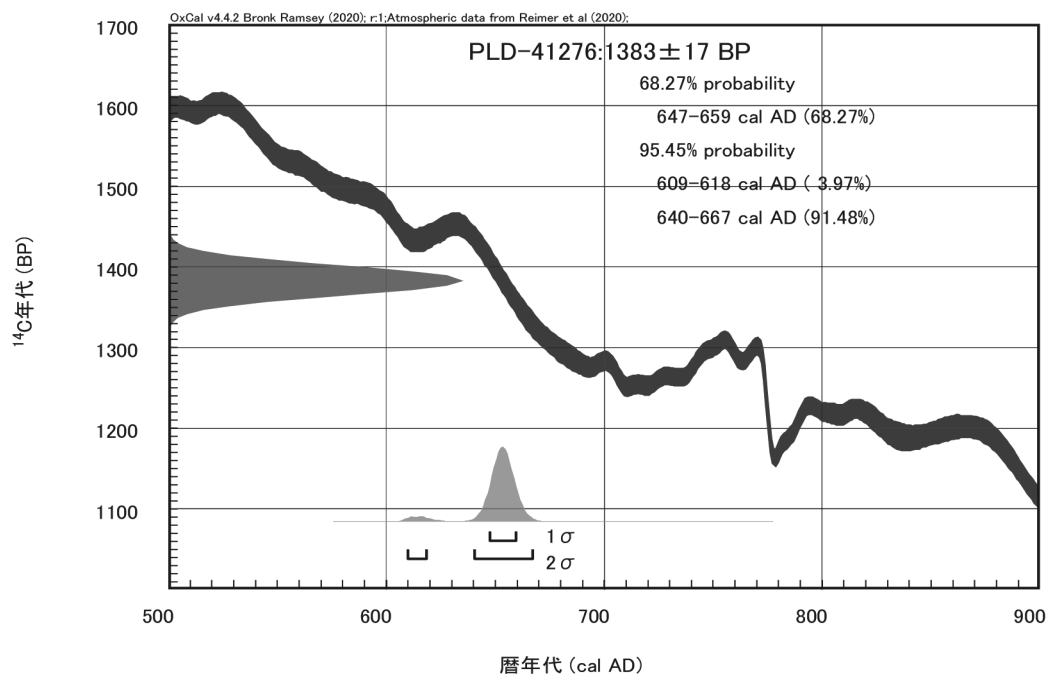
第25表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

4. 考察

測定結果のうち、2 σ 暦年代範囲に注目すると、609-618 cal AD (3.97%) および640-667 cal AD (91.48%) の暦年代を示した。これは飛鳥時代に相当する。考古学的所見では、86号住居跡の時期は7世紀後葉とされており、今回得られた年代値は考古学的所見と矛盾しない。

[参考文献]

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1) 337-360
- 中村俊夫 2000 放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」3-20 日本第四紀学会
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4) 1869-1887



第26表 暦年較正結果

第4節 田子山遺跡出土の鉄滓の自然科学分析

竹原弘展・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

志木市本町に所在する田子山遺跡で行われた金属生産活動の調査を目的として、鉄滓の断面観察およびX線分析を行い、材質を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、83Hから出土した大型の鉄滓1点である（第27表、図版28-2-1）。時期は、8世紀後葉から9世紀前葉とみられている。岩石カッターで遺物の一部を切り取り、断面試料を作製して観察と分析を行った。

遺物番号	調査区	出土遺構	時期
119	第160地点1区	住居跡83H	8世紀後葉～9世紀前葉

第27表 分析対象一覧

まず、切り取った試料を超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製SEA1200VX、照射径8mm、以後XRF）を行い、採取部位の化学組成を調べた。続いて、この試料片を注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。包埋試料は、ディスクプランで研磨した後、超精密研磨フィルムの#1000、4000、8000の順で研磨し、観察、分析面とした。走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200、以後EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

3. 分析結果および考察

XRF分析による半定量値を第28表に示す。また、SEM反射電子像を図版28-2-2、3に、SEM反射電子像に示したa～dのポイントのEDS分析結果を第29表に示す。

照射径	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃
8mm	1.70	14.78	31.75	0.50	0.15	1.20	1.31	4.16	0.11
MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Ga ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	BaO
0.28	43.86	0.02	0.01	0.01	0.02	0.04	0.01	0.05	0.05

第28表 XRF分析による鉄滓の半定量値（mass%）

[遺物番号119] 製錬滓

大型の鉄滓で、弱い磁着が認められる。XRF分析では、鉄が酸化物（Fe₂O₃）換算で約44%と比較的少ない。また、チタン（TiO₂）が約4%と比較的多かった（第28表）。SEM反射電子像では、図版28-2-2、3のような結晶組織が観察された。EDS分析結果と併せると、やや明色の多角形組織（図版28-2-3のa、b）では鉄（Fe）とチタン（Ti）が主に検出されており、ウルボスピネル（2FeO・TiO₂）とみられる。中間色木ずれ状組織（図版28-2-3のc）では鉄とケイ素（Si）が主に検出され、ファイヤライト（2FeO・SiO₂）とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（図版28-2-3のd）上に晶出している。

チタン含有量が比較的多く、ウルボスピネルが観察された。一方、鉄含有量は比較的少なく、ウスタイトは観察されなかった。以上の特徴より、製錬滓である可能性がある。

ポイント	検出元素	組織	所見
a	O,Ti,Fe, (Si), (Al), (Mg)	ウルボスピネル	製錬滓か
b	O,Ti,Fe, (Si), (Al)	ウルボスピネル	
c	O,Si,Fe, (Al)	ファイヤライト	
d	O,Al,Si,K,Ca,Fe, (Ti)	ガラス質	

第29表 EDS分析結果

[参考文献]

- 中井 泉編 2005 蛍光X線分析の実際 242p 朝倉書店
- 大澤正己・鈴木瑞穂 2005 中道東山西山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター編
「中道東山西山遺跡」: 149-173 鳥取県教育文化財団
- 大澤正己・鈴木瑞穂 2013 石塚遺跡(第2次)の鍛冶滓等の自然科学分析 萩原義彦・伊藤裕偉編「石塚遺跡(第1・2次)・
高樋遺跡(第1・2次)発掘調査報告」: 49-65 三重県埋蔵文化財センター
- 材料技術教育研究会編 2008 組織検査用試料のつくり方 226p 大河出版
- 材料技術教育研究会編 2015 標準顕微鏡組織 第1類(炭素鋼・鋳鉄編)改定8版 128p 山本科学工具研究社

圖 版



調査区全景・合成写真



1. 1区プラン確認状況



2. 2区プラン確認状況



3. 6号炉穴セクション



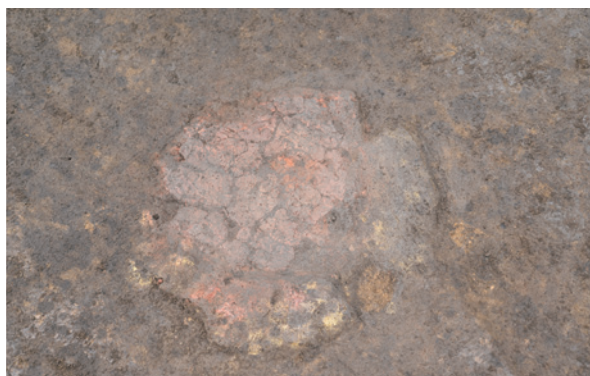
4. 6号炉穴完掘



5. 24号住居跡遺物出土状況



6. 24号住居跡完掘状況



7. 30号住居跡炉跡



8. 30号住居跡掘り方



1. 31号住居跡完掘状況



2. 32号住居跡掘り方



3. 42号ピットセクション



4. 76号住居跡遺物出土状況



5. 76号住居跡遺物出土状況



6. 76号住居跡遺物出土状況



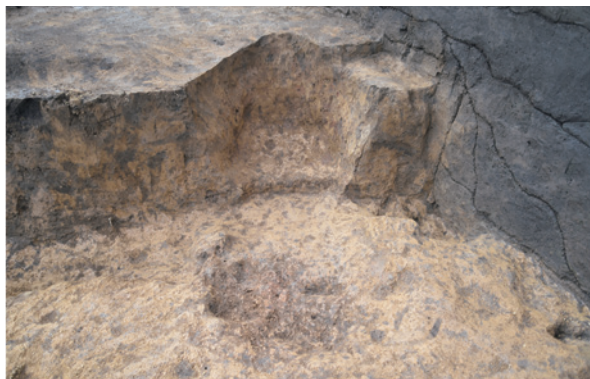
7. 76号住居跡遺物出土状況



8. 76号住居跡完掘状況



1. 76号住居跡掘り方



2. 76号住居跡カマド完掘状況



3. 81号住居跡遺物出土状況



4. 81号住居跡常総型甕出土状況



5. 81号住居跡完掘状況



6. 81号住居跡掘り方



7. 82号住居跡遺物出土状況



8. 82号住居跡完掘状況



1. 82号住居跡カマド完掘状況



2. 82号住居跡カマド掘り方



3. 82号住居跡掘り方



4. 83号住居跡遺物出土状況



5. 83号住居跡鉄滓出土状況



6. 83号住居跡遺物出土状況



7. 83号住居跡完掘状況



8. 83号住居跡カマド遺物出土状況



1. 83号住居跡カマド完掘状況



2. 83号住居跡カマド掘り方



3. 83号住居跡掘り方



4. 84号住居跡遺物出土状況



5. 84号住居跡遺物出土状況



6. 84号住居跡完掘状況



7. 84号住居跡カマド遺物出土状況



8. 84号住居跡カマド完掘状況



1. 84号住居跡カマド掘り方



2. 84号住居跡掘り方



3. 85号住居跡灰釉陶器手付小瓶出土状況



4. 85号住居跡遺物出土状況



5. 85号住居跡完掘状況



6. 85号住居跡カマド1完掘状況



7. 85号住居跡カマド1掘り方



8. 85号住居跡カマド2セクション



1. 85号住居跡カマド2掘り方



2. 85号住居跡炉跡セクション



3. 85号住居跡炉跡完掘状況



4. 85号住居跡掘り方



5. 86号住居跡遺物出土状況



6. 86号住居跡遺物出土状況



7. 86号住居跡土製品出土状況



8. 86号住居跡紡錘車出土状況



1. 86号住居跡遺物出土状況



2. 86号住居跡
粘土・ローム・焼土堆積層検出状況



3. 86号住居跡完掘状況



4. 86号住居跡カマド遺物出土状況



5. 86号住居跡カマド完掘状況



6. 86号住居跡カマド掘り方



7. 87号住居跡完掘状況



8. 87号住居跡カマド完掘状況



1. 87号住居跡掘り方



2. 88号住居跡遺物出土状況



3. 88号住居跡遺物出土状況



4. 88号住居跡遺物出土状況



5. 88号住居跡完掘状況



6. 88号住居跡カマド遺物出土状況



7. 88号住居跡カマド遺物出土状況



8. 88号住居跡カマド完掘状況



1. 88号住居跡貯蔵穴完掘状況



2. 88号住居跡炉跡完掘状況



3. 88号住居跡炉跡掘り方



4. 88号住居跡出入口施設拡張状況



5. 6号掘立柱建築遺構



6. 14号溝跡遺物出土状況



7. 14号溝跡完掘状況



8. 16号溝跡完掘状況



1. 17号溝跡完掘状況



2. 287号土坑炭化材出土状況



3. 304号土坑遺物出土状況



4. 7号ピットセクション



5. 7号ピット遺物出土状況



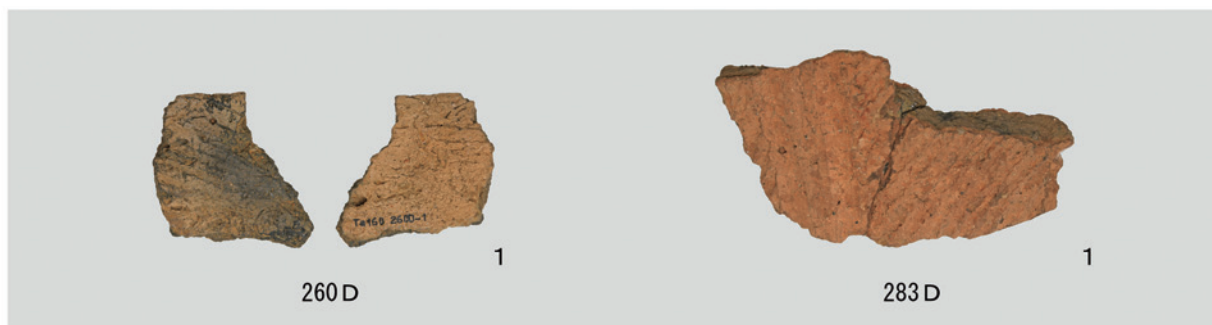
6. 深掘りトレンチ (TP 3) 土層断面



7. 発掘作業風景



8. 現地説明会



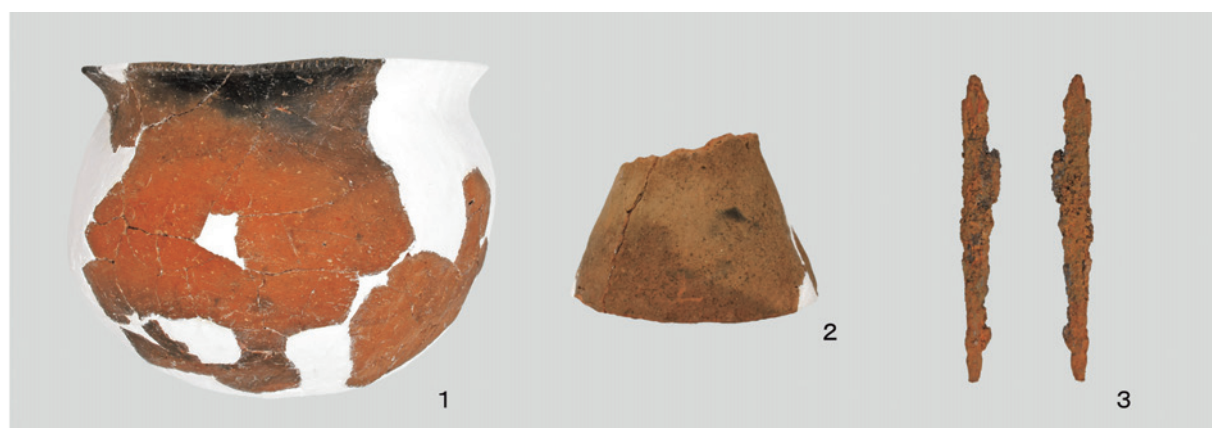
1. 260·283号土坑出土遺物



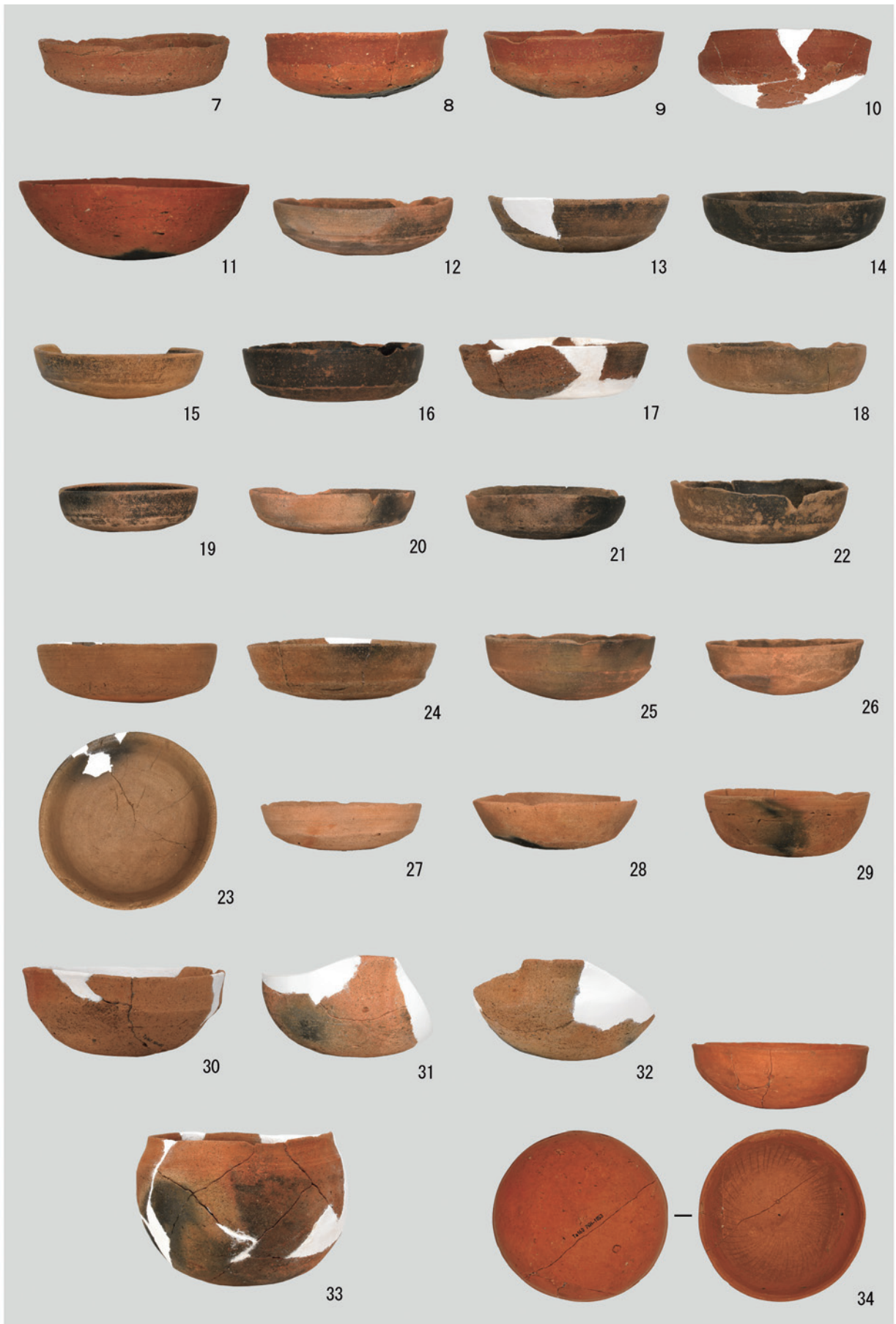
2. 24号住居跡出土遺物



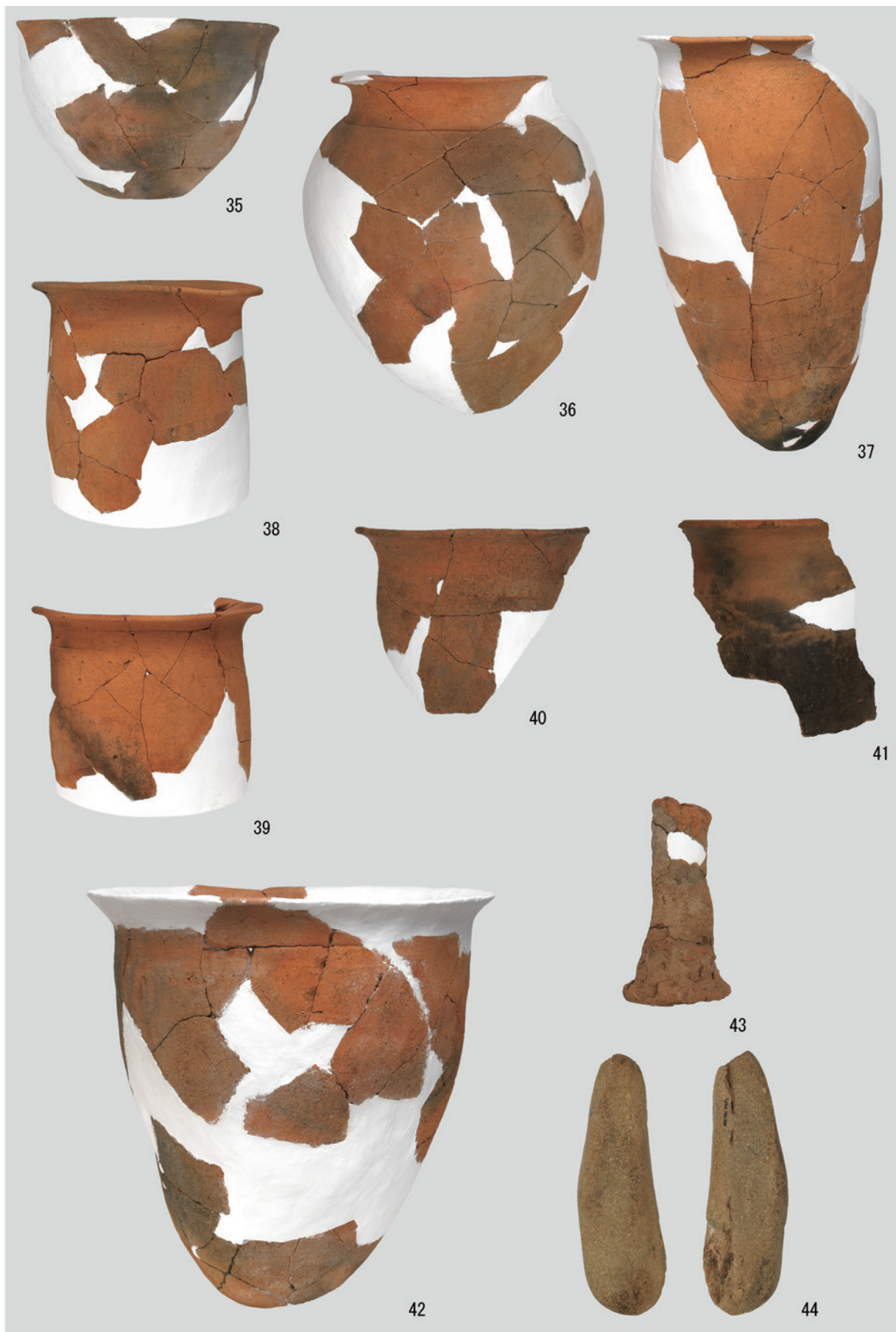
3. 30号住居跡出土遺物



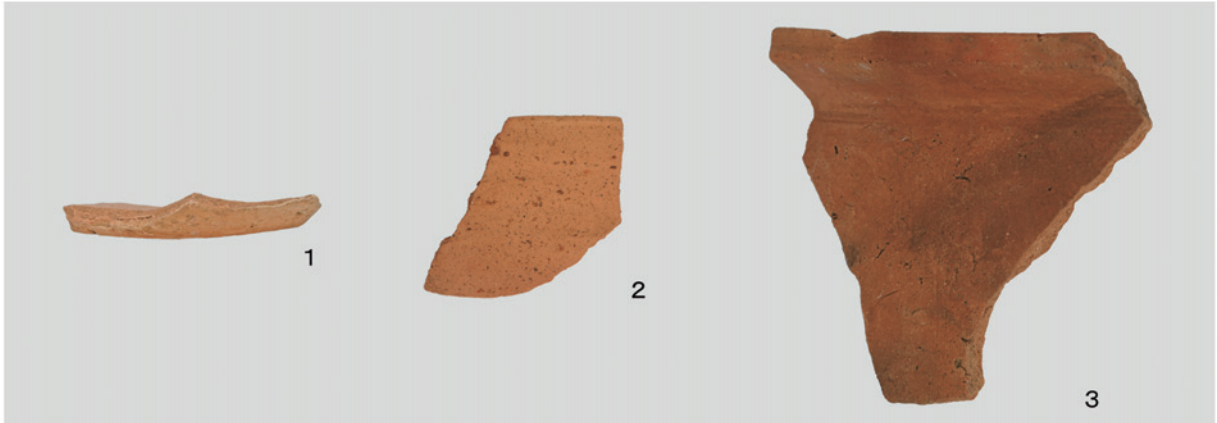
4. 32号住居跡出土遺物



76号住居跡出土遺物 1



76号住居跡出土遺物 2



1. 81号住居跡出土遺物



2. 82号住居跡出土遺物



3. 83号住居跡出土遺物 1



1. 83号住居跡出土遺物 2



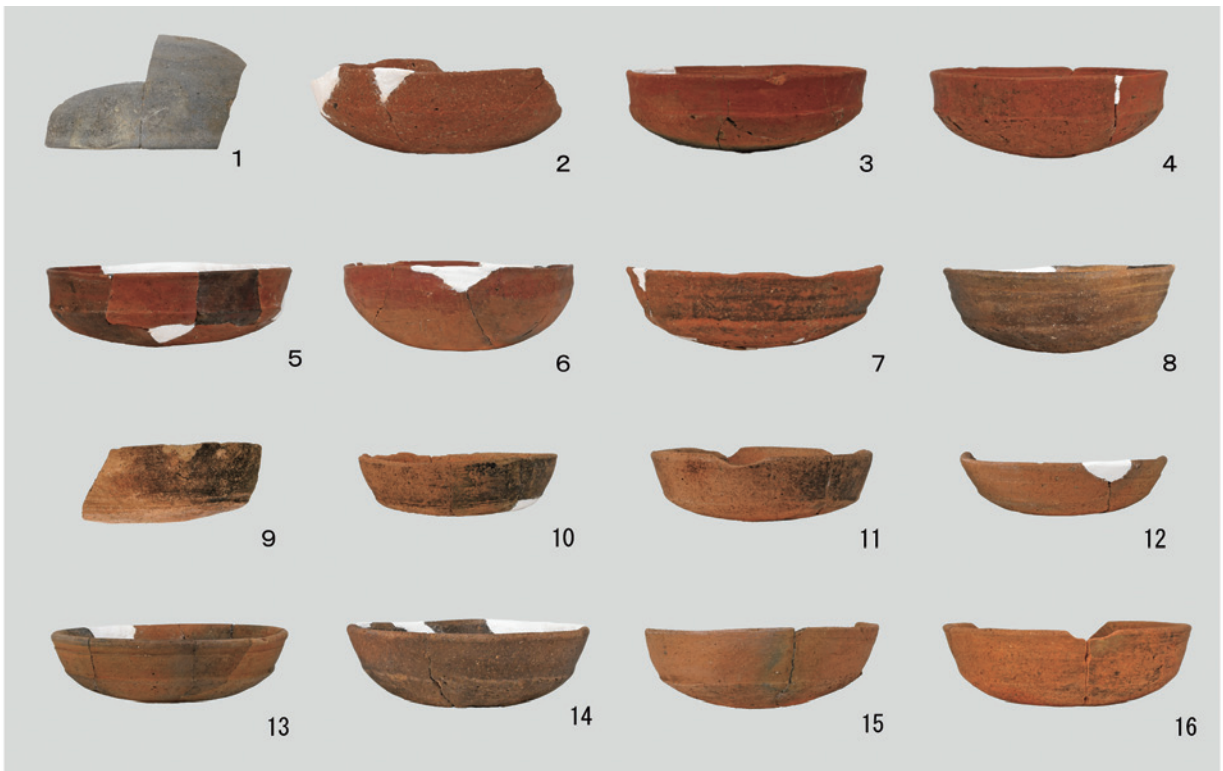
2. 84号住居跡出土遺物



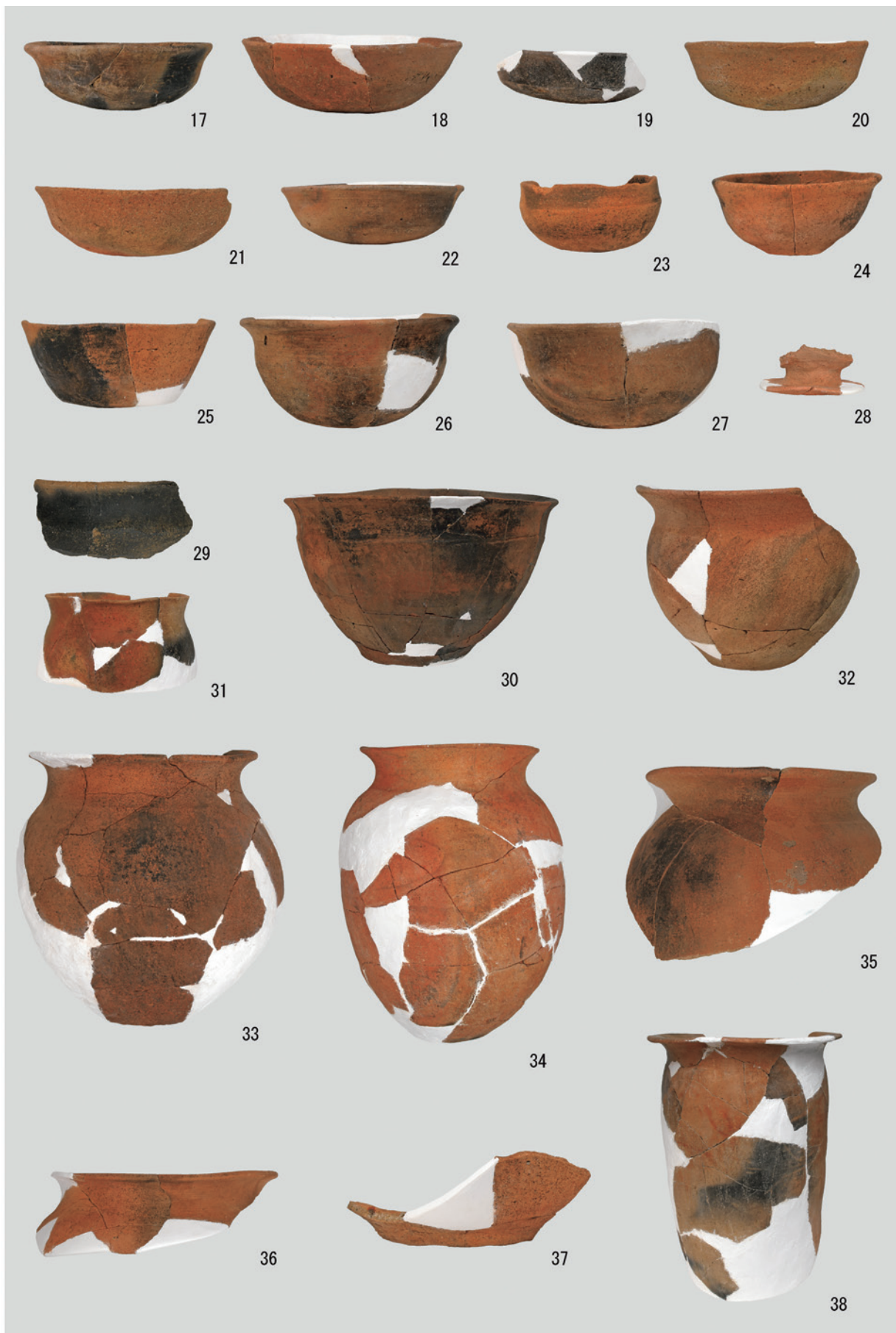
3. 85号住居跡出土遺物 1



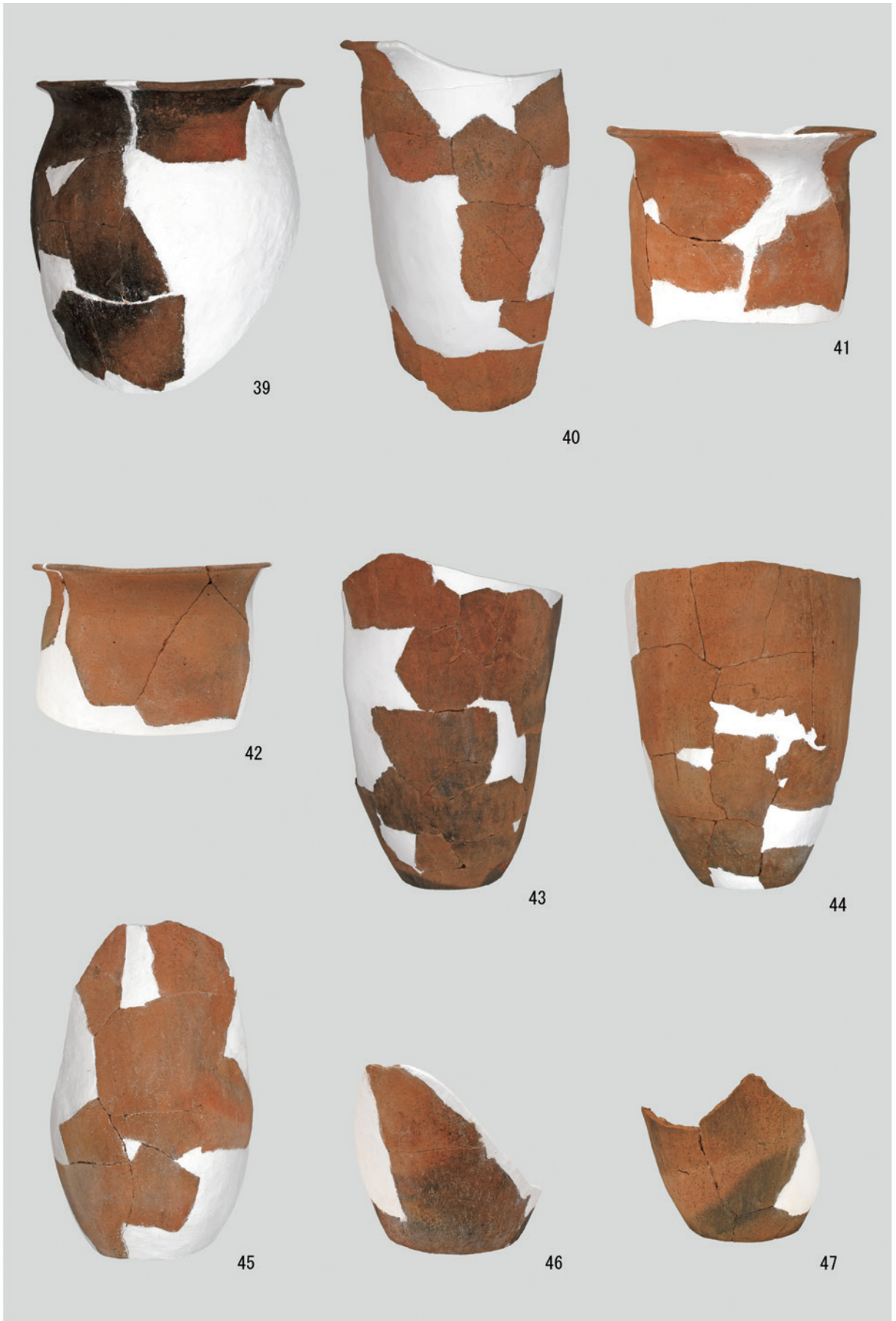
1. 85号住居跡出土遺物 2



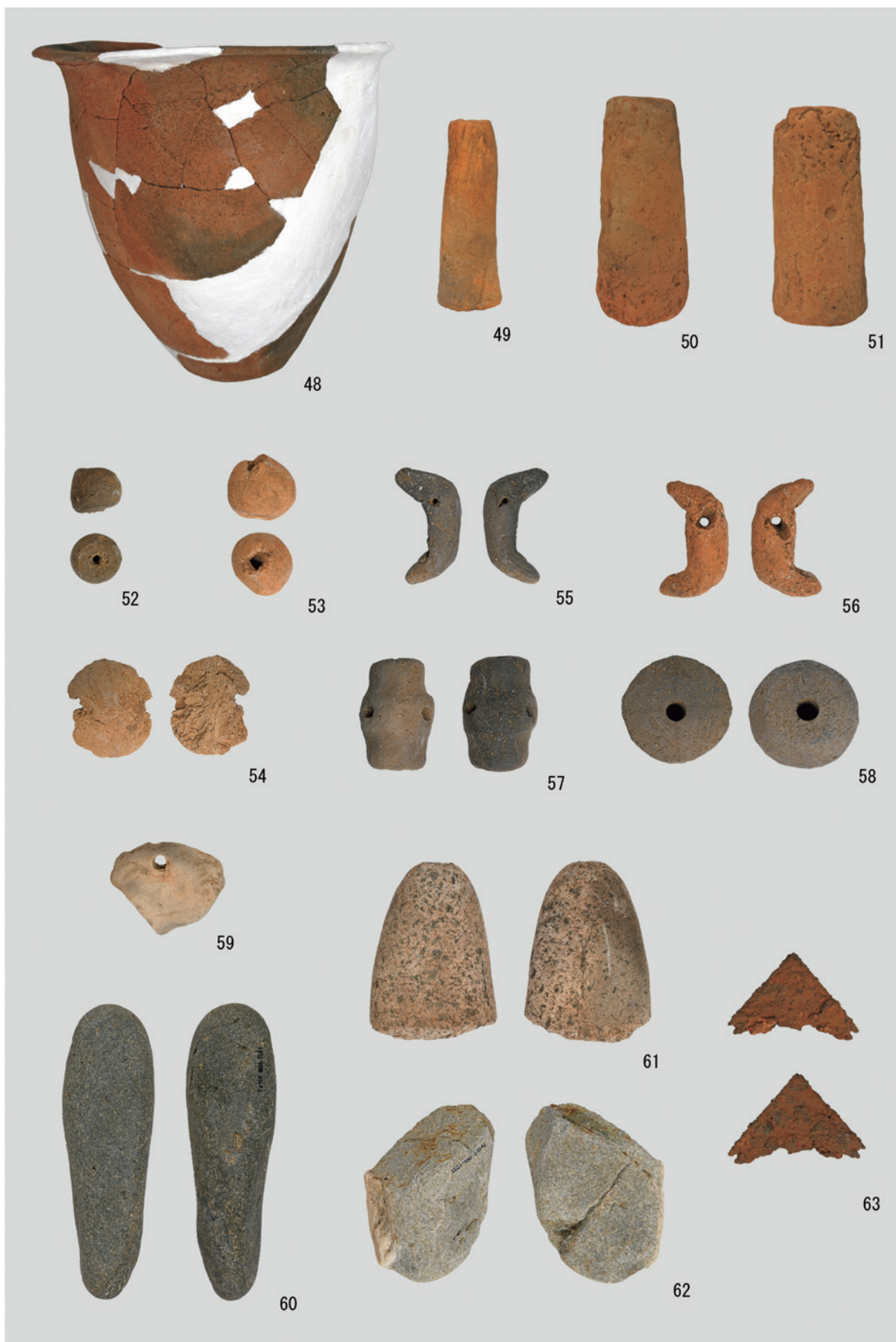
2. 86号住居跡出土遺物 1



86号住居跡出土遺物 2



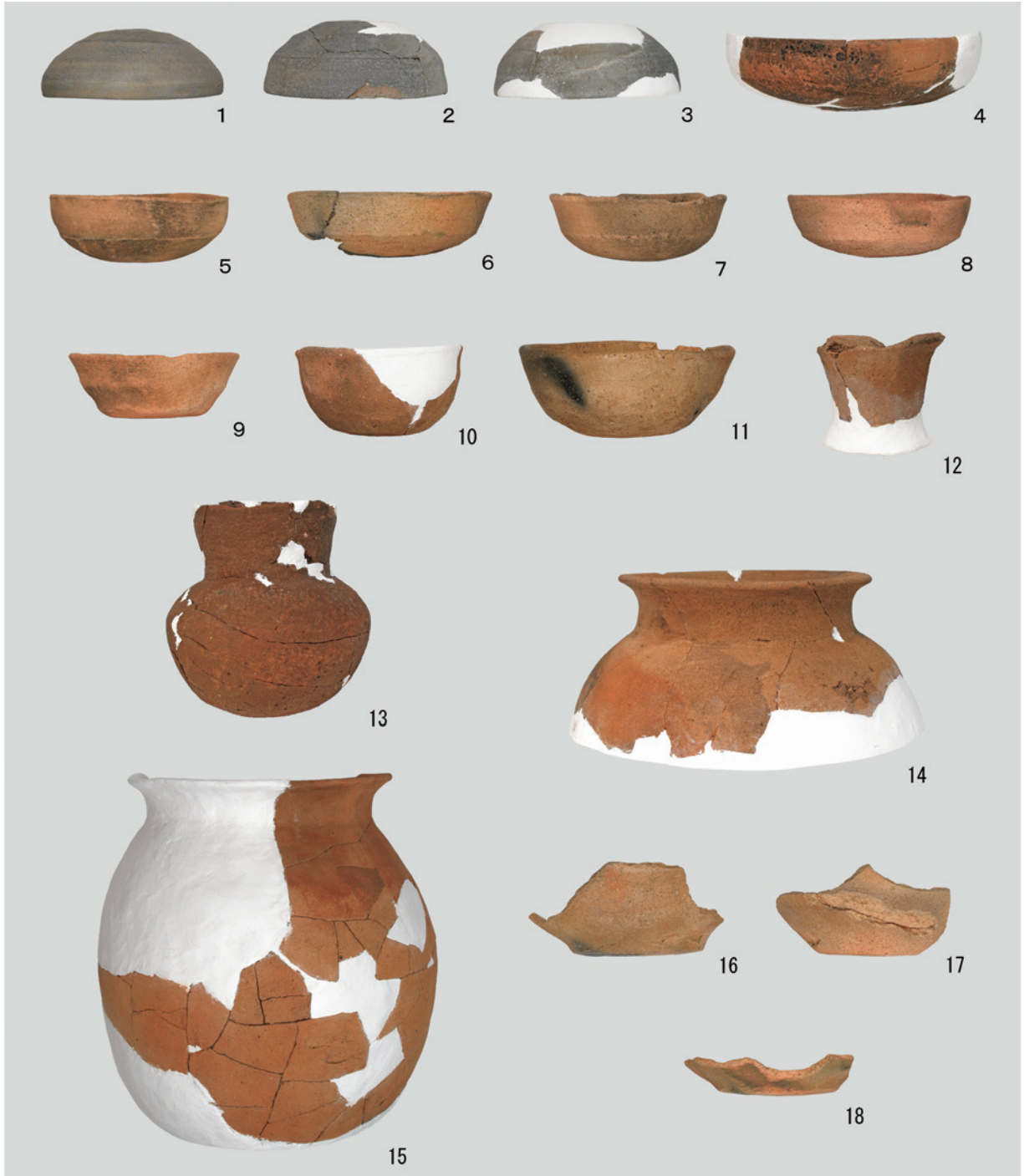
86号住居跡出土遺物 3



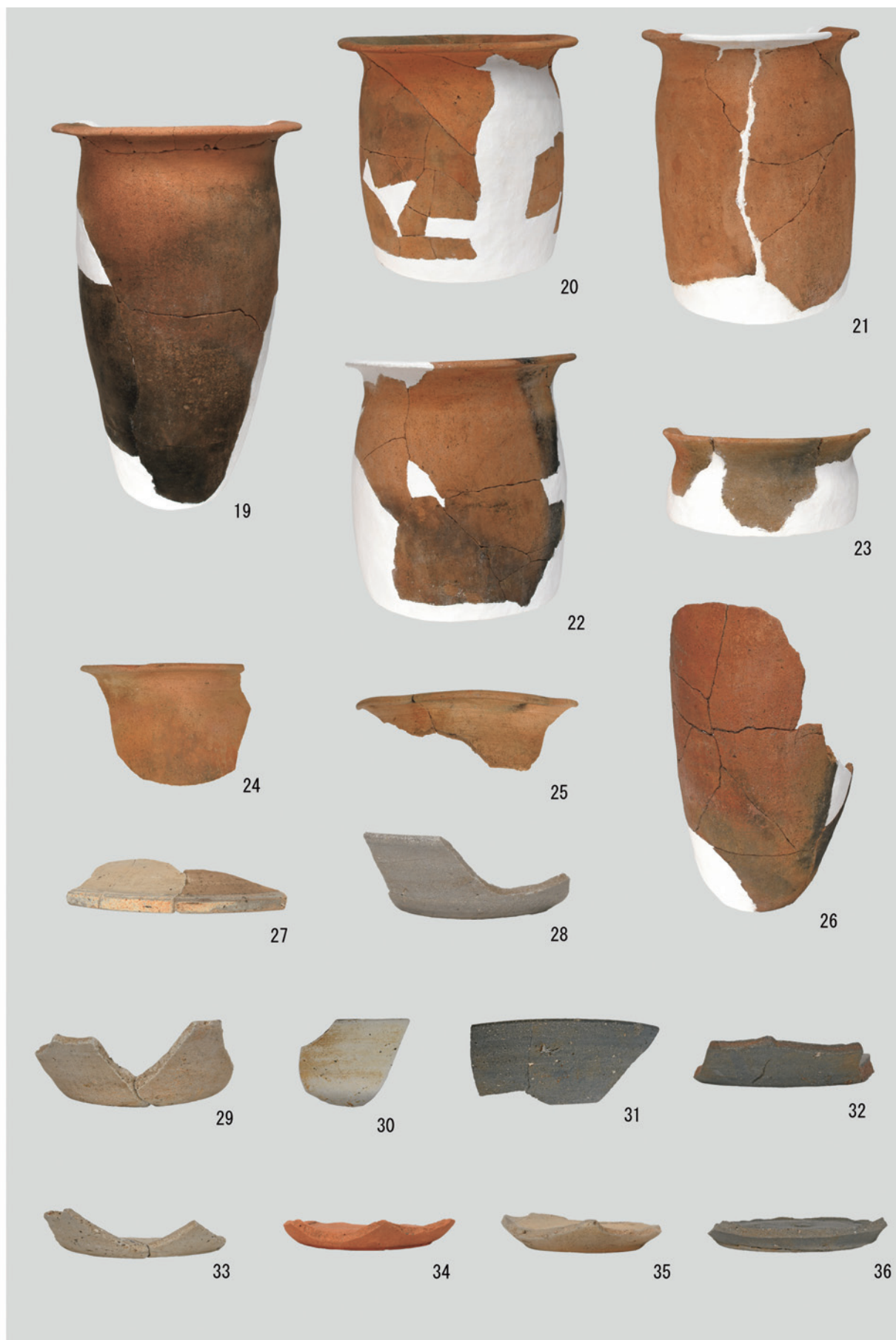
86号住居跡出土遺物 4



1. 87号住居跡出土遺物



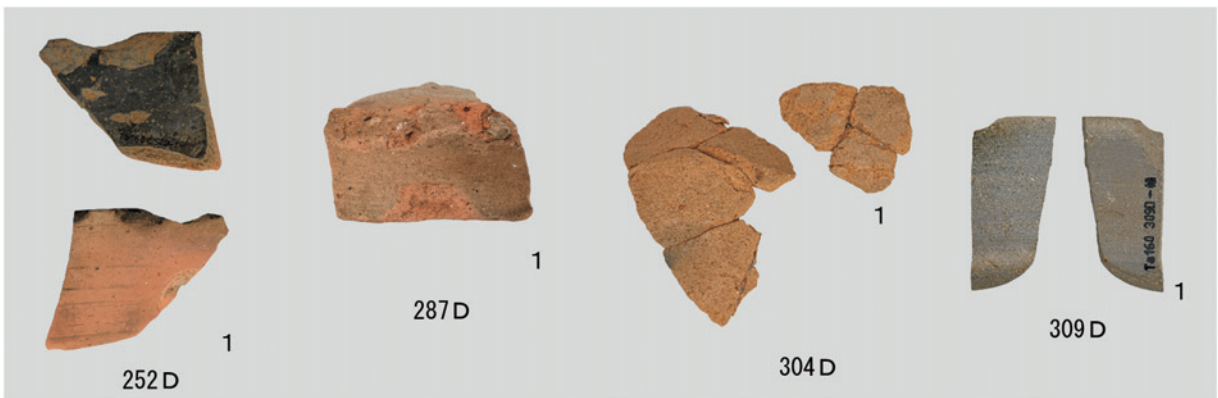
2. 88号住居跡出土遺物 1



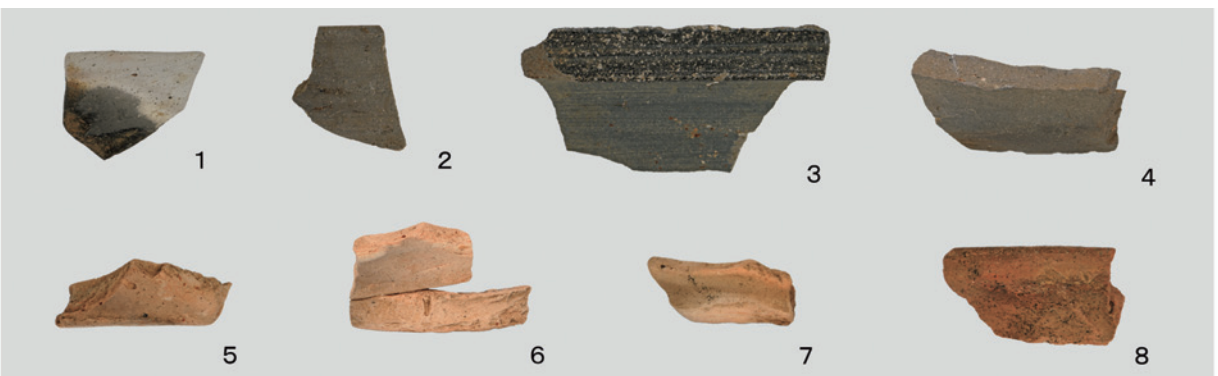
88号住居跡出土遺物 2



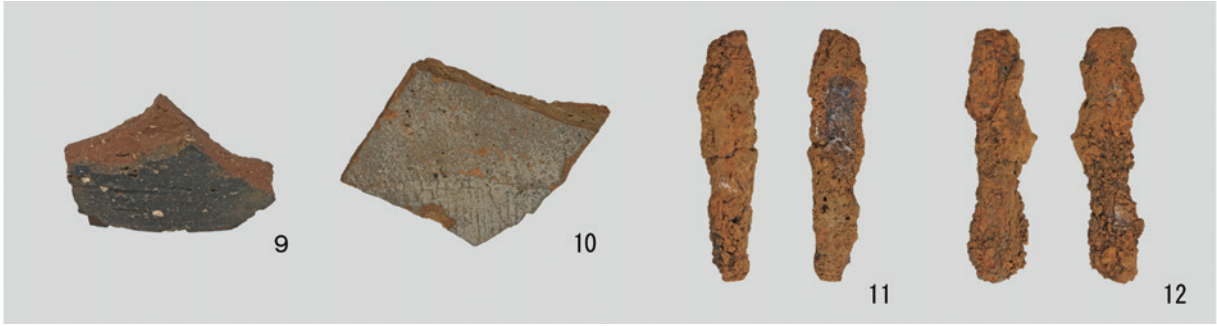
1. 88号住居跡出土遺物 3



2. 古墳・平安時代土坑出土遺物



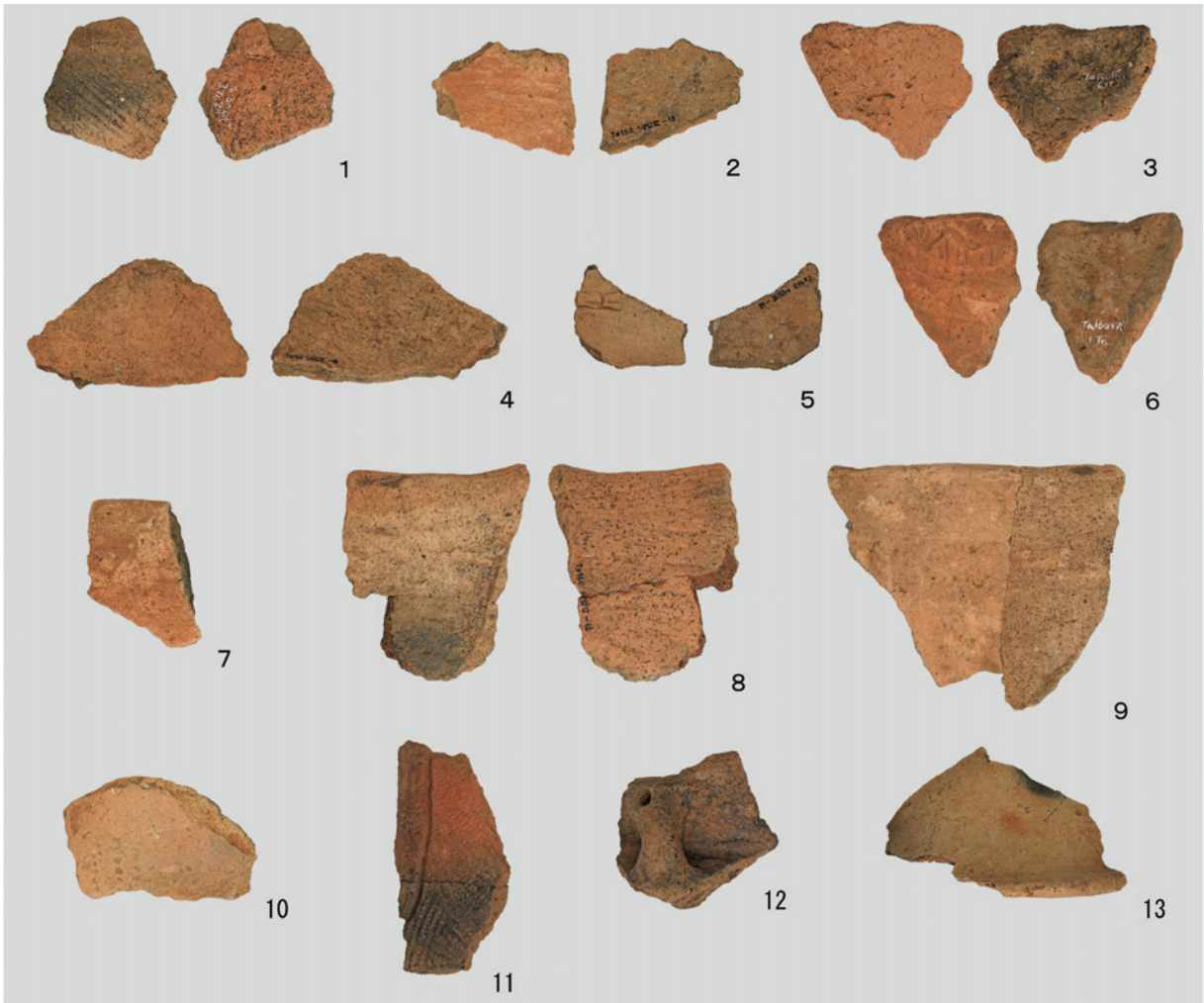
3. 14号溝跡出土遺物 1



1. 14号溝跡出土遺物 2



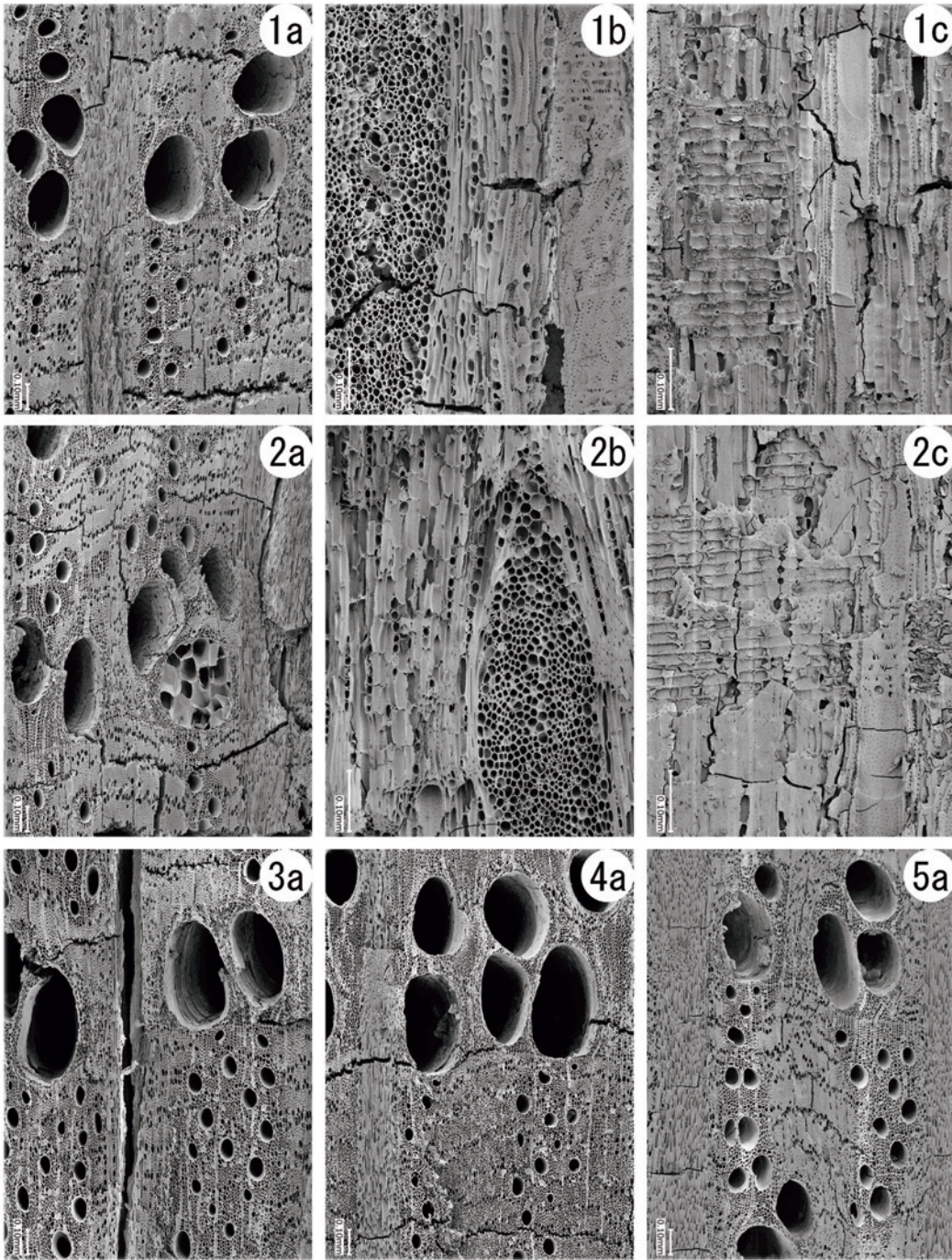
2. 7号ピット出土遺物



3. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



炭化材の走査型電子顕微鏡写真

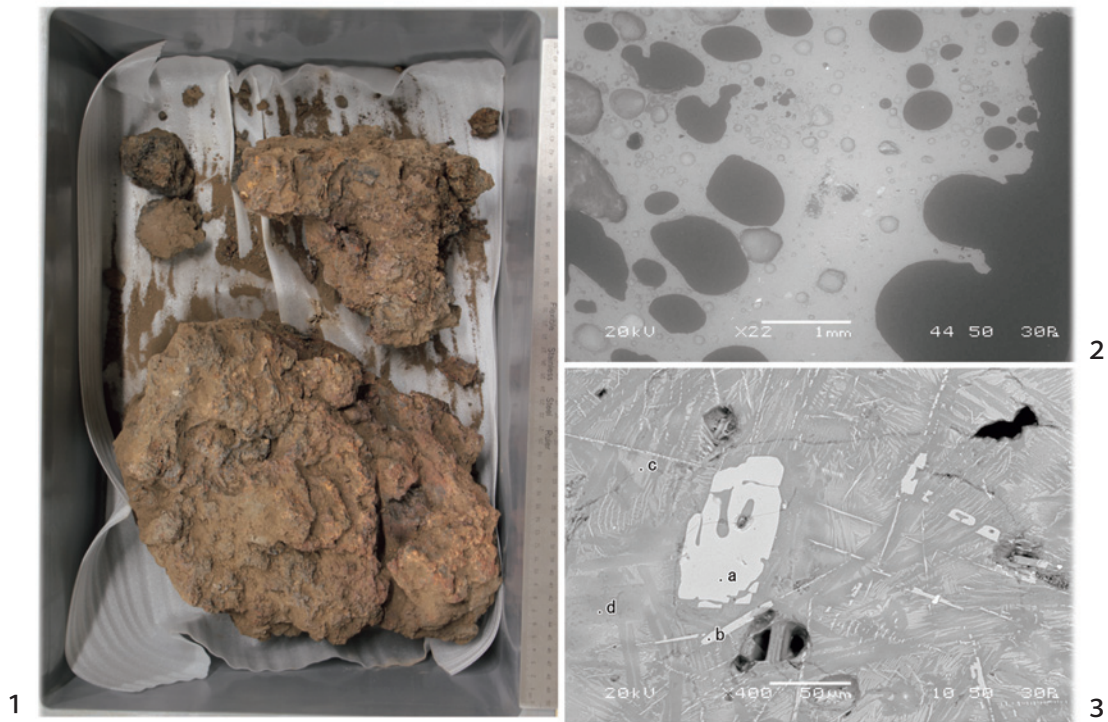
1 a-1 c.コナラ属クヌギ節 (No.7)、2 a-2 c.コナラ属クヌギ節 (No.8)、3 a.コナラ属クヌギ節 (No.9)、4 a.コナラ属クヌギ節 (No.10)、5 a.コナラ属クヌギ節 (No.11) a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



スケール 1-8 : 5 mm

1. 田子山遺跡第160地点 2区86Hから出土した炭化種実

- 1. モモ炭化核 (完形) (No.808)、2. モモ炭化核 (完形) (No.1876)、
- 3. モモ炭化核 (完形) (No.1735)、4. モモ炭化核 (完形) (No.453)、
- 5. モモ炭化核 (動物食痕) (No.531)、6. モモ炭化核 (半割) (No.1736)
- 7. モモ炭化核 (破片) (PLD-41276、No.457)、8. スモモ炭化核 (No.1302)



2. 鉄滓とその断面組織

- 1. 遺物写真 2・3. SEM反射電子像

報 告 書 抄 録

ふりがな	たごやまいせきだい160ちてん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	田子山遺跡第160地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第77集					
編著者	尾形則敏 大久保聡 石川安司 小林陽子 清水理史							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒 353-0004 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番地1号							
発行年月日	2020年12月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たごやまいせき 田子山遺跡 だい (第160地点)	しきしほんちよう 志木市本町 ちようめ 2丁目1700 ぼんちごう 番地1号	11228	09-010	35° 83° 22"	139° 58° 23"	20190507 ～ 20190903	1315.05㎡	校舎等建 替え工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田子山遺跡 (第160地点)	集落跡	縄文時代	土坑 炉穴 ピット	19基 1基 1本	縄文土器 なし なし	古墳時代後期の住居跡からは畿内系暗文坏、湖西産須恵器、在地系土師器など多様な遺物が出土し、人為的な埋め戻しによる特異な埋没状況を示す住居跡も検出した。平安時代の住居跡からは、市内で初めて「常陸型」又は「常総型」の甕が出土し、大形の精錬滓が出土した住居跡も検出した。		
		弥生時代後期～ 古墳時代前期	住居跡 ピット	4軒 1本	弥生土器・石器・ 鉄製品 なし			
		古墳時代後期	住居跡	3軒	土師器・須恵器・土 製品・石製品・鉄製 品・炭化種子			
		奈良・平安時代	ピット	10本	なし			
			住居跡	6軒	土師器・須恵器・鉄 製品・製錬滓			
			掘立柱建築遺構	1棟	なし			
		近世以降	土坑	43基	須恵器			
			溝跡	2本	土師器・須恵器・ 陶器・鉄製品			
			ピット	54本	須恵器			
			溝跡	1本	なし			
			土坑	1基	なし			
			ピット	1本	なし			
要 約								
<p>田子山遺跡は志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、柳瀬川と新河岸川の合流点からやや下流の右岸に所在する。これまでの発掘調査により縄文時代～近世・近代にかけての複合遺跡であることが判明している。</p> <p>今回報告する第160地点からは、縄文時代の土坑19基や炉穴1基、弥生時代後期の住居跡4軒、古墳時代後期の住居跡3軒、奈良・平安時代の住居跡6軒、掘立柱建物建築遺構1棟、溝跡2本などが検出された。特に古墳時代後期の7世紀末葉から8世紀初頭の76・86・88号住居跡からは畿内系暗文土器・湖西産須恵器・比企型環・続比企型環・在地系土師器・炭化種子などの多様且つ多量の遺物、平安時代の9世紀後葉から10世紀中葉の81号住居跡・14号溝からは市内で初の「常陸系」または「常総系」の甕などが出土した。</p>								

志木市の文化財 第77集

田子山遺跡第160地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 令和2（2020）年12月25日
印刷 望月印刷株式会社